

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	包 宝海
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 212 号
学位授与の日付	2016 年 3 月 24 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	中国内モンゴルにおける集合的記憶 —モンゴル民族の英雄ガーダー・メイレンを事例として—

Name	Bao Baohai
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 212
Date	March 24, 2016
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	The collective memory of Inner Mongolia of China — A case study of Gada Meiren

中国内モンゴルにおける集合的記憶

ーモンゴル民族の英雄ガーター・メイレンを事例としてー

東京外国語大学大学院

総合国際学研究科

国際社会専攻

包宝海

2016 年 3 月

目次

序論.....	1
第1節 問題提起と論文の目的	1
第2節 先行研究と論文の方向性	5
第3節 なぜガーダー・メイレンなのか.....	8
第4節 本稿の構成	9
第1章 集合的記憶について.....	11
第1節 集合的記憶の概念とその展開	11
1. モーリス・アルヴァックスの集合的記憶論.....	11
2. 集合的記憶論の展開—J. アスマンおよび A. アスマンの文化的記憶論	13
第2節 中国における集合的記憶論研究動向.....	17
1. 集合的記憶の理論紹介と応用	18
2. 内モンゴルでの動向	23
小結.....	26
第2章 歴史叙述としての「ガーダー・メイレン蜂起」.....	29
第1節 蜂起の歴史的背景	30
1. ジリム盟 10 旗の形成	30
2. 清朝末期の「移民実辺」政策とホルチン左翼中旗の開墾	33
第2節 ガーダー・メイレンと「開墾反対運動」.....	37
第3節 蜂起の経過とその影響	40
1. 蜂起の勃発から 1930 年の秋まで	40
2. 1931 年 1 月から蜂起が弾圧されるまで.....	44
小結.....	51
第3章 「記憶の場」としてのガーダー・メイレン	53
第1節 「馬賊」ガーダー・メイレンと蒙漢関係	56
第2節 ガーダー・メイレンと「階級闘争のモデル」、「革命者の原型」	61
第3節 「祖国の裏切り者」としてのガーダー・メイレン	68
第4節 「階級闘争のモデル」から農耕文明と遊牧文明の対立へ.....	73

小結	79
第4章 内モンゴルにおけるガーダー・メイレンの記憶の形成とその変遷	81
第1節 ガーダー・メイレンの記憶の形成と受容	82
1. 中国共産党の文芸政策とガーダー・メイレンの記憶の根源	82
2. 「記憶の共有化と一般化」ーウリゲルト・ドーを手がかりとして	83
3. 出来事の「再記憶化」ー民間芸能者のホールチの役割	93
第2節 ガーダー・メイレンの記憶の変容	97
1. 「ガーダー・メイレン蜂起」の「公式的記憶」	97
2. 文芸におけるガーダー・メイレン表象の変遷	101
小結	111
第5章 草の根社会におけるガーダー・メイレンの記憶と語り	113
第1節 ホルチン左翼中旗の概況とインタビューの方法	114
1. ホルチン左翼中旗の自然環境	114
2. インタビューの概要	115
第2節 民間に共有されるガーダー・メイレンの記憶と語り	120
1. 地域で共有されるガーダー・メイレンの共通する記憶	120
2. ウリゲルト・ドー、口承による「ガーダー・メイレン記憶」の形成と伝承	124
3. 蒙地開墾によるモンゴル人の「被害の記憶」	128
4. 語りと場所(空間)の関係	132
5. ウリゲルト・ドー、ホーリン・ウリゲルと老人の語りの内容がなぜ異なるのか	136
第3節 ガーダー・メイレンの記憶と語りの根源ーウリゲルト・ドーの内容	143
1. ウリゲルト・ドーの歌詞	143
2. ウリゲルト・ドーのテキスト分析	150
小結	152
結論	155
参考文献	160
跋	170

序論

第1節 問題提起と論文の目的

本論文はモンゴル民族の英雄とされるガーダー・メイレン¹を事例として、中国内モンゴルにおける集合的記憶の動態を考察するものである。ガーダー・メイレンは、中国の公式的見解からは、「階級闘争のモデル」²を体現した人物として語られる。本論文は、その人物に関する公式の語り、マス・メディアのメカニズム、記憶の文化的・社会的再生産のあり方を掘り下げ、それらが内モンゴル社会において、いかなる「記憶の抗争」や忘却を孕みながら、集合的記憶³として造形されているのかを、記憶論（メモリースタディーズ）の研究方法を用いて解明するものである。また、内モンゴルの地域共同体、エスニック・グループ、村落共同体は、このような社会的に生産されるガーダー・メイレンの表象をいかに受け入れているのか、「個人の意識と集団の社会性の相互浸透」⁴によって、集合的記憶がいかに作り出されているのかといった集合的記憶の形成過程と実態を、フィールドワークを通じて明らかにするものでもある。

ガーダー・メイレン（Gada Meiren、1892～1931、漢語表記は嘎達梅林[Ga Da Mei Lin]）の本名は、ナドミド(Nadmid)、漢名孟青山（Meng Qingshan）及び孟業西（Meng Yexi）という。「ガーダー」は末子という意味の漢語である。彼は家族の中で末子として生まれている。「メイレン」は官職を指しており、満州語では旗兵隊の最高統領という意味になる。彼は1929年末から1931年代初頭まで、内モンゴルのホルチン地域（内モンゴル東部地域）で、漢人農民による過度の農地開墾に反対して武装蜂起を起こし、1931年2月12日（旧暦）に熱河省派遣の李守信の部隊によって鎮圧され、戦死した実在の人物である（第2章第3節を参照）。彼は、モンゴル人の土地と利益のために戦ったとされており、そのためにモンゴルの人びとのあいだでは一定の尊敬を集めつつ、その名が記憶され、彼に関するウ

¹ 「ガーダー・メイレン」のカタカナ表記については、先行研究では「ガダ・メーリン」、「ガーダー・メーリン」、「ガーダー・メーレン」、「ガーダー・メイリン」などの異なる形で表記されているが、本稿ではモンゴル語と満州語の発音に従って、「ガーダー・メイレン」と表記する。

² 石原邦子「内モンゴル民歌「ガダ・メーリン」に関する一考察—モンゴルの英雄はなぜ中国で歌われたか」『モンゴル研究』、第20号（2002年）、30頁。

³ 「集合的記憶」については後の第1章で詳しく論じることにした。

⁴ 石井弓『記憶としての日中戦争—インタビューによる他者理解の可能性』研文出版、2013年、23頁。

リゲルト・ドー、文学作品や映画などが数多く作られている。姜迎春の研究によれば、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』⁵は、実在の人物を題材として、民間芸能人の創作と再現を通じて民間社会で広く伝えられ、共有されてきた民衆自身のオーラル・ヒストリーであるとされている。また、この民謡がホルチン地域の文化を最もよく反映した作品の一つとして、地域の「歴史的記憶」の媒体として機能しているのである。ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』は、2007 と 2008 年にそれぞれ内モンゴル自治区と国家レベルの「無形文化遺産」(intangible cultural heritage)に登録され、その民間文化としての役割がますます注目されるようになっていく⁶。

これまでに行われてきたガーダー・メイレンに関するさまざまな研究を大きく整理してみると、「ガーダー・メイレン蜂起」とそれに関する歴史事実を求める実証的研究と、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』に関する文学的、芸術的研究の二つがあると言える。しかしながら、ガーダー・メイレンが内モンゴルの社会・政治的変動に伴って、異なる解釈がなされる場合もあり、なおかつ出来事の体験者の数がどんどん減っていくなかで、この出来事を固定的な歴史解釈による研究と文学的・芸術的研究という二つのカテゴリーだけを前提にして見ていくことはもはや妥当ではない。そもそも、「ガーダー・メイレン蜂起」は、歴史的事件としてあるばかりではなく、現在の内モンゴル社会において、広義での「社会的記憶」⁷になっている。そうであるならば、このような広義での「社会的記憶」が内モンゴル社会において、また、その異なる時代において、どのように形成され、継承され、社会的格子(社会的フレームワーク)⁸を通じて変容しているのかに注目しなければならない。集合的記憶研究は歴史学ばかりでなく、民俗学、社会学、文化人類学など複数の学問分野で取り上げられるようになっていく。歴史家テッサ・モーリス＝スズキは、著書『過去は死なない：メディア・記憶・歴史』のなかで「解釈としての歴史」と「一体化の歴史」という二つの概念を用いることによって、この問題に関連する議論を展開している。

⁵ ウリゲルト・ドーとは、実在の人物の事実に基づいた俗謡で、①完全な物語性を持つ、②登場人物が多様である、③分量が多い、④韻文形式と散文形式を持つ、⑤多くの場合は四弦で伴奏しながら歌う、といった特徴を持つ歌を指している。(包金剛「内モンゴル東部地区特有の口承文芸の研究：ホルチンとホルリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドー」、東京外国語大学博士論文、2003年、160頁を参照。)ウリゲルト・ドー「ガーダー・メイレン」も「ガーダー・メイレン」を題材として、民間芸能者の創作と再現を通じて人びとの間に広く伝わっている歌謡(漢語では「長編叙事民歌」と表記されているが、本稿ではモンゴル語の発音に従って「ウリゲルト・ドー」と表記する)である。

⁶ 姜迎春「長編叙事民歌〈嘎達梅林〉文本和歴史記憶研究」中央民族大学博士論文、2010年。

⁷ ここでは「社会的記憶」と表記しているが、本稿では「集合的記憶」と同じ意味を持つものとする。

⁸ フランスの社会学者であるモーリス・アルヴァックスの提起した概念である。後の第1章で詳しく紹介する。

一方の視点から見れば、歴史の研究とは解釈の研究であり、様々な出来事間の因果関係、思想や制度の系譜、人間社会に変化をもたらす力を理解するための知識の探求でもある。しかし別の見方からすれば、歴史は「一体化」の問題でもある。私たちと過去の関係は原因や結果についての事実の知識や知の理解だけでなく、想像力や、共感によってもかたちづくられる。展示資料館、記念館、史跡などは（文字史料とおなじく）過去に生きた人々の共感的関係に導いてくれる。過去の人々との経験や感情を想像し、彼らの苦しみを偲び、死を悼み、彼らの勝利を祝う。過去に生きた他者のこうした一体化は、しばしば、現在における私たちのアイデンティティの再考、あるいは再認識の基盤になる⁹。

そこで、本論文ではこのような問題意識に基づき、ガーダー・メイレンに関するウリゲルト・ドー、映画、小説など「一体化の歴史」を描く文化的存在に着目し、また、記憶の媒体＝形ともなる記念物などに焦点をあて、現在にいたるまでのガーダー・メイレンの表象が内モンゴルにおいて、また、その異なる時代においてどのように存在し、機能する記憶となっているかを深く立ち入って論じていきたい。出来事の体験者が亡くなるにつれて、我々の過去に対する理解は単なる学問的歴史だけでなく、いわゆる「文化的記憶」¹⁰によっても造形されるのである。ここでいう「文化的記憶」は、メディアと切り離して論じることにはできない。「メディアや政治的に依存する記憶といった、別の形式の記憶が明らかにその重要性を増している。〔中略〕単数形の歴史という抽象的なジンテーゼに、今日では多種多様な、中には互いに矛盾し合う複数の記憶が対峙している」¹¹のである。それゆえ、ガーダー・メイレンの記憶を考える際、われわれを取り込んでいる「一体化の歴史」である文学作品や映画などにも注目すると同時に、物質的支えとして文化的記憶を基礎づけ保護しているメディア、アーカイブ、記念物のあり方をも考察していかなければならない。岩崎稔は「記念碑と対抗的記念碑」のなかで「歴史学がうまく主題化できないもの、構造的に捉えられないできごとが、記憶論の氾濫という兆候とともに、生起している

⁹ テッサ・モーリス＝スズキ著、田代泰子訳『過去は死なない：メディア・記憶・歴史』岩波書店、2004年、27-28頁。

¹⁰ 「文化的記憶」については、後の第1章で詳しく紹介する。

¹¹ アライダ・アスマン著、安川晴基訳『想起の空間：文化的記憶の形態と変遷』水声社、2007年、28-29頁。

のではないか」¹²と述べていた。ガーダー・メイレンの記憶を単なる史実的解釈と文学的検討だけではなく、オーラル・ヒストリーと最新の「記憶のブーム」とも呼ばれているメモリースタディーズの研究方法を用いて解明することが本論文の目的でもある。

また、本論文では、記憶を特定の人々の体験に由来するというミクロレベルでのものから捉えると同時に、記憶が社会的に構成されるというマクロレベルでの理解においても考察を進めていく。中国・内モンゴルにおいて、集合的記憶としてのガーダー・メイレンがその社会の背景やその時代によって、異なる形で解釈され、構築され、変容しているのは否定できない事実である。一方で、我々に浸透している記憶という意識の営みが存在している限り、これは我々自身の過去の捉え方にも影響を及ぼす。ここで問題となるのは何が忘却され、記憶され、語り継がれているのか、また、それがどんな担い手を通じて、形成され、変容しているのか、それが如何に我々を拘束し、躊躇いを生んでいるかといった点である。記憶の保存、循環、流通のために、メディアが不可欠だということは疑う余地がないにしても、では、そのメディアとはそもそも記憶にとってはいかなる存在なのか、その役割も改めて考え直す必要があるだろう。

ドイツのフランクフルト大学の英文学者であるアストリート・エアル（Astrid Erll）は、文学は「集合的記憶」の媒体であると述べ、文学作品の様式・ジャンルが「記憶の場所」とであると指摘している。エアルによると、既に形成された文学作品の様式モデルそのものが集合的記憶の課題であり、このような様式（例えば、長編歴史小説、ノート、伝記など）は文化的記憶の形成の中で重要な役割を果たしている¹³という。文学テキストを媒介として集合的記憶の形成と継承について考察したエアルの研究は、集合的記憶の研究に重要な示唆を与えたように思われる。

では、本研究では、どのような記憶を分析するのか。集合的記憶を分析対象とする場合、必ずしも、一人ひとりの経験や歴史解釈を問題にするわけではない。集合的記憶の形成のプロセスを考える時、特定の人々の持っている個人的記憶の中から読み取るだけでなく、個人を超えた社会的かつ文化的な側面から考える必要があるだろう。本研究が目指すのは一人ひとりの記憶の中に共有されている要素を読み取り、そこから集合的記憶を導き出し

¹² 岩崎稔「記念碑と対抗的記念碑」『クェドランテ』第10号（東京外国語大学海外事情研究所2008年3月）、47-56頁。

¹³ ア斯特莉特・埃爾、馮亜琳『文化的記憶論読本』北京大学出版社、2012年、210-246頁。

ていくだけではなく、人々の外に存在する文学作品、メディアや記念物などについて考察し、そこからも集合的記憶の形成のプロセスを検証するということである。

第2節 先行研究と論文の方向性

従来のガーダー・メイレンに関する研究を振り返ってみると、総じて史料に基づいた実証主義的な検証、確認を目指す顕著な傾向があり¹⁴、また、ジャンルとしても、文学的、芸術的研究がその多くを占めてきた。近年の中国では、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』を内モンゴル東部地域のもっとも代表的な作品として位置づけ、それを社会学的観点から研究するという新しい動向も現れている。それは、民俗学、文化人類学、オーラル・ヒストリー、記憶論などの複数の研究方法を用いた総合的な研究でもある。ここでは、こうした新しい傾向に属する成果の中からいくつかの代表的な論文について概観し、先行研究の状況を確認しておくことにしよう。

ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』に関する先行研究としては、まずはダルホド・ヒンガン (Darqud Kingyan : 2009)¹⁵と姜迎春 (Jiang Yingchun : 2010)¹⁶が挙げられる。ダルホド・ヒンガンは、ガーダー・メイレンに関するウリゲルト・ドーとモンゴル民族の他の民間文学を比較しながら、民俗学、文化人類学などの研究方法を用いて、それらに含まれている文化、風俗習慣、民族意識と、その社会、文化、そして文芸に与えた影響などを論じた。従来のウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』についての研究が、ほとんどその内容、芸術性、階級性の面を検討してきたのとは対照的である。もっとも、その一方でヒンガンの研究にしても、なおもテキスト分析の枠組みを乗り越えられていないという限界が見られる¹⁷。また、ヒンガンは、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』が他の文芸に与えた影響について触れてはいるが、残念ながらその掘り下げは十分に深いものとは言えない。例えば、ウリゲルト・ドーの影響で文学作品や映像作品などが創られたと紹介しているが、個々の作品を吟味することは行っていない。

¹⁴ 中国における「ガーダー・メイレン」に関する先行研究については、姜迎春「長編叙事民歌〈嘎達梅林〉文本和歴史記憶研究」、16-37頁に詳しい。

¹⁵ Darqud Kingyan, *Gada meyiren-ü daquu-yin sudulul*, Öbör mongyol-un soyol-un keblel-ün qoriy-a, 2009 on.

¹⁶ 姜迎春「長編叙事民歌〈嘎達梅林〉文本和歴史記憶研究」(姜迎春の研究に対する批判的考察として、拙稿「中国における集合的記憶論の議論状況—『文化的記憶論読本』などを手がかりに—」『クアドランテ』第16号(東京外国語大学海外事情研究所2008年3月)、302-303頁を参照。)

¹⁷ これについては、姜迎春「長編叙事民歌〈嘎達梅林〉文本和歴史記憶研究」でも批判されている。

次に、馬国林（Ma Guolin：2008）と李瑞文（Li Ruiwen：2012）の研究は文学的、芸術的考察であるが、ガーダー・メイレンに関する研究の最新の範例となっている。馬国林は20世紀の80年代のアメリカで発生した「クラシック文学」に関する論争を取り上げ、中国とモンゴル民族の「クラシック文学」に対する認識や論争を紹介した上で、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』がモンゴル民族の「クラシック文学」に選ばれるようになった理由を分析した。馬によれば、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』に含まれている文化的価値こそが、「クラシック文学」として高い評価を受けるようになった内在的要因であるのに対して、その創作主体の伝承、受け手と時代の変化がその外在的要因をなすと見ている。李瑞文は内モンゴルの異なる時代に作られたガーダー・メイレンに関する芸術作品を比較分析し、ガーダー・メイレンの表象の変遷とそのイデオロギー的特徴を明らかにした。それと同時に、ガーダー・メイレンの芸術作品における表象の変遷を、社会状況を理解するための代表的な文化現象として解釈し、「モンゴル民族の英雄としてのガーダー・メイレン」、「階級闘争の革命家としてのガーダー・メイレン」「悲劇英雄としてのガーダー・メイレン」という複数の類型に分類している。しかし、二人の研究は、芸術作品だけに焦点を当てたため、これらの作品に表現されたガーダー・メイレンのイメージが草の根社会においてどのように受容され、構築されていったかについて、実地調査を行っておらず、ガーダー・メイレンの表象とイデオロギー的特徴をただ単に美学的理論の枠組みだけにあてはめて説明しようとした点が残念である。

中国大陸以外の先行研究としては、蔡偉傑（Tsai Wei chien）¹⁸、Anne Henochowicz¹⁹、石原邦子²⁰などの業績が挙げられるだろう。蔡偉傑は、歴史記述とウリゲルト・ドー、映像作品などの分析を通じて、内モンゴル“蒙地開墾反対運動”のリーダーであるガーダー・メイレンの歴史像の変遷を分析した。彼は、現代中国の政治的・社会的変動に伴い、ガーダー・メイレンのイメージが、1930年代の“蒙匪”から、1950年代には“反封建、反軍閥の英雄”へ、また文化大革命時代には“民族分裂分子”に、さらに現在では“環境保護のパイオニア”（環保先鋒）へと変容した、と論じている。そのなかで彼は、現代中国の公的な歴史叙述の中でのガーダー・メイレン像と、内モンゴル草の根社会で共有されている

¹⁸ 蔡偉傑（Tsai Wei chien）「從蒙匪、英雄到環保先鋒：嘎達梅林在現代中國的表述與政治」『蒙藏季刊』第22卷、第3号（2013年）。

¹⁹ Anne Henochowicz, “For the Land of All Mongols: Gada Meiren the Bandit, Hero and, Proto-Revolutionary”, *The postcolonialist*, November 2013, Vol.1, Number1.

²⁰ 石原邦子「内モンゴル民歌「ガダ・メーリン」についての一考察—モンゴル英雄はなぜ中国で歌われたか」。

ウリゲルト・ドーの中のガーダー・メイレン像を比較しながら、モンゴル人が中国の少数民族として、自分たちの歴史を解釈する際のジレンマがあると指摘している。

Anne Henochowicz は、1979 年に出版されたウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』（陈清漳、赛西、芒・牧林整理）を使いながら、入植してきた漢人が、蒙地開墾に伴って、ホルチン地域にどのような変化をもたらしたのかを論じている。Henochowicz によれば、「ガーダー・メイレン蜂起」はホルチン社会の伝統的な秩序を取り戻すために行われた「野盗の運動」（a movement of social banditry）であって、それはモンゴル人社会に完璧な新しい世界を作り出す解放運動ではない。

これらの研究はガーダー・メイレンに関するウリゲルト・ドーを主な分析の対象としているが、内モンゴルにおけるガーダー・メイレンの記憶そのものの根源や、その形成と受容の過程は論じていない。また、先行研究では、1960 年代の文化大革命時代におけるガーダー・メイレンに関する評価や語り方についてほとんど論じられていない。筆者はこれらの研究とは立場を異にし、ウリゲルト・ドーのテキストなどに限定することなく、ホーリン・ウリゲル²¹、歌劇、文学作品、映像作品などにも分析の対象を広げ、集合的記憶そのものの研究を試みたいと考えている。

実際、ガーダー・メイレンの評価は、歴史に翻弄されながら二転三転する。ガーダー・メイレンが 1930 年代の中華民国時代では、国の政策と抵抗した「匪賊」、「蒙匪」として、批判されていた。ところが、中国共産党は、ガーダー・メイレンが「封建階級と軍閥と戦ったこと」を取り上げ、「階級闘争」のモデルとして彼の業績を盛大に称賛し、20 世紀の 50 年代から宣伝の素材に用いるようになる。そのため、ガーダー・メイレンに関するウリゲルト・ドーや芸術作品が 20 世紀の 40 年代末、50 年代初め頃から作られるようになったといわれている。しかし、「文化大革命」時代になると、ガーダー・メイレンは「祖国の裏切り者」、「民族分裂分子」として再び批判され、ガーダー・メイレンに関する作品の創作や研究も長い間禁じられるようになる。それらは、「改革・開放」後、ようやく再評価されて、今一度作られるようになったという²²。内モンゴルの政治的・社会的変動を伴って、ガーダー・メイレンが内モンゴルの異なる時代において、どのように評価され、どのよう

²¹ 「ホーリン・ウリゲル」の「ホーリン」という言葉は「ホール」（胡弓）に属各語尾が付いたもので、「ウリゲル」は「物語」という意味、即ち、「ホーリン・ウリゲル」とは胡弓の伴奏で語る特定の語り物ジャンルを指している。（包金剛「内モンゴル東部地区特有の口承文芸の研究：ホールチとホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドー」、1 頁を参照）。

²² 姜迎春「長編叙事民歌〈嘎達梅林〉文本和歴史記憶研究」、85 頁。

に記憶され、(社会的フレームワーク)を通じてどのように変容しているのかを解明することは、本論文の一つの骨格である。

中国共産党にとって、ガーダー・メイレンの出来事を中国内モンゴルで定着している「階級闘争」のモデルとして繰り返し分かり易く説明することは、「封建的な蒙古王公」や、「反動的な軍閥」と戦ったという結論に導くために必要なことである。しかし、このような表象に対して、モンゴル人学者であるボルジギン・ブレンサインは「蒙地開墾に反対したことによる、土地をめぐるモンゴル人と漢人の民族的対立というその本来の姿が隠されてきた」と異議を唱えている。このように、隠れた記憶を探求し、周辺化され忘却された「マイナーな記憶」を掘り下げるためには、史料を実証的に積み重ねることだけではなく、むしろ、草の根社会の記憶の実態を長時間にわたって調査・検証することが求められている。そのため、「階級闘争」のモデルとして定着されている「公式的記憶」²³に対して、それに対抗する形で存在する隠された記憶を掘り下げていくことは、本研究のもう一つの骨格となっている。

第3節 なぜガーダー・メイレンなのか

そもそも、なぜガーダー・メイレンなのだろうか。それにはいくつかの理由が考えられる。

第一に、ガーダー・メイレン像は、内モンゴル・ホルチン地域の広い範囲で共有され、記憶されている。彼はおそらくホルチン地域のモンゴル人であれば、だれにでも思い当たるような人物である。彼にまつわる記憶は内モンゴルの至る所で残されており、彼の業績を讃えた歌は内モンゴルにとどまらず、全国、いや、国境を超えて伝えられている。したがって、ガーダー・メイレンは、内モンゴルにおける集合的記憶を考察するにはもっともふさわしい事例と言えるだろう。

第二に、ガーダー・メイレンが、内モンゴルの文化政策の下で、すでにホルチン地域の文化的存在として記憶されるようになってきているという点がある。1979年3月、中国に発行された記念コインの中に描かれた偉人やリーダーなどの人物像(塑像)の中に、モンゴル民族からは、テムジン(チンギス・ハン)、フビライと共に、ガーダー・メイレンが選ば

²³ 本論文では、今井昭夫「歴史の力か、歴史の重荷か—ベトナムにおける「戦争の記憶」の構図」今井昭夫・岩崎稔編『記憶の地層を掘る—アジアの植民地支配と戦争の語り方』御茶の水書房、2010年、37頁に従って、中国共産党が公式的に打ち出している「出来事の記憶」を「公式的記憶」と呼ぶ。

れている。また、1997年5月「中国少数民族文化記念銀貨」の裏側にもガーダー・メイレンの像が刻まれている²⁴。ガーダー・メイレンという人物はウリゲルト・ドーによって有名になり、また、中国共産党の文芸政策や1950年代の政治的環境の影響を受け、「モンゴル民族の英雄」として位置づけられ、一般化され、繰り返し再記憶化されているのである。つまり、ガーダー・メイレンが有名になったのは、彼の業績を歌で讃えたウリゲルト・ドーが作られ、口承で伝えられ、テキスト化された経緯と深く関わっている。今日の内モンゴルのホルチン地域において、ガーダー・メイレンは、もはや「モンゴル民族の英雄」という評価の枠を超え、「文化的英雄」ともなりつつある。というのも、内モンゴルの「文化大自治区」を作り上げるというスローガンの下で、各旗は各自の有名な人物を宣伝し、特有の文化を作り上げようとしているからであり、その中で、ガーダー・メイレンの故郷であるホルチン左翼中旗は「叙事民謡の郷」に選ばれ、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』も内モンゴル自治区と国家レベルの「無形文化遺産」に登録されたからである。このようにして、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』はホルチン文化を代表する典型的な作品になり、この地域の「集合的記憶」を強く造形する役割を果たしているといえよう。

第三に、ガーダー・メイレンが内モンゴルのホルチン地域のモンゴル民族のさまざまな「文化的記憶」の形となりつつということも指摘しておきたい。なぜなら、内モンゴルでは、ガーダー・メイレンに関するウリゲルト・ドーやホーリン・ウリゲルなどの口承文芸だけではなく、他の芸術作品や「ガーダー・メイレン記念碑」、「ガーダー・メイレン広場」などの記念物も造られているからである。内モンゴルにおいて、ガーダー・メイレンに纏わる記憶は、その出来事の経験者や目撃者などの狭義の想起の主体＝「想起の共同体」の枠を超えて、ホルチンなどの民間芸能者、作家、芸術家などの創造力と再構築によって活き活きと継承されている。その端的な実例が、記念碑や広場の記念物である。

第4節 本稿の構成

序章では本稿の問題意識と目的を示し、先行研究の検討を行う。そして研究方法と研究対象の設定を行う。

第1章では、モーリス・アルヴァックス(Maurice Halbwachs) (1877-1945) の「集合的記憶論」とその展開を紹介し上で、中国における「集合的記憶論」研究について、概念の説明、研究の注目点、方向性に関わる課題など論じていきたい。

²⁴ Darqud Kingyan, *Γada meyiren-ü daγuu-yin sudulul*, p.284.

第2章では、先行研究ではほとんど使われていない奉天で出版された『盛京時報』、『東三省民報』などの新聞を参照にしながら、「ガーダー・メイレン蜂起」の歴史的背景とガーダー・メイレンらの指導した「開墾反対運動」について説明し、「武装蜂起」のプロセスについて詳しく検討することで、歴史事実としての「ガーダー・メイレン像」の再構築を試みる。

第3章では、ガーダー・メイレンを「記憶の場」として捉え、内モンゴルの異なる時代において、それがどのように形成され、継承され、また社会的フレームワークを通じてどのように変容してきたのかを検証する。つまり、彼がいかに「蒙匪」として批判され、「階級闘争のモデル」として利用され、また「モンゴルの匪賊」、「祖国の裏切り者」として再批判され、さらに、「環境保護のパイオニア」として作り上げられ、宣伝されたのかを考察し、内モンゴルの社会共同体によって、維持され、「再記憶化（ピエール・ノラ）」される「記憶の場」のあり方を解明する。

第4章では、中国内モンゴルにおけるガーダー・メイレン記憶の形成と変容のプロセスを考察し、国民国家と地域に共有され、生成され、変容される「ガーダー・メイレン像」を明らかにしたい。その中で、まず、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』を手掛かりに、内モンゴル社会におけるガーダー・メイレンの記憶の根源と原型を辿る。そして、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の採録の経緯と、その他の文芸が創られる過程を整理し、それらが内モンゴル東部地域だけに共有され、記憶されていた「ガーダー・メイレン」の記憶を、いかにして全国的な記憶へと昇華し、普遍化したのかという過程についても吟味する。最後に、現代内モンゴルにおいて、映画などの視覚イメージや、文芸作品をも分析し、ガーダー・メイレンの「公式的記憶」とその変容を考察する。

第5章では、内モンゴルの「草の根社会」、つまり、社会の下層にある人々の間で共有される「ガーダー・メイレン像」と記憶の語り方を考察し、実際に記憶する主体（内モンゴルの人々）がガーダー・メイレンをどのように記憶しているのかについて検討する。つまり、内モンゴルの人びと、とりわけ、ホルチン地域のモンゴル人たちは、これらの国民国家と地域の範囲で共有されるガーダー・メイレンのイメージと表象をいかに受け止めているのだろうかということを、フィールドワークを通じて明らかにする。

第1章 集合的記憶について

集合的記憶の概念は、フランスの社会学者であるモーリス・アルヴァックスが初めて提示し、これまで、人類学や歴史学など広範な学問分野に導入されてきた。アルヴァックスの「集合的記憶論」は戦後長いあいだ忘却されていたが、1990年代に入って再び注目され、再評価されるようになる。冷戦終結に伴う、歴史認識をめぐる論争の状況の中で、この「記憶のブーム」とも呼ばれるような言説群が頻出するようになったのである。「そこでは、『記憶』という想起や表象に関わる営みが、深刻な抗争を内包した次元としてあらためて発見されている。こうした風潮が、異なった地域、異なった言説領域においておおむね同時に生起してきている」²⁵。岩崎稔の指摘するように、「記憶」をめぐる問題群は領域的にも、歴史的にも多様であり、錯綜している²⁶。

本章では、このような「記憶」と「集合的記憶」研究をめぐる議論の現状と様相を確認した上で、中国における「集合的記憶」の研究動向とその深度を確認することを意図している。まずは、モーリス・アルヴァックスの集合的記憶論とヤン・アスマンおよびアライダ・アスマンの文化的記憶論について紹介する。次に、中国における「集合的記憶理論」の紹介及び概念の説明、研究の注目点、方向性に関わる課題などを論じていきたい。

第1節 集合的記憶の概念とその展開

1. モーリス・アルヴァックスの集合的記憶論

アルヴァックスは、個人の記憶の社会との関係を強調し、社会が記憶形成に与える影響を論じている。彼によると、「個人的な記憶」は「集合的なものであって、周りの多くの人々から刺激を受けており、接触し続ける。例えそれがわれわれだけが関与した出来事や、われわれだけが見た事物にかかわるものであっても、ほかの人々によって想いおこされるのである」²⁷。ようするに、個人の記憶は「社会的特徴を持つ影響力の組み合わせ」によって構成されるといい、彼は、それを「集合的記憶」と定義した²⁸。彼はこのことをさらに強調して、集合的記憶は社会的集団的に支えられていると述べる²⁹。つまり、記憶には社

²⁵ 岩崎稔「モーリス・アルヴァックスの『集合的記憶』1」『未来』、377号、1998年、20頁。

²⁶ 同上、20頁。

²⁷ モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989年、2頁。

²⁸ 石井弓『記憶としての日中戦争—インタビューによる他者理解の可能性』、7頁。

²⁹ 佐藤量「植民地都市をめぐる集合的記憶—「たうんまっぷ大連」の形成プロセスを事例に一」『コア・エシックス』、第4号、2008年、132頁。

会性という特徴が備わっており、個人的な記憶は集団によって支えられていると同時に、集団に属しているのである。アルヴァックスに従えば、「集合的記憶」は、端的に言って、「集団の記憶 (mémoire du groupe)」なのである。つまり、「集団」というエージェントが、「過去」の出来事、客体、人物、さらに当の集団を巡って、「現在」において、想起するあるいは「思い出す」ところのイメージ、印象、感覚、そして、観念である³⁰。しかし、アルヴァックスによれば、記憶の想起とは、「過去」の単なる保存、純然たる再生・再現ではなく、現在からの「過去」の「再構成」である。つまり、過去の様々な事象や人物や客体についてのもろもろの断片的なイメージ（思い出）は現在の視点から、置き直され配列されるのである³¹。したがって、その記憶や想起の過程には、同時に忘却の過程も伴う。その記憶は「生きた記憶」として変容し、凝縮し、ゆらぎ、あるいは消失する。そのつど、現在の準拠枠の内部で過去として再構成されているものだけが想起され、現在においてもはや準拠枠を持たないものは忘却されることになる³²。

一方、空間のイメージと集合的記憶についてアルヴァックスは次のように述べている。

空間のイメージは集合的記憶のうちで重要な役割を演じている。〔中略〕場所は集団の刻印を受けており、また集団も場所の刻印を受けている。それだから集団のあらゆる歩みは空間の用語によって表現することができるし、集団の占有する場所はあらゆる用語の集合にほかならない。この場所の一々の様相、一々の細部はそれ自体、集団の成員にしか理解できない意味を持っている。なぜなら、集団が占める空間の部分はすべて、成員が属する社会の構造や生活の異なった様相に同じだけ対応し、少なくともその社会におけるもっとも安定した部分に対応しているからである³³。

言い換えれば、集団によって支えられる集合的記憶は、集団の成員のコミュニケーションや関わりによって成り立つだけでなく、物質的空間によって、保持され、継承されるのである。ただし、アルヴァックスの集合的記憶研究は特定の集団（たとえば、家族、宗

³⁰ 小野道邦『可能性としての文化社会学：カルチュラル・ターンとディシプリン』世界思想社、2011年、99-100頁。

³¹ 同上、105頁。

³² 岩崎稔「モーリス・アルヴァックスの『集合的記憶』1」、24頁。

³³ モーリス・アルヴァックス『集合的記憶』、167頁。

教団体など)に留まって、それを文化のカテゴリーまでは発展させなかったと批判されている。

また、アルヴァックスは集合的記憶と歴史との対立的な関係を論じている。彼によれば、集合的記憶は連続的な思考のながれであって、過去から、その記憶の中で、今なお生きているものしか、あるいは、その記憶を保っている集団の意識の中で生きることのできるものしか保持していない³⁴。これに対して、「歴史というのは、人間の記憶の最も重大な位置を占めてきた事実の集合であり、過去の出来事は本で読まれたり、学校で教えられたりして、選択され、比較され、分類されたものである」³⁵。つまり、歴史とは、学校で教えられている年代記のように、超個人的な出来事をまとめたものであり、それは一部の少数者だけのものである。また、集合的記憶はたくさんあり、多様性、可変性という特徴を持っているのに対して、歴史は一つであって、一つの歴史しかないという。

2. 集合的記憶論の展開—J. アスマンおよび A. アスマンの文化的記憶論

アルヴァックスの集合的記憶の概念を引き継ぎ、さらに発展させたのがドイツのエジプト学者のヤン・アスマン (Jan Assmann) と英文学者のアライダ・アスマン (Aleida Assmann) である。J. アスマンは「コミュニケーション的記憶」と「文化的記憶」という概念を提示し、「集合的記憶」の概念を文化学のカテゴリーに導入した。

文化学においては、「記憶」を人間の神経的、生理的心理の問題として考えるのではなく、それを「文化」や「歴史」などのカテゴリーと結びつく概念として捉えたのである。

「文化的記憶」は、現在から絶対的な距離を持つ歴史的イベントや神話を記憶の対象として、集団の現時点での合理性を弁証し、集団のアイデンティティを強化する役割を果たしている³⁶。

アスマンによると、「コミュニケーション的記憶」は近い過去と関わっており、同世代に共有されている記憶のことである。それは運び手に支えられており、時間の経過によって、新しい記憶に更新される。あるいは、媒介を通じて、「文化的記憶」に移し変えられるのである。この媒介には、各社会と各時代において固有に再利用されるテキスト、文献資料だけではなく、社会的実践としての記念物も記憶の媒介に含まれているのである。「コミ

³⁴ 同上、88 頁。

³⁵ 同上、86 頁

³⁶ アスתרリット・埃爾、馮亜琳『文化的記憶論読本』のカバー解説の表現。

コミュニケーション的記憶」は日常生活の中で循環しているのに対して、「文化的記憶」は、遠い過去と関わっており、文化的意味の循環空間である祝日、祝典、儀式などの行為や、シンボリックな記念物、顕彰記念行為などの形式によって、展示され、具体化されるのである³⁷。

「文化的記憶」の継承は特定の形式に従い、自らの記号体系あるいは伝承の形式を持っている。たとえば、文字や図像、儀式などがそれにあたる。これらが集団のアイデンティティの構築において重要な役割を果たしているものであり、その蓄積と伝承は厳しく制御され、操作されている³⁸。ヤン・アスマンの議論はアルヴァックスの集合的記憶概念を継承し、人間の記憶の外的次元、つまり、社会的、文化的枠組との関わりを問題化している。文化的記憶は文化の体制＝システムを主体とし、超個人的であり、文化的諸媒体の中で存在している。表でまとめると以下の通りである（表 1-1）。

表 1-1 コミュニケーション的記憶と文化的記憶の違いについて³⁹

	コミュニケーション的記憶	文化的記憶
内容	自伝的枠組みにおける歴史経験	神話的历史、絶対的過去の出来事
形式	非形式的、わずかに形式的、自然発生的、相互作用によって発生、日常	設立された、高度に形式化された、セレモニ－的コミュニケーション、祭り
メディア	器官的記憶、経験、見聞における生き生きとした想起	不変的客体化、言葉や絵や踊りなどによる伝統的なシンボリックのコード化/演出
時間構成	80-100 年、現代と共に移ろう 3-4 世代の時間地平	神話的原時間の絶対的過去
運び手	不特定、想起共同体の時代の証人	専門家化された伝統の運び手

A. アスマンの研究は主に、記憶と想起のさまざまなモデルを整理・検討している。A. アスマンによると、記憶には二つの機能がある。すなわち、蓄積と再現である。ここでの蓄積は、物事を蓄えておくこと、そして、いかにそのまま蓄積するかということをも含んでいる。したがって、蓄積というのは、蓄積の方法そのものでもあり、記憶術の問題でもあるのだ。A. アスマンはそれを「術（ars）としての記憶」と呼んでいる。このような記憶術が

³⁷ 同上、25-26頁。

³⁸ 黄晓晨「文化的記憶」『国外理論動態』、2006 年、第 6 期、61 頁。

³⁹ 斉藤公輔「集合的記憶概念の批判的考察と今後の展望」『ドイツ文学論考』第 49 号、2007 年、62 頁。

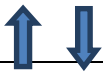
あるからこそ、一つの文化的モデルが絶え間なく継承されていくのである。それに対して、再現というのは、蓄積した記憶を思い出し、想起し、再生産することである。しかし、記憶したものと再現の間には根本的なずれが生じる。なぜなら、記憶がそれ自体のうちに忘却を孕んでいるからである。それは意図的ではない行為であり、それをアスマンは「力(vis)としての記憶(=想起)」と呼んでいる。これらが記憶の二つの機能であり、アスマンの記憶についての思考の第一の区別である。そして、想起の経験のなかにおいても、二つの契機があるとアスマンは強調している。すなわち、快い過去の想起を主観的かつ意のままに求める主観的な想起＝「リコレクション」とそれと対抗的な想起の形式＝「アナムネーシス」である。アナムネーシスという想起の形式は没主観的で、意のままにならない想起のことである。これが A. アスマンの想起の空間論における第二の区別である。

加えて、アライダ・アスマンは歴史と記憶の関係を想起の二つの様態として、確保することを提案し、歴史と記憶の問題をさらにダイナミックに考察した。A. アスマンは、歴史と記憶の問題を対極化したり、同一視したりすることを乗り越える決定的な歩みは、住まわれた記憶と住まわれざる記憶の関係を、二つのお互いに補い合う想起の様態として理解することだと強調している⁴⁰。すなわち、機能の領域と保管の領域として、「機能的記憶」と「蓄積的記憶」とを区別したのである。言い換えれば、記憶はある時代に需要があれば、「機能する記憶」として、社会の中で、流通し、需要がなければ、「保管された記憶」として、どこかで蓄えられていく。もちろん、この二つの記憶は相互に排除しあう関係ではなく、互いに流動的で、補完的である⁴¹。例を挙げると、歴史的に現在まで、評価されなかった博物館などに保管されている遺物や、所有者がいなくなった品物が再び評価される時、それが、もともとの保管の領域＝「蓄積的記憶」から機能の領域＝「機能的記憶」に移ったと考えることができるだろう。これが A. アスマンの想起の空間論における第三の区別である。表でまとめると以下ようになる（表 1-2）。

⁴⁰ アライダ・アスマン著、安川晴基訳『想起の空間：文化的記憶の形態と変遷』、163 頁。

⁴¹ 斉藤公輔「集合的記憶概念の批判的考察と今後の展望」、67 頁。

表 1-2 A. アスマンの想起の空間論における三つの区別

第一の区別	術 (ars) としての記憶	記憶をいかにそのまま蓄積するかという蓄積の方法であり、過去のものをできる限りそのまま再現する技術、意図的行為に関わる
	力 (vis) としての記憶 (=想起)	記憶はそれ自体において忘却を含み、それは想起のプロセスにおいて、記録と再現との間に根本的なズレを生じさせる、意図的ではない行為に関わる
第二の区別	リコレクション (recollection)	快い過去の想起を主観的かつ意のままに求める主観的な想起、創造性、そして自我の構築
	アナムネーシス (anamnesis)	リコレクションと対抗的な想起の形式であり、それは能動的な自己構築のパターンを降服させる
第三の区別	蓄積的記憶 (歴史) 	住まわざる記憶：特定の担い手から切り離されている、過去を現在と未来から根本的に切断する、何にも関心を抱く、すべてが等しく重要
	機能的記憶 (記憶)	住まわれた記憶：集団、機関、個人など何らかの担い手と結びついている、過去、現在、未来を橋渡しする、選択的にふるまう

A. アスマンによると、文字の出現によって、蓄積されるものは人々に利用されるもの、あるいは更新されるものという枠組みを超えて、「文化的記憶」の領域で深刻な変化をもたらした。つまり、記憶のカテゴリーにおいて、利用される領域＝住まわれる記憶＝機能的記憶と、潜在的・蓄積的領域＝住まわざる記憶＝蓄積的記憶の二つの記憶が存在するようになったのである。「機能的記憶の重要な特徴は、特定の集団とのつながり、選択的性格、価値に拘束されていること、そして未来に向けられていることだ。それに対して歴史の学問はセカンド・オーダーの記憶。つまり諸々の記憶の記憶であり、現在との生きたつながりを失ったものを収容する。この諸々の記憶の記憶を「蓄積的記憶」と呼ぼう」⁴²とアスマンは述べている。「機能的記憶」と「蓄積的記憶」の違いを表でまとめると以下の通りである（表 1-3）。

⁴² アライダ・アスマン『想起の空間：文化的記憶の形態と変遷』、163-164 頁。

表 (1-3) 蓄積的記憶と機能的記憶の違いについて⁴³

	蓄積的記憶	機能的記憶
内容	他者、現時点を超える	自己、現時点の基礎がある特定の過去
時間構成	時間が乱れている、すべてが重要	過去、現在、未来を橋渡しする
形式	テキスト、文献の侵害不可能性	選択的に利用される想起
媒介	文学、芸術、博物館、科学	祭り、集合的公共儀式
運び手	文化的集団の中の個体	集合的行為主体

ここまで、「集合的記憶」研究をめぐる議論の現状と様相を確認してきたが、次の節では、中国における「集合的記憶」の研究動向とその深度を確認したいと思う。

第2節 中国における集合的記憶論研究概観

20 世紀の中国は、革命や戦争による多様な「法的暴力」を経験しており、その暴力の「記憶」もまた、「集合的記憶」研究の考察の対象となっている。現代中国において、日中戦争の記憶は大きな国民的記憶として前景化し、それを描写するメディアや言説が過剰なまでに膨張してきているともいえる。それと同時に、イデオロギー的な暴力の記憶としての「文化大革命」時代の記憶や「民族的記憶」は政治的圧力を受けつつ、例外的に描写されるにとどまっている。

例えば、2012 年 5 月 29 日から中国中央テレビ局（CCTV1）のゴールデンタイムで放送された連続テレビ・ドラマ『知青』がその好例であろう。この作品は文化大革命時代の毛沢東の提唱によって、農村に「下放」された「知青⁴⁴の生活」、つまり、「下放＝上山下郷運動」を題材とした梁曉声の小説『知青』⁴⁵に基づいて制作されたテレビ・ドラマである。テレビ・ドラマ『知青』は放送後、中国で大きな話題を呼んだ。それ以外にも、中国各地で建てられている「日中戦争」記念館や、革命烈士記念館・遺跡の建築は、過去の出来事

⁴³ ア斯特莉特・埃爾、馮亜琳『文化的記憶論読本』、28頁。

⁴⁴ 「知青」というのは、「知識青年」の略語であり、知識を持っている青年・若者たちという意味で、文化大革命の時、毛沢東の提唱によって、都市の若者たちを知青として、農村に下放され、地方での労働に従事させられた。「下放＝上山下郷運動」とも言われる。このような特別な時代に形成された「若者集団」がその時代の「集合的記憶」研究の徴候的な担い手になっていると言える。

⁴⁵ 梁曉声『知青』青島出版社、2012 年。

や戦争の記憶をめぐる抗争を反映し、その記憶を強化する目的をさらにはっきり担うようになっている。

1. 集合的記憶の理論紹介と応用

中国において、「集合的記憶」の研究にはじめて関心を払ったのは歴史研究者であった⁴⁶。中国で出版されている翻訳としては、ポール・コナトン（Paul Connerton）の『社会はいかに記憶するか』、モーリス・アルヴァックスの『集合的記憶』があり、これらはそれぞれ2000年と2002年に上海人民出版社から出版されている。また、2007年には、北京大学出版社から『社会的記憶：歴史、想起、伝承』も出版されている。

近年、『歴史研究』、『学术研究』、『中国図書評論』、『思想戦線』、『民族研究』、『外国文学』などの雑誌において、記憶論に関する論文が実に多数掲載されるようになった。これらの場合、主に海外の記憶論の紹介や記憶と文学の関わりをサーヴェイし、伝統的な祝日と集合的記憶、民間信仰と儀式はいかに民族のアイデンティティを強化しているのか、それが民族の集合的記憶形成においてどのような役割を果たしているのか、などを研究の対象としている。その実例として、李莉（Li Li）⁴⁷、舒開智（Shu Kaizhi）⁴⁸、钟年（Zhong nian）⁴⁹、納日碧力戈（Naribilige）⁵⁰などの研究が挙げられる。

「集合的記憶」の事例分析においては、「文化大革命」、「南京虐殺」などの重大な歴史的事件を考察の対象とした研究が多い。「文化大革命」時代の「苦難の記憶」や「知青の記憶」を主題にしたものには朱沛昇（Zhu Peisheng）⁵¹、艾娟（Ai Juan）⁵²の研究があり、また、「南京虐殺」を「集合的記憶」の事例として考察した論文としては陳曉紅（Chen Xiaohong）⁵³と程鉅舜（Cheng Boshun）⁵⁴の研究が挙げられる。これらの中から、中国における「集合的記憶」研究に関するいくつかの論文を取り上げてみたい。

⁴⁶ ア斯特莉特・埃爾、馮亜琳『文化的記憶論読本』、2頁。

⁴⁷ 李莉「文学与記憶的關係探析」『社会科学家』、2009年、第12期。

⁴⁸ 舒開智「伝統節日、集体記憶与文化認同」『天府新論』、2008年、第2期。

⁴⁹ 钟年「社会記憶与族群認同——從《評皇券牒》看瑶族的族群意識」『广西民族学院学报』、2000年、第4期。

⁵⁰ 納日碧力戈「各烟屯蓝靛瑶的信仰儀式、社会記憶和学者反思」『思想戦線』、2000年、第2期。

⁵¹ 朱沛昇「“文革”——沉重的集体記憶」、福建師範大学修士論文、2010年。

⁵² 艾娟「知青集体記憶研究」、南開大学博士論文、2010年。

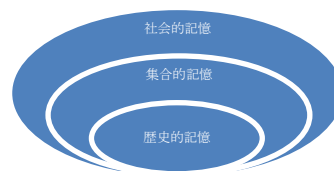
⁵³ 陳曉紅「映像生産与集体記憶——以南京大屠殺影片為中心」、南京師範大学修士論文、2008年。

⁵⁴ 程鉅舜「集体記憶的规训：南京大屠殺的記憶如何被建构」、南京大学修士論文、2012年。

最初に、台湾の学者である王明珂 (Wang Mingke)⁵⁵の論文を取り上げよう。王明珂は「歴史的事実、歴史的記憶と歴史のメンタリティー」と題する論文の中で、記憶の概念群とその関係性について、少なくとも三つの異なるカテゴリーに属する記憶を区別する必要があると論じている。一つ目は、社会の中で、各種の媒介によって、保存され、伝承されている「記憶」、つまり「社会的記憶」であり、その範囲はもっとも広い。例えば、図書館の中で収蔵されているすべてのもの、一つの山に関する神話、一つの偉人の塑像によって喚起される歴史的記憶、および民間社会の口承による歌謡、物語などがそれに当たる。二つ目は、「集合的記憶」であり、その範囲は「社会的記憶」より狭い。つまり、「社会的記憶」の中で、社会の成員によって共有される記憶である。例えば、一つの有名な刑事事件、一回だけの試合の記録、大きな政治的事件などがこれに当たる。三つ目は、一つの社会の「集合的記憶」の中で、当該社会に認められている歴史を現す形態およびその伝承である。これが、「歴史的記憶」であり、その範囲は一番狭くなるという。人々はそれを通じて、集団の共同の起源及び歴史の変遷を遡り、それによって集団の現在時におけるアイデンティティを解釈することができるのである⁵⁶。

王明珂の議論を図式化すれば、以下の通りである (図 1-1)。

図 1-1 : 「記憶」の概念群とその関係性

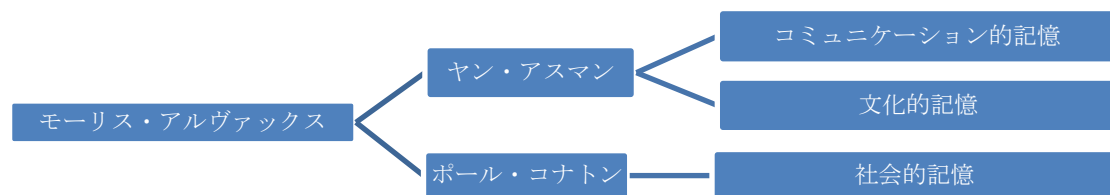


⁵⁵ 本稿では、中国大陆における「集合的記憶」研究の動向を中心に紹介するが、中国における「集合的記憶」研究の多くは彼の議論を参照しているからここで簡単に紹介した。

⁵⁶ 王明珂「歴史事実、历史記憶与歴史心性」『歴史研究』、2001年、第5期。一方、日本では、王明珂の考察と似ている研究として、小野道邦 (2011) の著作があげられる。彼はアルヴァックスの集合的記憶の概念群とその区別について次のように紹介する。第一に、集団を担い手とする固有な意味における集合的記憶であり、「集団的記憶」と呼んでもよい。家族、学校、友人、村落、職業集団、政党、宗教集団、社会階級、政治的社会 (国家・国民) などが伝承し保存し想起する記憶である。第二に、「集合的記憶の潮流 (courant)」とも「集合的思考の潮流」とも呼ぶことのできるタイプである。これは、特定の集団が担い手である記憶とよりも、それに限定されずに社会全域に普及し拡散している「世論」、「雰囲気」、「精神」であり、むしろ、「社会的記憶」と呼んだほうがよいかもしれない。このタイプの記憶は、新聞、雑誌、ポスター、絵画、大衆小説、教科書などの表現されており、ある意味で、その主要な担い手はジャーナリズムである。第三に、「歴史的記憶」である。それは、過去を「要約的かつ図式的な形態で専ら表現する」「国民の出来事」しか含まない記憶である (小野道邦『可能性としての文化社会学：カルチュラル・ターンとディシプリン』、103-104頁)。

王とは視点が違う議論として、「集合的記憶」の概念群とその系譜に関して論陣を張っている燕海鳴（Yan Haiming）の論文⁵⁷も興味深い。燕海鳴は王明珂のように、「集合的記憶」に関わる諸概念を包含型で捉えているのではなく、むしろ、垂直的に捉えているといえる。燕海鳴の解釈によれば、アルヴァックスの集合的記憶は抽象的な概念としての collective memory ではなく、具体的な概念として collected memories である。つまり、アルヴァックスのいう集合的記憶は、実はいくつかの個人的記憶の集合にすぎないものであり、それを実際の集合的記憶（collective memory）の動態にまで掘り下げて議論を発展させたのはアルヴァックス以降、例えば、ポール・コナトンやヤン・アスマンの世代の学者であると見る。つまり、ポール・コナトンの「社会的記憶」の概念とヤン・アスマンの「文化的記憶」の概念は、それぞれアルヴァックスの集合的記憶論の展開形態であるという理解である。燕海鳴の議論は以下のように図式化することができる（図 1-2）。

図 1-2 記憶の概念群とその系譜



燕海鳴は「集合的記憶」の概念とその展開について言及しながら、中国の「集合的記憶」研究の問題点を指摘している。燕によれば、英語の collective memory の collective という言葉は中国語で「集体（ji ti）」と訳されるので、collective memory は「集体记忆」（集合的記憶）と訳されている。ところが、この「集体」という言葉は、中国の文脈において、「人の組合」という意味で、非常に具体的な意味を表す。そのため、「集体记忆」（集合的記憶）は、社会主義時代の「集体主義（集団主義）」、「集体所有制」などの用語と結びついたものとして考えられる傾向がある。そのため、中国の集合的記憶の研究は、社会主義革命とその歴史的出来事を取り上げて考察するものが主で、集合的記憶の内容も collective memory ではなく、collected memories⁵⁸として用いられていることが多いという。このよう

⁵⁷ 燕海鳴「集体記憶与文化記憶」『中国図書評論』、2009年、第3期。

⁵⁸ collective memory と collected memory の相違について、斉藤公輔はアストリート・エアルの議論を借りながら、詳しく説明している。（斉藤公輔「集合的記憶概念の批判的考察と今後の展望」、68頁）。

な翻訳の曖昧さによって、中国における集合的記憶の研究もいわゆる「コミュニケーション的記憶」に留まり、それをマクロレベルでの「文化的記憶」にまで昇華していない点が惜しまれる、と燕海鳴はいう。燕は論文の中で、このような研究の枠組を乗り越え、現在から最も距離を持つ歴史的事件や人物、映像作品による過去の表象、シンボリックな記号（例えば、万里の長城、義勇軍進行曲など）を分析の視野へ置き、集合的記憶としての動態を分析するべきであると呼びかけている。しかしながら、その燕海鳴も、集合的記憶概念の系譜とその関係性について詳しく説明しているが、「コミュニケーション的記憶」と「文化的記憶」の関わりや、「文化的記憶」の伝承と個人への影響についての考察は行っていない。

これについて、王霄冰（Wang Xiaobing）は「文化的記憶と文化の伝承」という論文の中で、ヤン・アスマンの議論を紹介しながら、「コミュニケーション的記憶」と「文化的記憶」の関わり、また「文化的記憶」と「社会的記憶」との関わりについて論じている。

王霄冰は論文の中で、ヤン・アスマンの「文化的記憶論」を静的なものとして捉えるのではなく、むしろ動的なものとして捉えるべきだという。「文化的記憶」によって保存される文化的遺産が「社会的記憶」として社会に認識されることで、はじめて意味を持つようになり、永遠に伝承されるのである。つまり、「文化的記憶」は可変的であり、それは「社会的記憶」との流動的關係を通じて、絶えず更新され、変容する。「文化的記憶」と「社会的記憶」の流動的關係において、知識人は重要な役割を果たしているという。また、「文化的記憶」の形成と伝承について、王霄冰は中国古代の歴史上の重大な出来事や王朝の統治者たちによって行われていた儀式、知識人によって編纂された経典⁵⁹などを取り上げ、中華民族の「文化的記憶」は漢代になってから初めて形成されたものである、と論じている。

「文化的記憶」としての経典は国家の憲法のように綱領的役割を果たしている。それが一部の専門家や知識人によって保存され、整理・研究されるとともに、「社会的記憶」として社会に戻り、儀式化され、普及することによって永遠に維持され、民族のアイデンティティを構築・強化する役割を果たしているという。

また、李興軍（Li Xingjun）は「集合的記憶研究概観」という論文の中で、モーリス・アルヴァックスの「集合的記憶」の概念とその系譜、研究の射程、問題点について、あらためて包括的に述べている。彼によると、中国における「集合的記憶論」研究は主に、理論の紹介と理論の応用の二つの方向で展開されている。理論の紹介としては、何栄（He rong）、

⁵⁹ ここで、『詩経』、『書経』などが挙げられている。

趙永樂(Zhao yongle)⁶⁰が代表的であり、理論の応用としては、王漢生(Wang Hansheng)、劉亜秋(Liu Yaqiu)⁶¹、景軍(Jing Jun)⁶²、陳旭清(Chen Xuqing)⁶³、郭于華(Guo Yuhua)⁶⁴などの研究が挙げられるが、いずれにしても、研究の内容と分野が狭く、方法論的にも未熟であると指摘している。

この中では、王漢生、劉亜秋は集合的記憶論の研究方法を用いて、「知青」の記憶と語りを分析し、興味深い議論を展開している。彼らは、「下放＝上山下郷運動」による「知青」という「若者集団」の集合的記憶の形成、構築と伝承の契機を吟味し、また、当事者の語りや「知青文学」の分析を通じて、「知青」の集合的記憶の特徴と語りのスタイルやタイプを明らかにした。王漢生によれば、「知青」の中で共有されている共通的な語りとして、「下放」による「生活の困苦」や「精神的な困惑」が挙げられているが、多くの「知青」が自分の体験に対して、積極的な意味を見いだせる思い出を持っており、後悔していないという。しかし、「知青」の記憶と語りは単純なものではなく、彼らの現在の生活状況によって、語りの内容も異なっているともいう。さらに、「知青」の記憶形成と伝承において、「知青文学」や「集い」は重要な役割を果たした。

最後に、モーリス・アルヴァックスとポール・コナトンに対する批判的考察として、李紅武(Li Hongwu)、胡鴻保(Hu Hongbao)、羅彩娟(Luo Caijuan)⁶⁵、高萍(Gao ping)⁶⁶、孫峰(Sun Feng)などの研究を一瞥しておこう。李紅武と胡鴻保はモーリス・アルヴァックス及びポール・コナトンの提示した議論の内容とその到達点について評価しながら、その不足点について次のように批判している。

まず、アルヴァックスが、集団の集合的記憶はいかに保持され、伝承されるかについて論じていないことである。そして、アルヴァックスの論じている集団は統一的、調和的な集団であるが、実際には、そのような理想的な集団は存在しえない。また、アルヴァックスは社会的側面から、家庭、宗教と階級の集合的記憶を論じているが、人々がいかに過去の記憶を借りて現在の問題を解説しているかについては論じていない。さらに、

⁶⁰ 何栄、趙永樂「国外群体記憶研究概述」『宜宾学院学報』2009年、第5期。

⁶¹ 王漢生、劉亜秋「社会記憶及其建构一項關於知青集体記憶的研究」『社会』2006年、第3期。

⁶² 景軍「社会記憶理論与中国問題研究」『中国社会科学季刊』(香港)1995年、第12期。

⁶³ 陳旭清「心灵的記憶：苦难与抗争——山西抗戰口述史」浙江大学博士論文、2005年。

⁶⁴ 郭于華「心灵的集体化：陕北驢村農業合作化的女性記憶」『中国社会科学』2003年、第4期。

⁶⁵ 羅彩娟「社会記憶散論」『廣西民族師範学院学報』、2011年、第6期。

⁶⁶ 高萍「社会記憶理論研究綜述」『西北民族大学学報』、2011年、第3期。

アルヴァックスは記憶を社会的構造の中で検討し、社会的集団の中での、記憶の現時点での再生産的な特徴をあまりにも強調し過ぎているため、記憶の連続性の問題を軽視する傾向がある。一方、この点に関して、ポール・コナトンは『社会はいかに記憶するか』の中で、記憶の連続性の問題、集合的記憶の保持と伝承についての解明を行っている。しかし、ポール・コナトンは政治的意味のある社会的行為や、顕彰記念行為、身体を主な研究の対象とし、それ以外の社会的記憶の現象を論じていない点が惜しまれる⁶⁷。

罗彩娟と高坪は、アルヴァックスの「集合的記憶論」とコナトンの「社会的記憶論」を紹介しながら、その理論紹介と応用をめぐり国内外の「集合的記憶論」に関する研究動向について整理している。記憶に関する諸概念とその系譜、関係性に関して、罗彩娟は、台湾の学者である王明珂の解釈に基づいて集中した解説を行なっているが、これまでの議論の問題点や展望については提示していない。

孫峰 (Sun Feng)⁶⁸はアルヴァックスとコナトンの議論を比較しながら、両者の到達点と問題点を提示した上で、両者の議論の内在的関わりと相違点を論じている。ただし、孫の研究はその両者の議論だけに焦点を当てて限定的に論じており、既存の理論的枠組みを乗り越えていないという点で、いまひとつの限界がある。

2. 内モンゴルでの動向

中国語圏での記憶論研究をサーヴェイしてきたが、さらに限定してそのなかでも内モンゴル地域での研究動向や文脈について少々立ち入っておこう。

内モンゴル地域のモンゴル研究においても、集合的記憶論は導入されている。例えば、美華 (Mei Hua)、ナセンバヤル (Nasunbayar)、テクスバヤル (Tegüsbayar)、姜迎春 (Jiang Yingchun) などの研究が挙げられる。

美華は、「記憶および記憶の研究を巡って」⁶⁹という論考の中で、文化学と民族学に用いられている「記憶」という言葉に含まれている意味と要素、記憶と歴史の関わりについて考察している。彼女によると、記憶は過去の出来事と人物を内容とし、記憶そのものが歴

⁶⁷ 李紅武、胡鴻保「国外社会記憶研究概述」『学習月刊』、2011年、第6期。

⁶⁸ 孫峰「从集体記憶到社会記憶——哈布瓦赫与康納頓社会記憶理論的比較研究」華東師範大学修士論文、2008年。

⁶⁹ Mei Hua, “Durasumji jichi durasumji-yin toyorin-du ügülekü-ni”, *Öbör mongyol-un neigem-ün sinjilekü uqayan*, 2007 on-u 6 duyar quyuçay-a.

史と関わっているので、「歴史的記憶」とも言われる。しかし、記憶と歴史はいくつかの点で区別されるという。歴史は過去の出来事とその経過を指している客観的存在であるため、一回性、永遠性、隠蔽性、客観性という特徴を持っている。これに対して、記憶は客観的存在と主観的認識の関わりによって形成されるので、構築性、複雑性などの特徴を持っている。歴史は人間の意識によらない客観的存在であると同時に、人間に認識されるものである。記憶は歴史についての認識である。両者を対照すれば、歴史は「過去は何か」という問いを解明することであるのに対して、記憶は「過去の出来事の何が、何のために、どのように想起されるか」という問いに集約されるような存在である。そのため、記憶は選択性、合理性、継続性、可変性、時代性という特徴を持っているのであるという。

また、彼女はモーリス・アルヴァックスの議論を踏まえて、記憶の所属する主体によって、二つの記憶を区別する必要があると論じている。一つは、内的なもの、即ち個人的記憶である。もう一つは、外的なもの、つまり、社会的、集合的記憶のことである。すべての集団は自分の集合的記憶を持っており、またそれを通じて、別の集団から区別され、集団の共同性を有効に保証する過去の認識として広く認識されるのである。例えば、モンゴル人たちは一つの集団として、特定の集合的記憶を持っており、オボー祭り、民謡、ホーリン・ウリゲル、記念物、博物館などを通じて、自分の集合的記憶を絶え間なく構築しているのである。

内モンゴル大学のナセンバイルは「歴史的記憶と現代内モンゴル人の民族アイデンティティの構築」⁷⁰という論考で、民族学の視点から、現代内モンゴル人の歴史的記憶と民族のアイデンティティの関わりについて論じている。彼によると、歴史的記憶は、過去の人物と出来事の人間の頭の中での痕跡、イメージとして、個人と集団において、口承あるいは、文章を通じて、伝承されるのである。内モンゴル人の歴史的記憶というのは、一つの集団として、かつての歴史的人物と出来事を長時間に渡って記憶している集団の文化的現象を指している。今日の内モンゴル人の歴史的記憶は、民族のアイデンティティの構築と深く関わっており、記憶される歴史が集団の歴史的経験とつながっていると同時に、現在の集団の目的にも利用されている。この内モンゴル人の歴史的記憶の重要な特徴は、まず、「何を記憶しているのか」、そして、「何のため、その歴史を記憶しているのか」という問題として解釈できる。ちなみに、内モンゴル人の民族のアイデンティティにおいて、二つ

⁷⁰ Nasunbayar, “Teüken durasumji kiged odo üy-e-yin Öbör mongyolcud-un ündüsüten-ü adalisil-un čoyčalalta”, *Öbör mongyol-un yeke surγayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgöl*, 2006 on-u 4 duγar quyučay-a.

の歴史的記憶が主に利用されている。一つは、13世紀のモンゴルの歴史的記憶であり、もう一つは、清朝時代のモンゴルの歴史的記憶であるという。

また、テクスバヤルは、「伝説と記憶としてのリンダン・ハーン—記憶と想起の交錯をめぐって」⁷¹という論文を書いている。彼はこの中で、モンゴル帝国の最後の皇帝「リンダン・ハーン」(Ligden Qayan 林丹汗 1591-1634)に関する16種類の伝説を取り上げ、その記憶と忘却の交錯をめぐって論じている。その中で、多くの伝説は現在内モンゴルのアル・ホルチン(阿魯科爾沁旗)を中心に伝わっており、また、これらの伝説はモンゴル人たちの国家意識が失われていることと関連していると論じている。彼は、伝説を「集合的記憶」の一つとして捉え、「リンダン・ハーン」の伝説が記憶と忘却のメカニズムの中で伝承されてきたと主張している。彼は、多くの「リンダン・ハーン」に関する伝説が内モンゴルのアル・ホルチンを中心に伝わっている理由は、アル・ホルチンの「チャガン・ホト」(Čayan qota)というリンダン・ハーンの首都であった町の跡と関係があると見る。「チャガン・ホト」という実在の町が存在し、その町の跡がいまだに残っているからこそ、多くの「リンダン・ハーン」に関する伝説が伝えられているのであるという⁷²。この意味で、「空間のイメージは集合的記憶のうちで重要な役割を演じている」というアルヴァックスの議論を、ここに当てはめることが出来る。テクスバヤルは「リンダン・ハーン」に関する伝説とその変容について詳しく分析した上で、モンゴル人たちの国家意識が失われた原因を考察しているが、空間的イメージとしての「チャガン・ホト」と集合的記憶の関わりについては深く論じていない点が惜しまれるところである。また、彼は、「伝説が「集合的記憶」の一つの内容である」という指摘をしているが、伝説と集合的記憶の関わりについてはやはり詳しく分析していない。

最後に、集合的記憶の事例分析として姜迎春の研究を取り上げたい。姜は、テキスト分析と歴史的記憶(Historical Memory or Memory for the past)の研究方法を用いて、モンゴル民族のウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の歴史的記憶の内容、特徴と機能を考察した。姜は、「歴史的記憶」には、権力側の記憶⁷³、エリートの記憶とともに、草の根社会の記憶が含まれていると考えている。姜は、権力側の歴史的文献から見られる「ガーダー・

⁷¹ Tegüsbayar, “Domoγ durasumji-yin Ligden Qayan---durasqu-ba martaqu-yin solbičel jürilčel Öbör mongγolcud-un ündüsüten-ü adalisil-un čoyčalalta”, *Öbör mongγol-un yeke surγayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgöl*, 2006 on-u 5duγar quyučay-a.

⁷² 同上, p.24.

⁷³ ここでいう「権力側の記憶」は、統治者のイデオロギーに対応される「公的記憶」、あるいは「公式的記憶」を指す。

メイレンの記憶」、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』における「ガーダー・メイレンの記憶」、草の根社会の口述史料から見られる「ガーダー・メイレンの記憶」という三つの側面から分析し、その出来事の歴史的記憶の様式を明らかにした。その中で、「ガーダー・メイレン蜂起」に関する主な歴史的人物と出来事とを手がかりとして、文献整理とフィールドワークを行い、一定の業績を収めている。

姜迎春の研究は内モンゴル地域のガーダー・メイレンに関する記憶論的研究の先駆と位置づけるべきであり、その意義は大きい。しかし、姜の用いている歴史的記憶の概念は、先述したような中国である程度共有されている狭い意味での「集合的記憶」（集体记忆）のものであり、いわゆる「コミュニケーション的記憶」のことにすぎない。というのも、姜の行ったフィールドワークは、主にガーダー・メイレンの戦死した村の人々、ガーダー・メイレンの親戚へのインタビュー調査を中心としたものであるからである。「コミュニケーション的記憶」とは、同時代の歴史経験を内容とし、日常生活の中で自然に生まれた経験談、見聞などの中に現れる生き生きとした思い出を媒介としている⁷⁴。したがって、「ガーダー・メイレンの記憶」が、いかに集合的・社会的動態の中で、再構築されたのかを解明しているとはいえ、それはあくまでも、いくつかの個人的記憶の集合にすぎない。つまり、ガーダー・メイレンが集団のメンバーのコミュニケーションとウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』を通じて構築されたことについては理解しているものの、それをマクロレベルでの「文化的記憶」にまで昇華しなかったのである。論文の後半部分で、「文化的記憶」について若干の言及があるが、解釈が曖昧であり、詳しく論じられていない。

小結

以上のように、集合的記憶の概念とその展開について概略してきた。アルヴァックスは人間の「個人的記憶」＝「内的な記憶」と対照的に、社会的に構築される「集合的記憶」＝「外的な記憶」のほうに関心を持ち、前者が後者の影響を受けていると強調した。彼によると、集合的記憶は集団によって支えられており、可変性や多様性という特徴を持っている。しかし、彼の考察した「集団」は家族、宗教団体などの特定の集団に留まって、その領域を文化のカテゴリーまでは発展させなかったと批判されている。これに対して、ヤン・アスマンはアルヴァックスの「集合的記憶」概念を狭い意味での「コミュニケーション的記憶」として受け止め、「文化的記憶」という概念を提示し、「集合的記憶」の概念を

⁷⁴ 齊藤公輔「集合的記憶概念の批判的考察と今後の展望」、59-78 頁。

文化学のカテゴリーに導入した。つまり、「集合的記憶」研究は特定の集団や日常的コミュニケーションによって維持されている記憶の動態を考察するだけでなく、遠い過去と関わっている文化的シンボルや神話的歴史、絶対的過去の出来事をも研究の内容としている。また、アルヴァックスは集団の意識の中で生きている多様な「集合的記憶」と、少数者だけによって維持される単一の「歴史」との関わりを論じている。これに対して、A.アスマンは、歴史と記憶の関係を想起の二つの様態として捉え、それが「蓄積的記憶」と「機能的記憶」の問題であると主張して、「文化的記憶」の領域をさらに拡大した。

一方、中国における「集合的記憶」研究の動向を整理してみると、その研究の注目点、方向性に関わる課題としては、以下の諸点が挙げられる。

まず、研究の対象と内容から見れば、それは「文化大革命」、「南京虐殺」などの重大な歴史的事件を考察の対象として一定の成果を収めているが、草の根社会やマイナーな記憶に関する研究の蓄積が少ない。草の根社会の記憶に関する研究としては、姜迎春の研究を挙げることはできるものの、そこでも「マイナーな記憶」は軽視されている。姜の研究ではガーダー・メイレンの歴史的記憶の内容、特徴と機能が考察されているが、ガーダー・メイレンの何が忘却されたかについては、明らかにされていない。つまり、「ガーダー・メイレン」に関する権力側の記憶、あるいは、「公式的な記憶」があまりに強調され過ぎており、それに対抗するような形で存在する周辺的な「マイナーな記憶」については度外視されている。筆者が考える「マイナーな記憶」というのは、何らかの権力装置によって忘却され、排除された「記憶」である。この記憶は、制度化された「歴史的記憶」、あるいは「公式的記憶」の傍らに存在するが、それと対抗的な形で存在しているものである⁷⁵。例えば、権力側の歴史的文献からも見られるように、「反動的な軍閥」や、「封建的な蒙古王公」と戦った「階級闘争のモデル」としての「ガーダー・メイレンの記憶」を「公式的記憶」とすれば、忘却されつつある漢民族の入植に対抗した「ガーダー・メイレンの記憶」（土地をめぐるモンゴル人と漢人の民族的対立）は「マイナーな記憶」であると言える。

集合的記憶の理論紹介に関しても、モーリス・アルヴァックス、ポール・コナトンとヤン・アスマンらの議論に留まり、アライダ・アスマンの「想起の空間論」や、ピエール・ノラの「記憶の場」の議論などはほとんど導入されていない。発表された論文から見ても、王明珂、燕海鳴と王霄冰の研究を除いて、それらについて理論的に深く掘り下げられてい

⁷⁵ 拙稿「集合的記憶としての「ノモンハン事件」/「ハルハ河戦争」『言語・地域文化』第20号、2014年、341-357頁。

ないのが現状である。燕海鳴が指摘したように、「集体记忆」（集合的記憶）という言葉の翻訳によるニュアンスの相違が大きな障害になっている。collective memory と collected memory の相違について、中国の文脈において意識されずにその概念が乱用されることにより、現時点での研究では、その枠組を乗り越えられずにいるのが現況である。

さらに、研究の方法と方向性に関して、集合的記憶論の研究方法を用いて、文学作品、映像作品、記念物、顕彰記念行為について考察した研究が少ない。映像作品を分析したものとして前節で取り上げた珍曉紅 (Zhen Xiaohong) の研究以外には、秦志希 (Qin Zhixi)、曹茸 (Cao Rong)⁷⁶の研究がある程度である。また、記念物と顕彰記念行為について分析した研究としても、楊楊 (Yang Yang)⁷⁷の研究は挙げられるが、その程度であり、研究の蓄積は少ない。姜迎春においても、テキスト分析の対象としては、草の根社会に伝えられてきたウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』だけに焦点を当てているので、「ガーダー・メイレンの記憶」としては不十分である。「ガーダー・メイレンの記憶」を考察するには、ウリゲルト・ドーだけではなく、他の文学作品や、ホーリン・ウリゲル、映像作品、記念物などについても分析する必要があるだろう。

⁷⁶ 秦志希、曹茸「電視歴史劇：対集体記憶的建構与消解」『現代伝播』、2004年、第1期。

⁷⁷ 楊楊「空間、儀式与社会記憶—以侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館為中心的考察」南京師範大学、修士論文、2007年。

第2章 歴史叙述としての「ガーダー・メイレン蜂起」

集合的記憶としての「ガーダー・メイレン蜂起」を論じる前に、歴史叙述としての「ガーダー・メイレン蜂起」、つまり、その出来事が起きた歴史的背景と蜂起のプロセスについて再確認する必要がある。

今日の内モンゴルの公式的な歴史叙述の中では、「ガーダー・メイレン蜂起」が勃発したのは、ダルハン王などのモンゴル王公が張作霖などの奉天軍閥と手を結んで、ホルチン左翼中旗の土地を開墾した結果であると解釈されている。しかし、モンゴル地域へ流入して来た漢人移民の入植史が論じられておらず、しかも、それが漢人の移民や入植はホルチン地域のモンゴル人社会、特に土着民のモンゴル人の生活のスタイルについてや、また社会的構造にどのような変化をもたらしかについてはほとんど解明されていない。これについては、ボルジギン・ブレンサイン（2003）ではホルチン左翼中旗の蒙地開墾の経緯、移住民社会の形成と通婚関係から形成される多民族村落社会の統合過程を明らかにしており、参考に値する。

中国における「ガーダー・メイレン蜂起」に関する先行研究や、各資料の記述では、ガーダー・メイレンが「開墾に反対し、王公と対立し、奉天派軍閥の軍勢と戦った」という点で合意が見られるが、彼が「どのような人々と」「何のために」戦ったのかについての見解はそれぞれ異なっている⁷⁸。中国で書かれたガーダー・メイレンに関する伝記の中には、ダルハン旗の貧しい一般庶民のほかに、ホルチン左翼後旗、同前旗、ゴルロス旗、双山県から来た地元の漢人匪賊団も「蜂起軍」に加わっていたと書かれている⁷⁹。また、「ガーダー・メイレンは蒙漢人民の共同の利益のために戦った」⁸⁰とされており、「蜂起軍が各地のモンゴル人と漢人に歓迎され、長岭、双山一帯の漢人からの銃と弾薬などの援助を得ていた」⁸¹と書かれている。これに対して、日本で発表された論文や記事の中では、「彼は蒙地

⁷⁸ 石原邦子「内モンゴル民歌「ガダ・メーリン」に関する一考察—モンゴルの英雄はなぜ中国で歌われたか」、24-25頁。

⁷⁹ Kūrelša, Sergūlēng, *Qorčin arad-un daγuu-yin bayatur-un domoy namdar, Öbör mongyol-un soyol-un keblel-ün qoriy-a*, 1999 on, p.167. なお、蜂起軍の内実については、史料によって「蜂起軍」、「匪賊団」、「蒙匪」、「胡匪」などの形で記されている場合もあるが、本論文では一貫して、「蜂起軍」、あるいは「ガーダー・メイレン蜂起軍」と記す。しかし、引用史料によって「匪賊」、「匪賊団」などの言葉も用いる。

⁸⁰ 波・特古斯、王坤「嘎達梅林起義軼事」『内蒙古文史史料』第十輯、内蒙古人民出版社、1983年、17頁。

⁸¹ 「民族英雄嘎達梅林的歷史材料彙編」科爾沁左翼中旗檔案館、1960年7月7日、16頁。

開墾に対抗し、モンゴル遊牧民のために戦った」⁸²、あるいは、「蒙地開墾を巡ってモンゴル人と漢人の対立的な構造があった」⁸³と指摘されている⁸⁴。

一方、これまでの先行研究では、蜂起軍の行動についてある程度記述されているが、蜂起前後の展開や戦闘の過程、蜂起軍の規模、メンバーなどについて不明な点が多い。

本章ではこのような問題意識を持って、ガーダー・メイレンに関する先行研究ではほとんど使われていない奉天で出版された『盛京時報』、『東三省民報』などを参照にしながら、「ガーダー・メイレン蜂起」の歴史的背景とガーダー・メイレンらの指導した「開墾反対運動」について若干説明した後、戦闘の過程、とりわけ、蜂起が弾圧される数ヶ月前の出来事について詳しく検討することにした。

但し、本章では、新発見の新聞記事からわかったことのみを中心に扱う。新聞は発行側の主張や国の政策を宣伝する目的で出版されたものが多く、そこに多くのバイアスがかかっていることはいまさら言うまでもない。しかし、新聞の世論に及ぼす影響力は多大である。本章で取り上げる『盛京時報』は1906年10月18日から1944年9月14まで、日本人によって瀋陽で刊行されていた漢語新聞である。当新聞では、当時の中国の内政、外交、経済、軍事、社会情勢などを含む重大な事件が詳しく報道されており、それは、中国現代史、国際関係史、とりわけ、中国東北史研究では基本史料として使われている。また、『東三省民報』は張作霖と張学良の資金援助を受け、1922年から「東三省民治促進会」によって奉天で出版されていた中国人経営の漢新語新聞であり、当時の社会情勢を反映する重要なメディアだと思われる。本章では、これらの新聞を用いることで「ガーダー・メイレン蜂起」の再構成を試みた。

第1節 蜂起の歴史的背景

1. ジリム盟10旗の形成

1206年の大モンゴル帝国の建立に伴い、チンギス・ハンは征服した一部の土地を自分の兄弟と功臣に封じた。チンギス・ハンの兄弟たるハブト・ハサルに所属した部族（後のホ

⁸² 特古斯巴雅爾「ガダ・メーリン」―モンゴル開墾抵抗運動の英雄―『日本とモンゴル』第88号、1994年、36頁。

⁸³ ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』風間書房、2003年、127頁。

⁸⁴ 石原邦子「内モンゴル民歌「ガダ・メーリン」に関する一考察―モンゴルの英雄はなぜ中国で歌われたか」、25頁。

ルチン部)は16世紀の半ば頃までエルグネ河やオノン河流域に遊牧していた⁸⁵。およそ16世紀中頃、ハブト・ハサルの子孫である Küimöngke tasqar-a(奎蒙克塔斯哈喇)は漠北のウリヤンハイ部の反乱の被害を受け、興安嶺を下って嫩江流域に南下し、遊牧するようになり、ノーン=ホルチン(nun qirčin/嫩料爾沁)と呼ばれるようになった⁸⁶。温暖で比較的湿度の高い嫩江流域に暮らすノーン=ホルチンは人口も家畜も急速に増えて、「二十万科爾沁」とも呼ばれるほど力強い部族になった⁸⁷。当時のホルチン部の支配していた遊牧地は北のソロン山から南の盛京(現在の瀋陽)に至り、東のジャライト部から西のジャルト部に至る。東西435キロで南北1000キロを渡り、総面積は約15万平方キロで現在の通遼市の面積の2.5倍に当たる⁸⁸。1593年、ホルチン部は近隣の諸部と連合しヌルハチに対して、所謂「九部之戦」をしかけたが、戦いに敗れ、1624年に後金政権に臣服した⁸⁹。その後、清朝はホルチン部の協力を受けて、チハル部を滅亡させ、漠南モンゴル諸部を統一し、対明征服戦争にもホルチン部の果たした役割が極めて大きい。

清朝はモンゴル各部に対して分割して統治した。清朝皇室とモンゴル王公の間では「満蒙聯婚」が進められ、懷柔政策が実行された。1612年(明万歴40年)、ヌルハチがミンガンの(明安)の娘を妻としてめとった以後、このような婚姻政治が広く清朝末期まで続けられたのである。

清朝の崇徳元年(1636年)清太宗のホンタイジはモンゴル各部の勢力を分割して統治するために、満州八旗制に基づき、モンゴル盟旗制度を設置した。漠南(内モンゴル)の24部のなかに4つの盟、51旗を設置し、その中でジリム盟は4つの部、10の旗から形成された。4つの部はそれぞれ、ホルチン部、ゴルロス部、ジャライト部、ドルベト部である。ホルチン部もまたホルチン左翼前、中、後旗とホルチン右翼前、中、後旗の6つの旗に分けられ、ホルチン左翼には扎賚特、杜爾伯特旗を附し、同右翼にはゴルロス二旗を配し、これが哲里木盟(ジリム盟)をなしている⁹⁰。これらの各旗はそれぞれ Küimöngke tasqar-a

⁸⁵ 同上、26頁。

⁸⁶ 同上、27頁。

⁸⁷ 同上、27-28頁。

⁸⁸ 劉忱『嘎達梅林』远方出版社、2004年、20頁。

⁸⁹ ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、29頁。

⁹⁰ 徳吉徳「科爾沁左翼中旗的由来」『達爾罕文史』政協科爾沁左翼中旗文史委員会、2008年、3頁;オウエン・ラティモア著、後藤富男譯『満州に於ける蒙古民族』善隣協會、1934年、175頁。しかし、ボルジギン・ブレンサインによれば、「盟旗制度」の実施された時期については必ずしも明確な結論がないという(同上書、29頁)。

の子孫（表 2-1）によって支配された。その体制は清朝末期まで継続し、一部は中華民国初期、さらに 1931 年の満州事件まで持続したのである。

表 2-1 ジリム盟 10 旗の始祖とその支配地⁹¹

旗名	始祖	支配地
ホルチン右翼前旗（ジャサクト jasaytu/札薩克図旗）	botači	Tuγur-un γoul(洮児河)流域
ホルチン右翼中旗（トシエト tūsiytü/図什業図旗）	Ouba（奥巴）	Qaulin（霍林）河流域
ホルチン右翼後旗（または鎮国公旗、蘇鄂公旗）	Tumei öyeng	čarsan（察爾森河流域）
ホルチン左翼前旗（ビント王旗 bingtü vang-un qosiyu/ 賓図王旗）	qongγur(洪果爾)	yangsib（養畜牧）河流域
ホルチン左翼中旗（ダルハン旗）	mangγus（莽古 思）	siramüren（西拉木倫）河上流域
ホルチン左翼後旗（bodulyatai čin vang-un qosiyu/博王 旗）	Mingyan（明安）	siramüren（西拉木倫）河下流域
ゴルロス前旗（γorlus/郭爾羅斯前旗）	ubaši	松花河流域
ゴルロス後旗（γorlus/郭爾羅斯後旗）	ubaši	松花河流域
ドルベト旗（dörbed/杜爾伯特旗）	ayinay-a	嫩江東岸流域
ジャライド旗（jalayid/扎賚特旗）	amin	嫩江西岸流域

清朝が支配下に入ったホルチン部の 10 旗に対してとった分割政策は、各旗の遊牧する牧地の範囲を定め、各自の旗境界線を乗り越えることを禁止することも内容としていた。清朝におけるホルチン部各旗、とりわけホルチン左翼 3 旗と右翼 3 旗と清朝との特別な関係によって、ジャサク以外のいわゆる閑散王公と呼ばれる爵位の高い王公が多く存在し、そのひとつとは、旗内においてそれぞれが支配する領有地を有していた⁹²。ボルジギン・ブレンサインによれば、ホルチン部各旗のこのような状況は、ほかのモンゴル旗とは異なっており、ここに住むモンゴル人の子孫は、現在の内モンゴル自治区のモンゴル人人口の半分以上を占めている。

⁹¹ ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、29-30 頁を参照に作成。

⁹² 同上、30 頁。ジャサク (jasay/札薩克) は旗の長という意味を持っている。

2. 清朝末期の「移民実辺」政策とホルチン左翼中旗の開墾

清朝政府がモンゴル地域に対して、長年にわたって漢人の入植を禁じる「封禁政策」を取り、モンゴル旗地の開墾を堅く禁じていたが、その背景には常にモンゴル王公の私的招墾という事実があった⁹³。ところが、清朝末期から実行された「移民実辺」（移民を持って辺境を充実させる）政策により、多くの漢人がモンゴル地域へ入植してきていた。一方、一部のモンゴル王公たち北京などの大都市の贅沢な暮らしに染まって中国の商社に借金をかさねていた⁹⁴。彼らはその借金を返済するために、蒙地開墾の潮流に乗じて、開墾作業を推し進めたのである。

「ガーダー・メイレン蜂起」の舞台であったホルチン左翼中（ダルハン）旗は、1636年に設置され、その面積は33510平方キロで、清朝初期のホルチン諸旗の中で最大の旗の一つであった。先行研究によれば、ジリム盟地域が漢人の入植を受けるようになったのは18世紀の中ごろとされており、漢人がホルチン左翼中旗へ流入した最も早期の記録は乾隆49年（1784）のものが残っている⁹⁵。この年から民国20年（1931）まで、およそ150年の間に、ホルチン左翼中旗において、数回の大規模な蒙地開墾が行われた。以下の表はホルチン左翼中旗における歴代の蒙地開墾の概略である（表2-2、図2-1）。

表2-2 ホルチン左翼中旗における歴代の蒙地開墾の概略⁹⁶

開墾の年	開墾地名	開墾の面積	開墾の理由	結果（設置された県、他の県に編入された土地、原住民モンゴル人に与えた影響など）
1851年	鄭家屯白市 荒	ウンドゥル王府から約40キロ位離れた鄭家屯と白市	移民の急激な増加によって、漢人とモンゴル人の取引を行う交易拠点とし	1902年、鄭家屯を中心とする遼源州が設置され、旗の領地は281平方キロ減

⁹³ 同上、36頁。

⁹⁴ 特古斯巴雅爾「ガダ・メーリン」—モンゴル開墾抵抗運動の英雄—、30頁。

⁹⁵ 同上、26頁、39頁。なお、ジリム盟10旗における漢人植民の沿革については、南滿洲鐵道株式會社哈爾濱事務所『内蒙哲里木盟殖民の沿革』南滿洲鐵道株式會社哈爾濱事務所庶務課、1929年3月、7-20頁；オウエン・ラティモア『滿州に於ける蒙古民族』、168-192頁に詳しく紹介されており、ここでは割愛する。

⁹⁶ 劉忱『嘎達梅林』、12-14頁；ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、40-62頁を参照に作成。この中では、王公による小規模の開墾が含まれていない。

			て漢人商人達に払い下げた。	った。
1870 年	懷徳、奉化 (現在の梨樹県)	7490 平和キロの面積の土地が旗の管轄から離脱された。	借地養民	懷徳県と梨樹県が設置された。
1884 年	七十四屯	鄭家屯東部の約 495 平和キロの土地が博王旗に譲渡された。	借地養民	博王旗に譲渡された土地は法庫県に編入された。
1907 年	采哈新甸荒	520 平和キロ	代理ジャサクのジョリクト親王ジクデンワンホル (jigdenvangqur/済克登旺庫爾) は北京での多額の借金を返済するため	開墾された土地は双山県に編入された。
1909 年	鄭家屯白市の拡大荒		ウンドゥル王所属タイジセレンナムジル (serengnamjil/舍冷那木吉拉) の債務返済のため	開墾された鄭家屯白市荒をさらに拡大した。
1910 年	洮遼站荒	遼源州 (鄭家屯) から洮南に至るまでの幅 20 里、長さ 144 里の土地、払い下げた総面積は 1280 平和キロ	日露紛争を背景に東北統治の基盤強化の必要で東三省総督の上奏で開墾された。	開墾された土地は遼源県に編入された。
1912 年	巴林愛新荒	西遼河南岸の東西 50 里、南北 30 里	セワンドンルブ (sevangdongrub/色旺端	ホルチン左翼中旗の各王公間の領有地問題がいよ

		であり、総面積は 6万7千垧 ⁹⁷	魯布)はジョリク王として爵位世襲のために、巨額の借金に追われ、それを乗り越えるため	いよ表面化したのである。
1916年 ⁹⁸	東夾荒	実際に払い下げた面積は当初予定した面積を遥かに上回って、740平方キロの土地が開墾された。	ウンドゥル王ナランゲレル(narangerel/那蘭格日勒)は所属の約200人の「蒙旗軍隊」の諸費用を捻出するため	開墾された土地は双山県に編入された。
1920年	河南河北荒	西遼河の南北両岸の800あまりの平方キロの土地	閑散個山貝子ダライ(dalai/達萊)の債務と所属タイジ、壮丁などの生計のために	結局モンゴル人に留界地として与えられたのは丈量地以外の耕作不能な荒地であり、やむをえず、他所に移住して行った。

このように、ホルチン左翼中旗の歴代の蒙地開墾を通じて、1929年になると、その面積は18114平方キロまで縮小し⁹⁹、総面積の46%が開墾された。残されたのは遼北荒および西夾荒と呼ばれる新開河流域と北部の砂漠、山岳地帯のみであった¹⁰⁰。ここでは歴代の蒙地開墾の被害を受けて移住してきたモンゴル人も多く生活していた。したがって、この二つの荒地の開墾はホルチン左翼中旗の存続と滅亡に関わる問題であり、しかも、モンゴル人の生計に関わる問題であった¹⁰¹。

満州国大同元年(1932年)のホルチン左翼中旗におけるモンゴル人の数は11万3千人で旗全人口の75.19%を示していた¹⁰²。また、1929年に出版された『内蒙哲里木盟殖民の沿革』という本の中では、「本旗内に於ける蒙古人は現在地質の良好なる地点を選び、農業

⁹⁷ 東北満州地域では通常280弓(約3尺)を1畝とし、10畝を1垧、45垧を1方とする(ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、84頁)。

⁹⁸ ボルジギン・ブレンサインによれば、東夾荒の開墾は1927年から始まった(同上、61頁)。

⁹⁹ 趙海山『科爾沁左翼中旗志』内蒙古文化出版社、2003年、76頁。

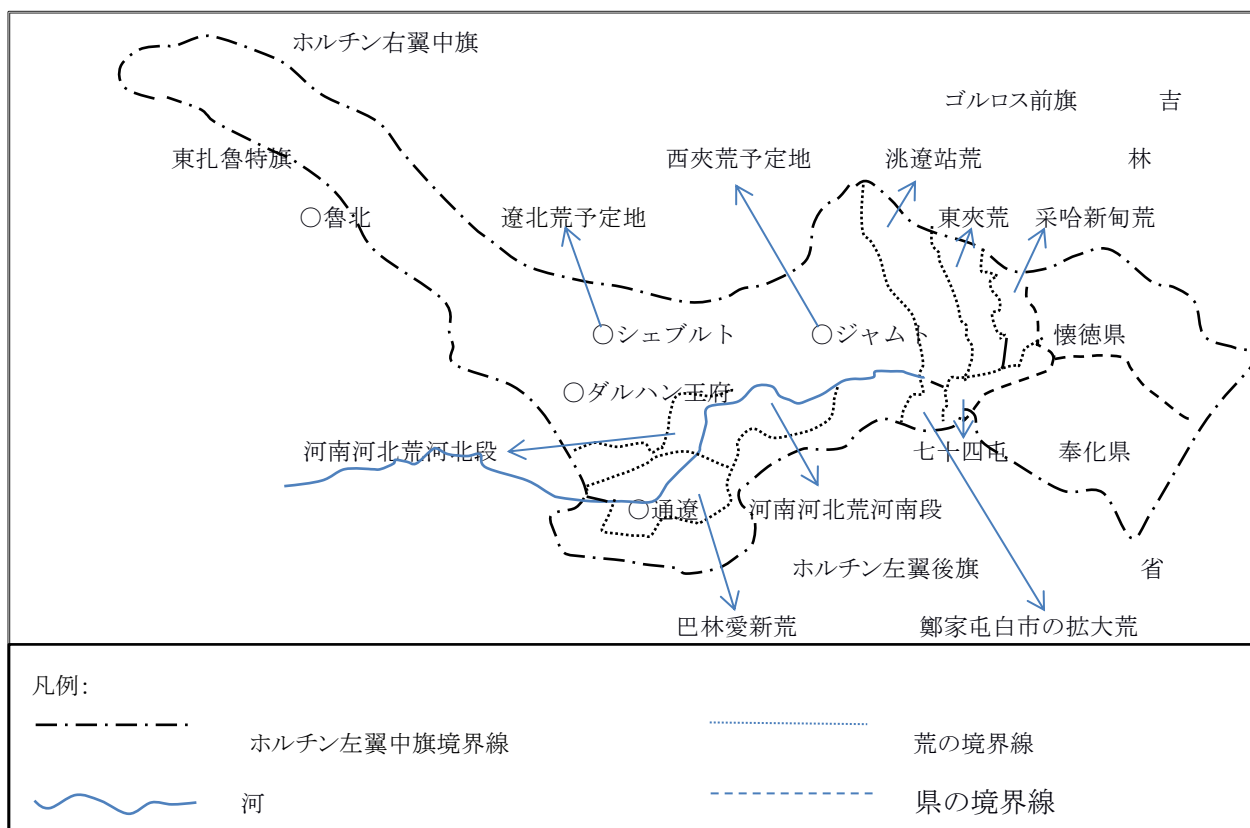
¹⁰⁰ ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、89頁。

¹⁰¹ 同上90頁。

¹⁰² 趙海山『科爾沁左翼中旗志』、149頁。

に移りつつある蒙古人の人口は3萬5千人で、其所有家畜數は百五十萬頭に及んで居る」¹⁰³と書かれている。ここから見ると、1930年の「ガーダー・メイレン蜂起」が起きた際には、少なくとも旗内の3分の1のモンゴル人が農耕に従事していたと推察できる。したがって、「ガーダー・メイレン蜂起」が勃発した背景には、蒙地開墾による漢人とモンゴル人の対立や「遊牧文明と農耕文明の対立と衝突」の問題が存在したことは否定できない。しかし、ガーダー・メイレンの蜂起したのは、単なる「蒙地開墾に対抗し、モンゴル遊牧民のために戦った」と指摘されるのは、適当ではないと思われる¹⁰⁴。それは「モンゴル遊牧民のために戦った」出来事、あるいは、王公と軍閥の圧迫に苦しむモンゴル人と漢人の共同の利益のために戦った闘争という教条的な原則によって整理される理由だけではなく、むしろ蒙地開墾と漢人入植によって占領されたモンゴル人の故郷を守るために勃発したというより直截な出来事であり、したがって、集団社会の存続のために対抗した運動であると規定したほうがよいだろう。

図 2-1 「ホルチン左翼中旗の歴代の蒙地開墾」 105



¹⁰³ 南滿洲鐵道株式會社哈爾濱事務所『内蒙哲里木盟殖民の沿革』、14 頁。

¹⁰⁴ これについては、本論文の 49 頁で取り上げる【資料 8】でも確認できる。

¹⁰⁵ ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、45頁を参照に作成。

第2節 ガーダー・メイレンと「開墾反対運動」



ガーダー・メイレンは1892（光緒18）年にホルチン左翼中旗のウンドゥル王の領地であるタブンゲル＝ノトクのジャムントハイ（jam-un tohui）という村で生まれた。彼の祖父のボヤンデルゲル（宝音徳力格爾）は、かつてセンゲリンチン（増格仁欽）と共に、太平天国の乱の討伐戦争に参加し、戦功を立てたことがあるという。彼の叔父のサイン

図2-2 ガーダー・メイレン ボヤン（Sayinbuyan）もジャラン¹⁰⁶職に就いていたが「東來荒」の開墾に反対したことにより免職された。ガーダー・メイレンの先祖自体は庶民出身であったが、自分の力で裕福になった階級であると言われている。しかし、彼の父親のイデルアルスレン（yiderarslan）の時代になると、父のアヘン吸飲の悪癖により、家族は没落した。ガーダー・メイレンが10歳の時、故郷が「采哈新甸荒」として開墾されたため、家族は、「平斉鉄道」の西側にあるマンドラハ（mandurqu）という村に移住し、さらに1921年頃にはイスンゲル＝ノトクに再移住した¹⁰⁷。

1903年、11歳の彼はシネアイル（新艾勒）という村の塾でモンゴル語と漢語を学んでいる¹⁰⁸。1905年、13歳の彼はバヤンタラに位置される東王府のバラジ・ハブン¹⁰⁹と名乗る人物の家でゴチョク¹¹⁰として勤務していたが、バラジがつけてくる様々な難癖に耐えられず、家に戻った。1908年、ガーダー・メイレンはホルチン左翼中旗の治安維持を任務とする旗兵隊に入った。¹¹¹かれは勤勉で、モンゴル語と漢語が話せるので、ダルハン王に認められ、1920年、旗兵隊のジャンギ¹¹²に昇進した。1922年、30歳でジャランに昇進し、1925

¹⁰⁶ 参領、官名を指している。

¹⁰⁷ ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、113-114頁。

¹⁰⁸ ガーダー・メイレンの学歴について、資料によって、異なる形で記述されているが、ここでは Kürelša, Sergüleg, *Qorčin arad-un darguu-yin bayatur-un domoy namdar, Öbör mongyol-un soyol-un keblel-ün qoriy-a*, 1999 on. を参考にした。

¹⁰⁹ バラジ (balji/巴拉吉) は人名で、ハブン (qabung/哈崩) は官名を指している。

¹¹⁰ ゴチイク (γočiγ-a/高士格)、ここでは雑役をする人（下僕、使用人）のことを指している。

¹¹¹ Kürelša, Sergüleg (1999) によれば、ガーダー・メイレンは親戚の紹介で1910年に旗兵隊の漢人コーチの通訳として採用され、のちに旗兵隊の一員として入隊したという。

¹¹² 旗兵隊の軍職を指しており、「章京」、「専依達」、「什長」とも言われる。Kürelša, Sergüleg (1999) によれば、1911年に章京にジャンギされ、1917年にジャランになったたといふ。また、波・特古斯、王坤 (1983) では1912年にジャンギに昇進されたと書かれている。

年、33 歳で旗兵隊全体を統括する軍務メイレンまで昇りつめた。この時から、彼は皆に「ガーダー・メイレン」と呼ばれるようになった¹¹³。

ガーダー・メイレンは 20 歳になる前に一度結婚したことがあるが、その妻は難産によって死亡した。1924 年、32 歳になり、同旗イスンゲル＝ノトクのタイジの娘ムーダン（Müdan）と結婚し、次兄ジョルラマ（Jorlam-a）の息子アムルリンゴイ（Amurlingyui）を養子として引き取って育てた。後に、ムーダンとの間に娘のテンジンリャン（田金亮/天吉良/田吉良）が生まれるが、その娘は 1929 年に病死する。

反開墾による叔父の免職や、幼い時から没落した家庭に生れ育ち、蒙地開墾によって故郷を追われたという過酷な経歴は、ガーダー・メイレンの後の活動に重要な影響を与えたと考えられる。1925 年から 1928 年までの三年の間に、ガーダー・メイレンはダルハン王妃のジュボルとその手先の官吏たちと対立するようになり、そのために 2 度免職された。その経緯については、ガーダー・メイレンに関する伝記や文献の中では、彼は旗の中間層の役人であったが、つねに下層の貧しい人々の利益を守り、率直な言動によって王公や同僚などの封建的勢力と衝突し、特にダルハン王と夫人のジュボル（朱博儒）との対立は深刻であったと解釈されている。以下はガーダー・メイレンの免職の概略である。

1925 年、すでに開墾された旗内のベーリン・テレー荒の中から 60 方の農地が指定され、その租金を旗兵隊の諸費用にあてるように決められていた。1926 年の冬、旗兵隊全員の制服が更新される際に、旗兵隊のトゥブデン、ソドなどの一部のリーダーたちは、自分達のために上等な毛皮の軍服を注文するように要求したが、ガーダー・メイレンによって拒否された。このことにより、彼らはガーダー・メイレンに対して恨みを持つようになり、1927 年正月 20 日に行われたダルハン王府の旗務会議（開印典礼）でガーダー・メイレンが旗兵隊制服の予算を横領したと誣告して、そのかどでかれを免職するように王府へ要求した。その後、奉天で滞在していたダルハン王妃のジュボルがこの訴えを受入れ、免職命令を下して、王妃の腹心部下である王祥林を軍務メイレンに任命した。王祥林はメイレンになった後、この「予算横領事件」を調べたが、ガーダー・メイレンに横領の事実はなく、逆に、旗兵隊側がガーダー・メイレンに 2 匹馬、3 頭牛、10 石食料と 200 圓銀貨を返済するべきであることが明らかになったという¹¹⁴。

¹¹³ 特古斯巴雅爾「ガダ・メーリン」—モンゴル開墾抵抗運動の英雄—、31 頁。

¹¹⁴ 義都合西格、額爾徳木図、吳津『嘎達梅林的事迹』内蒙古人民出版社、1960 年、5-8 頁。

1927 年の年末になると、王祥林は権勢を笠に着て、自分の親戚を旗兵隊の重要な職に就かせ、公事にかこつけて私腹を肥やして、勢力を拡大した。しかし、のちに彼はダルハン王陵丁の葛氏と衝突するようになり、ある時旗兵隊を連れていた折に葛氏の雑役人の二人を殺してしまうという事件を起こした。葛氏は洮南鎮の張海鵬（張仙濤）と親戚関係を持っていたので、張を通じて、王祥林のことを遼寧省公署に訴え、やがて、公署側は王を逮捕するようにダルハン王府に要求した。1928 年、ダルハン王は再びガーダー・メイレンを軍務メイレンに任命し、王祥林を逮捕するように要求した。しかし、王妃のジュボルの庇護で王が逮捕を避けて隠れ、逆にガーダー・メイレンが奉天省警察庁に逮捕された。妻のムーダンが奉天省側に提訴してガーダー・メイレンを救い出したが、彼は再び免職され、劉昌林（劉振玉ともいう）が軍務メイレンになった。

これらのエピソードは 1960 年代以降に書かれた伝記などに書きこまれているものであり、おそらくはムーダンの語りや当事者へのインタビュー調査に基づいて整理されたものであると考えられる。ただし、細かいところで記述が一致していない。ともあれ、これらのエピソードやそれに対する解釈も時代によって、異なる形で評価されるようになり、後に作られたさまざまな芸術作品の中でも、多様な姿で取り上げられている。

1929 年旧暦 1 月から奉天省（同年遼寧省と改名され、省都は瀋陽とされた）側による遼北荒と西夾荒の開墾が始まり、土地測量が強制的に行われた。同年 3 月に、ガーダー・メイレンはダ・ラマなどの人たちと協議して、「遼北荒」の中心地であるシェブルト（舍伯吐）やゴルバンマンハ（古爾本芒哈）地域で「約 500 人の民衆が参加した」モンゴル人の反開墾会議を開いた¹¹⁵。この会議で参加したモンゴル人は「ドゴイラン（duyuilang/円形署名）」の形で署名をし、ガーダー・メイレン、張色旺、韓僧格嘎日布、趙舍旺、張瑞（舍楞尼瑪）の 4 人を代表として選んだ。また、会議では 60 人の老人（ジランエブゲン）から形成される代表团（反開墾請願団）が選ばれ、4 人の代表と共に瀋陽へ向かい、ダルハン王と省側に直訴することにした¹¹⁶。

同年の夏（または旧暦 4 月上旬）、代表团は瀋陽に赴き、小河沿（ダルハン王滞在地）前と遼寧省政府の門前で座り込み、面会を求めた。約一か月後、遼寧省民事長の庁長の瀋文雪が省長を代表して会見したが、代表団の意見を受け入れようとはしなかった。旧暦 5 月 4 日（西暦 6 月 10 日）、代表团がダルハン王に会見し、蒙地開墾によってモンゴル人が受

¹¹⁵ ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、144 頁。

¹¹⁶ Kürelša, Sergüleg, *Qorčin arad-un dayuu-yin bayatur-un domoγ namdar*, p.121.

けている被害などを述べ立てたが、その意見も受け入れられなかった。2日後、ダルハン王は韓色旺を派遣し、代表団の籠絡を試みたが、それも失敗した。

旧暦7月26日（西暦8月30日）夜、（または25日、27日）遼寧省警察庁は、代表者である4人を宿泊先の旅館で逮捕し、奉天で一か月近く拘置した後、ホルチン左翼中旗の印務処牢屋に送還した¹¹⁷。同年の旧暦11月13日（西暦12月13日）の夜、ガーダー・メイレンの妻ムーダンは養子のアムルリンゴイ、下僕のセレンゲー、ドンロブなどを含む7人と語らって、武器などを持って牢屋を襲い、ガーダー・メイレンを救出した¹¹⁸。この日から蜂起がはじまったのである。

第3節 蜂起の経過とその影響

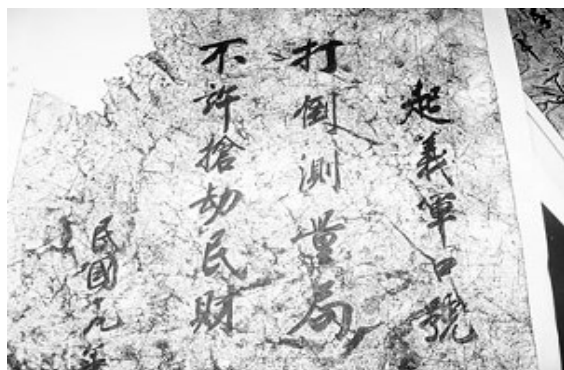


図2-3 「ガーダー・メイレン蜂起軍」のスローガン

1. 蜂起の勃発から1930年の秋まで

脱獄したガーダー・メイレンらはダルハン旗から離れて北の洮南へ向かい、旧暦12月にはホルヒン寺（quraq-a-yin sum-e/胡力罕蘇木廟）で集会を開き、開墾に反対し、民衆の土地を守るという蜂起の目的を宣言

し、民衆に共に戦おうと呼びかけた¹¹⁹。

一か月後、蜂起軍は当初9名から40、50名、さらに200名あまりに増えた¹²⁰。彼らは「測量局を打倒し、民衆の財産を奪わせない」¹²¹（図2-3）というスローガンをうち出し、遼寧省側から派遣されてきた遼北荒と西夾荒地域の開墾軍を攻撃し、測量道具、帳簿や契約書などを焼いた。

¹¹⁷ ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、145頁。

¹¹⁸ これについては、当事者であるセレンゲーによる回想記「嘎達梅林越獄の経過」に詳しく書かれている（劉忱劉忱『嘎達梅林』、145-153頁）。

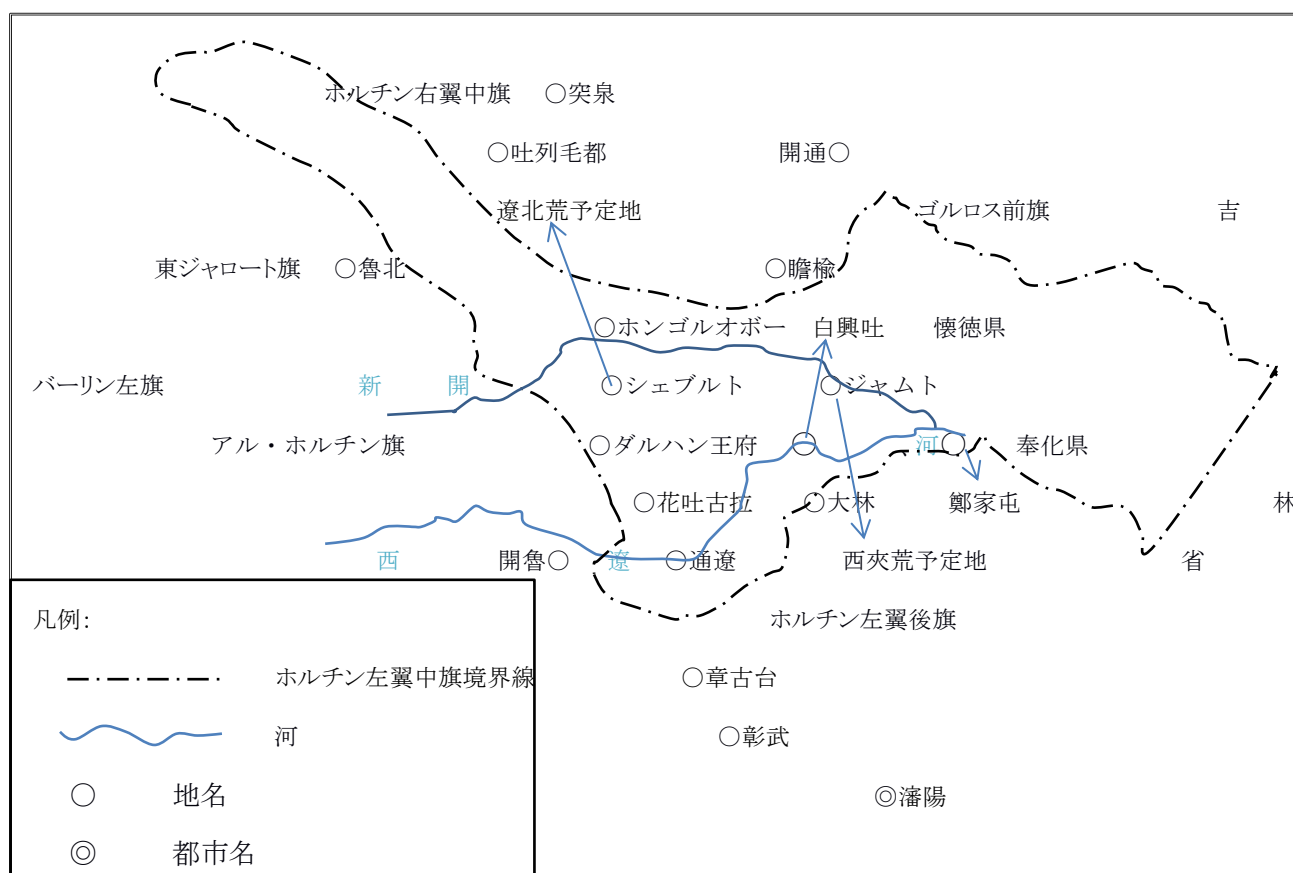
¹¹⁹ 石原邦子「内モンゴル民歌「ガダ・メーリン」に関する一考察—モンゴルの英雄はなぜ中国で歌われたか」、23頁。

¹²⁰ 波・特古斯、王坤「嘎達梅林起義軼事」、19頁。

¹²¹ これは『内蒙古日報』（モンゴル語版）2007年7月6日に掲載された「測量局を打倒し、民衆の財産を奪わせない」という蜂起軍のスローガンで、ガーダー・メイレン本人によるサインであると言われているが、研究者によって疑問や批判もなされている（S.Urusyal, “Tada meyiren-ü amidaral üile-düqolboydaqu kedün adsayudal”, *Öbör mongyol-un yeke suryayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgöl(gün uqayan neigem-ün sinjilekü uqayan-u mongyol keblel)*, 2009 on-u 2 duyar quyuçay-a. p.80-81).

旧暦 1930 年の 3 月中旬（西暦 4 月中旬）ごろ、ガーダー・メイレン蜂起軍がホルチン左翼中旗シェブルト一帯で、墾務局の「総辦」韓色旺をリーダーとする数十人の測量軍を攻撃し、9 人を殺し、5 人を捕虜にした¹²²。その後、蜂起軍が同旗のホウトゴル（Quwatuγul/花吐古拉）、ジャムト（jamtu/架瑪吐）、ウランホワ（Ülanqwa/烏蘭花）などの地域で、旗兵隊及び開墾軍と小規模の戦闘を何回も繰り返した¹²³（図 2-4）。

図 2-4 ガーダー・メイレン蜂起軍当時の地域名の配置図



同年 5 月 5 日から 12 日にかけて、蜂起軍は通遼県の北から 140 里余り（70 キロ）離れているモンゴル荒地、煙能吐¹²⁴付近で、農業に従事する漢人を攻撃し¹²⁵、5 月下旬にはホ

¹²² Kürelša, Sergüleg, *Qorčin arad-un daγuu-yin baγatur-un domoγ namdar*, p.162-166.

¹²³ 同上, p. 166.

¹²⁴ 図 2-3 では表示されていないが、現在の「白興吐」の北、「ジャムト」の西に位置する「煙灯吐」のことを指していると思われる。

¹²⁵ 「通遼県県長王激波呈文」民国 19（1930）年 5 月 21 日、科爾沁左翼中旗档案馆「史志辦档案史料」-「沿革地理類」類号 80；ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、147 頁。

ルチン左翼中旗開墾地域内のモンゴル人を動員して西夾荒一帯で測量作業を妨害させたが、陸軍騎兵第7団の追撃を受けたために、北部山岳地帯を拠点として反開墾活動を展開するようになった¹²⁶。この時点では、蜂起軍の規模は150余人であると報じられており、蜂起軍の主要なメンバーとしては、ガーダー・メイレンと洪順¹²⁷、天紅、高山、満天紅の名前が挙げられている。

当時の新聞記事から1930年8月中旬ごろの蜂起軍の活動の様子を確認できる。

【資料1】『盛京時報』1930年8月12日、(第7408号)

昨日、開通に駐屯する騎兵第5団長の劉茂儀は第1と第2の二つの中隊を率いて、匪賊討伐に出発した。瞻榆西南へ向かい、ダルハン旗まで追撃し、黄河の開保というところで、有名な疙疸米里[ガーダー・メイレンー引用者注、以下同じ]匪賊団と遭遇し、約百名余りの匪賊がいた。〔中略〕今回の討伐では、7名の匪賊と3名の人質が捕虜にされ、7挺の歩兵銃と多くの騾馬が鹵獲された¹²⁸。

資料1では、1930年の8月中旬ごろ、蜂起軍は瞻榆とダルハン旗境で活動し、百名余りの規模であったことになる。他方、資料2では、9月下旬ごろの西夾荒、三林站付近で活動する蒙匪の活動の様子が報じられている。この記事の文脈からして、これはガーダー・メイレン蜂起軍のことを指していると思われる。この時点では蜂起軍の規模は3百名余りまで拡大されたと報じられており、被害を受けたのは西夾荒、三林站付近の漢人であったことが読み取れる¹²⁹。

¹²⁶ 「遼源県長金玉聲密稟呈文」民国19年5月16日、科爾沁左翼中旗档案馆「史志辦档案史料」-「沿革地理類」類号120；「丈放東西夾荒事務局總辦劉効琨呈文」民国19年8月、科爾沁左翼中旗档案馆「史志辦档案史料」-「沿革地理類」類号138；ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農村村落社会の形成』、148頁。

¹²⁷ ここで挙げられている「洪順」という人物は、蜂起軍に加わっていた「匪賊団」のリーダーの一人であり、資料によって「紅順」と書かれている場合もあるが、同じ人物を指していると思われる。

¹²⁸ 「劉団長剿匪獲勝」『盛京時報』民国19(1930)年8月12日、(第7408号)、第76冊、697頁。なお、同年、9月26日、騎兵第5団長の劉茂儀は所属の第14中隊を率いて、瞻榆一帯で紅順などの匪賊団を攻撃したことが報じられている(「劉団長率隊剿匪」『盛京時報』民国19(1930)年9月27日、(第7450号)、第77冊、154頁)。

¹²⁹ 西夾荒付近での漢人が蜂起軍によって殺されたことは、次の記事でも報じられている。「西夾荒は辺ぴなところに位置され、ずいぶん昔から匪賊は出没常ならず地域で、産額は遼源全県で一番多い。去年夏秋頃から蒙匪の孟青山は徒党数百名を率いて躍起になって略奪行為を行い、漢人を殺し、人民の生活のよりどころがない〔後略〕」(「西夾荒蒙匪猖獗」『盛京時報』民国20(1931)年2月22日、(第7589号)、第78冊、283頁)。

【資料2】『盛京時報』1930年9月30日、(第7457号)

西夾荒、三林站から6里離れている海沙吐付近では、26日大勢の蒙匪3百名余りが発見された。漢人に対して焼き払いや略奪行為を行い、悪事の限りを尽くしている。27日午前中、東の白興吐屯へ向かい、陳連舉などの小銃を5挺、吳占昇の騾馬20頭余りを略奪し、午後、七段劉家窩に行き、住民の劉某などの6名を殺し、10名余りを傷つけた。蒙匪の至るところでは、人びとが酷く殴られ、殺害されている〔後略〕¹³⁰。

なお、同新聞の10月23日の報道では「近来、大山湾、青溝章古台一帯に、長江、青山、泰子、山子などの匪賊団約百名は盤踞し、銃と馬が完備しており、憚るところがなく横行している」¹³¹と書かれている。この記事で報道される「青山」はガーダー・メイレンのことを指しているとするなら、同年10月下旬には蜂起軍は、ダルハン旗から離れ、彰武県の北にある青溝章古台一帯で活動していたと考えられる。しかし、この時点で蜂起軍には長江、泰子、山子などの匪賊団が加わっており、約100人の規模になっていた。

資料3では、蜂起軍の1930年秋の活動の様子が伝わっており、漢人が蜂起軍に略奪され、殺されたと報道されている。また、西夾荒において、蜂起軍の弾薬を援助する「総機関」が設置されていたことが書かれている。この時点では蜂起軍の規模は数百人を超えている。

【資料3】『盛京時報』1930年11月16日、(第7501号)

西夾荒匪首孟青山、綽名はガーダー・メイレンと呼ばれ、昨年 of 反開墾の首領である。去年冬、徒党200名余りを集め、ほしいままに略奪し、人民が安心して生活することができていない。今年の秋、防衛軍が関内に入った機会に乗じて¹³²、彼らは活発に行動し、数百人の匪賊と結託し、略奪、殺害を行っている。至るところで、銃と馬を奪い取ることに専念している。西夾荒では「総機関」¹³³が設置され、彼らの弾薬を援助しており、その勢力が盛んで制し切れていない。〔後略〕¹³⁴。

¹³⁰ 「發現大股蒙匪」『盛京時報』民国19(1930)年9月30日、(第7457号)、第77冊、174頁(括弧内の内容は引用者挿入、以下同じ)。

¹³¹ 「匪勢披猖」『盛京時報』民国19(1930)年10月23日、(第7478号)、第77冊、309頁。

¹³² 原文では「今秋乘防軍開撥入關之際」と書かれている。

¹³³ 原文では「在西夾荒設有總機関、接濟槍彈」と書かれている。

¹³⁴ 「蒙匪機関尚存」『盛京時報』民国19(1930)年11月16日、(第7501号)、第77冊、445頁。

ここまで、『盛京時報』の記事を参照にしながら、蜂起が勃発してから 1930 年の秋までの蜂起軍の活動の様子を確認してきた。この間、ガーダー・メイレン蜂起軍は 10 月下旬ごろ、彰武県の北にある青溝章古台一帯で活動していたことを除いて、主にゲリラ戦の形でダルハン旗新開河側両岸と西夾荒、遼北荒付近を回りながら展開していたと考えられる。次の節では、『盛京時報』のほかに、『蒙蔵周報』¹³⁵や、『東三省民報』を参照にしながら、1931 年の 1 月から蜂起が弾圧されるまでの活動について検討していきたい。

2. 1931 年 1 月から蜂起が弾圧されるまで

『蒙蔵周報』では、蜂起軍は「匪賊勢力」と位置付けられているが、彼らの攻撃の対象には「窑」¹³⁶が建てられているところでジャラン職に就いていたモンゴル人も含まれていた（資料 4）。

【資料 4】『蒙蔵周報』1931 年 3 月 31 日（第 66 号）

ジリム盟ダルハン旗は安定した豊かなところに属していたが、去年の夏から、経済不況の状況に陥っている。時々、匪賊の災難が発生し、過疎の村々に匪賊が出没している。〔中略〕1 月 29 日、馬賊 1000 名余りが軍人に扮し、旗鼓を備えており、非常に大きな勢力。11 日から 14 日の間、哈喇吐〔地名、ホンゴルオボーの東に位置する村ー引用者注〕の窑を四つ連続で破り、孫家窩棚に向かった。二日間で、また窑を四つ破り、さらに人頓毛都村へ侵攻し、得薄吉〔人名ー引用者注〕ジャランの家に入り込み、彼を拉致した。現在、林毛道を攻撃しており、盛んな勢力で立ち向かうことができない。数少ないモンゴル軍がいるが、実に攻撃能力は皆無である¹³⁷。

当時の内モンゴルのホルチン地域の事情からして、「窑」は地主や牧主などの豊かな人びとの家だけで建てられていた。ジャラン職に就任している人々も一般には勢力のあるモン

¹³⁵『蒙蔵周報』は 1929 年 9 月、中国国民政府の蒙蔵委員会によって南京で刊行された週刊誌である。「三民主義」を宗旨に、モンゴルとチベットは中華民族の一部であることをアピールしながら、その歴史的地位などを強調していた。当新聞では、当時の国内外における重大なニュースや、モンゴルとチベットの社会情勢などは報道されていた。

¹³⁶「窑 (yao)」という言葉が辞書の中では「瓦や陶磁器を焼く窯」と解釈されているが、劉忱 (2004: 90) によれば、「窑」とは、周りに砲台が建てられた住宅 (大院) を指しており、「响窑 (xiang yao)」ともいう。

¹³⁷『蒙蔵周報』第 66 号、民国 20 (1931) 年 3 月 31 日、この資料については、義都合西格、額爾徳木図、吳津『嘎達梅林的事迹』、26 頁を参照、また、この資料の内容は Kürelša, Sergüleng (1999: 175-176) でも引用されている。

ゴル人であったと考えられる。したがって、当時の「ガーダー・メイレン蜂起軍」がいかに「モンゴル人の土地と利益のために戦う」というスローガンを掲げて立ち上がったとしても、「豊かな人びと」の「窟」を攻撃し、彼らの財産を奪い取ったのは明らかである。今日の内モンゴルの一部の人びとの中でも、このような記憶がいまだに残っている（これについては、本論文の第5章を参照）。

1930年の年末には、ダルハン旗側の旗兵隊が蜂起軍を制圧できなくなったので、東北軍に援軍を求めた。東北軍の総司令官張学良と熱河省政府主席の湯玉麟は、洮南、白城、鄭家屯、通遼、開魯に駐屯する近隣の東北軍を4千人以上の規模で動員し、蜂起軍の弾圧に乗り出した¹³⁸。

『盛京時報』での報道によれば、1931年の2月、通遼に駐屯する「騎兵三旅団団長の除明晨、公安局長の趙興周、ダルハン旗統領（軍務メイレン）の劉振玉、興安大隊長の崔錫九は連合し、各自の部隊を率いて匪賊（蜂起軍）を討伐したとある¹³⁹。また、洮遼鎮守使の張仙濤は2月11日、自分で騎兵4団を率いて出発し¹⁴⁰、通遼一帯で蜂起軍を攻撃したという。その中で、所属第2団の徐雨泉団長は、長い間の激しい戦闘を通じて、数十名の匪賊（蜂起軍）を殺害し、20名余りを鹵獲した¹⁴¹という。同月の21日、張仙濤はダルハン王府からの手紙を受け取り、合同討伐を提案された。かれはしばしば勝利を収めたが、郷村は匪賊の方を援助していることが報道されている¹⁴²。このときの通遼一帯での戦いでは、張仙濤は北側から攻撃し、彰武の第3旅の張旅長も2団の兵力（駐遼源1団、駐通遼1団）を持って南側から迎撃した。康平、法庫、遼源、昌図4県の公安大隊長もその包圍殲滅作戦に加わった¹⁴³。

一方、『東三省民報』（資料5-6）でも、この時のガーダー・メイレンの活動の様子が報じられている。

【資料5】『東三省民報』1931年2月13日、（第2858号）

¹³⁸ ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、145頁。

¹³⁹ 「聯合勦匪」『盛京時報』民国20（1931）年2月10日、（第7580号）、第78冊、232頁。

¹⁴⁰ 「張鎮帥出発」『盛京時報』民国20（1931）年2月14日、（第7584号）、第78冊、258頁。

¹⁴¹ 「張鎮帥勦匪捷音」『盛京時報』民国20（1931）年3月5日、（第7600号）、第78冊、354頁。

¹⁴² 「達爾罕王府電請張鎮帥會同勦匪」『盛京時報』民国20（1931）年2月26日、（第7593号）、第78冊、310頁。

¹⁴³ 「軍警雲集搜勦胡匪」『盛京時報』民国20（1931）年2月21日、（第7588号）、第78冊、276頁。

最近、通遼における匪賊による被害が蔓延している。当県の東、北と西の三面において、匪賊の雙青、莊稼人、紅順、天紅、占東邊などの5人はそれぞれ1、2百人を率いて至るところで騒乱を起こしている。最近また、蒙匪の孟迷喇（名は青山、綽名は托天）のグループ5、6百人と合流し、熱河境に入ったという。駐当県警務処觀察長の崔錫九は、すでに駐当地の陸軍徐団長と共に討伐を行い、また、張鎮守使（仙濤）も討伐に出発したという¹⁴⁴。

【資料6】『東三省民報』1931年2月23日、（第2867号）

当鎮[大林—引用者注]河北蒙界において、大勢の蒙匪賊が掻き乱している。匪名は平心、紅順と言われ、猖獗を極めている。洮南の駐屯軍である張旅2、5両団は通遼に来て討伐した。当鎮の河北一帯で匪賊団と遭遇し、4、5時間の戦闘を通じて、匪賊は敗れ、荒野へ落ちのびた。討伐軍が匪賊を追い詰め、20名あまりの匪賊を捕虜し、30名あまりを殺し、多数の銃と馬を鹵獲した〔後略〕¹⁴⁵。

注140と史料6の内容から見ると、今回の通遼一帯での戦いは、2月11日、通遼の東北にある、大林鎮の河北一帯（遼河の北側）で、平心、紅順の指導する匪賊団（蜂起軍）と洮遼鎮守使の張仙濤の所属第2団（団長：徐雨泉）との間で行われたようである。蜂起軍側は20名余りが捕虜にされ、30名余りが殺された（図2-4）。

ちなみに、紅（洪）順の指導する匪賊団（数十人）は、「ガーダー・メイレン蜂起」が勃発する前の1929年10月下旬ごろに、突泉一帯で活躍していた存在である¹⁴⁶ことが『盛京時報』で報じられている。また、1930年1月上旬ごろ、同匪賊団（2百余名）がこの地域で活躍し¹⁴⁷、同年、3月19日、ダルハン旗の泥簍屯及び、古石廟などで瞻榆県に駐屯する陸軍騎兵第3団の第1連と戦ったことが報じられている¹⁴⁸。上の記事では、「最近、紅順などの匪賊団は蒙匪の孟迷喇（ガーダー・メイレン）のグループと連合し、熱河境に入った」とされているが、実際に彼らが「ガーダー・メイレン蜂起軍」に加わったのは、

¹⁴⁴ 「通遼股匪 已聯合五六百人 軍隊正謀會勦」『東三省民報』民国20（1931）年2月13日、（第2858号）。なお、ここで登場する莊稼人という人物と『盛京時報』で登場する「庄家人」は同じ人物を指していると思われる。

¹⁴⁵ 「匪患肅靖 擊斃三十餘名 活捉二十餘名」『東三省民報』民国20（1931）年2月23日、（第2867号）。

¹⁴⁶ 「調隊勦匪」『盛京時報』民国18（1929）年10月25日、（第7135号）、第74冊、360頁。

¹⁴⁷ 「傳団長勦匪凱旋」『盛京時報』民国19（1930）年1月10日、（第7204号）、第75冊、47頁。

¹⁴⁸ 「防軍勦匪凱旋」『盛京時報』民国19（1930）年4月3日、（第7281号）、第75冊、518頁。

おそらく 1930 年の 3 月から 5 月の間であると考えられる。なぜなら、民国 19 (1930) 年 5 月 21 日、蒙地開墾を推し進める側が遼寧省側に報告した文書にはじめて彼らが合同で活動する様子が描かれているからである¹⁴⁹。

なお、莊稼人 (庄家人) などの指導する匪賊団は、1930 年 11 月ごろ、通遼一帯で、同県警務処觀察長の崔錫九の兵隊に追撃された後¹⁵⁰、1931 年 1 月ごろも同地域で活動していた。同匪賊団は、莊稼人の他に、黒虎、雙青天、紅雲龍、大英字などに指導され、その戦力は 200 名余りの規模であったようだ¹⁵¹。この時点で彼らが「ガーダー・メイレン蜂起軍」と合同で活躍していたかどうかは確認できないが、1931 年 2 月ごろ、「ガーダー・メイレン蜂起軍」に加わったのは確かなことであろう。

『盛京時報』の 3 月 19 日の報道では「数日来、通遼などのところから来た大勢の匪賊団約数百名は数グループに分けられ、匪首は老三哥、青山、和字、高山、樂字、老梯字、雙山、三點、振字、明字などが県西北の各村に分散されている」¹⁵²と書かれてある。また、3 月 27 日の報道では「最近、匪首の疙疸米里 (ガーダー・メイレン) は大勢の匪賊を率いて開魯から突泉へ逃げた」¹⁵³と書かれている。これらの記事から見ると、蜂起軍 3 月中旬ごろは、しばらくの間彰武県の西北で活動し、その後開魯県を経て、突泉県境に入ったと考えられる。

しかし、この時点で東北軍に包囲される状況に陥り、やむを得ず、数百名は数グループに分かれて活動するようになった。つまり、4 千人以上の兵力を擁する東北軍の弾圧に対して、ガーダー・メイレンはやむを得ず蜂起軍を分散させ、彼の所属部隊はホルチン右翼中旗と扎魯特旗の境界にある山岳の要害地で戦闘をしながら、西のバーリン左翼旗、同右翼旗、ウジュムチン旗に回り、苦しい戦局を突破しようとした。蜂起軍は補給を求めて西に向かったが、ホルチン右翼中旗の吐列毛都付近で熱河省派遣の李守信軍団に進路を阻まれた。そのため、包囲を突破し、西の林東まで走り抜けた¹⁵⁴。しかし、彼らはバーリン旗

¹⁴⁹ 「通遼県縣長王激波呈文」民国 19 (1930) 年 5 月 21 日、科爾沁左翼中旗档案館「史志辦档案史料」-「沿革地理類」類号 80。

¹⁵⁰ 「大隊長剿匪凱旋」『盛京時報』民国 19 (1930) 年 11 月 8 日、(第 7494 号)、第 77 冊、402 頁。

¹⁵¹ 「大隊長剿匪凱旋」『盛京時報』民国 20 (1931) 年 1 月 17 日、(第 7556 号)、第 78 冊、87 頁。

¹⁵² 「胡匪蜂起」『盛京時報』民国 20 (1931) 年 3 月 19 日、(第 7612 号)、第 78 冊、426 頁。

¹⁵³ 「張局長防患未然」『盛京時報』民国 20 (1931) 年 3 月 27 日、(第 7620 号)、第 78 冊、477 頁。

¹⁵⁴ 石原邦子「内モンゴル民歌「ガダ・メーリン」に関する一考察—モンゴルの英雄はなぜ中国で歌われたか」、23 頁。

で越冬していたウジュムチン旗の遊牧民とその騎衛隊に遭遇して衝突し¹⁵⁵、東のほうに引き返した。長い期間に渡る苦闘を繰り返した蜂起軍は物質や弾薬も欠乏し、次第に窮地に追い込まれていった。

引き返した蜂起軍は、吐列毛都付近では再び李守信軍団の伏兵に遭遇し、まる 1 日に及ぶ激しい戦闘を行った（資料 7）。その戦闘で蜂起軍はひどい損害を受け、包囲を突発できたのはたった 40、50 名しかいなかったようである。1931 年の 3 月 30 日、ガーダー・メイレンは残りの 40、50 人あまりの兵士を率いて、吐列毛都から魯北県を経て、ダルハン旗に戻ってきたが、ホンゴルオボー（洪格爾敖包）付近で、行先をウルジームレン河（新開河）に阻まれ、追ってきた李守信に包囲された¹⁵⁶。それはちょうど凍りついた河が解け始める頃であり、20 人ぐらいの兵士が河を渡ったが、ガーダー・メイレンはそこで戦死した。

資料 7 と資料 8 では、ガーダー・メイレン蜂起軍が弾圧される際の様子が伝えられている。

【資料 7】『盛京時報』1931 年 4 月 5 日、（第 7628 号）

当県防衛軍 17 旅長の崔星五は命令を受け、27、34 の両団の兵士を率いて蒙匪を討伐するために出発した。現在は魯北、天山、林東などの地域の匪賊への討伐が終わり、匪首の孟梅倫が逃亡し、行方不明となっている。〔中略〕当匪賊団は皆モンゴル人で、地理に詳しいため、包囲しにくい状況。その直前、開魯から 500 里離れたところで当匪賊団に遭遇し、約 1 日間の激戦を通じて、蒙匪が破れてちりぢりばらばらになった。

今回の討伐では数百頭の馬を鹵獲し、80 名余りの匪賊を殺し、53 名を捕虜にし、5 名の人質を殺した〔後略〕¹⁵⁷。

資料 7 で書かれている「開魯から 500 里離れたところ」とは、ホルチン右翼中旗の吐列毛都付近の地域を指していると考えられる。李守信自身の回想記によれば、今回の戦闘で

¹⁵⁵ Kürelša, Sergüleg によれば、当時の諸モンゴル旗の間でのやり取りや情報交換は少なかったことにより、両側がお互いの区別をはっきりさせなかったのが、衝突してしまったという（Kürelša, Sergüleg, *Qorčin arad-un dayuu-yin bayatur-un domoy namdar*, p.178）。

¹⁵⁶ 李守信「我是怎樣鎮壓嘎達梅林起義部隊的」『内蒙古文史史料』第十輯、内蒙古人民出版社、1983 年、55 頁。

¹⁵⁷ 「勦討蒙匪軍凱旋 擊斃百名活獲五十」『盛京時報』民国 20（1931）年 4 月 5 日、（第 7628 号）、第 78 冊、581 頁。また、同新聞の 4 月 9 の記事でもこの時の様子が報じられている（「崔司令又出剿匪」『盛京時報』民国 20（1931）年 4 月 9 日、（第 7631 号）、第 78 冊、548 頁）。

は、蜂起軍の規模は 1000 人余りであり、2、3 百人が捕虜にされるか、殺された¹⁵⁸と書かれているが、実際にも、少なく見積もっても約 50 人から 80 人規模の蜂起軍が殺されたとみられていた。また、資料 7 では蜂起軍に参加した兵士全員がモンゴル人であったと記述されている。

資料 8 の下線部では、匪首（ガーダー・メイレン）は権勢のある人であって、西夾荒の開墾により、彼自身の土地（tariy-a/農耕地）が争いに巻き込まれ、逮捕されるが、脱獄し、民衆を集めて匪賊になったという。また、副首領の陳剛、洪順等の人物像も紹介され、「これらの匪賊が最初は約千人余りの民衆を集め、少々政治的意味を持ち、魯北縣と東西札魯特旗内で活動していた」という。

【資料 8】『蒙蔵旬刊』1931 年 9 月 20 日（創刊號）

去年の冬、駐熱河東北陸軍独立旅の崔新五の部下は魯北に来て討伐し、数回の接触を通じて、40、50 人の匪賊を射殺したが、まだ徹底的に肅清できなかった。崔の部下李守信団長の大隊長である胡宝山、李明遠とその兵士の大半は皆モンゴル人であるため、モンゴルで作戦するには役に立った。当匪賊の首領は孟氏で、ガーダー・メイレンとも呼ばれ、元々はダルハン旗の兵隊統領であって、かなりの権勢を持っていた。遼寧省による西夾荒の開墾で彼の農地の大半が巻き込まれたので、それに反対した疑いで逮捕され、脱獄後、民衆を集めて匪賊になった。今回の戦いで殺されたと言われているが、まだ明確ではない。副首領は陳剛、洪順等という。陳は林東のモンゴル人で、かなりの財産を持っていて、かつて警察官を勤めたことがあったが、事件に巻き込まれ、財産を没収され、追い詰められて無謀なことをした。当匪賊団は、最初はかなりの政治的な意味を持っており、1000 人あまりの人を組織し、魯北県、東西ジャロート旗境内で一年あまり盤距し、過酷な騒乱を起こした。〔後略〕¹⁵⁹。

ここまでの内容をまとめて見ると、蜂起軍の行軍ルートは以下の通りである（図 2-5）。

ダルハン王府の印務処牢屋から脱獄、武装蜂起開始（1929 年 12 月 13 日）→ダルハン旗の西夾荒、遼北荒付近（1930 年 4 月～1931 年 2 月）→彰武県（1931 年 3 月中旬）→開魯

¹⁵⁸ 李守信「我是怎樣鎮壓嘎達梅林起義部隊的」、55 頁。

¹⁵⁹ 「魯北縣境匪患已平」『蒙蔵旬刊』民国 20（1931）年 9 月 20 日（創刊號）、137 頁。また、『蒙蔵周報』の第 76 号（民国 20[1931]年 7 月 21 日）では「達旗殲滅巨匪」という見出しで蜂起軍が弾圧される時の様子が報じられている。

県（1931年3月中旬）→ホルチン右翼中旗の土列毛都（1931年3月中旬）→バーリン左旗（林東）、同右翼旗、ウジュムチン旗（1931年3月中旬）→ホルチン右翼中旗の土列毛都（1931年3月下旬）→魯北（1931年3月下旬）→ホゴルオボー（ガーダー・メイレン戦死、1931年3月30日）。

図 2-5 ガーダー・メイレン蜂起軍の進軍ルート



蜂起軍の主なメンバーについては、不明な点が多い¹⁶⁰。上で取り上げた新聞記事には、副首頭領の陳剛、洪順(紅順)以外に、天紅、高山、満天紅、三哥、和字、楽字、老梯字、雙山、三點、振字、明字、雙青、平心、莊稼人(庄家人)、占東邊などの匪賊の名が登場し

¹⁶⁰ 義都合西格、額爾徳木図、吳津『嘎達梅林的事迹』、Kürelša, Sergüleng, *Qorčin arad-un daγuu-yin bayatur-un domoy namdar*などの伝記によれば、蜂起軍には、紅順、高山の他に、中国、庄五団、庄五營、玉山、天龍、黒塔などの匪賊団が加わっていた。

ている。この中では、洪順(紅順)は、モンゴル人であると言われており、文学作品などにもしばしば登場する人物であるが、他の匪賊の詳細については現時点では不明である。

ガーダー・メイレン蜂起は失敗した。しかし、その出来事は遼北荒と西夾荒の開墾作業を大幅に遅らせ¹⁶¹、半年後、「満州事変」を契機にホルチン左翼中旗を含む東北三省が満州国に編入されたので、蒙地開墾は中止された。約1年3か月の期間に、蜂起軍はホルチン左翼中旗から、ホルチン左翼後旗、彰武県、ジャロト旗、開魯県、ホルチン右翼中旗、バーリン左旗まで展開していた。本稿で見てきたように、この出来事は、蒙地開墾を推し進める側である遼寧省に報告された文書においてだけではなく、『盛京時報』、『東三省民報』、『蒙蔵週報』、『蒙蔵旬刊』などの新聞でも報じられていた。また、この出来事は、当時の東北師範学校の学生であったハーブングーのような知識人だけではなく、ダルハン旗の一般モンゴル民衆の関心をも引きつけた¹⁶²。彼らにとっては、漢人によって奪い取られそうになった故郷を守ってくれた英雄の事績であったからである。

小結

本章では、奉天で出版された『盛京時報』、『東三省民報』などの新聞を用いて、「ガーダー・メイレン蜂起軍」の活動や戦闘、移動ルートについて検討し、歴史的事実としての「ガーダー・メイレン像」の再構築を試みた。

前述したように、「ガーダー・メイレン蜂起」は内モンゴルの公式的な歴史叙述の中で、内モンゴルの低層民衆による抑圧に対抗する運動¹⁶³、封建的王公、軍閥、民族的抑圧に対抗する闘争¹⁶⁴と評価され、漢人農民も蜂起軍のパートナーとして叙述されている。しかし、『盛京時報』の報道によれば、蜂起軍の攻撃の対象が地元の漢人であったことが確認できる。もし、これが事実だとするなら、『嘎達梅林的事迹』、「民族英雄嘎達梅林的歴史材料彙編」などの伝記や資料で記述されている内容とは齟齬がある。これらの伝記や資料は「ガーダー・メイレン蜂起」の事実を客観的に伝えているというよりは、出来事を可能な限り「階級闘争理論」の枠組みで解釈しようとする意図で書かれた可能性がある。

¹⁶¹ ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、145-146頁。

¹⁶² S.Urusyal, “Tada meyiren-ü amidaral üile-dü qolboydaqu kedün adsayudal”, pp.78-81. (これについては、第3章を参照)。

¹⁶³ 曹永年『内蒙古通史』内蒙古大学出版社、2007年、1-109頁；白拉都格其、金海、賽航『蒙古族通史』第五卷(上)、内蒙古大学出版社、2002年226-228頁。

¹⁶⁴ 郝维民『内蒙古革命史』人民出版社、2009年、161-162頁。

一方、伝記で記述されている、蜂起軍の活動に地元の漢人匪賊団が加わったことは『蒙蔵周報』と『東三省民報』で報じられており、それはかなり信憑性があると考えられる。彼らの掲げたスローガンに留意したい。蜂起軍が遼寧省側から派遣されてきた遼北荒と西夾荒地域の開墾軍を攻撃したとき、「民衆の財産を奪い取ってはいけない」というスローガンを掲げていた。そのような倫理は、同時に匪賊団のメンバーに対しても要求していたかもしれない。もっとも、さまざまな種類の伝記などに表われているように、一部の人々が蜂起軍の名義で地元の漢人とモンゴル人地主に対して、略奪行為を行ったという事件も存在した。

これまで見てきたように、もともとの蜂起の契機は「開墾反対運動」であったとしても、途中で加わった「匪賊団」のことを考えると、蜂起軍の内実は変わって行ったのではないだろうか。当時の東北地域の状況から見れば、外モンゴルは清朝の崩壊と中国の辛亥革命の動乱に乗じて、独立を宣言した。中華民国が建国されたが、実際には軍閥により分割された状態になった。このような背景で、東北地域に「満州の馬賊」とも呼ばれような「匪賊団」が多く見られるようになった。ガーダー・メイレン蜂起が勃発した後、後方からの援助が少なかったので、匪賊団と連携する方法しかなかったと思われる。これについては、地元のモンゴル人も同様の指摘を行っている（本論文の第5章を参照）。

ここまで文献資料にみられるガーダー・メイレンの「実像」について検討してきた。次の章では、「記憶の場の歴史学」とも呼ばれる新しい視点から、文献資料だけではなく、いわば一種の「状況証拠」といえる文学作品、映像作品、記念物などに焦点を当てて、広い意味での「集合的記憶としてのガーダー・メイレン像」の在り方を検討していきたい。

第3章 「記憶の場」としてのガーダー・メイレン

本章は、ガーダー・メイレンの内モンゴルの時間的枠組みで形成される複数の様相に焦点を当てて、その分裂と葛藤から浮かび上がる「記憶の地形図¹⁶⁵」を描き出すものである。ここではガーダー・メイレンの記憶の生成と変容の深層構造を探究するために、内モンゴルの異なる時代の政治的背景とコンテクストに関連させながら、ガーダー・メイレンを「集合的記憶の根づいた場所」、つまり「記憶の場」として捉えたい。

「記憶の場」とは、物質的なものであれ、非物質的なものであれ、きわめて重要な含意を帯びた実在である。それは人間の意志もしくは時間の作用によって、なんらかの社会的共同体のメモリアルな遺産を象徴する要素となったものである¹⁶⁶。別の言い方をすれば、「記憶の場」とは、根底から変容し革新されつつある共同体が、技巧と意志とをもって、生み出し、作り上げ、宣言し、また維持するものである¹⁶⁷。

フランスの編集者であり、歴史家であるピエール・ノラは、1984年から1992年にかけて、約120名の歴史家を動員し、約130編（総論的なものを加えれば135編）のエッセイを『記憶の場』（全7巻、5600頁以上）というシリーズに収めた。フランスにおいて集合的記憶を表象する「場」のあたかも百科全書のような相貌を呈したこの『記憶の場』のスタイルは、限定した範囲や体系を持たず、それは、絶えず新たな要素が加えられ、常に全体の布置が組み替えられてゆくような歴史学のあり方を示している¹⁶⁸。『記憶の場』に収められた論文の多くは、フランス人にとっては、誰にも馴染みのあるテーマを扱っており、ある意味では実証史学以前の物語的な（エッセイ風の）叙述スタイルを持っている¹⁶⁹。ノラの言葉で言うなら、「記憶の場の歴史学」は次の通りである。

事件それ自体よりも、時を経て事件のイメージがどう作られていくか、その意味が消滅したり、蘇ったりすることのほうに注目する。「実際に起こったこと」よりも、出来

¹⁶⁵ 板垣竜太「力道山」板垣竜太・鄭智泳・岩崎稔『東アジアの記憶の場』河出書房新社、2011年、193頁。

¹⁶⁶ ピエール・ノラ『「記憶の場」から「記憶の領域」へ』ピエール・ノラ編、谷川稔訳『記憶の場：フランス国民意識の文化＝社会史』（対立）岩波書店、2002-2003年、18-19頁。

¹⁶⁷ ピエール・ノラ「記憶と歴史のはざまに」前掲書、37頁。

¹⁶⁸ 工藤光一「『記憶の場』と現代フランスの歴史叙述」『クアドランテ』第6号（東京外国語大学海外事情研究所、2004年3月）、19頁。

¹⁶⁹ 谷川稔「『記憶の場』の彼方に－日本語版をどう読むか－」『クアドランテ』第5号（東京外国語大学海外事情研究所、2003年3月）、11-12頁。

事が絶えず再利用され、誤用されたりして、現在に引き継がれる。伝統よりも、伝統が創られたり、衰退したりする仕方のほうに関心がある。ようするに、この歴史学は、再生でもなければ、復元でもなく、再建でもなければ、表象ですらない。それは言葉の能うかぎりの意味での「再記憶化」である。つまり、過去の想起としての記憶ではなく、現在のなかにある過去の総体的構造としての記憶に関心を寄せる歴史学なのである¹⁷⁰。

谷川稔は、『記憶の場』の上梓を「個人的記憶と社会的記憶の交互」による「集合心性史」、つまり「集合的記憶」の歴史の流れに位置づけ、その「領域を一気に拡大した史学史上の大事件である」¹⁷¹と指摘している。それは「現在のなかにある過去を、時系列をはずして縦横に読み替えることをとおして「現在史を構築する」ことである¹⁷²。つまり、「連続性」より「断絶＝非連続性」が強調され、「起源」より、「誕生」のほうが語られる歴史学である¹⁷³。

研究の対象と方法においても、従来の歴史学の寵児とされてきた手稿史料などの一次史料から、二次史料ないしそれ以下の「状況証拠」とされる歌謡、文学作品、映像作品、絵画、記念物なども分析の対象となりうる¹⁷⁴。つまり、叙述スタイルや、方法論的にも「公文書実証主義的」な近代歴史学の「時系列的で目的論的連続性」¹⁷⁵、「閉鎖的・特権的」¹⁷⁶な特徴と対照的に、「記憶の場」の歴史学は、「縦横的」、「現在的」、「開放的」「自由的」であると言えるだろう。

ここでの「場所 *lieux*」とは、物理空間的な意味での三次元的な場所に還元されるものではない。この「場所」は記憶術論の伝統のなかでの *loci* であり、*topoi* である。近代語の「topic」の語源がこの「*topos*」であるように、この「場所」は論点や判断が分節化されてあらわれること、またそのように分節化されることで可能になる秩序という

¹⁷⁰ ピエール・ノラ『『記憶の場』から『記憶の領域』へ』、27-28 頁。

¹⁷¹ 谷川稔「社会史の万華鏡—『記憶の場』の読み方・読まれ方—」『思想』第 911 号、2000 年、4 頁を参照。

¹⁷² 谷川稔『『記憶の場』の彼方に—日本語版をどう読むか—』、16 頁。

¹⁷³ ピエール・ノラ「記憶と歴史のはざまに」、45 頁。

¹⁷⁴ 谷川稔『『記憶の場』の彼方に—日本語版をどう読むか—』、12 頁。

¹⁷⁵ ピエール・ノラ『『記憶の場』から『記憶の領域』へ』、21 頁。

¹⁷⁶ 谷川稔『『記憶の場』の彼方に—日本語版をどう読むか—』、12 頁。

意味を持っている。「記憶の場所」とは「集合的」にあるいは「社会的共同体」において共有された記憶の拠りである¹⁷⁷。

ノラは「記憶の場」を構成するには、記憶と歴史の働きと相互作用は不可欠であり、また記憶の意志がなければならぬと強調する。「歴史や時間や変化が介入しなければ、記憶の場の歴史は単なる記念碑の歴史に終わってしまう。〔中略〕記憶の場が存在するのは、その意味が絶えず変わり、その枝が予期できないかたちで茂るなかで、変化に対して対応力を持っているからである」¹⁷⁸。

ノラの議論はアルヴァックスの「集合的記憶論」を継続し、歴史と記憶の背反的な関係を強調しながら、二つの存在の決定的な非緩和的關係を指摘している¹⁷⁹。ノラの提示したこの「記憶の場」の概念は、フランスという国民国家の領域を超えて、ヨーロッパや、アメリカなどの世界各地の研究者の関心を引き、日本でもそれに批判的な試みとして、日韓共同作業による『東アジアの記憶の場』が出版されている。

ノラの「記憶の場」論に即していえば、ガーダー・メイレンも内モンゴル人（とりわけ、モンゴル人）であれば、「誰もが思い当たり、それぞれの記憶が喚起されるようなもの」¹⁸⁰となっており、それは一つの理念的「記憶の場」となっていると考えられる。なぜなら、ガーダー・メイレンが「モンゴルの故郷を守るために戦った英雄」を想起させ、表現させる「場所」だからである。ガーダー・メイレンという場の中には、彼の記憶を集約する要素が放り込まれており、それは彼の記憶を表現し、保持させ続ける、非常に強烈な「場」として存在しているのである。ここでは、ガーダー・メイレンを「記憶の場」として扱うに際して、「ガーダー・メイレン蜂起」がなぜ起こってしまったのか、どのように展開されたのかを分析するのではない。むしろ、彼はいかに「階級闘争のモデル」¹⁸¹として利用され、「モンゴルの馬賊」、「祖国の裏切り者」として批判され、また、「環境保護のパイオニ

¹⁷⁷ 岩崎稔「東アジアの記憶の場」の可能性—ピエール・ノラへの批判的応答の試みとして—『クアドラント』第11号、2009年、50頁。

¹⁷⁸ 同上、49頁。

¹⁷⁹ 岩崎稔「ピエール・ノラの《記憶の場所》1」『未来』第380号、1998年、5頁を参照。この論文では、ノラの指摘した歴史と記憶の背反的な関係について詳しく論じられている。また、ノラ自身のよる『「記憶の場」から「記憶の領域」へ』、ノラ「記憶と歴史のはざまに」を参照させたい。

¹⁸⁰ 岩崎稔「東アジアの記憶の場」の可能性—ピエール・ノラへの批判的応答の試みとして—、50頁。

¹⁸¹ 石原邦子「内モンゴル民歌「ガダ・メーリン」に関する一考察—モンゴルの英雄はなぜ中国で歌われたか」、30頁。

ア」¹⁸²として再利用されたかを吟味し、内モンゴルの社会的変動を伴って、共有され、構築され、また、「再記憶化（ノラ）」される「記憶の拠り（岩崎）」、つまり「記憶の場」のあり方を解明することである。

内モンゴルにおいて、ガーダー・メイレンの記憶は教科書などの「公式的な記憶」の媒介だけではなく、ウリゲルト・ドーを通じて「記憶の場」となったのである。現代内モンゴルにおける「民族の英雄としてのガーダー・メイレン」の物語の始まりは、彼の戦いを歌ったウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』から由来する。現在、ガーダー・メイレンに関するウリゲルト・ドーは様々なヴァリエーションを持っており、また、同一の主題を用いた宣伝活動、歌劇、映画脚本、交響詩、長編小説、映像作品、漫画・連環画などが制作されている¹⁸³。

ここで、内モンゴルの時間的、空間的枠組みによる変動的、かつ多様な「ガーダー・メイレン像」を描き出すために、本章では四つの視点から、ガーダー・メイレンの記憶と忘却のメカニズムを検証する。まず、1930年代の中華民国時代において、「モンゴルの馬賊」としてのガーダー・メイレン像と蒙漢関係（モンゴル人と漢人の関係）を、新聞記述の側面から検討する。次に、1950年代における反動的軍閥や、封建的王公と対抗した「民族の英雄」となったと同時に、土地をめぐるモンゴル人と漢人の対立が忘却されたプロセスを考察する。第三に、文化大革命時代における「祖国の裏切り者」としてのガーダー・メイレン像を分析する。最後に、「改革開放」後の内モンゴルにおける「階級闘争のモデル」から「草原を開墾から守るために戦った英雄」まで変容するガーダー・メイレン像を検討する。

第1節「馬賊」ガーダー・メイレンと蒙漢関係

「馬賊」という言葉は、清末頃から中国東北地域に現れ、略奪などを行っていた騎馬の武装集団を指すが、それだけにとどまらない。さらに、20世紀初期の満州各地では「盗賊団」のイメージが強く「満州の馬賊」も現れた。東北軍閥の張作霖も馬賊出身で、当時の混乱した状況に乗じて権力を握った有名な人物である。

¹⁸² 蔡偉傑 (Tsai Wei chien) 「從蒙匪、英雄到環保先鋒：嘎達梅林在現代中國的表述與政治」、81 頁。

¹⁸³ 拙稿「中国・内モンゴルにおけるガーダー・メイレンの記憶とその変遷」『クアドランテ』第17号（東京外国語大学海外事情研究所、2015年3月）、304頁。

漢語の「胡匪」・「土匪」と対照的に、モンゴル語では、「馬賊」ではなく、ホンホズ「qungquja/紅胡子」という言葉がよく用いられる。これも実際には漢語から借用した言葉であるが、20世紀初めの内モンゴルのモンゴル人にとって、強い恐怖と不安の効果を喚起させる「馬賊」のイメージとして受け入れられていた。一方、漢人たちは「紅胡子」という言葉の代わりに、「胡匪」・「土匪」を用いたが、モンゴル人によって組織された匪賊団のことを「蒙匪」（モンゴルの匪賊）とも呼んでいた。モンゴル人匪賊団を「蒙匪」と呼ぶことは、英語の bandits という表現と同様、強い非難や排除の意味合いを伴っていた。1920年代から30年代にかけて、中国共産党が国民党側に「共匪」や「毛匪」（毛沢東の匪賊団）と呼ばれたように、「蒙匪」の中には普通の匪賊団の他に、政治的裏切り者(political rebels)も含まれていた¹⁸⁴。

中華民国が建国された後、漢語で出版された新聞の中で「匪賊」や「蒙匪」という言葉が現れるようになった背景には、当時の政治的配置や国際関係の変化がある。外モンゴルは清朝の崩壊と中国の辛亥革命の動乱に乗じて独立を宣言したが、中華民国の建国後は、実際には軍閥により分割された状態になった。また、1927年の蒋介石によるクーデターを契機に、共産党員が拘束・虐殺される事件が起こり、毛沢東や朱徳らの活動が「共匪」の行為として弾圧されると同時に、当時の新聞などの各メディアの中で「共匪」や「毛匪」という言葉が頻繁に現れるようになった。

第2章では述べたように、「ガーダー・メイレン蜂起」が発生した当時、中華民国の『蒙蔵周報』、『蒙蔵旬刊』などの新聞や雑誌はその出来事について報道し、「蒙匪」・「馬賊」としてのガーダー・メイレン像が浮かび上がった。例えば、『蒙蔵周報』の第65号は「去年冬、大勢の馬賊孟梅林[ガーダー・メイレンー引用者注]、紅順などは人々を率いて、ダルハン旗の境を超えてきて、扎魯特左旗の境界線あたりで騒ぎ回っていた。最初は三百名程であったが、他のグループの加わることにより、六、七百名にまで増えた」と報道し、「地元の警備隊が制御できなかった」¹⁸⁵とも伝えている。また、『蒙蔵旬刊』で「ダルハン旗騎兵統領孟青山[ガーダー・メイレンー引用者注]は北の王府牢屋から脱獄し、民衆を集めて

¹⁸⁴ Jaqchid sechin, An Interpretation of “Mongol bandits”(Meng-fei), *Altaica:Proceedings of the 19th Annual Meeting of the Permanent International Altaistic Conference*, edited by Juha Janhunen, (Helsinki : Suomalais-Ugrilainen Seura, 1977) : 118.

¹⁸⁵ 『蒙蔵周報』第65号、民国20(1931)年3月23日(旧暦2月5日)。

匪賊になり、いたるところに出没し、一年あまりの時間が経った」¹⁸⁶と報道し、ガーダー・メイレン蜂起軍が東北軍によって弾圧される様子を描いている。

これらの報道には、蜂起当時の状況が照らし出されている。被害を受けた漢人にとっても、蒙地開墾を推し進めていた当局にとっても、「胡匪」（匪賊）や「馬賊」そのものは、彼らの開墾作業を脅かしかねない人々であり、取り締まるべき存在であった。

ここで取り上げた『蒙蔵周報』は、確かに当時の国民党政府に属する「蒙蔵院」によって、当時の「法律、政令などの宣伝」や「国民大革命の実現」という目的から刊行された新聞¹⁸⁷であるため、国民政府の立場から、ガーダー・メイレンの指導した蜂起を「馬賊の略奪行為」と評価するのは当然のことだろう。

ところが、この新聞と並行して 1929 年「駐北平（北京）モンゴル人学生会」（“Beiping-dü baiqu mongyol suruyči-yin qural”）によって刊行された雑誌『Mongyol/蒙古』¹⁸⁸は、異なる立場からガーダー・メイレン蜂起を報道した。同誌の第 6 号では、遼寧省の役所からホルチン左翼中旗の遼北荒と西夾荒の開墾が実施されるようになったことが紹介され、この二つの荒が開墾されると、そこに住む 20 万人のモンゴル人たちは生計を奪われ、飢餓に瀕することになると懸念しつつ、ガーダー・メイレン蜂起について次のように伝えている。

〔前略〕話によると、この前、西夾荒の開墾が所属地の民衆の生計を脅かしつつ行われたので、数千人が団結し、ジャン・ジンユン[原文は Zhang Jingyun]、孟青山などの 10 人あまりの老人[原文ではこのように書かれているが、当時の孟青山は 30 歳過ぎの人であった—引用者注]を代表として奉天に派遣し、省役所に請願したが、政令[原文は alban jarliy]に対抗した罪でジャン、孟などのリーダーが逮捕され、他の人々は逃げ帰った。その後、張、孟はダルハン旗のジャサクに移動となり、処刑と決定されたが、孟の妻（氏名が不明）が 100 人ぐらいの人々を集め、牢屋を潰して、夫及び他数人を救い出したという。現在、孟青山夫婦が 1000 人ぐらいの人々を率いて、開墾に抵抗している〔中略〕。

ここで批判したいのは、今日の漢人によるモンゴル人に対する圧迫が極限に達していることだ。一寸を得ればさらに一尺進もうとする。かつて奪い取った蒙地どころか、

¹⁸⁶ 「魯北縣境匪患已平」『蒙蔵旬刊』民国 20（1931）年 9 月 20 日（創刊號）『中國少數民族舊期刊集成。第 1 版』、南京卷、第 28 冊、137 頁。

¹⁸⁷ S.Urusyal, “Tada meyiren-u amidaral üile-dü qolboydaqu kedün adsayudal”, p.80.

¹⁸⁸ モンゴル語と漢語の合璧月刊。

現在ぎりぎりで生活しているモンゴルの土地をまた奪い取ろうとは、いかに欲望に際限がない奴であろうか。権勢のないモンゴル人を全部北の海まで追い出そうとしているのか〔後略〕¹⁸⁹。

この記事では、今日の漢人たちがぎりぎりで生計を立てているモンゴル人の土地を奪い取ろうとしていると批判され、ダルハン旗の数千人が蜂起を起こしたのは生存をかけての必死の行動だと伝えられている。記事の最後の署名では「1930年4月10日、サラングレル(Sarangerel)がベーレンタリヤー(Bayiran tariy-a)より」とあるため、この記事を書いたのは、モンゴル人であると推察できる。

ここで描かれるガーダー・メイレン蜂起は、民国側が誹謗するような「馬賊」の「略奪行為」ではなく、むしろ土地や生存権が奪い取られたモンゴル人によるやむを得ない選択であった。このようなモンゴル人側の立場から当時の民国政府のモンゴル地域に強行した政策を批判していた人の中に、当時奉天にある東北モンゴル人師範学校の学生であったハーブンガー¹⁹⁰もいた。彼は遼寧省側の推進する蒙地開墾によってモンゴル人の生計が奪われたことを激しく批判し、漢人の抑圧と暗黒の社会的搾取を受けるモンゴル人たちの覚醒を促している¹⁹¹。また、1930年に同誌に発表されたモンゴル人によって書かれた文章の中では「内モンゴルを省に変更させた後、モンゴル人の牧場が占領され、土地が奪われた。今日、開墾作業がますますエスカレートし、モンゴル人の生計が全く無視されている」¹⁹²と記されている。

ところが、1930年の12月25日に刊行された同誌(第7号)は、「修正すること」(*ᠵᠠᠰᠠᠨ ᠲᠥᠪᠯᠡᠭᠦ ᠤᠴᠢᠷ*)という見出しで前述した第6号に掲載した記事の内容を修正し、「孟青山は最初に開墾を反対したことで逮捕されたが、脱獄した後、すぐに彼の妻と共に匪賊の首領となり、略奪行為を行っている」と発表した。

¹⁸⁹ Sarangerel, “*Monᠭol-dür qolboydaltai kereg Liao ning moji-yin Liao bei, Si jia qoyar quang talbiqu cimege*” *mongᠭol*, 6 duᠭar quᠭuᠴaᠭ-a, pp.13-16.

¹⁹⁰ ハーブンガー (Qabungᠭ-a) : 1908-1970、漢名は滕续文 (Teng Xuwen)、満州事变後、内モンゴル自治軍に参加し、その後満州国の官吏となった人物である。日本降伏後、内外蒙古統一の夢を抱いて活動するが、当時の複雑な国際関係の中で内外蒙古統一運動が失敗した。国共内戦期において、中国共産党の支持を受けた内モンゴル自治運動に参加し、内モンゴル自治区政府の副主席に就任するが、文化大革命の際、被害を受けて死亡した。

¹⁹¹ Qabungᠭ-a, “*Yiregsen biᠴig-i yosuyar ᠶagaᠭsan*” *mongᠭol*, 7 duᠭar quᠭuᠴaᠭ-a, pp.40-42.

¹⁹² Dawaosserl, “*Odo man-u uysay-a-yin mükükü-gi sigümjilekü-anu*” *mongᠭol*, 7 duᠭar quᠭuᠴaᠭ-a, p.6.

記事の内容がこのように修正されたのは、ス・オロスガル (S.Urusyal) が述べるように「雑誌刊行側が遼寧省当局の関係者による交渉や指示を受けた可能性もある」¹⁹³。一方、少数のモンゴル人学生によって刊行されたこの雑誌において、民国側が「匪賊」として位置づけるガーダー・メイレンを正面から「モンゴル人の土地や生存権のために立ち上がった」と評価するのは難しいかもしれない。

1920年代という時代を考えるなら、内モンゴルにおけるモンゴル人と漢人の民族的関係は決して穏やかな調和的な関係ではなかった。モンゴル人と漢人の民族的関係に関する当時の語りにおいては、モンゴル人によって書かれた新聞記事は「漢人の虐め」や「モンゴル人の牧場が漢人に奪い取られた」などとしばしば言及するようになり、語り継がれていたのである。

ガーダー・メイレンに関する批評や記述も書き手により異なり、一致した見解は見られない。しかし、ここではハーフンガーなどの民族主義者の思想や批判をことさら重視することで「ガーダー・メイレン蜂起」をめぐるモンゴル人側の立場を明らかにしようとしているのではない。むしろ、注目したいのは、これらの記事の中で「ガーダー・メイレン」という「記憶の場」がどのように構成されていたのかということである。同じ雑誌の中で「匪賊」、「悪辣な漢人」や「漢人の抑圧と暗黒の社会的搾取を受けるモンゴル人」、「開墾」などの単語が使用され、加害者と被害者という二項対立的な相互関係の中でガーダー・メイレンが蒙地開墾に抵抗した「匪賊・馬賊」の表象として浮かび上がったのである。

このように、1930年代の中華民国期において、モンゴル人の土地や生存権のために立ち上がったガーダー・メイレンは、国の政策に抵抗した「馬賊」や至る所で略奪行為を行っていた「蒙匪」として評価され、批判される一方、蒙地開墾によって被害を蒙るモンゴル人側の声は不当に抹殺された。しかし、当時のモンゴル人たちは、彼がモンゴルの故郷を守るために戦った出来事を忘れなかった。ガーダー・メイレン蜂起が勃発した後、内モンゴル東部地域にガーダー・メイレン蜂起を歌い称えたウリゲルト・ドーが作られた。モンゴル人たちは歌を通じて、モンゴル人の故郷を守るために戦った彼の英雄的な戦いを讃えたのだった。最初に作られた「ガーダー・メイレンの歌」は、ホールチのセーレンによって、1930年7月に作られ、口承で伝わっていたが、1945年か1946年頃にテキスト化されたと言われる。歌の一部を引いてみたい。

¹⁹³ S.Urusyal, “Tada meyiren-u amidaral üile-dü qolboydaqu kedün adsayudal”, p.80.

人民の運命にまかせよう
北の聖地に行ってみよう
みずからの力が強くなってから
人民をふたたび救済しよう

ここで歌われているのは、ガーダー・メイレンが蜂起軍を連れて、独立した国＝北の聖地（モンゴル人民共和国）に行き、援助を受けて戻ってくるという場面である。ここで描かれるのは、「馬賊」としてのガーダー・メイレンではなく、むしろ、受難するモンゴル人の「救済者」としての「ガーダー・メイレン像」であった。これについては、第4章で論じることにした。

第2節 ガーダー・メイレンと「階級闘争のモデル」、「革命者の原型」

上述したように、1930年代の中華民国期において「蒙匪」として位置づけられてきたガーダー・メイレンは、1947年の内モンゴル自治区政府の成立と1949年の中華人民共和国の建国に伴い、「反動的な軍閥」や、「封建的な蒙古王公」と戦った「民族英雄」として位置づけられ、「階級闘争のモデル」として評価されるようになった。

当時の内モンゴル自治区政府主席であったウランフは『1951年の任務』において「ガーダー・メイレンが役人であったが、北洋軍閥に対抗した民族英雄である」¹⁹⁴とした。また、1963年の「第1回美術作品展覧会での演説（在一次美術作品展覧会的講話）」と「文学芸術界聯合会拡大会議（在文聯拡大会議上の講話）」でも、ウランフはガーダー・メイレンに言及し、晋劇『ガーダー・メイレン』¹⁹⁵は「マルクス、レーニン主義、社会主義」を支持していると強調した。さらに、『内蒙古日報』にもガーダー・メイレンを宣伝する文章が発表され、「ガーダー・メイレンの“造反”は自分の民族の解放のためであり、異民族の統治階級の侵略に対抗した闘争である」（1951年7月1日）と位置づけている¹⁹⁶。

¹⁹⁴ 内モンゴル大学の井岡山『文藝戦鼓』編集部「烏蘭夫反革命修正主義、民族分裂主義集團鼓吹嘎查達梅林的滔天大罪行」『文芸戦鼓』（嘎查達梅林批判專号）10頁、翻訳は引用者による、以下は同じ。

¹⁹⁵ 晋劇（Jinju）とは山西省の地方劇を指しており、“山西梆子”とも呼ばれる。

¹⁹⁶ 内モンゴル大学の井岡山『文藝戦鼓』編集部「烏蘭夫反革命修正主義、民族分裂主義集團鼓吹嘎查達梅林的滔天大罪行」10頁。

文学創造の面では、ガーダー・メイレンの歌やウリゲルト・ドーが大量に録音・放送され、また、レコードに吹き込まれた。建国後の最も早く撮影された内モンゴル人の革命闘争を描いた映画『内モンゴル人の勝利』(内蒙古人民的勝利)の中でガーダー・メイレンの歌が挿入され、全国に流布された。また、ウランフらの援助を受けて作られた歌劇『ガーダー・メイレン』が1955年に出版され、1957年に晋劇として改編され、内モンゴル自治区10周年大典で演出された。さらに、1962年に作られた交響詩『ガーダー・メイレン』が中央楽団によって演出され、しかもレコードに吹き込まれ、放送された。この作品も「10周年文芸評奨」(三等賞)を受けた。その後、孟和博彦による映画脚本『ガーダー・メイレン』(1959年)も造られ、まるで一時期の「ガーダー・メイレンブーム」になった¹⁹⁷。

1957年の「晋劇『ガーダー・メイレン』の審査座談会」では、副主席のハーフンガーは「ガーダー・メイレン蜂起が起こらなかったら、ホルチン左翼中旗は滅亡した」と発言し、蜂起の意義を高く評価した。同年、彼はまた「ガーダー・メイレン記念碑」を建てる計画を持ち出し、1962年、ガーダー・メイレンの故郷で記念碑を建てようとしたが、実現できなかった¹⁹⁸。また、1963年9月18日に、ハーフンガーがガーダー・メイレンを宣揚する長編談話を出し、「彼の反開墾運動と反軍閥的行為やモンゴル人の利益を代表したことを肯定すべきである」¹⁹⁹と主張した。

1962年に出版された『内蒙古革命史』では「ガーダー・メイレン蜂起」は民衆の利益を守ったと肯定され、1960年に出版された『蒙古族文学簡史』と『内蒙古自治区中学教科書(代用本)』(内蒙古自治区中学郷土教材(代用課本))にもガーダー・メイレンを讃える作品が収録された²⁰⁰。

一方、ガーダー・メイレン蜂起の当事者に対するインタビュー調査や専門家による資料収集と整理も1960年から活発になった。最初に整理された「ガーダー・メイレン蜂起」に関する伝記は、エドヘシグ(Edükesig/義都合西格)などによって編集された『ガーダー・メイレンの事績』(嘎達梅林的事迹)である。この資料は、ガーダー・メイレン蜂起軍の生き残りや当事者、出来事に詳しい老人に対するインタビュー調査に基づいて整理・完

¹⁹⁷ 同上、10-11頁。

¹⁹⁸ 同上、12頁。

¹⁹⁹ 同上、14頁。

²⁰⁰ 同上、12頁。

成したものである。その語り手の中でも、ガーダー・メイレン蜂起軍の重要な人物であると同時に、ガーダー・メイレンの妻であったムーダン（牡丹）の語りが重要な証言とされている。ここから、この資料におけるガーダー・メイレンの評価を振り返り、そのポイントを整理してみよう。

まず、ガーダー・メイレンは、正義感が強い人間であり、モンゴル人だけではなく、漢人の民衆にも尊敬される清廉で公正な官吏であった。次に、ガーダー・メイレンは自分の部下に対して、非常に優しい人間であり、全旗の安全のために、自分の安否を顧みない。また、ガーダー・メイレンは、中間層の役人であったが、あくまでも、貧しい人々のために考える文武両道に優れた人間であった。彼は、土地を奪われた人々のため、「開墾反対嘆願団」を組織し、奉天側とダルハン王に直訴した。その際、奉天省の民事庁の庁長陳文雪（省長の代理として会見を開いた）に対して、道理の通らない強弁をするのではなく、「三民主義」や民国の法律を前提に、奉天当局と交渉した。

また、奉天側の強い対応に対して、「開墾反対嘆願団」の一部の代表たち（ガーダー・メイレン以外のほかの中間層の代表たち）は交渉の意志を弱めていったが、ガーダー・メイレンは、逮捕されるまで交渉を続けたという。そして、彼は脱獄し、武装蜂起を組織するが、「脱獄の目的は、絶対に目先の安逸をむさぼるのではなく、塗炭の苦をなめている人々を救い出すことである」²⁰¹と記されている。

武装蜂起を起こしたガーダー・メイレンは、モンゴル人だけではなく、漢人の農民からの援助をも得た。なぜなら、社会の下層には、貧しいモンゴル人だけではなく、漢人もいたからである。「モンゴル人と漢人はそもそも一つの家族に生活しており、利益も一致している。ガーダー・メイレンは、労働者たちの利益のために戦った点では、民族の限界がないのである」²⁰²。

ガーダー・メイレン蜂起軍に参加した人々の多くのは生活に苦しんでいる下層のモンゴル人と漢人であったが、蜂起軍が拡大するにつれて、蜂起軍の成員が複雑になり、一部の馬賊(例えば、紅順、玉山、高山など)も混入してきて、蜂起軍の名誉が傷つくこともあったという。これについては、民国側の新聞でも報道されているが、モンゴル人と漢人の民族的関係は穏やかな関係ではなかった。

²⁰¹ 義都合西格、額爾徳木図、吳津『嘎達梅林的事迹』、24 頁。

²⁰² 同上、25 頁。

この史料で記述されているガーダー・メイレンの輝かしい行動や奇跡に満ちたエピソードは、その後に出版された様々な芸術作品や回想記、伝記など書籍の中にも数多く書き記された。例えば、劉忱らが編集した『ガーダー・メイレン』²⁰³フレルシャ(Kürelša)らが編集した「ホルチン民謡における英雄の伝記」にも同様のエピソードが叙述されている。

一方、1960年の6月、デジド(Dejid/徳吉徳)などの6人の「ガーダー・メイレン蜂起調査グループ」によって収集・整理された「民族英雄ガーダー・メイレンの歴史資料」²⁰⁴は、ガーダー・メイレンの経歴を次のように紹介している。

ガーダー・メイレンの原名は孟業喜、「庶民家庭出身」で農民イデルアルサラン(伊徳阿士冷)の末子として生まれたので、「ガーダー」と呼ばれる。彼は1893年に生まれ、1931年2月に戦死した。元々はホルチン左翼中旗タブンザラン(他本扎欄)とイソングル(九家子屯)で住んでいたが、その後、オレンモド(敖林毛都)に移住した。彼は10歳から19歳までシネアイル(新艾力屯)村で勉強した。〔中略〕休学後、ダルハン王府に入り、1919年軍務メイレン職に就任し、騎兵130名と各ノトク²⁰⁵の保甲兵320名、合計450名の軍隊を管掌するようになった。1929年、ダルハン王が開墾を進行した時、彼は民衆を組織し、開墾を阻止するために、2回請願したが、逮捕され、結局、妻のムーダンの助けを受け、1929年11月13日に脱獄し、開墾作業と外来の侵略に武装蜂起で対抗した²⁰⁶。

ここで、ガーダー・メイレンは「庶民家庭出身」であり、「10歳から19歳までシネアイル村で勉強した」と紹介されているが、前述した『ガーダー・メイレンの事績』ではガーダー・メイレンの家族は「元々地主であったが、アヘン吸飲により、没落したので、貧困に陥り、彼が小さい時から学校に入学せずに、外で勤務しながら、家の生活を維持していた」²⁰⁷と書かれている。

²⁰³ Kürelša, Sergüleg, *Qorčin arad-un daγuu-yin bayatur-un domoy namdar*.

²⁰⁴ 科爾沁左翼中旗档案馆「民族英雄嘎達梅林的歷史材料彙編」1960年7月7日。この資料は、共産党ホルチン左翼中旗委員会によって派遣された甘珠、徳吉徳、巴布扎布、孙月亮、朝克図、実小、邢連栄の6人が1960年の6月22日から7月6日の間、全旗の範囲で、特に、ガーダー・メイレンの故郷の中で、ガーダー・メイレンの戦友、親戚、王府兵士、ムーダン(ガーダー・メイレンの妻、調査当時長春に住んでいた)などの11人に対して、15日のインタビュー調査を行なって整理されたものである。

²⁰⁵ ノトク(努吐克)は地方行政単位を指す。

²⁰⁶ 同上、3頁、括弧内の人名と地名は原文より引用。

²⁰⁷ 義都合西格、額爾徳木図、吳津『嘎達梅林的事迹』、1頁。

これらの伝記や資料は全て中華人民共和国の建国後に整理されたものなので、当時の中国の政治状況が緊密に関わっているのは言うまでもないだろう。1960年に書かれたこの二つの資料は、当時の背景から考えると、中国国内で実施された政治運動、例えば、「四史」の編纂と深く関わっていると思われる。ここでいう「四史」とは、歴代王朝の歴史で中国の正史とされる「二十四史」に対抗する形で唱えられた「家史、村史、公社史、工場史」の総称である²⁰⁸。内モンゴルにおいて、ガーダー・メイレンに関する資料が編纂されたのは、このような政治的背景と関わっていると言える。『ガーダー・メイレンの事績』の前書きでは「彼ら（ガーダー・メイレンのような英雄的人物）に関する資料調査も同じく民衆路線で進め、皆共同でこの光栄な、しかも困難な任務を完成しなければならない」²⁰⁹と書かれているように、この資料が編集されたのは「民衆の歴史を作ろうとする思想政治教育運動」の一事例であろう。つまり、民衆路線に従う知識人達は、蜂起軍の生き残りなどの一般民衆に対してインタビュー調査を行いながら、「封建的な蒙古王公」や、「反動的な軍閥」などの支配階級に対抗した「ガーダー・メイレン像」を作り出し、その出来事をめぐる民族的対立を避けたのである。

ガーダー・メイレンは貧しい人の家で生まれた人間なので、貧しい人々の苦難をよく知っているし、いつも貧しい人々の利益のために考える堅忍不屈で英雄的な人物であった。彼はいつも貧しい人々の側に立っているので、逮捕された後、人々から様々な援助をもらって、脱獄に成功した。また、脱獄したガーダー・メイレンは短い時間で、200人程の農民と遊牧民で形成される「人民義勇隊」を組織し、軍閥とダルハン王の「開墾作業」に対抗した。したがって、今回の対抗運動を「開墾作業」に対抗した「民衆の革命運動」と見なすことができる²¹⁰。

こうした評価は同時代に作られた諸芸術作品の創作や後世代の語りにも着想を与えたと考えられる。

例えば、ムンフボヤン（Mönkebuyan/孟和博彦）による映画脚本『ガーダー・メイレン』（1959年）が描き出すガーダー・メイレンのイメージはこのような手法に基づいたもので

²⁰⁸ 石井弓『記憶としての日中戦争—インタビューによる他者理解の可能性』、38-39頁。石井弓によれば、「四史」の内容は時期によって異なっており、『人民日報』では初期（一九六〇年）は「県史、公社史、公社大隊史、国家機関史」とされており、一九六四から「家史、村史、公社史、工場史」となる。

²⁰⁹ 義都合西格、額爾徳木図、吳津『嘎達梅林の事迹』、前書きより。

²¹⁰ Edükesig, “Tada meyiren-ü bosuly-a-yin tuqai ügülel”, p.59.

ある。作品の冒頭では、ダルハン旗の土地が張作霖に払い下げられることによって、生計が奪われた貧しい人々の様子が紹介される。また、洪水などの自然災害によって山東省からダルハン旗に流浪していく漢人農民の馬雲龍の物語も描かれる。馬はダルハン旗に行く途中で、開墾保護隊の軍人にお金を奪われ、娘も拉致される。困窮に陥った馬は一人のモンゴル人に助けられ、またガーダー・メイレンに面会するが、その後、二人とも逮捕され、投獄される。牢屋の中で苦しめられるガーダー・メイレンは馬を通じて、山東省の農民蜂起のリーダーであった宋景詩²¹¹の物語を聞く。その後、馬雲龍はガーダー・メイレンのパートナーとして蜂起軍に参加していく。

また戦いで勝利を収めた蜂起軍はモンゴル人だけではなく、漢人農民にも熱烈に歓迎される。

射殺された開墾保護軍の遺体はあちらこちらに雑然と倒れている。

民衆（その中にはモンゴル人もいれば、漢人もいる）はガーダー・メイレン蜂起軍を歓迎している。

「遼瀋道遼北県政府」と書かれる掲示板が撃ち落され、無数の馬のひづめがその上を踏んでいく。

ガーダー・メイレンの軍隊が前進している。

前進している。

〔中略〕

村で蜂起軍の兵士たちは喜びにあふれて、戦闘の勝利を祝った。遊牧民たちは、漢人同郷と共に、乳製品を持って彼らにお祝いを言った²¹²。

ここでは「蜂起軍を歓迎する民衆の中にはモンゴル人だけではなく、漢人もいた」と強調され、漢人とモンゴル人の民族的な対立は隠される。このような場面は、前節で紹介した民国側の文献資料で見られる「ガーダー・メイレン像」とは対照的であるため、これは作られた物語であることを推察できる。この作品が出版された時、ガーダー・メイレンに関する伝記などはまだ出版されていない。映画脚本の粗筋からは、陳清漳らの採録した漢

²¹¹ 宋景詩（Song Jingshi、1842-？）山東省堂邑（現在の聊城西）出身、清朝末期における農民蜂起軍のリーダーとして知られている。

²¹² 孟和博彦『ガーダー・メイレン』（映画脚本）内蒙古人民出版社、1959年、47-51頁、括弧の内容は原典での表記である。

語版のウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の影響を多く受けたことが分かる。ムンフボヤンの脚本は結局のところ映画化されなかったため、出版の後、どれほどの読者を獲得したのかは確認できないが、当時の知識人たちによる「ガーダー・メイレン物語」の再構築を示していると考えられる。

上述した映画脚本以外に、9幕からなる晋劇『ガーダー・メイレン』（1959年）は、李賜(Li Ci)によって李悦之の歌劇『ガーダー・メイレン』²¹³（1957年）から改編されたものである。この作品では、ガーダー・メイレンは、庶民の苦情や利益をなによりも優先的に考える清廉で公正な官吏として描かれる。同時に、彼は貧しい人びとに尊敬される「救世主」のイメージからも描かれ、蜂起軍が来るたびに、貧しい人びとに非常に歓待されている。



図 3-1 晋劇『ガーダー・メイレン』（第7幕）より

空を覆う黒雲が風に吹かれ
黄色の太陽が現れた
人びとを救済するガーダーが突然現れ
村いっばいの貧しい人びとは喜ぶ²¹⁴

漢人とモンゴル人については、「モンゴル人と漢人は一つの家族の中で心をつにしている」²¹⁵と強調されるが、歌劇『ガーダー・メイレン』とは対照的に、李賜の作品には、日本帝国主義に対抗した場面が出てこない。

以上のように、中華人民共和国初期において、モンゴルの故郷を守るために戦ったガーダー・メイレンは「反動的な軍閥」や、「封建的な蒙古王公」と戦った「革命者の原型」²¹⁶、「階級闘争のモデル」として位置づけられた。というのも、ガーダー・メイレンは貧しい農民の家で生まれた「庶民階級」に属したからである。彼はダルハン王と軍閥などの旧体制のあらゆる支配階級（特権階級）の「開墾作業」に対抗し、犠牲者になった。つまり、この時代において、「ガーダー・メイレン蜂起」に纏わるモンゴル人と漢人の民族的な対立

²¹³ 歌劇『ガーダー・メイレン』については、拙稿「中国・内モンゴルにおけるガーダー・メイレンの記憶とその変遷」、313-314頁を参照にせよ。

²¹⁴ 李賜『嘎達梅林』（晋劇）中国戏剧出版社、1959年、51頁。

²¹⁵ 同上、47頁。

²¹⁶ 「革命者の原型」については、Anne Hénocowicz, “For the Land of All Mongols: Gada Meiren the Bandit, Hero, and Proto-Revolutionary”に詳しい。

が「記憶の穴」に放り込まれ始めて、軍閥と王公などの支配階級と戦った「階級闘争のモデル」としての「ガーダー・メイレン像」が浮かび上がったのだといえよう。

現代内モンゴルにおけるガーダー・メイレン物語の正史の語りはこの時期から始まっており、ガーダー・メイレンが「階級闘争」の代名詞となったのもこの時期からである。これが、内モンゴルにおけるモンゴル民族の戦争史、内モンゴル革命史だけではなく、内モンゴル文学史でも必ず言及される「ガーダー・メイレンの物語」である。そもそも、モンゴル民族の戦争史においては、ガーダー・メイレンは満蒙開墾に対抗した最初の人物ではない。「ガーダー・メイレン蜂起」が勃発する前の 19 世紀半ばから 20 世紀の初期まで、内モンゴル各地で「蒙地開墾」に対抗した運動は頻繁に起こっていた。本研究で取り上げる「ガーダー・メイレン蜂起」もその一連の反開墾運動の一例に過ぎない。

第 3 節「祖国の裏切り者」としてのガーダー・メイレン

1966 年から始まった文化大革命は内モンゴルの人々に深刻な被害をもたらした。当時の内モンゴル自治区の主席であったウランフをはじめ、多くの少数民族の人たちが「反毛沢東分子」、「反動的人物」、「反革命者」、「祖国の裏切り者」、「反革命的民族分裂主義者」、「歴史反革命分子」などの汚名を着せられ、逮捕された。「反革命者」あるいは、「反革命分子」（モンゴル語で“qubisqal-un esergü бүлүгтен”）というのは社会主義国家で現れる反体制的・反イデオロギー的な人々だという理由で着せられる罪のことである。「文化大革命」時代の内モンゴルにおいては、かつての「対日協力者」だけではなく、知識人たち、地主、牧主、富農はほとんどが批判される対象となった。その実例は内モンゴルの老人の語りや「文化大革命」の経験者の語りの中でもよく登場する。「反革命的」あるいは「反動的」という他者表象を表す言葉は、「ある恐ろしい存在を表す記号」として内モンゴルに流通していた。「反革命的」という言葉は「革命政権を脅かしかねない」存在として、そう名指しされた者は排除・粛清の対象とされた。

前述したように、中華人民共和国初期において、「民衆の革命運動」を指導した「革命者」として評価されてきたガーダー・メイレンが、1966 年の「文化大革命」が始まると、「モンゴルの匪賊」、「祖国の裏切り者」、つまり、「反革命者」と評価されるようになった。この節では、内モンゴル大学の井岡山『文芸戦鼓』編集部によって出版された「ガーダー・メイレン問題調査報告」を取り上げ、「祖国の裏切り者」という「敵」の表象がガーダー・

メイレンに対してどのように用いられ、その言葉によってどのような効果が喚起されたかを文献資料に基づいて考える。



図 3-2 雑誌『文藝戦鼓』(第 8 号) の表紙

1968 年の『文藝戦鼓』第 8 号では、前述した『ガーダー・メイレンの事績』、「民族英雄ガーダー・メイレンの歴史資料」などの伝記や資料と全く違うヴァリエーションの「ガーダー・メイレン問題調査報告」(以下「報告」と略す)が発表された。この「報告」でもガーダー・メイレンの出身から、武装蜂起を起こした原因、そして失敗するまでの出来事が叙述されている。それと同時に、

1966 年の文化大革命までに作られたガーダー・メイレンに関するすべての芸術作品が相次いで批判され、これらの諸「毒草」²¹⁷がウランフを代表する「反革命集団」によっていかに創られたかについて詳しく論じられている。

「報告」によれば、「歴史的人物であるガーダー・メイレンが、内モンゴルの党(中国共産党内モンゴル委員会)内の最大な走資派²¹⁸であるウランフに利用され、彼の党と祖国を裏切った「独立の王国」を造るために、世論を準備する最大な戦功を立てた」²¹⁹という。ガーダー・メイレンの人物と出自について「報告」は次のように紹介している。

彼は旗の最高武官であったため、財産もあれば、権勢もあった。同郷人の話によると、当時、匪賊が多かったので、勢力のない家族は単独で住むことができなかった。しかし、彼の家は、王府から 10 キロ離れていたところに位置し、自宅に塙と砲台が建てられ、家には 30 人の家僕が雇用され、20 方の土地、百頭余りの牛馬と 2 台の馬車を備えていた。この大富豪には非常に威風があり、家には 20 人余りの衛兵がいた。彼は寺の縁日に行く時にも 3、4 人のモーゼル拳銃を持った護衛兵を連れて行った。

ガーダー・メイレン一族は地主の家柄で、彼も勢力を持っていた大富豪であり、封建的統治階級の上層官吏であった。彼の生活は腐敗しており、アヘン吸飲のたしなみがあ

²¹⁷ 「毒草」は、「人民にとって有害な言論や文学作品」の意味で用いられることがあるが、ここでは、ガーダー・メイレンに関する諸芸術作品を指している。

²¹⁸ 中国共産党内の資本主義の道を歩む実権派。文化大革命中、相手を非難するため用いられたという。

²¹⁹ 内モンゴル大学の井岡山『文藝戦鼓』編集部「嘎達梅林問題調査報告」、1 頁、括弧の内容は引用者による。

った。このような高い官位と多額の俸給、栄華を極めたモンゴルの封建階級の上層官吏は、ウランフと彼の手先が宣伝したように、モンゴル人労働者のために、大漢民族主義の張作霖の抑圧に対抗し、家族の離散や肉親の喪失を惜しむことなく、多大な犠牲をいとわなかったのか?全くふざけた話だ²²⁰。

ここで語られるガーダー・メイレンは「庶民家庭出身」ではなく、「勢力を持っていた大富豪であり、栄華を極めたモンゴル封建階級の上層官吏」であった。この評価も「文武両道に優れやさしい人間で清廉で公正な官吏であった」という『ガーダー・メイレンの事績』での記述とは対照的である。

また、ガーダーが蜂起を起こしたのは、絶対に「帝国主義と封建主義に反抗し、多くの労働者の苦難を取り除くためではなく、それはダルハン王府内における支配階級の間内部矛盾と衝突の結果である」と指摘している。

日本帝国主義者は中国への勢力を拡大し、特に張作霖を唆してモンゴルの封建統治者の地盤を徐々に併呑していった。歴史上のホルチン左翼中旗における10回に渡る開墾が彼らの併呑の手段であった。

1920年代から、ダルハン旗の王府内部では、権力闘争により、二つの派が対立していた。一つの派はダルハン王妃、劉××、韓色旺、王詳林などが率いるグループである。もう一つの派はダルハン王、ガーダー・メイレン、舍力格尼瑪及び他の上層人物をリーダーとした。したがって、奉天側が押し進めるこの「蒙地開墾」において、旗側の開墾権を誰が握り、開墾を推進するのかという問題を巡り、王府内における支配階級の間で激しい対立が起こった。結局、この内部闘争において、ガーダー・メイレンが敗北し、逮捕され、最後に脱獄して「蜂起を起こした」という²²¹。

つまり、ガーダー・メイレンは「蒙地開墾」に対抗して「蜂起を起こした」のではなく、「蒙地開墾」の開墾権を得て自分の利益を守るために、「蜂起を起こした」とされるのである。なぜなら、「蒙地開墾」が推し進められる際、開墾権を持つ側が多く利益を得られたからだという。

²²⁰ 同上、2頁。

²²¹ 同上、3-5頁、「××」は原典での表記である、以下は同じ。

ガーダーを煽てる者は、「民衆を率いて蜂起を起こした」彼の輝かしい物語を捏造し、「ガーダーの蜂起軍」は豊かな人びとを殺し、貧しい人びとを援助したと盛んに吹聴した。しかし、事実は全く違うという²²²。「報告」では地元の農民の話も聞かれている。

ホルチン左翼中旗要忙哈公社東章古台大隊の×××（63歳、モンゴル人）によると、「私はガーダーのグループに参加した時、彼の下には300名余りの人がいた。我々皆は紅胡子（匪賊）であった。主に略奪行為を行い、庶民の財産を奪い取り、また、豊かな人びとやガーダーの敵の財産を奪い取っていた。奪ったものがガーダー本人に支配され、部下は関与することができない」（この×××もガーダーの下で砲手として活躍したことがあり、しかも略奪する時、一人を殺したことがある。そのため、聞き取り調査の時、彼の言い方がしどろもどろで、敢えて、自分の匪賊であった経験を言えなかった）。

ホルチン左翼中旗烏力吉図公社好カ営子大隊の仁欽道爾吉（貧農、63歳、王府奴隸）、都冷（貧農、55歳、王府奴隸）、并朗（貧農、69歳、王府奴隸）によると「ガーダーが匪賊になった後、いたるところで略奪行為を行い…彼らは庶民を攻撃した。彼らはまた巴音（大富豪）の銃、馬、食糧を奪い取ったが、他の財産を取らなかった」²²³。

ここで語られているガーダー・メイレンも前節で取り上げた『ガーダー・メイレンの事績』に書かれているような「人民に支持され、敬愛された」蜂起軍のリーダーではなく、「いたるところで略奪行為を行っていた」匪賊であった。彼は「人民の利益を代表しているのではなく、人民の目の敵であり、彼の匪賊部隊も庶民に対して略奪行為を行っていた」²²⁴。この時代におけるガーダー・メイレンの語りは、1930年代の中華民国側の文献資料で書かれている「蒙匪の略奪行為」と一致しており、ガーダー・メイレン記憶の多元性、多声性、複雑性を表している。

「報告」によれば、ガーダー・メイレン蜂起軍の主な人物は、ガーダー・メイレンの家族や親戚（例えば、妻のムーダン、養子のアモレングイなど）の他に、天胡、高山などの大匪賊、「大反国分子」（祖国の裏切り者）であるトクトホの部下であるゴンボセーレン、「大民族分裂主義分子」、内モンゴル人民革命党首のハーフンガーの父、藤海山であった²²⁵。

²²² 同上、5頁。

²²³ 同上、5頁、括弧の内容は原典での表記である。

²²⁴ 同上、27頁。

²²⁵ 同上、5頁。

彼らは、たまたま「反開墾」の名義を挙げて、軍閥によって派遣された開墾官を殺した場合もあるが、実際には、貧しい人々に対して「略奪行為」を行っていた²²⁶。ガーダーが蜂起した後、王府とのつながりを保ち、王府の官吏から銃砲、弾薬と情報をもらっていた。従って、「蜂起」の初期には、十分な勢力を持っており略奪活動も凶暴であった²²⁷。

1930 年末から 1931 年の春にかけ、ガーダーの匪賊たちは包囲され、北西方面への突破を試みた。ホルチン左翼中旗委員会の一人の同志によれば、ガーダー・メイレンはホルチン草原で動きがとれなくなって、トクトホに続いて外モンゴルへの逃避行を企てた。彼は祖国を裏切り、外国への逃亡を企てようとしたという。

〔中略〕中国共産党は全国の各民族の人々を指導し、蒋介石政府に対して命がけの闘争をした時、ガーダーが外国へ逃げようとしたことは、民族の屑であったことを示しており、そこに彼の醜悪な姿が露見したのだ。彼が大漢民族主義の軍閥に対抗したというのは嘘であり、祖国を裏切ったというのが真実だ²²⁸。

また、ガーダー・メイレン戦死に関しては「彼がアヘンと金銭のために、河で溺死した」²²⁹とされている。この説は、他の文献資料や今日の内モンゴルにおけるウリゲルト・ドーナの諸文芸作品の中には描かれていないが、「彼がアヘン吸飲のたしなみを持っていた」という記憶が一部の人びとの間で共有されており、姜兆文の長編小説『ムーダン夫人（牡丹夫人）』（1997 年）でもそのように描かれている。

1961 年、中国は食糧危機を乗り越えるために、中央政府は内モンゴルに「生産兵団」を派遣し、「開墾作業」を行い、食糧の基地を作り上げた。しかし、当時の内モンゴル自治区のウランフ、ハーフンガーなどのモンゴル民族のリーダーたちの反対によって、「開墾作業」が中止された。

〔中略〕

毛主席が指摘したように、「民族の闘争は、つまるところ、階級闘争の問題である。」ウランフの仲間たちが、公然と、毛主席に反対を唱え、ガーダー・メイレンを利用し、

²²⁶ 同上、5 頁。

²²⁷ 同上、6 頁。

²²⁸ 同上、6-8 頁。

²²⁹ 同上、6 頁。

民族内部における階級的対立と闘争を隠そうとしたのである。彼らはいわゆる「大漢民族主義」に対抗した「英雄」であるガーダー・メイレンを煽て上げ、彼らの民族分裂、反党反国の世論を準備する最大な戦功を立てた²³⁰。

こうして、文化大革命期に、ガーダー・メイレンは内モンゴルのウランフを代表する「反革命集団」に利用された反党反国の世論道具に過ぎないと批判され、彼に関する評価は逆転した。ウランフとハーフンガーはそれぞれ「現代の王様」（当代王爷）「現代のガーダー」（当代嘎達）と名づけられ、プロレタリア革命政権を脅かしかねない反動的な人物として批判され、打倒された。ハーフンガーは1963年の長編談話において「開墾はモンゴル人にとって、政治上、大漢民族主義の抑圧であり、経済上、モンゴル人の土地を奪い取ることである」と指摘した。これも当時の中央政府の「開墾政策」に対抗する反動的な言論として批判され、彼の失脚の一因であった。

また、蜂起を起こしたガーダー・メイレンが窮地に陥り、外モンゴルに行こうとしたことは最初のウリゲルト・ドーにも歌われており、今日の内モンゴルの一部のモンゴル人の間でもその記憶が共有されている。しかし、これは文化大革命時代に権力側に「祖国を裏切った民族分裂分子」と批判される「根拠」になったのである。

第4節「階級闘争のモデル」から農耕文明と遊牧文明の対立へ

文化大革命の後、中国の研究者は再びガーダー・メイレンに注目するようになり、民族的文学や芸術分野では、文化大革命期に禁じられていたものがほぼ開放され、ある程度の言論の自由がもたらされた。文化大革命の後、ガーダー・メイレンの生涯にまつわる批評も各新聞記事で紹介され、文化大革命期に蒙った様々なレッテルが剥がされ、「名誉回復」がなされた。1978年、リンジンドルジ(Rinčindorji)とニーマ(nim-a)は『ジリム文芸(jirim-un uran jokiya)』に評論を発表し、思想内容と芸術手法の側面から「文化大革命」時代におけるウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の「民族分裂文芸」、「反動的歌」という評価や解釈を批判した²³¹。

²³⁰ 同上、14頁。

²³¹ Rinčindorji, nim-a, “julyarasi ügei urliy-un čečeg---arad-un dayuu ‘Tada Meiren’-u tuqai sigümji”, *jirim-un uran jokiya*, 1978 on-u 4 duyar quyučay-a, pp.63-72.

また、モンゴル語と漢語によるウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』が再び採録されたと同時に、他の芸術作品も大量に作られた。このような豊かな表象の中でウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』は彼の痕跡を刻み込み、時代の流れにも影響を及ぼしながら歌われてきたのである。多くの人は、誰にも理解できる歌を通じてガーダー・メイレンを知ったが、教科書、新聞記事などのメディアから彼について理解した人も多いだろう。

教科書、通史、新聞記事などは記憶の媒介として一般的によく知られているが、ガーダー・メイレンの記憶を広めた手段はほかにも沢山ある。例えば、ホーリン・ウリゲル、演劇、小説、映画などでは彼の英雄的な物語が繰り返し描き出された。1978年、蘇赫巴魯による長編叙事詩『ガーダー・メイレン』が雑誌『緑野』で発表され、その後、吉林人民ラジオ放送局で放送された。1979年、ス・チンゲル(S. Čingel)による5幕からなる歌劇『ガーダー・メイレン』(モンゴル語)が『ジリム文芸』誌で発表され、ス・ビリグト(S. Biligtü)による現代劇『ガーダー・メイレン』が『現代モンゴル民族演劇選(1947-1985)』(Mongyol ündüsüten-u odo üy-e-yin jücüge-yin sungyumal)に収録された。1983年にはジリム盟(現在の通遼市)のラジオ放送局でウリゲルト・ドーの他に、テムレーホールチの語ったホーリン・ウリゲル『ガーダー・メイレン』(31回、31時間)が放送され、その後も何回も放送され、聴取者の数は100万人を超えた。それと同時に、中央ラジオ放送局、内モンゴルラジオ放送局などの8つの中央と省レベルの放送局でこの番組が中継された²³²という。



図 3-3 通遼市にある「ガーダー・メイレン商店」

また、1982年に、画家の許勇、顧蓮塘、趙奇による連環画『ガーダー・メイレン』が出版され、第3回全国連環画二等賞を受賞した。さらに、ザラガフ(jalyakü/扎拉嘎胡)の長編小説『ガーダー・メイレン』(漢語、1986年)、エネリルト(Eneriltü)の長編小説『ガーダー・メイレン』(モンゴル語、1989年)

と対照的に、姜兆文の長編小説『ムーダン夫人

(牡丹夫人)』(漢語、1997年)とツ・ブヘデレゲル(Č. Bükedelger)の長編小説『ミードン夫人(Midan qatun)』(モンゴル語、2007年)は、ガーダー・メイレンの妻(ムーダン)を主人公として描いた作品である。このように、ウリゲルト・ドー、ホーリン・ウリゲル、演劇など様々な芸術作品を通じて、ガーダー・メイレンが人々の記憶に刻まれ続け

²³² 姜迎春「長編叙事民歌〈嘎達梅林〉文本和歴史記憶研究」、161頁。

た。実際に、文化大革命後の内モンゴル、特にホルチン地域では、ガーダー・メイレンの名は小売店から、広場の名まで、あらゆる場所で用いられている。



図 3-4 保康鎮にある「ガーダー・メイレン記念碑」

2003 年に、陳軍華(Chen Junhua)をリーダーとしたホルチン左翼中旗の民族宗教協会（民族文化協会）は上の政府の許可を得られないまま、募金を通じて保康鎮（旗政府所在地）に「ガーダー・メイレン広場」を建てた。この広場は実際に陳軍華本人の希望で建てたので、除幕式も行わなかったようだ。陳があえて広場を建設した理由は、中

国共産党機関紙『紅旗』（1982 年、第 2 期号）に

掲載されたザンバル(jambal)による「ガーダー・メイレンの像」の写真であった。陳はこの写真を「中央に認められた根拠」として、広場を立てた。当初の計画では、ガーダー・メイレン広場をさらに拡張し、記念博物館も建設する予定であった。広場の中央にガーダー・メイレン騎馬像を建て、周りにはハーフンガー、アスカンなどの革命者の像とホールチなどの有名な民間芸能者の像を建てようとしたものの、実現できなかった。現在の完成した広場は当初の計画より狭く、建てられた記念碑もガーダー・メイレンの騎馬像ではなく、羊飼いのような姿である²³³。

文化大革命後の内モンゴルにおいても、ガーダー・メイレン蜂起は依然として、「封建的な蒙古王公」や「反動的な軍閥」に対抗した武装蜂起と位置付けられている²³⁴。しかし、最近の中国では、「ガーダー・メイレン蜂起」を農耕文明と遊牧文明との衝突と矛盾として位置づける研究²³⁵も発表され、文学作品でもそのように描かれるようになった。

²³³ この「ガーダー・メイレン広場」の建てられた経緯については、2013 年 9 月 22 日、内モンゴル・科爾沁左翼中旗ラジオ放送局におけるトゥムレバガナー先生へのインタビューによる。また、ガーダー・メイレンの戦死地点に建てられた「ガーダー・メイレン記念碑」については、ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』風間書房、2003 年、319–321 頁を参照せよ。

²³⁴ 例えば、卢明輝の「嘎達梅林伝記」や武国驥の「民族英雄嘎達梅林」などの文章でも、ガーダー・メイレン蜂起について論じられており、「ガーダー・メイレンの指導組織した軍閥、ダルハン王に対抗した闘争は、わが国の革命闘争と繋がっている。それは我が国の新民主主義革命の一部である」という。（『中国蒙古史学会大会紀念集刊』中国蒙古史学会偏印、1979 年、571 頁；波・特古斯、王坤「嘎達梅林起義軼事」を参照せよ。）

²³⁵ Darqud Kingyan, *Γada meyiren-ü dayuu-yin sudulul*.

モンゴル人作家の郭雪波によって書かれた小説『青旗・嘎達梅林』（漢語、2011年、図4-4）で描き出される「農業学大試合」や「砂漠から食料を取る」、「荒原へ進軍しよう」²³⁶といった出来事はこの問題関心を反映している。

郭の小説の第13章から第17章では、1980年代の出来事が描かれる。そこで、主人公のバヤルタイ（白爾泰）は友人の王治安の協力を受けて、ホルチン地域でガーダー・メイレンの事跡を調査していく中で、中国科学院蘭州砂漠研究所からホルチン草原に派遣された王光復教授と地元のシルモ（希日模）老人に出会い、彼らの従事していた砂漠防止・改造作業を目撃しながら、シルモ老人からガーダー・メイレンについての話を聞く（シルモ老人は実際にガーダー・メイレン蜂起軍の生き残りの息子であった）。そして彼らは砂漠防止の作業に従事したところで、鷹と狼に追われる兔の様子を目撃する。その後、三人は共に砂嵐の攻撃を受け、バヤルタイと王光復教授の命は救われるが、シルモ老人が砂嵐に巻き込まれてしまう。結局、砂漠に埋れ、氣息奄々になったシルモ老人は先ほどの兔を追っていた狼と鷹とに襲われる「獲物」となるが、鷹の助けを受けた彼は、奇妙にも生き残る。ここまでの描写は確かにこの小説の一番奇妙なところと思われる。実際、この小説では主人公のバヤルタイがガーダー・メイレンの事跡を調査していく個人的な体験ばかりではなく、ガーダー・メイレンの物語も描かれている。バヤルタイの個人的な体験とガーダー・メイレンの物語が絡み合った小説のあらすじになっている。第13章から第17章にかけて、主人公のバヤルタイを含む三人が砂嵐に巻き込まれた出来事が描かれると同時に、ガーダー・メイレン蜂起軍も東北軍に包囲され、その激しい戦闘の場面が描かれていく。

ここまで見てくると、二つの対立の構造が浮かび上がってくる。一つは草原を開墾から守ることであり、遊牧文化の継続のために戦った対抗運動の英雄としてのガーダー・メイレンとモンゴルの土地と牧場を一方的に占領し「蒙地開墾」を推し進めた中華民国側との対立である。もう一つは、「蒙地開墾」によって草原の従来の生態システムが破壊され、砂漠化された後に起こっている砂嵐と、砂漠を防止・改善しようとしている人々との対立である。このような対立の構造はこの小説の全体を貫いている。

また、この五章で描かれる鷹と狼に追われる兔の運命をどのように考えればよいだろうか。もし、兔は長年に渡って開墾されてきた今日の内モンゴルの草原のことを象徴してい

²³⁶ 小説の第11章では、文化大革命時代の内モンゴルのホルチン左翼中旗における開墾の様子が描かれる。小説では、韓布林という地元の共産党幹部は「毛主席の内モンゴルにおける開墾試合（農業学大試合）を、命をかけてまろう」というスローガンを挙げて、草原を次々と開墾してしまう。

るとするならば、狼は草原におけるすべての生命の強敵、あるいは悪い勢力を代表する漢人による一方的な推し進められてきた「蒙地開墾」のことを表しているのではないか。もちろん、これは根拠のない推察に過ぎないが、モンゴル人作家の郭雪波はこのような問題意識、つまり農耕文明と遊牧文明との衝突と矛盾の問題を考えながら、この小説を書いたと思われる。なぜなら、小説の最後で書かかれている「百年にわたる遊牧文明への誤読—ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の歌詞を手がかりに」という跋文では、郭雪波はウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の歌詞の漢訳の誤りを次のように指摘している。

漢語の歌詞では「要説起義的嘎達梅林／是為了蒙古人民的土地」（ガーダー・メイレンが蜂起したのは／モンゴル民衆の土地のためだったのだ）と訳されている。ここでいう「土地」という単語の元々のモンゴル語の歌詞は「ノトグシロイ」（*nutuy siroi*/努図格・希若）であり、その意味は「牧場」、つまり、モンゴル人の「草原」（草地）を指しており、純粹に「土地」という意味ではない。しかし、漢語の「土地」という単語は人びとに馴染まれた農耕用語であり、「ノトグシロイ」が「土地」と訳されることによって、遊牧文明の「草原」という概念は農耕文明の用語（土地＝農地）として誤読されてしまう。ガーダー・メイレン蜂起が勃発した社会経済的背景は遊牧経済であり、その時、ダルハン旗はまだ農耕化されておらず、ガーダー・メイレンが蜂起した目的は放牧用の「草原」は農耕用の「土地」として開墾されることに対抗したことである。また、「土地」と訳されることにより、農地領土という概念をもたらし、「ガーダー・メイレン蜂起」は領土の争いになったようなイメージを与えられ、反開墾運動の本当の意味を曖昧化させ、知らずのうちにこの闘争の深い歴史的意義が変更され、薄らいでしまう。〔中略〕「ガーダー・メイレン蜂起」は「遊牧文明と農耕文明の衝突、対立」によって起こった闘争であり、二つの文化の衝突と二つの生存方式の矛盾である。数千万年前から、「草原」と呼ばれるのは、それは「草」の「原」であり、「農」の「原」ではない。その原因は非常に分かりやすい。草原の植生は1尺に過ぎず、その下は何メートルにわたる砂層である。一旦開墾されると、最初の数年は農地として使われるが、その後、砂層がすき起こされ砂漠化されてしまう。歴史が証明するように、草原

は農耕に適しない。その根本的な原因は北の草原における年平均降水量が 200 ミリぐらいで、草の成長が不足している²³⁷。

ここでは、「遊牧文明と農耕文明の衝突」という議論が持ち出され、1930 年代に勃発した「ガーダー・メイレン蜂起」の歴史的意義は「草原を開墾から守ることである」と論じられている。郭が指摘するように、もしその出来事が狭い意味での「地方分裂」と「蒙匪の騒動」として評価され鎮圧されていなければ、広いホルチン草原が国連によって 400 キロに渡る「ホルチン砂漠」と名づけられることも、北京と東北三省及び東アジア隣国が毎年 10 何回にも及ぶ砂嵐の攻撃を受けることもなかっただろう²³⁸。

このように、郭は従来のガーダー・メイレンにまつわる「封建的王公と反動的軍閥」に對抗した「階級闘争」という記憶を剥ぎ取り、「遊牧文明の生存」のために戦った英雄像を描き出した。

ところで、第 2 章で述べたように、「ガーダー・メイレン蜂起」が勃発した歴史的な背景を見てみると、当時のモンゴル人社会が相当程度漢人を通じて農耕化されていたことも浮かび上がる。この問題は、中国国内でのガーダー・メイレンの表象において、「忘却の穴」に放り込まれた部分である。しかし、蒙地開墾をめぐるモンゴル人と漢人の対立の問題は諸外国での研究においては、「機能的記憶」あるいは「記憶の場」として議論されてきた。外国の研究者のなかでは、「ガーダー・メイレン蜂起」はかなり早い時期から漢人の入植に對抗した運動として注目されていた。例えば、オウエン・ラティモアの書いた『満州に於ける蒙古民族』という著作の中で、1891 年から 1930 に至るまでジリム盟で起きた無数の蒙古蜂起(ガーダー・メイレン蜂起を含む)の原因を漢人植民の入植の結果であると指摘した。

また、札奇斯欽(Jagchid Sechin)は、オウエン・ラティモアとワルター・ハイシッヒ(Walther Heissig)の研究に基づき、19 世紀の半ばから 20 世紀の半ばまでの内モンゴルに起きた「蒙匪」のタイプと性格を分類しながら、「ガーダー・メイレン蜂起」を「満州人と漢人の入植に抵抗した運動」として位置付けている。札奇斯欽によれば、漢人とモンゴル人は数千年の長い歴史を渡って、相互に交錯していたが、仲良く互恵的な平和共存を構築しなかった。

²³⁷ 郭雪波「跋 百年誤読遊牧文明—従民歌『嘎達梅林』歌詞談起」『青旗・嘎達梅林』新星出版社、2011 年(京東読書電子版)、279 頁。

²³⁸ 同上、279 頁。

その関係はほとんど侵略と反侵略、圧迫と反圧迫の相互敵対関係であった。遊牧民の農耕地域への侵略は、経済的に必要で、攻撃と略奪のパターンを持って来るのである。そこで、遊牧民は農耕地域を占領し、帝国を建立した事例もあるが、彼らの基本的な目的は、ある種の経済的な開拓である。彼らのルールおよび開拓の目的は、農耕民のライフスタイルや生計を破壊することにあつたのではない。これに対して、漢人の遊牧地域への拡張は、彼らの強力な国民国家と軍事的勢力によってもたらされ、より永久的な政治的支配と経済的な発展をもたらす可能性があつた。遊牧地域の土地が占領され、開墾された結果、モンゴル地域の文化と社会が根本的に変化し、植民地化される。そして基礎的な経済とライフスタイルが変化することにより、遊牧社会のライフスタイルと生計が破壊される²³⁹。

札奇斯欽のロジックに基づいていえば、「ガーダー・メイレン蜂起」は、やはり、漢人を含む外来人のモンゴル社会への入植に対抗した運動である。ここで、議論の焦点が土地をめぐる遊牧民と農耕人の対立に当てられており、もっと言えば、モンゴル人と漢人の対立、ライフスタイルと生計をめぐる対立の問題である。

小結

本章では、内モンゴルにおける「ガーダー・メイレンの記憶」を、時間的枠を軸に整理し、その表象の変遷を辿った。ガーダー・メイレンは、彼が戦死した後、長年に渡って、ホールチなどのモンゴル人芸能者だけでなく、漢人芸術家の関心を引きつけ、こうして生み出される数多くの作品によって、彼の記憶が語られ、産出され、構築されたのである。彼の活動に関する批評も中国国内に留まらず、国境を越えて伝えられている。

中国において、ガーダー・メイレンの記憶は「時代によって変容し、それは、しばしば矛盾もあるが、相乗効果をもつ力によって引き起こされたのである」²⁴⁰。このように形成されるガーダー・メイレンの記憶は内モンゴルの政治的社会的変動があるなかでは、決して安定したものではなく、深刻な断絶と葛藤を孕みながら「記憶の場」として成り立っていると考えられる。「記憶の場」の複数性と言ってもいい。蒙地開墾による漢人とモンゴル人の民族的関係や、「階級闘争のモデル」としての英雄像、文化大革命による「敵の

²³⁹ Jaqchid sechin, An Interpretation of “Mongol bandits”(Meng-fei), 113-121.

²⁴⁰ ミシェル・ヴィノック「ジャンヌ・ダルク」ピエール・ノラ編、谷川稔監訳『記憶の場』第3巻、岩波書店、2003年、15-16頁。

表象」、農耕経済と遊牧経済の対立の問題などの複数の要素が絡み合っ、多様な「ガーダー・メイレン像」が浮かび上がっている。

ノラの言うように、「記憶の場が存在するのは、その意味が絶えず変わり、その枝が予期できないかたちで茂る中で、変化に対して適応力を持っているからなのである。また、それゆえにこそ記憶の場は情熱を呼ぶのである」²⁴¹。ガーダー・メイレンに対する評価が絶えず変わり、社会的変化に対する適応力を持つのは、彼の記憶を「生み出し、作り上げ、また維持させる意志」が存在するからである。

森村敏己は記憶と忘却をめぐる対立と亀裂について次のように述べる。

記憶に留めるべき過去、忘却すべき過去の選択は必ずしも容易ではない。選択は時として対立や亀裂を招くことになる。むしろ、何の議論も呼ぶことなく平穏に選択がなされるとすれば、それは特定の過去を表象することで諸集団を統合する必要性、あるいは敵対する表象を排除する理由自体が存在しないことになる。表象しようとする「過去」に対抗する「過去」が存在するからこそ、選択が、換言すれば対抗記憶の排除が求められるのである²⁴²。

中華人民共和国初期において、ハーフンガーたちの提議によって建てようとしていた「ガーダー・メイレン記念碑」が「不正当な過去」として禁じられ、「文化大革命」後に再建され「愛国主義教育の基地」となったことは、記憶と忘却を巡る解釈と選択の難しさを表している。また、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』(30行のヴァリエーション)に歌われるガーダー・メイレンの「ハルハ・モンゴル(モンゴル人民共和国)に行き、援助を受けて戻ってくるという場面」は、「文化大革命時代」に「祖国を裏切った民族分裂者」として批判されたが、「文化大革命」後、再び歌われるようになる。ガーダー・メイレンを巡る解釈は権力闘争そのものであり、出来事を「正当な過去」として内モンゴル革命史や文学史の中でどう位置づけられかを問う争いや選択の過程そのものである。

²⁴¹ ピエール・ノラ『記憶の場』第1巻、43頁。

²⁴² 森村敏己「記憶とコメモレイション：その表象機能をめぐって」『歴史学研究』第742号、2000年、185頁。

第4章 内モンゴルにおけるガーダー・メイレン記憶の形成とその変遷

内モンゴルは、今は中華人民共和国の一部であり、過去の戦争や出来事に関するその言説や表象は、中国共産党の文化的ヘゲモニーによって校閲され操作されている²⁴³。「ガーダー・メイレン蜂起」に関する言説や、いわゆる「公式的記憶」も中国の政治的正統性を弁証する役割を与えられ、社会主義リアリズムの理想のもとで人為的に構築されている。例えば、中華人民共和国建国の一年後、つまり1950年に、陳清漳（Chen Qingzhang）らは共産党機関誌『人民文学』（1950年第1巻第3期）にウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』を初めて漢語で発表した。「また1952年『東蒙民歌選』に収録された民歌『ガーダー・メイレン』はこのテキストの初めと終わりの二段ずつを抜き出して中国語訳したもので、現在もっとも広く知られている歌詞の原型となっている」²⁴⁴。その後、「ガーダー・メイレン蜂起」を主題としたウリゲルト・ドーの採録が進むとともに、同一の主題を用いた宣伝活動、歌劇、映画脚本、交響詩、長編小説、映像作品、漫画・連環画などが制作されている。ここで注目したいのは、これらのウリゲルト・ドーやさまざまな芸術作品が作られた背景とガーダー・メイレンの集合的記憶との関わりである。つまり、内モンゴルにおけるガーダー・メイレン記憶の形成と受容において、これらのウリゲルト・ドーや芸術作品がどのような役割を果たしたのかということである。

本章では、記憶論の方法を用いて、社会的表象という観点から内モンゴルにおける「ガーダー・メイレンの記憶」の形成と受容の過程を論じてみたい。取り上げるのは中国共産党が1940年代から実施した「文芸政策」と、1958年の「大躍進運動」に伴って展開された「民謡運動」である。まず、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の採録の経緯と、その他の文芸が創られる過程を整理してみる。また、それらが内モンゴル東部地域だけに共有されていたガーダー・メイレンの記憶を、いかにして全国的な記憶へと昇華し、普遍化したのかについても吟味する。加えて、現代内モンゴルにおいて、映画などの視覚イメージや文芸作品をも分析し、ガーダー・メイレンの「公式的記憶」とその変容を考察したい。

²⁴³ 拙稿「集合的記憶としての「ノモンハン事件」/「ハルハ河戦争」、334頁。

²⁴⁴ 石原邦子「内モンゴル民歌「ガダ・メーリン」に関する一考察—モンゴルの英雄はなぜ中国で歌われたか」、25頁。

第1節 ガーダー・メイレン記憶の形成と受容

1. 中国共産党の文芸政策とガーダー・メイレンの記憶の根源

前述したように、中国の公的歴史叙述の中では、ガーダー・メイレンは、「封建的蒙古王公」と「反動的軍閥」に対抗した「モンゴル民族の英雄」として位置づけられている。そしてその叙述は、中国の共産主義的歴史哲学の強い影響を受けたものであると考えられている²⁴⁵。蔡偉傑によれば、ガーダー・メイレンの物語の採録には、当時の中国共産党による文芸政策が深く関わっていた。

1920 年以来、中国の左翼知識人たちは現実主義プロレタリア文学を提唱し、これらの作品の主題には社会批判と政治的風刺が含まれていた。こうした傾向は中国共産党の文芸政策にも影響を与えた。1942 年、毛沢東が中国共産党の文芸政策の方向性を定め、あらゆる文学は階級的背景を持ち、文芸の創作者はプロレタリア階級及び共産革命を支持すべきであると主張した。ここでいうプロレタリア階級とは、主として労働者、農民、軍人のことを指す。このような思潮の下で、音楽家や文学者の多くが農村へと向かい、民謡や民間説話を収集する作業に従事した。なぜなら、このような作品こそ真のプロレタリア創作だと考えられたからである。ガーダー・メイレンの物語の収集はこのような風潮の産物であった²⁴⁶。

蔡が述べるように、1950 年代から内モンゴルにおいてガーダー・メイレンに関する作品が多数作られたのは、「中国共産党の文芸制作と関わっており」、この時代に作られたウリゲルト・ドーや文芸におけるガーダー・メイレンの表象が、後の時代の記憶の原型となっている。ところが、ここで指摘すべきことは、内モンゴルにおけるガーダー・メイレンの記憶の再構築がこの時代から始まったとはいえ、それはガーダー・メイレンの記憶の根源であるとはいえないという点である。なぜなら、ガーダー・メイレンはモンゴル人の故郷を守るために戦ったローカルな英雄なのであり、彼を民族の英雄として讃える民謡はすでに 1930 年代には作られていたからである。当初は口承伝承であり、内モンゴル東部地域だけで歌われていたが、「1948 年に初めて活字化され、その後内モンゴル全地域に広まるこ

²⁴⁵ 蔡偉傑「從蒙匪、英雄到環保先鋒：嘎達梅林在現代中國的表述與政治」、73 頁。

²⁴⁶ 同上、74 頁。

とになった」²⁴⁷。のちに漢語で訳されたウリゲルト・ドーの歌詞は、元のモンゴル語の歌詞と異なっている点もある。これについて後の節で詳しく論じることにはしたい。

2. 記憶の共有化と一般化²⁴⁸—ウリゲルト・ドーを手がかりとして

現代の内モンゴル社会において、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』は極めて広範囲に知られ歌われている。それは、ガーダー・メイレンという英雄の過去の事績を想起させる機能的な記憶装置あるいは、媒体とも言うべき役割を果たしている。ガーダー・メイレンの記憶はそもそも、ウリゲルト・ドーに由来し、形成され、構築されたものである。前述したように、1930年代においては、ガーダー・メイレン蜂起は、国の政策に反抗した「蒙匪の略奪行為」として弾圧され、民国当局による公的な言説において強く批判されていた。しかし、そのなかでも、ガーダー・メイレンは、1930年代の内モンゴル東部地域のモンゴル人たちに尊敬され、記憶されてきた。この間、モンゴル人たちは、ウリゲルト・ドーを通じて、モンゴル人の故郷を守るために戦った彼の英雄的な戦いを讃えたのである。

ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』について、その著者とそれが作られた時期に関して、先行研究のなかには一致した見解が見あたらないが、前述したヒンガン(2009年)によれば、ガーダー・メイレンの歌は、最初に「ガーダー・メイレン蜂起軍」に従ってホールチ²⁴⁹として活動していたシブン・サーレン(Sibeng Sereng)によって、1930年の7月に作られたという²⁵⁰。当初の「ガーダー・メイレンの歌」は、ガーダー・メイレン及び彼の蜂起を歌い讃えた、短い幾つかの段で構成されたリリカルなものだったが、その後、多くの民間芸能者の手を経て、今日の完全なプロットを持った悲劇的なウリゲルト・ドーになったという²⁵¹。ヒンガンによれば、採録活動は1940年代末から始まっており、現在に至るまでに20以上のヴァリエーションがある。それぞれ、細かい歌詞やプロットが若干異なっているが、基本的な内容は共通している。

²⁴⁷ ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、146頁。

²⁴⁸ この節のタイトルについては、石井弓『記憶としての日中戦争—インタビューによる他者理解の可能性』、第二章における「四史—記憶の共有化の始まり」という議論から借用した。

²⁴⁹ ホールチとは、「実演、演奏、歌うなどの多様な技能を持っている民間芸能者のこと」を指している。次の節で詳しく紹介する。

²⁵⁰ 「ガーダー・メイレンの歌」の作られた年とその著者について、先行研究では異なる形で論じられている。まず、歌の作られた年については、それぞれ1930年の始めごろ(Qarakü [2005年])、1931年(Mang Mören [1990年])、1932年(劉忱 [2004年])という3つの説があり、歌の作者についても、ホールチのシブン・サーレン(Sibeng Sereng)、民間芸能者のボヤンチョグラ(Buyančuyla)、ダルハン旗のホールチのサンジェ(Sanjai)、ハスワチル(Qaswčir)という四つの説がある(Darqud Kingyan, *Gada meyiren-ü dayuu-yin sudulul*, pp.70-76 参照)。

²⁵¹ 同上、p.76。

これらの採録活動は、1940年代末期から60年代の文化大革命までの時期と、それ以降から現在にいたるまでの時期とで、2段階に分けるのが研究史において一般的である（表1と表2を参照）。

(1) テキスト化の第一段階—1940年代末期から60年代の文化大革命まで

繰り返しになるが、「ガーダー・メイレンの歌」は、ホールチのセーレンによって、1930年7月に作られたとされている。しかし、テキスト化されたのは1945年か1946年ごろで、「30行のヴァリエーション」（*Fučin ulayan mörtü eke*/三十行文本）として知られている。このヴァリエーションには、タイトルと採録者の名前がなく、ただ大きい紙に30行の歌詞が記されているため、オ・ショガラー（*Ü.Suyar-a*）によってこの名称がつけられた²⁵²。その一部を具体的に見てみよう。

Arad tümen-ü mini jayay-a medeg
Aru boyda-yin küriyen-dü kürçü üjey-e
As-un küçün mini büridügsen-ü següler
Arad-ıyan dakin tengkeregülüy-e
Qamuy olan-u mini qobi-ni medeg
Qalq-a mongyol-un yaĵar kürçü üjey-e
Qobin-u-mini čidal güicegsen-ü següler
Qariĵu ireged olan-ıyan tengkeregülüy-e²⁵³

人民の運命にまかせよう
北の聖地に行ってみよう
みずからの力が強くなってから
人民をふたたび救済しよう
すべての人民の運命に任せよう
ハルハ、モンゴルに行ってみよう
みずからに力が備わったなら

²⁵² 姜迎春「長編叙事民歌〈嘎達梅林〉文本和歴史記憶研究」、59頁。

²⁵³ Darqud Kingyan, *Γada meyiren-ü dayuu-yin sudulul*, pp.10-11.

戻ってきて人民を救済しよう

ここで描かれているのは、「ガーダー・メイレン蜂起」末期の出来事であると思われる。つまり、蜂起軍が東北軍と戦い、絶体絶命の苦境に陥り、ハルハ・モンゴル（モンゴル人民共和国）に行き、援助を受けて戻ってくるという場面である。この内容はマン・ムレン（Mang Mören/芒・牧林）の採録したウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』（1990 年）を除いて、ほかのヴァリエーションには含まれていない。

次のヴァリエーションは、ドーライ（Durai）という人が 21 歳の時に採録したとされる『ガーダー・メイレンの歌』である。これは 1947 年か 1948 年ごろに採録されたものといわれており、原文は 2 頁半で、25 連、212 行で構成されている²⁵⁴。歌の最後の段は次のようである。

Altan kingyan orgil-deger-e

Bürgüd jigür-iyen delgen-e küi

Öbör mongyol-un orun-dayan

Γada Meiren mori-ban dabkiyulun-a²⁵⁵

黄金色の興安嶺の上に

鷹が翼を広げ飛び回る

内モンゴル地域では

ガーダー・メイレンが馬を疾走させる

その後、1952 年に出版された『東蒙民歌選』にも陳清漳らの手によるウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』（『人民文学』、1950 年第 1 巻第 3 期）の一部が収録されており、1960 年に出版された『内モンゴル歌謡』（漢語）にもその一部が転載された²⁵⁶。

石原邦子の述べるように、「この一連の収集整理及び宣伝活動は漢族がモンゴル族に取材するという形を取っており、漢族が中心となり中国語によって発表されたという点でモ

²⁵⁴ 姜迎春「長編叙事民歌〈嘎達梅林〉文本和歴史記憶研究」、59 頁。

²⁵⁵ Ü.Suγar-a “Durasγa-un kösiy-e ---Γada meyiren-u dayuu nuγud-i tanilčayulqu-ni” *Ör-yin čolmun*, 1981 on-u 3duγar quyučay-a.

²⁵⁶ Darqud Kingyan, *Γada meyiren-ü dayuu-yin sudulul*, p.11.

ンゴル族から外に向けて民謡ガーダー・メイレンを紹介したものといえる」²⁵⁷。そのため、モンゴル語の民謡の歌詞が漢語で翻訳される際には、オリジナルのモンゴルのな特徴が、変化、喪失してしまう。例えば、先に示した最初のモンゴル語のヴァリエーション中の「ハルハ・モンゴルに行く」という内容は、陳清漳らによる「ガーダー・メイレンの歌」には反映されていない。また、オリジナルの2つのヴァリエーションの冒頭、

urdu жүг-еңе нисүгед ирекү

ulayan җалауun-u җулҗау-a күи

urdu yeke Siramören-iyen

Daγariqu-ügei-ber γaruniy-a күи²⁵⁸

(南から飛んでくる

雁のひなよ

南のシラムレン河に

舞い降りずに飛び立てようか)

であるのに対し、陳清漳らによって採録された漢語版は

「從南邊飛來的小鴻雁

不落長江不飛起

(南から飛んでくる雁のひなよ

長江河に舞い降りずに飛び立てようか)

と訳されている。モンゴル語の「シラムレン河」は、ガーダー・メイレンの故郷である内モンゴル・ホルチン左翼中旗に実在する河で、彼がまさに戦死した場所でもある²⁵⁹のに

²⁵⁷ 石原邦子「内モンゴル民歌「ガダ・メーリン」についての一考察—モンゴル英雄はなぜ中国で歌われたか」、25頁。

²⁵⁸ Darqud Kingyan, *Γada meγiren-ü daγuu-yin sudulul*, p.11.

²⁵⁹ ガーダー・メイレンの戦死した場所に流れていた河について、史料では、老哈河、遼河、ウルジモレン河、新開河など異なる形で記されているが、ガーダー・メイレンの故郷であるホルチン左翼中旗では、ウルジモレン河（シラムレン河の支流）で戦死したといわれている。

対して、漢語訳における「長江」は、中国南部の内モンゴルとはまったく関係がない河川である²⁶⁰。

1940年代の最初のモンゴル語のヴァリエーションについて、それがどのような背景と事情の下で採録されるに至ったかは判っていないが、後の陳清漳らの採録活動は、あくまでも当時の中国共産党の文芸政策に即したものであり、政治的背景と関わっていた。つまり、1949年に建国された中華人民共和国は、『人民文学』というメディアを通じて、「ガーダー・メイレンの歌」を宣伝し、「ガーダー・メイレン蜂起」を「反動的軍閥」や「封建的王公」と戦ったという「階級闘争のモデル」として利用しようとしていたのだ。

こうした背景下で、ガーダー・メイレンを素材にした他の芸術作品もさまざまな形で作られた。例えば、李悦之（Li Yuezhi）が創作した歌劇『ガーダー・メイレン』（1955年）は中央歌劇院（北京）で上演され、ムンフボヤン（Mönkebuyan/孟和博彦）による映画脚本『ガーダー・メイレン』（1959年）、辛戸光（XinHuguang）による交響詩『ガーダー・メイレン』（1962年）も相次いで作られた。

また、この時期に、モンゴル人自身によってモンゴル語でウリゲルト・ドーを採録する活動も始まった。例えば、民謡運動に先駆け、ホールチ双宝（Shuang Bao）によって歌われていたウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』は、1952年にテキスト化された。チムドドルジ（Čimeddorji）、ボムバー（Bumba）、マグセルジャブ（Mayserjab）などによって採録されたウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』も、それぞれ1958年と1959年にテキスト化された。（表4-1）

これらの作品が創られ、上演されたことによって、内モンゴル東部地域でしか共有されていなかったローカルな英雄ガーダー・メイレン像が、内モンゴル全域、さらに中国全土の広範な地域で共有されるようになった。加えて、ガーダー・メイレンの記憶の共有をさらに促進した要因として、『ガーダー・メイレンの事跡』（嘎達梅林的事迹）と「ガーダー・メイレンの歴史資料集」（民族英雄嘎達梅林的歷史材料彙編）などの伝記や歴史資料集が1950年代末から1960年代にかけて内モンゴルで編纂されたことを挙げよう。これらの史料は、ガーダー・メイレン蜂起軍の生き残りや、当時のことを知る老人らに対する聞き取り調査によるものである。

²⁶⁰ このようなモンゴル語と漢語の歌詞の違いについて、蔡偉傑も論じているが、彼が1978年に出版されたマン・ムレン、サイシャールトの整理したモンゴル語のテキストと2001年出版された『中国少数民族伝統音楽』に収録された漢語版の歌詞について比較している（蔡偉傑「從蒙匪、英雄到環保先鋒：嘎達梅林在現代中國的表述與政治」、73頁。）。

表 4-1 文化大革命までに採録・出版されたウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』のヴァリエーション

261

	採録・編集者	ヴァリエーション（言語）	収録・所蔵された場所	特徴	採録・出版年
1		三十行、（モンゴル語）	内モンゴル社会科学院文学研究所	22 頁、152 首で 1216 行の詩と 13 段 ²⁶² のせりふで構成	1945、1946 年ごろ採録
2	ドーライ採録	「ガーダー・メイレンの歌」（モンゴル語）	内モンゴル社会科学院文学研究所	25 首で 212 行の詩で構成（内容は一貫性が欠き、ムーダンが娘を殺した後、ガーダー・メイレンを救出するまでの出来事が歌われる）	1947-1948 年採録
3	陳清漳等共訳	「嘎達梅林」（漢語）	『人民文学』（一卷三期）	550 行の詩と 26 段のせりふで構成	1948-1949 採録・翻訳、1950 年出版
4	安波、徐直等採録	「嘎達梅林」（漢語）	『東蒙民歌選』	陳清漳などの共訳した原文の始まりと終わりの 16 行の詩で構成され、安波の記録した「嘎達梅林」の楽譜が附いている	1952 年
5	ホールチの双宝	ガーダー・メイレン（モンゴル語）	原稿は芒牧林が保管	16 頁、72 首で 516 行の詩と 22 段のせりふで構成	1952 年
6	チムドルジ採録	ガーダー・メイレン（モンゴル語）	手書き原稿は内モンゴル大学モンゴ	120 首で 960 行の詩と 16 段のせりふで構成され、	1958 年

²⁶¹ 文姜迎春「長編叙事民歌〈嘎達梅林〉文本和歴史記憶研究」、58-61 頁、192-193 頁を参照に作成。ここで紙幅の関係で一部のヴァリエーションの特徴をまとめた。

²⁶² この「段」は、せりふの一段分を意味する漢語の単位である。

		語)	ル言語学部で保存	語り者の名前と採録された地域と時期は不明	
7	ボムバー、 エルデムト 採録	ガーダー・メイ レン (モンゴル 語)	内モンゴル社会科 学院文学研究所	6 頁、56 首で 448 行の詩 で構成	1958 年
8	マグセルジ ャブ、ウユン バト等採録	ガーダー・メイ レン (モンゴル 語)	芒牧林	120 首で 960 行の詩と 16 段 のせりふで構成	1959 年
9		ガーダー・メイ レン (モンゴル 語)	『内蒙古民歌選』	2 首で 8 行の詩で構成	1960 年
1 0		「嘎達梅林」(漢 語)	『内蒙古歌謡』	「大躍進政策」と「新民 謡運動」の背景で、出版 されたテキスト、10 首で 40 行の詩で構成	1958 年

(2) 民謡を用いた宣伝政策—民謡運動にみる記憶表象と受容²⁶³

周知の通り、中国においては、1958 年から「農業・工業の大増産」を目指した「大躍進」政策が実施された。それと連動して、文化、芸術面では「一九五八年の民謡運動」と呼ばれる運動が展開された²⁶⁴。それは 1958 年 4 月 9 日に共産党機関紙『人民日報』に掲載された「民謡は社会主義の理念を各民族各人民に意識させるのに有効である」から、「今すぐ組織して民謡をあつめよう」という記事に端を発したものである。この後、民謡収集の一大ブームが巻き起こり、新聞各紙はこぞって民謡の実例を採り上げ、文芸紙は詩歌の特集を組み、全国の出版社は膨大な量の民謡集を出版した²⁶⁵。ただし、この運動で取り上げられた民謡とは、「大躍進」の趣意に即して創作された「新民謡」であった²⁶⁶。

²⁶³ この節のタイトルについては、石井弓『記憶としての日中戦争—インタビューによる他者理解の可能性』のうち、第二章と第四章における「政治運動にみる記憶表象と受容」、「歌謡を用いた宣伝政策」というタイトルから借用した。

²⁶⁴ 石原邦子「内モンゴル民歌「ガダ・メーリン」についての一考察—モンゴル英雄はなぜ中国で歌われたか」、30 頁。

²⁶⁵ 同上、30 頁。

²⁶⁶ 同上、30 頁。

この「民謡運動」は、「ガーダー・メイレンの記憶」の共有化と一般化にどのような影響をあたえたのだろうか。「1958年、中国全土各省では、多くの“詩歌県”、“詩歌郷”、“詩歌社”が現れ、一部の、詩歌郷の壁やドアの上、木や岩石の上、電柱から商店のカウンターに至るまで、詩と歌が溢れた」²⁶⁷。1958年の新民謡運動は全国各地で「詩壇や、頌詩台、民謡フォーラムなどの詩歌の世界を開拓し、民謡演芸会、詩歌鑑賞会などの多種多様な活動方式で展開された」²⁶⁸。民衆による詩歌鑑賞会は、1958年の民衆の詩歌創作運動の中で、もっとも人気がある活動方式であり、内モンゴル各地でも実施された。その中で、もっとも規模が大きく、もっとも大きな影響を与えたものは、内モンゴル自治区の「民謡百万鑑賞・賞賛月間（百万民歌展覽歌唱運動月）」である。11月16日から12月15日まで行われたこの運動月間中、内モンゴル各地から合計379万余の民謡が採集され、また、多くの盟、旗、県、市において、さまざまな小規模民謡鑑賞会や演芸会が催された²⁶⁹。

1958年に出版された『内蒙古民謡』には、陳清漳らが1950年の『人民文学』で発表したウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の一部が転載されている。この民謡集は、まさに「大躍進政策」と「新民謡運動」を背景として、中国民間文芸研究会によって、各地の優秀な民謡を採集して出版されたもので、やがて中国全土に普及した²⁷⁰（表1）。

こうして、1930年の「ガーダー・メイレン蜂起軍」の中で生まれたウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』は、最初は蜂起軍の当事者や内モンゴル東部地域の人びとの間の限定された集合的記憶であったにすぎないものが、1940年代末期にテキスト化され、さらに中国共産党の文芸政策や1958年の「民謡運動」の影響を受けて、内モンゴル全域に、ひいては中国全土に普及したのであった。しかし、この時代に形成された「記憶」はあくまでも「ガーダー・メイレン蜂起軍」の生き残りたち個々人の体験や、ウリゲルト・ドーによって形成された断片化された記憶であり、これはまだ集合的記憶形成の初期段階であったといえる。なぜなら、この時代に作られた芸術作品やウリゲルト・ドー（最初の2つのヴァリエーションを除く）は、当時の政治的意味に色濃く染めあげられた「パブリック・メモリー」という性格をもったものであり、今日の内モンゴル地域で形成されている「ガーダー・メイレンの記憶」のような「ヴァナキュラー・メモリー」とは同一ではないからであ

²⁶⁷ 天鷹『一九五八年中国民歌運動』上海文芸出版社、1978年、10頁。

²⁶⁸ 同上、28-29頁。

²⁶⁹ 同上、16-21頁。

²⁷⁰ 姜迎春「長編叙事民歌〈嘎達梅林〉文本和歴史記憶研究」、61頁。

る。そこで、次の節では、文化大革命から現在に至るまでの間にウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』が整理されつつ、その記憶が一般化、多様化していく過程をたどりたい。

(3) テキスト化の第二段階—文化大革命終結から現在まで

文化大革命を経て、1970年代の末から、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の採録が再開された。1978年の改革開放政策の開始によって、「民族的」文学や芸術分野に関しても、文革時代に禁じられていたものがほとんど開放され、ある程度の言論の自由がもたらされた。ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』は、漢語だけでなく、モンゴル語での採録、刊行も盛んに行われるようになった。包玉林（Bao Yulin）の採録したウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』が、『ウネル・チェチェグ（Önir ceceg）』紙の1978年の第3期に発表された後、ドンロブジャムス（Dungrubjamsü）らの『ガーダー・メイレンの民謡集』や、マン・ムレン、サイシャールトのウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』などがそれぞれ出版された（表4-2）。

表4-2 文化大革命後に採録・出版されたウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』のヴァリエーション

271

	採録・編集者	ヴァリエーション（言語）	発表・収録、出版された場所	特徴	出版年
1	芒牧林、赛西雅拉図採録	ガーダー・メイレン（モンゴル語）	内蒙古人民出版社	本文(15章)と終わりの部分で構成、327首で2416行の詩と74段のせりふ	1964年採録、1978年出版
2	陳清漳、塞西、芒牧林採録	「嘎達梅林」（漢語）	上海文艺出版社出版、最初は雑誌『草原』1978年7、8号に発表	始めと本文(13章)で、内容は基本的には、芒牧林、赛喜雅拉図の整理した上のモンゴル語のテキストの漢語訳	1962年採録、1979年出版
3	包玉林採録	ガーダー・メイレン（モンゴル語）	雑誌『内蒙古文芸』1978年3号	147首で1176行の詩と38段のせりふ	1956年から1966年の間

²⁷¹ 同上論文 62-67 頁、194-206 頁を参照して作成。ここで紙幅の関係で一部のヴァリエーションの特徴をまとめた。

		語)			で採録、1978 年 出版
4	道尼日布扎 木蘇等採録	ガーダー・メイ レン (モンゴル 語)	吉林人民出版社	この中で五つのヴァリエ ーションが収録されてい る	1979 年
5	仁钦道爾基、 道尼日布扎 木蘇、丁守璞 編集	ガーダー・メイ レン (モンゴル 語)	『蒙古民歌一千 首』	36 首で288行の詩と11段 のせりふ	1979 年
6	于興安編集	「ガーダー・メ イレンの歌」(モ ンゴル語)	『蒙古民歌』	本文は包玉林の整理した テキストと同じ	1979 年
7	烏苏古拉な ど採録	「嘎達梅林」(漢 語)	『中国少数民族文 学作品選』	84 首で 336 行の詩と 14 段のせりふ	1981 年
8	扎木蘇採録	「ガーダー・メ イレンの歌」(モ ンゴル語)	『叙事歌』 内蒙古人民出版社	114首で 456 行の詩と32 段のせりふ	1982 年
9	色道爾吉な ど採録	「ガーダー・メ イレンの歌」(モ ンゴル語)	『蒙古族历代文学 作品選』	110 首で 440 行の詩と 13 段のせりふ	1982 年
10		「ガーダー・メ イレンの歌」(モ ンゴル語)	『民歌—民间歌手 查干巴拉演唱集』 (上)	43首で172行の詩と13段 のせりふ	1984 年
11	斯琴高娃、鳥 力吉昌等採 録	「ガーダー・メ イレンの歌」(モ ンゴル語)	『科尔沁民歌』 (一)	178首で712行の詩と80段 のせりふ	1987 年
12	芒牧林採録	「ガーダー・メ イレンの歌」(モ ンゴル語)	民族出版社出版	682首で 5452行の詩と 192段のせりふで構成	1990 年

13	諾敏編訳	「嘎達梅林」(漢語)	『蒙古族民歌選』内蒙古教育出版社出版	安波、徐直等『東蒙民歌選』の一部	1991 年
14	道尼日布扎 木蘇採録	「ガーダー・メイレンの歌」(モンゴル語)	『蒙古民歌集』(一)	4首で16行の詩で構成	1991 年

表 4-2 に掲載したヴァリエーションのすべてはテキスト化されたものであり、モンゴル語で採録されているものが多い。これらのヴァリエーションの一部は、文学研究者や学者たちによって、文化大革命以前に採録、出版されたテキストに基づき、必要に応じて、ある程度の現地調査を行った上で、再編集して公開したものである。しかし、前の節でも述べたように、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』は最初にホールチによって作られ、歌われてきた口承文芸である。その段階では、すべてのホールチによって伝えられていた口承文芸としての『ガーダー・メイレン』が、洩れなくテキスト化されたわけではない。例えば、ホールチのドルジ (Dorji) の 1982 年の口演、チャガンバラス (Čayanbars) の 1983 年の口演、それにイダンジャブ (Yidanjab) の 2008 年の口演などが録音テープの形で残されているが、けっしてテキスト化はされていない。口承文芸としてのウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』がテキスト化されることによる変化は、よく論じられるところである。特に、モンゴル語が漢語に訳され、テキスト化される際に、ホールチの歌う時の文脈や、感情的なもの、話し言葉がすべて省略され、大きく変化してしまう²⁷²。

3. 出来事の再記憶化²⁷³—民間芸能者ホールチの役割

(1) 記憶の担い手としてのホールチ

前節で述べたように、1950 年代からガーダー・メイレンのウリゲルト・ドー採録が始まり、『ガーダー・メイレンの事跡』などが編纂され、文芸作品が多数作られたことは、社会主義理念を人びとに意識させ、階級教育を行うためであった。「この目的のためには、過去を記録しておくだけではなく、テキスト化されたその内容を人びとに伝え、記憶させる必

²⁷² 姜迎春「長編叙事民歌〈嘎達梅林〉文本和歴史記憶研究」、67-82 頁。

²⁷³ この節のタイトルについては、石井弓『記憶としての日中戦争—インタビューによる他者理解の可能性』のうち、第二章における「歴史を再記憶化する」というタイトルから借用した。

要があった」²⁷⁴。特に内モンゴルのような識字率の低い遊牧と農耕を生業とする地域において、ガーダー・メイレンの記憶がどのように伝えられ、共有され、記憶されたのかは重要である。

ここでは、ガーダー・メイレンの記憶は民間の芸能者であるホールチによって、歌として歌われ、語られることによる記憶化を前提としていたと考えられる。「ホールチとは伴奏することも、歌うこともできる多様な技能を持っている民間の芸能者であり、無形文化遺産の伝承者でもある」²⁷⁵。ホールチは特に、識字率の低かった内モンゴルの半遊牧、半農村地域において、人びとの精神的な関心を引く存在であった。彼らは記憶を伝承し歴史の語り手として、各地の村落や牧場を回って、ホーリン・ウリゲルやホルボー²⁷⁶などを語ったり、ウリゲルト・ドーを歌ったり、歴史物語を語ったりしていた。彼らが語る内容は中国の三国史、隋や唐時代の物語から、チンギス・ハンの物語や日中戦争、内モンゴルの自治運動まで実に様々で、史実に基づいたものも、創作によるものもある。しかし、彼らの優れた記憶力と生き生きとした言葉遣いは、聞き手の興味を引き、かれらの人格を陶冶する教育的効果があった。

今日の内モンゴル東部地域では、ホルチン方言で作られた次のような言葉が流布している。

Гулir buday-a idekü-ügei-dü qamiy-a-ügei

Гuniy-a quyurči-yin üligер-i sonosqu-ügei bol bolqu-ügei

Da Mi buday-a idekü-ügei-dü qamiy-a-ügei

“Da Lüng taizi”-yin üligер-i sonosqu-ügei bol bolqu-ügei²⁷⁷

小麦粉で作られた食品より

ゴニガ（Гuniy-a）ホールチのほうが大事だ

米より

『ダーレン皇太子』のほうが大事だ

²⁷⁴ 石井弓『記憶としての日中戦争—インタビューによる他者理解の可能性』、52 頁。

²⁷⁵ Čoytu, Erkimbayar, *Quyurčid-un aman teüke*, Öbör mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy-a, 2012 on, p.4.

²⁷⁶ ホルボーとは、曲を持ち、即興的に創作され、多くの場合はホルの伴奏で語る一つの韻文作品である（包金剛「内モンゴル東部地区特有の口承文芸の研究：ホールチとホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドー」、115 頁。）。

²⁷⁷ Čoytu, Erkimbayar, *Quyurčid-un aman teüke*, p.50.

ゴニガとは、過去の有名なホールチの名前で、『ダールン皇太子』は、彼の語ったホーリン・ウリゲルの外題である。経済的に貧しかったかつての内モンゴル東部地域では、小麦粉を使用した食品や米は、正月にしか食べられない贅沢なものであった。当時の人びとが、ホールチやホーリン・ウリゲルを如何に重んじていたかが推し量れるだろう。また、「Üliger-ün cay-tu üker usulaqu-ügei（ウリゲルが放送される時、牛に水を飲まさせない）」といったことわざや、「Bürinbaya-r-tai Radio abuy-a（布林バヤル（Bürinbaya）²⁷⁸が附いているラジオを買いたい）」といった言葉が人びとの間に伝わっていることから、ホールチやホーリン・ウリゲルが内モンゴルの人びとの日常生活において、いかに重要な位置を占め、欠かせないものであったかをうかがい知ることが出来る。

中華人民共和国の建国以前、ホールチたちは、村々を回り、また、王公、僧侶たちに招かれて、ウリゲルを語っていた。時には、寺でひと月に渡って、ウリゲルを語る場合もあった。（中略）中華人民共和国の建国以後、民間芸能者協会が組織され、「ウリゲルのゲル（ウリゲルの館）」が建てられた。具体的には、1950年11月、内モンゴル民間芸能者協会が組織された。1957年8月、内モンゴル自治区政府が、資金を出して、フフホト、ウランホト、通遼などの内モンゴル各地に合計18軒の「ウリゲルのゲル」を建てて、パージェ（Pajai）、モーウヒン（Muuükin）、ゴニガといった有名なホールチたちを招き、ホーリン・ウリゲルを語らせた²⁷⁹。

このように、当時の内モンゴルの人びとが仕事の後、「ウリゲルのゲル」に集まってウリゲルを聞くことによって、歴史物語を記憶し、歴史物語の主人公の運命や意志に鼓舞された。ホールチは、こうして集合的記憶の形成に大きな役割を果たしたのだ。

(2) 出来事の再記憶化：ホールチの活動・役割

ホールチたちがホーリン・ウリゲルやホルボー、ウリゲルト・ドーを語り、歌う時には、それぞれ自分の風格や流儀を持っていた。彼らの語るホーリン・ウリゲルやホルボーなど

²⁷⁸ ブリンバヤル（Bürinbaya）は内モンゴルの有名なホールチであり、彼の語ったホーリン・ウリゲルは内モンゴルの多くの人びとに受け入れられている。ここでは、「布林バヤルが附いているラジオを買いたい」というのはふざけた地口のひとつであるが、布林バヤルというホールチがいかに人びとに受け入れ、歓迎されていたかを表している。

²⁷⁹ Чойту, Erkimbaya, *Quyurčid-un aman teüke*, pp.38-39.

が、聴衆の興味を引くかどうかは、その語っている内容だけでなく、彼らの表現能力とも関わっていたからである。

昔はホールチの社会的地位は大変低かった。〔中略〕（彼らは）ほとんどが貧乏な家庭に生まれ、その中には体の不自由な人もすくなくなかった。〔中略〕1947年5月1日、内モンゴル自治区が成立すると、ホールチの地位には根本的な変化が起こった。あるホールチは旗や盟や自治区の歌舞団に入り、一部のホールチは旗や盟や自治区などに設立されたホーリン・ウリゲルを語る「ウリゲルの館」の専属のホールチになり、また、一部のホールチは盟や自治区のラジオ放送局に招かれ、ホーリン・ウリゲルを語るようになった²⁸⁰。

中華人民共和国の建国以降、ホールチたちは共産党の宣伝活動に参加させられることがあった。ホールチのパージェは『二匹の子羊の物語』(Tejigebüri qoyar yisige-yin yariy-a)というホルボーを語って、人民公社を歌い讃たえ、共産党政府の宣伝活動に貢献した。パージェとモーウヒンの二人は、ホールチの代表として選ばれ、毛沢東と会見し、集合写真も撮っていた。こうして、ホールチたちの社会的地位が高められたが、文化大革命期には、今度は多くのホールチが「内モンゴル人民革命党党员」であったという冤罪によって、さまざまな迫害を被った。もちろん、その時期にはホーリン・ウリゲルを語ることも禁じられた²⁸¹。

「文化大革命」が終結した1970年代末から、特に80年代以降には内モンゴル自治区ラジオ局や、東部地域における各地のテレビ局がホールチの口演を放送するようになり、それは現在も続いている²⁸²。

さて、それでは、ガーダー・メイレンの記憶は、ホールチを通じて、どのように伝えられ、形成されたのだろうか。ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』は実在の人物を題材としたモンゴル文芸の一つである。一方、モンゴル文化と漢文化の両者の影響下で形成

²⁸⁰ 包金剛「内モンゴル東部地区特有の口承文芸の研究：ホールチとホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドー」、34-36頁、括弧の内容は引用者による。

²⁸¹ Čoytu, Erkimbayar, *Quyurčid-un aman teüke*, pp.42-43.

²⁸² 包金剛「内モンゴル東部地区特有の口承文芸の研究：ホールチとホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドー」、38頁。

されたホーリン・ウリゲルも、モンゴル人の間に広く受け入れた。ガーダー・メイレンのウリゲルト・ドーは民謡としてホールチによって歌われるばかりではなく、ホーリン・ウリゲルの形でも語られる。

1980 年、ガーダー・メイレンの物語がホールチのテムレー (Temür-e) によって、「ホーリン・ウリゲル」として語られ、録音された。トゥムレーによれば、ガーダー・メイレンの物語を語った当時、「ガーダー・メイレン蜂起軍」の当事者などへの調査の類はまったくなかった。そこで、内モンゴル民族大学のドノロブジャムスのテキストに、バオ・ナムジル (元々はウンドゥル王府の役人であった) のガーダー・メイレンに関する知識や、ゴンボ・ダ (Gumbu da/官布・達)²⁸³に関する出来事を参考にし、適当に取り入れて、完成させている²⁸⁴。また、ダルハン旗を讃えた箇所や、ガーダー・メイレンの戦死を描いた箇所以外は、文言や曲などの全てをテムレー自身が創った²⁸⁵。このように、ガーダー・メイレンの「ホーリン・ウリゲル」は、客観的な史実そのものではなく、ホールチ自身の想像力によって語り直されている。つまり、ホールチが「ガーダー・メイレン蜂起」という集団の出来事を整理し、「ウリゲルを語る」という表現形式によって、歴史的出来事としての「ガーダー・メイレン蜂起」の諸相を再構築しているのである。

ホールチのトゥムレーが語ったガーダー・メイレンのホーリン・ウリゲルは内モンゴルの赤峰市、フロンボイルなどのラジオ局で放送され、通遼市では、合計 4 回放送された²⁸⁶。

第 2 節 ガーダー・メイレンの記憶の変容

1. 「ガーダー・メイレン蜂起」の「公式的記憶」

前述したように、「ガーダー・メイレン蜂起」の終結から現在に至るまで、中国では、関連する記事が新聞や雑誌などに掲載され、また、文学作品、映画などの映像作品を通じて、表現されてきた。マス・メディアと歴史的記憶について、余霞は次のように指摘している。マス・メディアは歴史的記憶を構築する重要な手段として、3 つのパターンを持っている。1 つ目は、出来事の証人 (目撃者) としての歴史報道。2 つ目は、歴史の再現 (再

²⁸³ ゴンボ (官布) は人名で、ダ (達) はノトグ (努図克: 行政単位) の首長、地元の長官、つまり、官職をさしている。彼は元々ホルチン左翼後旗の地元の長官であったが、奸商と官憲に迫られたため、所属部下は連れてガーダー・メイレン蜂起軍に身を寄せた。

²⁸⁴ 2013 年 9 月 15 日、内モンゴル・ホルチン右翼中旗の南バヤントハイ・ガチャにおけるテムレーホールチへのインタビューによる。

²⁸⁵ Çoçtu, Erkimbayar, *Qıyırçid-un aman teüke*, pp.63-69.

²⁸⁶ 同上、p. 64

生産)。3つ目は、歴史の構築である²⁸⁷。ここで言われている1つ目のパターンは、歴史的出来事が勃発、継続中のうちにそれを報じるということである。例えば、「ガーダー・メイレン蜂起」の際、当時の中国国民政府の新聞である『蒙蔵週報』の第65号、66号、75号と、「駐北平（北京）モンゴル人学生会」によって出版されていた雑誌『蒙古』の第6号、7号には、「ガーダー・メイレン蜂起」についての報道が見られる。2つ目のパターンは、主として事件後、それに関する経験者や証人の語りや叙述を通じて出来事を再現することである。例えば、孟沢民の「私の叔父ガーダー・メイレンはダルハン旗の孟氏第四代メイレン」『通遼日報』（2003年5月17日）といった記事は、このパターンに属する。3つ目のパターンは、芸術家の想像力によって、歴史的記憶を構築することである²⁸⁸。ウリゲルト・ドーや、ホーリン・ウリゲル、映画などはこのパターンに当てはまる。

すでに確認したように、中華人民共和国成立初期において、ガーダー・メイレンは「反動的な軍閥」や、「封建的な蒙古王公」と戦った「民族英雄」として位置づけられ、「階級闘争のモデル」として評価されていた。つまり、軍閥と王公などの搾取階級に対抗したガーダー・メイレンは、元々王府の中間層の役人であったにも関わらず、貧しい人びとの利益のために戦い、戦死したモンゴル民族の英雄、革命者として評価されたのである。したがって、彼の指導した武装蜂起も、「中国共産党の直接的な指導で行われた「革命運動」ではなかったが、それは全国の革命運動の影響を受け、帝国主義、封建主義のある種の「反動的な政策」に対抗した民衆の革命であり、全国的な新民主主義革命と内モンゴルの民族解放運動の歴史にそれなりの位置を占めるべきである」²⁸⁹と規定されたのであった。また、「ガーダー・メイレン蜂起」は、漢人の入植に対抗した運動などではなく、中国の新民主主義革命時代に起きた「民衆の革命運動」²⁹⁰であるという評価もあった。

これらは中華人民共和国成立初期における「ガーダー・メイレン蜂起」の「公的評価」、あるいは「公式的な歴史叙述」でもあるのだが、そのため、文芸の分野においても、基本

²⁸⁷ 余霞「歴史記憶的伝媒表達及其社会框架」『武漢大学学报』（人文科学版）2007年、第2号。

²⁸⁸ 歴史的記憶を構築するマス・メディアの3つのパターンとその役割については、余霞「歴史記憶的伝媒表達及其社会框架」、拙稿「集合的記憶としての「ノモンハン事件」/「ハルハ河戦争」、335頁を参照。

²⁸⁹ Edükesig, “Tada meyiren-ü bosuly-a-yin tuqai ügülel”, *Mongyol kele udy-a jökiyal teüke sedgöl*, 1960on-u 7 duyar quyuçay-a, pp.56-57.

²⁹⁰ 同上、pp.65-67.

的には社会主義イデオロギーの手法に基づき「革命的英雄主義」²⁹¹として描かれ、それが「公式的記憶」となった。

例えば、北京の中央歌劇院で上演され、1957年に中国戏剧出版社から出版された李悦之による歌劇『ガーダー・メイレン』を見てみよう。この歌劇は、プロローグとエピローグを除いて、10場で構成されている。歌劇には、プロレタリア階級の利益を代表する下層のモンゴル人遊牧民と漢人農民、ガーダー・メイレンと蜂起軍の他に、搾取階級の利益を代表するダルハン親王、上層貴族数人、また軍閥の利益を代表する奉天憲兵数人、荒務局の役人数人と日本帝国主義の利益を代表する僧侶に扮した日本人などが登場する。プロローグは、河畔で草をはむ牛と羊、老人バーボ（巴宝）と男女の村民が登場し、「同志たちよ、バーボおじさんがガーダー・メイレンの物語を語ろうとしているよ」という村民たちの集いの場面で始まる。「おじさん、ムーダンはまだ生きていますか？」という村民の問いに対して、バーボ老は笑いながら「毛沢東の指導下で、彼らはみな、不老長寿の人間なのだよ」と答え、次の歌が入る。

一つの歌を選んで歌おう、
一つの物語を選んで語ろう、
我々モンゴル人たちがいかなる被害を受けていたかを思えば、
平和時代の幸せをかみしめる。
我々モンゴル人の中からどれほどの英雄が出たかを思えば、
祖国の幸せな春を愛する²⁹²。

この場面には、「同志」や、「毛沢東」、「平和な時代の幸せを噛みしめる」などの社会主義イデオロギーの色濃い強いフレーズが登場する。続く第一場は、貧しい人びとの利益を代表する清廉で公正な官吏のガーダー・メイレンと、悪逆の限りを尽くす王府の役人である述合、宝合とが対立する場面、そして僧侶に扮した日本人と王妃とのダルハン旗の土地払い下げをめぐるやりとりの場面である。

²⁹¹ 「革命的英雄主義」については、今井昭夫「歴史の力か、歴史の重荷か—ベトナムにおける「戦争の記憶」の構図」、61頁を参照。

²⁹² 李悦之『歌劇 嘎達梅林』中国戏剧出版社、1957年、4頁。

日本人：(小切手を持って)私は大連司令部の依頼で、この銀貨十万円を王妃様に渡し、
大日本帝国の王妃様への親善の意を表明したい。

王妃：(笑) ありがとう。

日本人：王妃様、今回の土地の払い下げには、問題が起こったりはしないでしょうか。

王妃：奉天政府が、あなた方に干渉するということですか。

日本人：(笑) 大日本帝国が奉天政府と王妃様の取引には干渉しないように、奉天政府
も王妃様と私の取引には干渉などしません、万一、奉天政府が我々の取引に干渉
するならば、我々は奉天政府を帝国政府に変えてしまいます²⁹³。

この日本人が、王妃と手を結んで、モンゴルの土地を払い下げようとする場面は、李悦
之が共産党の反日（反帝国主義）を強調するために敢えて付加した可能性がある²⁹⁴。

歌劇の第十場では、ガーダー・メイレン蜂起軍は敵軍に包囲され、絶体絶命の状況に陥
ってしまう。ここで登場する敵軍には、ダルハン旗の旗兵隊や東北軍だけでなく、日本軍
も加わっている。蜂起軍の兵士のナヤ（朶雅）が「この数百キロの土地は、すべて奉天、
熱河と日本の兵隊に占領された。夜間灯される火は星ほども多く、我々はもはや対抗しき
れない。銃と馬を捨てて逃げましょう」と言ったのに対し、ガーダー・メイレンは次の様
に歌う：

日本人、軍閥、奸賊、王様よ、
貴方は新河の水を沸かし切れない限り、
僕の土地を占領したら、命で償え！
日本人、軍閥、奸賊、王様よ、
貴方は新河の草を刈り切れない限り、
わが平民を殺したら、血で償え²⁹⁵！

²⁹³ 同上、18 頁。

²⁹⁴ これと似ている場面はモンゴル語で採録されたウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の中でもし
ばしば登場する。「青や黒と言えば色の違い/残虐狡猾と言えば性格の違い/日本は愛すべき美しい中国を
支配しようと/王公の権力を頼って呉佩孚や張作霖と手を結んだ」、*Sečinyuwa, Örgön, Üljeisang, Qorčîn
arad-un dayuu, Öbör mongγol-un soyol-un keblel-ün qoriy-a*, 1987on, p.3. (歌詞の日本語の訳は、石原邦子「内
モンゴル民歌「ガダ・メーリン」についての一考察—モンゴル英雄はなぜ中国で歌われたか」、26-27 頁
を参照。)

²⁹⁵ 同上、79 頁。

ここでは、ガーダー・メイレンは、日本帝国主義、封建的王公、反動的軍閥と戦った「革命的英雄主義」を体現している。李悦之は、ガーダー・メイレンの英雄的な物語を中国共産党の「階級闘争のモデル」として、「蜂起」の革命的意義を語り直したのである。その他方で、この作品では、当時の中心問題であった土地をめぐる漢人とモンゴル人の対立はまったく描写されていない。

しかし、このような描き方は 1970 年代以後の改革開放政策により変化するようになる。例えば、2002 年に撮影された映画『ガーダー・メイレン』は、従来の革命的、反日的な「公式的記憶」も描き出されているものの、「環境保護の大切さ」がそのひとつの主題とされており、ガーダー・メイレンが被害者として描かれる傾向が現れている。次の節では、改革開放後の文芸におけるガーダー・メイレンの語り方の作法と表象の変遷を考察していく。

2. 文芸におけるガーダー・メイレン表象の変遷

(1) 映像作品の中の集会的記憶とその変遷



図 4-1 映画『ガーダー・メイレン』(2002 年)のポスター

漢人監督の馮小寧 (Feng Xiaoning) による映画『ガーダー・メイレン』(2002)²⁹⁶は「ガーダー・メイレン蜂起」の出来事を描いた作品のひとつである。映画のあらすじは次の通りである。

満州事変直前に、日本帝国主義者は 1927 年の「田中メモランダム」によって、東北軍閥と結託してその勢力をモンゴルへ拡大しようとしていた。ダルハン王とその後ろ盾である奉天軍閥、それに日本帝国主義者たちが手を結び、モンゴルの草原を次々と払い下げ、開墾してしまう。草原を失った人びとはガーダー・メイレンを代表とした「開墾反対嘆願団」を組織し、奉天側とダルハン王に直訴するが、ガーダー・メイレン

²⁹⁶ この映画が撮影される前に、監督の馮小寧によって作られた映画脚本『ガーダー・メイレン』は 1998 年の最優秀脚本賞を受けた。映画『ガーダー・メイレン』(2002 年)では、有名な歴史家の郝維民 (Hao Weimin) と義都合西格 (Edükesig) が民族史の顧問として招かれ、モンゴル人俳優のエブス (Ebüsü) と漢人俳優の劉薇 (Liu Wei) がそれぞれ主人公のガーダー・メイレンとムーダンに扮した。音楽はモンゴル人音楽家の三宝 (San Bao) によって作られ、主題歌が有名なモンゴル人歌手のテンゲル (Tengger) によって歌われた。映画の主な撮影地は物語の発生した内モンゴルのホルチン地域ではなく、フルンボイル草原であった。この映画は 2002 年の中国における切符の興行収入では、10 位だった (蔡偉傑[2013]: 78 頁)。

ンは逮捕され、ダルハン旗の王府印務処の牢屋へと送られてしまう。次の夜、妻ムードンと無名の「胡子」などの人びとの助けで、ガーダー・メイレンは脱獄し、武装蜂起する。やがて、蜂起軍は東北軍との激しい戦闘を繰り広げ、兵を失い、弾薬も食糧も尽き、絶体絶命に陥る。この時、日本帝国主義者の代表と思われる日本人(上野一夫)が武器と弾薬を持ってきて、蜂起軍の援助を申し出るが、「それは中国人の手で中国人を殺すことだ」と、ガーダー・メイレンは拒否し、戦死する。

この作品は、先に取り上げた歌劇『ガーダー・メイレン』のように「革命英雄主義」を称賛する要素は少ないが、「社会主義イデオロギー」の枠を乗り越えてはいない。

映画の中には、ダルハン旗 10 万の牧民の代表するガーダー・メイレンが、搾取する側を代表するダルハン王（ナムジルセレン）と奉天軍閥（身分は不明）に直訴をする場面がある。ここでは、ダルハン王と奉天軍閥は無言であったのに対し、その場に居合わせた日本帝国主義を代表する日本人上野一夫は、横暴な態度で、ガーダー・メイレンを叱責する（図 4-2）。



図 4-2 映画『ガーダー・メイレン』（2002 年）より

上野一夫：「王府のことは王によって管理され、官庁のことは長官によって管理される。お前は本分を弁えず、なぜこんなところで、騒ぎを起こすのだ？」

ガーダー・メイレン：「我々は止むに止まれず真実を官庁にお伝えするために参りました。騒ぎを起こすなどとは心外です。」

上野一夫：「中国のことがやりにくいのは、おまえたちのような先の見えない賤民がいるからだ！」

ガーダー・メイレン：「民衆が安寧に暮らせないのは、貴方たちみたいな人肉を食らう悪魔がいるからです！」

上野一夫：「馬鹿野郎！」

ガーダー・メイレン：「ええ、あの君は日本人？（ダルハン王に向かって）王よ！

日本人が軍閥と手を結び、草原を好き勝手にしては、いけません。王よ！『草原の草は牛と羊を養うことができると同時に、烈火をも熾すのです』、もし、草

原の人びとが、死滅への道へと余儀なくされるようなら『圧政は一揆を生ずる』
ことでしょう。」

この場面は、表向きは日本帝国主義者の侵略の横暴ぶりを描いているようだが、その背景にはモンゴル人と漢人の民族的な対立が隠されている。つまり、日本人の上野一夫とガーダー・メイレンとの対立は、この映画では外敵の侵略者（日本人）と故郷を守る民族の英雄（ガーダー・メイレン）の対立構造として描かれている。その裏側には、外敵の入植者（漢人）と故郷を守る民族の英雄（ガーダー・メイレン）という対立構造が隠されているのである。史実のガーダー・メイレンは、漢人のモンゴル地域への入植に対抗し戦ったローカルな英雄であったのだが²⁹⁷、この映画では、あくまでも、侵略者（日本）に対抗した愛国的な英雄として描かれている。モンゴル人と漢人の民族的な関係は、映画では非常に和やかなものとして捉えられている。「満洲人もモンゴル人も漢人も回人も、皆この土地で共に生活している」という台詞は、この映画における民族的関係の捉え方をよく表している。

李瑞文によれば、映画の中で2人の人物は、モンゴル人と漢人の調和的な民族関係を恣意的に表した記号なのだという。その1人は無名化された「胡子²⁹⁸」で、蒙漢関係の平和の使者（和やかな関係を構築する者）として描き出され、もう1人はたくましいモンゴル人のバートル²⁹⁹で、民族関係の破壊者として描き出されている³⁰⁰というのだ。

この「胡子」と、バートルが、モンゴル人と漢人の民族関係に、それぞれプラスとマイナスの影響を与えているという李瑞文の解釈には、やや違和感を覚える。史実の「ガーダー・メイレン蜂起」に、「胡子」のような馬賊が加えられたことは、逆に民衆に被害をもたらし、蜂起軍の名誉を傷つけることにもなったということが、文書史料やオーラル・ヒストリーからも確認できる。しかし、モンゴル人と漢人の民族的関係にどのような影響を与えたのかという点は確認できない。映画で、「胡子」が無名化された人物として登場するのは、民

²⁹⁷ これについては、ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』に詳しい。

²⁹⁸ 映画の中で「胡子」は、王様に反抗した人物の息子として描かれ、父親と共に、ギロチンにかけられる際に、少年時代のガーダー・メイレンが末期の馬乳酒を飲ませる。処刑直前に起こった砂嵐に紛れ、ガーダー・メイレンによって命を救われた。20年後、成長した「胡子」は「ガーダー・メイレン蜂起」に参加し、ガーダー・メイレンの忠実なパートナーとなる。

²⁹⁹ バートルは壮健で、たくましいモンゴル人少年として登場し、ホルチン草原の最も優れたブフチン（力士）となった。バートルも、「ガーダー・メイレン蜂起」に参加するが、漢人農民の老人を過失で死なせてしまった罪でガーダー・メイレンによって処刑される。

³⁰⁰ 李瑞文「歴史・芸術・意識形態—嘎達梅林形像流変分析」、暨南大学修士論文、2008年、34頁。

族関係よりは、むしろ、歴史上の「馬賊」というレッテルに合理的根拠を見つけられなかったことが原因ではないだろうか。馮小寧監督は、ガーダー・メイレンの物語を中国共産党の指導したプロレタリア革命や反日的な感情と結びつけることによって、芸術作品としての映画に合理的な上映根拠をもたらしたのである。

映画製作の動機について馮小寧監督は「ガーダー・メイレンからは、モンゴル民族と中華民族の英雄的な精神を辿ることができる。また、人類の自由と幸せな生活のために戦う英雄的な精神を辿ることができる」³⁰¹と語っている。また映画の意義について彼は「民族的団結を発揚し、民族間の友好を促進することが我々芸術家の責任でもある」と述べ、

「ガーダー・メイレンが指導した民衆蜂起は、当時としては、モンゴル人と漢人の基本的な生存権を守るためという意義があったが、今日のマクロ的な観点からは、土地を合理的に開発し、草原の自然環境を保護することが、わが国の優先的政策であり、人類の共同の利益を保護することにもなる」

と語っている。

このように、「環境保護」が、この映画のもう一つの主題となっていることは、しばしば指摘されてきたところである。

この映画が撮影された 2002 年前後には、中国のマス・メディアは、「環境問題」を一つの大きなトピックとして取り扱っていた。2002 年の中国砂漠防止観測センターの統計によれば、2001 年の年末までに、内モンゴル地域の砂漠化した地域の面積は 42 万平方キロを超え、内モンゴル全面積の 36%を占めた。このような背景下で製作された映画では、政治的宣伝のほかに、環境保護が、中国の知識人たちが大衆に伝えようと試みる一つの重要な主題となった。現代中国においても、ガーダー・メイレンの物語はなおも宣伝媒体としての機能を持っており、しかも、今回はもっとも有効な現代的宣伝である映画を通じて実行されているのである³⁰²。

³⁰¹ 馮小寧「嘎達梅林：拍出一部東方的斯巴達克思」『民族団結』1998 年、第 3 期、13 頁。

³⁰² 蔡偉傑「從蒙匪、英雄到環保先鋒：嘎達梅林在現代中國的表述與政治」、78 頁。

馮小寧監督によれば、映画『ガーダー・メイレン』の内容は人間と自然との共生関係という観点をめぐる問いかけを浮かびあがらせている。我々は自然を征服するのか、それとも、我々は自然に従い、自然と和やかに付き合うのか？これは人類のもっとも根本的な哲学テーゼの一つであり、私が映画という手法を用いて現代人に提示した啓示でもある。映画を通じて、モンゴル民族の英雄であるガーダー・メイレンは、我々の大自然を守るために戦ったことを描き出したかったのである³⁰³。

「環境保護の大切さ」は映画の中で、ガーダー・メイレンと農業に従事する一人の老人との対話の中で顕著に認められる。

ガーダー・メイレン：「おじさん、今年は不作ですね。」

老人：「そうだな、表面の草を抜いたら、残るのは砂だけだ。来年風に吹かれたら、残るのはもう砂だけだよ。この草原は絶対に開墾してはいけないんだ。」

草原を開墾してはいけないことを理解したガーダー・メイレンは、モンゴルの土地を売らないようにダルハン王に諫言する。

ガーダー・メイレン：「この草原は祖先が残してくれた我々の生きる土地です。王よ、後の世代のことを、お考えください。草原は荒地ではありません。開墾したら、風に吹かれ、残るのは砂だけです。10年以内にホルチン草原は砂漠になってしまいます。」

ダルハン王はガーダー・メイレンの諫言を全く聞き入れず、モンゴル草原を売り続ける。軍閥や開墾保護軍のモンゴル草原での略奪と横暴な行為を見たガーダー・メイレンは王に再び諫言するが、逆に非難され、免職されてしまう。やがて、「草原の草は牛と羊を養えると同時に、烈火をも熾す」という老人の言葉を聞いたガーダー・メイレンは「開墾反対嘆願団」を組織し、奉天へと向かう。奉天市で、役所を探してさまようガーダー・メイレンは帝国主義と軍閥に反対するデモ隊の一人の参会者に会い、共産党についての話を聞く。「中国の南の方で、民衆のために組織された一つの隊伍があります。彼らも民衆の土

³⁰³ 馮小寧「電影的意識形態和芸術家の社会責任」『緑葉』2005年、第5期、88頁。

地のために戦っているそうです」。この場面は、まさに馮小寧監督の「映画はイデオロギーを表現する一種の手段及び方法である」³⁰⁴という言葉を体現している。

もっとも、映画のなかでは共産党との「出会い」があったと描かれているガーダー・メイレンであるが、実際は、かれはむしろ内モンゴル人民革命党と繋がりがあり、その指導者ボヤンマダフとの密かな会談も行っていた。それどころか、その援助も受けていた可能性があるということは、今日歴史研究者によって明らかにされている³⁰⁵。

また、蜂起を起こし、弾薬が尽きたガーダー・メイレンが、日本人の弾薬提供の申し出を受け入れずに「関内一つの隊伍があるそうです。主導しているのは共産党です、もし彼らに連絡が取れれば、我々は助かるのだが」という場面からも、「社会主義イデオロギー」の作用を見てとれる。

「ガーダー・メイレン蜂起」に関する物語においては、この日本人による武器提供の申し出の場面が必ずと言って良いほど出てくるのは、反日的な感情へのアピールを意図してのことであろう。ガーダー・メイレンが、中国共産党と連絡を取りたがる場面は、監督か、或いは映画顧問の義都合西格 (Idükesig) によって創作されたものではないだろうか。なぜなら、義都合西格はその論文で、「ガーダー・メイレン蜂起」失敗の原因を「直接共産党の指導を受けなかった階級的限界性にある」と位置づけているからである。

この映画で表象されるガーダー・メイレンのイメージは「封建的王公」や「反動的軍閥」に対抗した「階級闘争のモデル」や「革命者」というより、外敵の侵略からモンゴルの草原を守るために戦った「英雄」であり、映画の中では草原を開墾から守るために戦って戦死した「被害者」として描かれている。

(2) 文学作品の中のガーダー・メイレンのイメージ

ここまで、歌劇や映像作品におけるガーダー・メイレンの表象とその変遷について見てきたが、この節では文学作品中のガーダー・メイレンのイメージを取り上げてみたい。

モーリス・アルヴァックスによれば、「集合的記憶」は動態的であり、それは「社会的フレームワーク」によって変容していくものである。内モンゴル社会において「ガーダー・メイレン蜂起」の何が記憶され何が忘却されるのかは、この「社会的フレームワーク」に

³⁰⁴ 同上、86 頁。

³⁰⁵ 博和、薩音『博彦満都生平事略』呼和浩特、1999 年、23-25 頁；二木博史「ボヤンマダフと内モンゴル自治運動」『東京外国語大学論集』第 64 号、2002 年、73 頁。

よって規定されてきた。内モンゴルにおいて「社会的フレームワーク」の役割を果たしているのは、基本的には、主流となっている「社会主義イデオロギー」であると言える³⁰⁶。そのために、蜂起におけるモンゴル人と漢人の対立の記憶や、内モンゴル人民革命党との関わりは、忘却されてしまうのである。

「ガーダー・メイレン蜂起」については、終結してから現在に至るまで、それを主題とする文学作品が、内モンゴルにおいていくつも生み出されてきた。例えば、ザラガフ（扎拉嘎胡/Jalyaqū）の長編小説『ガーダー・メイレン』（漢語、1986年）、エネリルト（Eneriltü）の長編小説『ガーダー・メイレン』（モンゴル語、1989年）などはよく知られた読み物である。郭雪波（Guo Xuebo）の『青旗・ガーダー・メイレン』（漢語、2011年）は、ガーダー・メイレン蜂起軍の生き残りである托日孟克（Tuo ri meng ke）、劉田倉（Liu Tiancang）、孟山虎（Meng Shanhu）などの数十人の語りで構成された記録文学であり、著者の前後40年にわたるインタビュー調査と文書資料に基づいて完成された70万字に及ぶ大作である。また、朱蘇進（Zhu Sujin）の長編小説『ガーダー・メイレン』（漢語、2011年）も人民文学出版社から出版されている³⁰⁷（図4-3）。

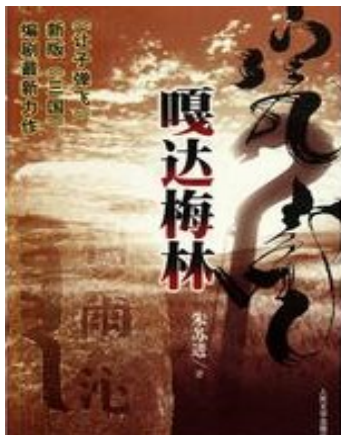


図4-3 朱蘇進の長編小説『ガーダー・メイレン』（2011年）の表紙

朱の作品は、先に取り上げた歌劇と同様に、「革命英雄主義」の称賛といった性質は後退しているが、プロレタリア階級を代表するガーダー・メイレンが、搾取階級を代表するダルハン王や王子の包明遠³⁰⁸と対立するという図式はそのままであり、あくまでも「公式的記憶」と結びついている。というのも、牧地を失ったモンゴル人たちの悲惨な状況や、東北軍や開墾保護隊の残酷な場面は描写されるものの、モンゴルの草原におけるこれらの被害をもたらしたすべての責任は、ダルハン王をはじめとする上級王公の罪として描写されているからである。この点で過去の諸作品と

変わるところがない。

³⁰⁶ 拙稿「集合的記憶としての「ノモンハン事件」/「ハルハ河戦争」、341頁。

³⁰⁷ この小説の出版されるに先駆け、2011年の初め頃から、中国中央テレビ局（CCTV8）のゴールデンタイムで同名テレビ・ドラマ『ガーダー・メイレン』（20回）が放送され、中国で大きな話題を呼んだ。このドラマは、朱蘇進：脚本、陳家林（Chen Jialin）：監督で、2009年から撮影され、2011年に完成したもので、中国のテレビ放送賞・第28期テレビ・ドラマ「飛天賞」、長編テレビ・ドラマ2等賞を受賞した（李瑞文「歴史・芸術・意識形態—嘎達梅林形像流変分析」、34頁）。

³⁰⁸ 小説で描かれる包明遠はダルハン王の第二王子であり、ダルハン王によって、奉天軍事学校に送られ、その後、中国国民党に入党した同時に、賄賂などの手段を通じて、大隊長になった人物である。

朱の小説の前半部は、王公側と、牧場や土地が奪われたために馬賊となった人びとの対立や交渉の場面によって占めている。後半は、ガーダー・メイレンに代表される「開墾反対嘆願団」の物語が描かれるのだが、ここでガーダー・メイレンは、他の作品のなかで描かれているように、奉天市で役所を探してさまようのではなく、直接自分の恩師である「呉先生」³⁰⁹を尋ねる。そして「呉先生」から、省側と交渉する方法などを教えてもらうのである。「呉先生」の家で、ガーダー・メイレンは、モンゴルの土地が奪われた経緯を語っていく。話を聞いた「呉先生」は厳粛な表情で次のように語る。

「呉先生」：「ガーダー君、草原に災禍をもたらした元凶は、牧場を払い下げ、開墾したことではなく、千年に渡って世襲されてきた封建制度なのだよ」。

ガーダー・メイレン：「えっ、封建制度？」

「呉先生」：「そうだ。辛亥革命以後、関内では封建帝政が覆されたが、モンゴル各旗では封建制度がいまだに残っています。考えてみなさい、ダルハン王が、牧場を払い下げ、開墾できるのは、彼が親王だからだ。草原にあるすべて、空を飛ぶもの、地上を走るもの、水の中を泳ぐものから、貴方たちのような遊牧民まで、みなダルハン王の財産であり、言わば、彼の小屋の中の羊と牛だ。主人が自分の羊や牛を殺す際に、羊と牛の意見を聞くかな？聞かないだろう。主人が自分の財産を払い下げる際に、貴方達の承認を求めるかな？もちろんない。なぜなら、封建制度は彼に生殺与奪の権利を握らせ、彼は天下の主だからだ」。

ガーダー・メイレン：（はっと悟る）「なるほど、今までそのことについては考えたこともなかったけれど」³¹⁰。

続いて、「呉先生」は「田中メモランダム」から、日本の侵略意図を説明した後、ガーダー・メイレンの当面の交渉方法を指導する。それに力を得たガーダー・メイレンは「呉先生」の教え通り、ダルハン王と奉天側とに直訴するが失敗し、「呉先生」とともに「大勢の人を集めさせ、騒ぎを起こした」という罪状で逮捕されてしまう。やがて、逮捕されたガーダー・メイレンらは、奉天憲兵によって刑場に連れて行かれ、「呉先生」らの処刑場面

³⁰⁹ この小説では、「呉先生」（呉永興）はガーダー・メイレンの学生時代の教師であったと同時に、ガーダー・メイレンらの奉天での交渉やプロレタリア革命について、いろいろ教える共産党秘密黨員として描かれる。

³¹⁰ 朱蘇進『嘎達梅林』人民文学出版社、2011年、237-238頁。

を見せられる。興味深いのは、ここで処刑任務を遂行したのは国民党の軍官であると同時にダルハン王子であった包明遠であった。この小説で、ダルハン王子がこのような登場の仕方をするのは、「封建的王公が軍閥と親戚となって、秘密共産党黨員を処決したと同時に、ガーダー・メイレンが指導した反開墾運動を弾圧した」という公式の見解を裏書きするためである。

朱蘇進の長編小説で描き出されるガーダー・メイレンのイメージは実在のガーダー・メイレンから離れ、封建的王公や軍閥と対抗した公式的な「ガーダー・メイレン像」となっている。朱はガーダー・メイレンのイメージを描き出す際、「ガーダー・メイレン蜂起」についての「公式的」な見解を配慮すると共に、「蒙地開墾」を巡るモンゴル人と漢人の対立をあえて隠蔽したと推察できる。なぜなら、「圧政は一揆を生ず」というのは中国の一貫した歴史記述のパターンであり、それに合わせて、事件は、搾取側と搾取される側との階級対立というプロットにはめ込まれているからである

この小説の作者である朱蘇進は漢人であり、彼の描き出すガーダー・メイレンのイメージは、あくまでも漢人の立場からの公式的な「ガーダー・メイレンの記憶」である。一方、同じ 2011 年に出版されたが、小説『青旗・ガーダー・メイレン』（図 4-4）は、モンゴル人作家郭雪波によるもので、「公式的記憶」とはいささか異なった集合的記憶が描かれている。

郭雪波は、1968 年内モンゴル民族専門学校を卒業後、ガーダー・メイレンの故郷であるホルチン左翼中旗の文書館に配属され、そこで 10 年ほど働いた。それは文化大革命期と重なるが、彼は自分の身の安全も顧みず、ガーダー・メイレン蜂起に関する史料をひそかに収集しつつ、保存した。中央芸術学院に在学中の 1978 年以降も、ホルチン地域で何回かの現地調査を行い、その中で、数十人のガーダー・メイレン蜂起軍の生き残りたちを訪問し、数十万字のインタビュー記録を残している。小説の完成三年前まで調査は続けられ、合計して四十年に渡ったという³¹¹。郭雪波によれば、『青旗・ガーダー・メイレン』は、主人公のバヤルタイ（白尔泰）の個人的な体験とガーダー・メイレンの歴史という 2 つの方向から展開される。

郭雪波によれば、『青旗・ガーダー・メイレン』の登場人物は全員実在の人物であった。したがって、この小説は記録文学であり、ノンフィクションでもあるという。『青旗・ガー

³¹¹ 郭雪波「四十年的求索」『青旗・嘎達梅林』新星出版社、2011 年（京東讀書電子版）、277 頁。

ダー・メイレン』で描かれた「ガーダー・メイレンの記憶」は、史実のそれともっとも近いものであると考えられる。

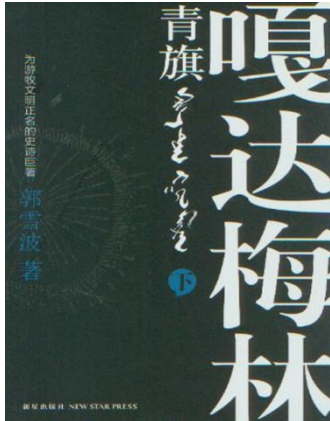


図 4-4 長編小説『青旗・ガーダー・メイレン』(2011 年)の表紙

小説のタイトルが示唆していることだが、この「青旗」は、モンゴル人にとって重要な表象として持ち出されている。「青色」はモンゴル文化の中では、「青い空＝天」を信仰する宗教や伝統と関わっている。それは変わることのない「青い空」のイメージを表している。また、「旗」は、民族の「団結」や「求心力」の表象であり、「青い旗」はモンゴル人の「民族的精神」と「感情」を動員させ、立ち上がらせる効果を持っていた。例えば、満州国時代のモンゴル語新聞である『フフ・トグ (köke tuy) / 青旗』はこのような目的で刊行されたと思われる。

「青旗」は小説の中では、ガーダー・メイレンらの組織した「開墾反対嘆願団」、つまり、「ドゴイラン運動」で使われていた青色の旗として登場する。小説の冒頭で、子供のバヤルタイは、自分のおじ（托日孟克）が長年保管してきたボロボロになった「青旗」を発見し、それに対する好奇心から物語は展開される。「間違いになったおじさんは古い鞆の中から出したぼろぼろになった布を翼々と開いた。その青い布で作られた旗の真中には、一つの輪が刺繍され、輪内には鷹が刺繍され、輪の周りに人名のような字がぎっしり書かれていた」³¹²。また、成長したバヤルタイはホルチン左翼中旗の文書館では、「ガーダー・メイレン蜂起」と書かれた公文書の中で、それとに似ているような「青旗」を目撃するのである。

一方、改革・開放後も依然として中国では、“公式”には、ガーダー・メイレンは、「封建的な蒙古王公」や、「反動的な軍閥」に対抗した武装蜂起の主導者であると位置づけられている³¹³。しかし、農耕経済と遊牧経済の矛盾の衝突として位置づける研究も出てきている。すでに述べたヒンガン(2009)は、ガーダー・メイレン蜂起の背景を論じる際に、先行

³¹² 同上、10 頁。

³¹³ 例えば、卢明辉の「嘎達梅林伝記」や武国驥の「民族英雄嘎達梅林」などでも、ガーダー・メイレン蜂起について論じられており、「ガーダー・メイレンの指導した軍閥、ダルハン王に対抗した闘争はわが国の革命闘争と繋がっている。それは我が国の新民主主義革命の一部である」という。（『中国蒙古史学会大会紀念集刊』呼和浩特：中国蒙古史学会編、1979 年、571 頁；波・特古斯、王坤「嘎達梅林起義軼事」を参照せよ）。

研究としての義都合西格の議論には、農耕経済と遊牧経済の衝突と矛盾が隠蔽されていると批判している³¹⁴。

小説『青旗・ガーダー・メイレン』主題のひとつは農耕経済と遊牧経済の矛盾と衝突そのものであり、著者の郭雪波は、「歴史と現実、宗教と文化、人類と自然の中で歩く思想家」と評価されていることを忘れてはならない。彼の描いた「ガーダー・メイレン蜂起」の真の意義は、草原を開墾から守ること、そして遊牧文化を継続するための対抗運動にある。彼のこのような自然観は、小説全体を貫く一つの主題となっており、中国・内モンゴルにおいて注目されている砂漠化に対する問題意識や、中国政府の打ち出している「退耕環林」（耕作を止めて林に戻す）などの環境政策と一致している。

小結

ここまで、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』のテキスト化、「ガーダー・メイレンの事跡」などの資料が編纂された経緯を、中国共産党の文芸政策、1958年の「民謡運動」と1978年の「改革開放」などの政治運動に沿って俯瞰してきた。また、政治運動によって編纂された『ガーダー・メイレンの事跡』などの資料や、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の内容が民間芸能者のホールチによって、ウリゲルト・ドーとして歌われ、「ホーリン・ウリゲル」として語り直されることによって、再記憶化され、より広い地域で共有されるようになったことも確認してきた。加えて、「ガーダー・メイレンの記憶」の形成に重要な役割を果たしている文学作品や映画などを視野にいて、集合的記憶としての動態と変容を検証した。

しながら、集合的記憶の事例研究においてすぐれた実績のある石井弓が述べるように、「記憶は必ずしも、為政者の意向に沿って形成されるわけではない」³¹⁵。特に、ガーダー・メイレンのようなローカルな英雄の記憶は、中国の政治運動や社会的変容によって、いかに「階級闘争」のモデルとして利用され、「公式的な記憶」として形成されたとしても、それに対抗する形で「マイナーな記憶」が存在するはずである。前述したように、中華人民共和国初期において、ガーダー・メイレンは基本的には社会主義イデオロギーの手法に基づいて、反敵国主義的、反封建的、反軍閥的な英雄として表象されてきた。しかし、このような状況は、とくに1970年代以後の改革開放によって、変化していくのである。一方、

³¹⁴ Darqud Kingyan, *Gada meyiren-ü dayuu-yin sudulul*, p.7.

³¹⁵ 石井弓『記憶としての日中戦争—インタビューによる他者理解の可能性』、59頁。

『青旗・ガーダー・メイレン』は、内モンゴルの社会主義イデオロギーの下で書かれたものであるが、そこで描き出されている「ガーダー・メイレンの記憶」は、中国共産党の打ち出している「公式的記憶」とはすでに異なっている。小説に登場する托日孟克、劉田倉、孟山虎などは実在の人物である。彼らは、「ガーダー・メイレン蜂起」の参加者であり、だからこそ中国においては、長年に渡って忘却され、周縁化されてきた。彼らの多くは、「ガーダー・メイレン蜂起」からこのかた、満州事件、内モンゴル自治運動、文化大革命を経験しており、そして生き残った。作家の郭雪波は、かれらを再びとりあげ、小説という記憶形成の手段を通じてガーダー・メイレンの出来事を発掘しなおし、出来事の諸相を現在に呼び戻して再構築したのであった。

あらゆるメディアが根本から操作されている中国・内モンゴルにおいて、このような作品が作られたことは意義深い。それはまさに、中国の改革開放政策の推進とグローバル化によって、人々の価値観が多様化し、認識や記憶の語り方が変化したためだとも言えよう。

本章では、紙幅の関係で、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』のテキストの内容とガーダー・メイレンの「ホーリン・ウリゲル」の内容までは分析することができなかった。また、取り上げた文学作品や映画が人びとにどのように共有され、認識されたかについては、実証的に論じることはできなかった。内モンゴルの人びと（記憶する主体）は、これらの国民国家と地域の範囲で共有されるガーダー・メイレンのイメージと表象をいかに受け止めているのだろうか？これらの問題を次の第5章では検討していきたい。

第5章 草の根社会におけるガーダー・メイレンの記憶と語り

前述したように、中国・内モンゴルの公式的見方では、ガーダー・メイレンは「階級闘争のモデル」として有名な人物であるが、内モンゴルにおけるモンゴル人の間では、「民族的英雄」、または「民族的犠牲者」として認識される場合もある。それは社会的かつ政治的に構成される「社会的フレームワーク」(モーリス・アルヴァックス)として作動する「公式的な記憶」、つまり、「封建的王公」や「反動的軍閥」と対抗した「階級闘争のモデル」としての「パブリック・メモリー」と異なって、ガーダー・メイレン本人もまた、「モンゴル人」対「漢人」という二分法で記憶の語りが構成されている。このような「公式的な記憶」の横にある、周辺化された「マイナーな記憶」の語り方は、今でも深い「忘却の穴」に投げ込まれている。こうした忘却された記憶の断片を再び整理し、可視化し、人々の間で共有されている「マイナーな記憶」を考える際には、政治的、イデオロギー的側面から形成される「公式的な記憶」としてのガーダー・メイレンではなく、むしろ、内モンゴルの「草の根社会」における記憶と語りを分析しなければならない。つまり、内モンゴルの人々(記憶する主体、特にホルチン左翼中旗の人々)は、国民国家と地域の範囲で共有される公式的なガーダー・メイレンのイメージと表象をいかに受け止めているのかを言及することが不可欠である。森村は言う。

白紙に自由に絵を描くように集合的記憶を捏造することは不可能であり、その際、もっとも配慮すべき条件は、対立する権力よりもむしろ収容者側の独自の表象体系・文化であろう。これに真っ向から対立し、完全に消滅させようとするには大きな困難が付きまとう。このため、表象を押しつけようとする権力主体は受容者の反応を前提として表象戦略を採らざるを得ない。こうした戦略は受容者の独自の文化の取り込み、変容、歪曲などを含むことになるが、その一方で受容者側も与えられた表象を権力側の意図とは別の形に読み替え、その意味をずらし、時には風化させていく³¹⁶。

「モンゴル人」対「漢人」という構図、つまり、「漢人の入植に対抗したモンゴルの英雄」という記憶の語り方は今日の内モンゴルにおける「公式的なガーダー・メイレン像」をある程度動揺させるかもしれない。しかし、内モンゴルの人々の間で構築されている「ガー

³¹⁶ 森村敏己「記憶とコメモレイション：その表象機能をめぐって」、186頁。

「ガーダー・メイレン像」は単一ないし単純なものではない。実際に、モンゴル人民衆の間で共有される「ガーダー・メイレン像」はもっとも複雑で、多様である。このような記憶の多様性や、多声性こそが、ガーダー・メイレンを巡る「記憶のトポロジー」を曖昧化させ、時に政治的な武器あるいは、政治政策の道具として利用されてしまう場合もある。鄭智泳の述べるように、「隠蔽され記憶の破片を隠そうとすればするほど、その力は一層強まる。危険な破片だからといってそれを隠すよりは、むしろ明らかにして、その秘密めいた危険性を除去する必要がある」³¹⁷。

そこで、本章では、内モンゴルの「草の根社会」、つまり、社会の下層にある人々の間で共有される「ガーダー・メイレン像」と記憶の語り方を考察していきたい。このため、方法として、フィールドワークの研究方法を用いて、実際に内モンゴルの人々、特にガーダー・メイレンの故郷であるホルチン左翼中旗のモンゴル人たちがガーダー・メイレンのことをどのように記憶しているのかについて検討してみたい。筆者は2013年9月から10月の1ヶ月間に、ガーダー・メイレン蜂起が起きた内モンゴルのホルチン左翼中旗で集中的に聞き取り調査を行い、その後も補足調査を行ってきた。調査範囲はホルチン左翼中旗の東部、中部と西部の八つの村、宝龍山鎮と旗政府のある保康鎮、また、ホルチン右翼中旗のバヤントハイ（巴彥套海）、通遼市、フフホト市で、合計22名にインタビューを行い、それに基づいて本章を執筆した（表5-1）。

第1節 ホルチン左翼中旗の概況とインタビューの方法

1. ホルチン左翼中旗の自然環境

調査地域であるホルチン左翼中旗は、内モンゴル自治区東部、興安嶺の東南に位置し、地勢は西北から東南に傾いている。旗の東側、北側、西側と南側はそれぞれ、吉林省、ホルチン右翼中旗と扎魯特旗、開魯県、ホルチン左翼後旗とつながっており、総面積は9818平方キロである。同旗の気候は寒暖の差が激しい大陸温帯気候に属する。年間降雨量は200～400ミリメートルで、平均気温が5.5℃である。2010年の統計によれば、旗の人口は54万人、その中ではモンゴル人は39.5万人で、総人口の73.6%を占めており、同旗も内モンゴルの各旗の中ではモンゴル人が一番多く旗であると言われている（図5-1）。

ホルチン左翼中旗は内モンゴル自治区の中では経済的に貧困な地域に属し、近年、出稼ぎ労働者の数も増えつつある。同旗は内モンゴルの半農半牧地域に属するが、近年の「禁

³¹⁷ 鄭智泳「孝女沈清」板垣竜太・鄭智泳・岩崎稔編著『東アジアの記憶の場』、113頁。

牧（放牧を禁止する）政策」により、牧畜に従事するモンゴル人が少なくなっている。農産物としては、主にトウモロコシ、緑豆、モロコシ、トウゴマなどが挙げられる。旗のモンゴル人たちは、随分昔から「蒙地開墾」と漢人の入植の影響を受け、遊牧生活をやめて、定住生活を営んでいる。生活の習慣やスタイルにおいては、漢文化の影響を強く受けており、漢語とモンゴル語を混ぜてしゃべるホルチン方言を使用し、中国式の瓦吹きの家や「土屋のゲル」³¹⁸に住み、農耕に従事するようになっている。

2. インタビューの概要

調査地域でのインタビューは、エムネ・タリンアイル（Emün-e Talinail/南塔林艾力）ガチャー（村）³¹⁹の元書記長のトン・シレム（Tong Širemü/佟西日莫）氏の協力を受け、各村のインフォマント（語り手）の自宅を訪問して行った。各村のインフォマントをトン・シレム氏の知り合いを通じて、紹介してもらい、使用言語は地元のホルチン方言で行った。インフォマントの年齢や性別をできるだけバラスンを取るように心がけたが、年寄の男性のほうが圧倒的に多かった。質問内容を事前に決めて行ったが、インタビュー中、語り手の語りの内容に応じて、適当に変わった場合もあり、自由に語ってもらう形もとった。インタビューは Apple レコーダーに録音しながら、記録ノートでメモを取って行った。

オーラル・ヒストリーの方法を扱った研究では、よく言われるのは、聞き手と語り手の関係性の問題や、語る内容の代表性の問題である³²⁰。調査地域は筆者の生まれ育てられた故郷であったため、聞き手の筆者と語り手の関係性が語りだす内容に与える影響が少ないと思われる。しかし、「岡目八目」と言われるように、語り手にとっても、筆者にとっても、当たり前のように思われる内容や、この地域にあまり慣れているせいで、別の文化圏の目から見ると、非常に重要だと思われる内容が見落とされてしまう可能性もある。これらの問題を前提として、まず、人々の間で共有されている多様な語り方の中から、最も「代表的な語り」、つまり、「多くの人々の意識に残っている共通的な語り」を取り出すことにし

³¹⁸ 「土屋のゲル（バイシン＝ゲル/bayising =ger）」は、文面通り土で造った家を指す（ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、261 頁）。

³¹⁹ 内モンゴル東部農耕モンゴル人居住地域では、モンゴル語の「ayil」あるいは「ayil tosqun」、「ködege tosqun」などという言葉で、ある一定の狭い区域内に集中して暮らす多数の戸の共同体を表すようになっている。一方、現在では「ガチャー（γačay-a）」という言葉は行政単位として「村」を指し、場合によって一つのガチャーの中にいくつかの村落が含まれていることもある。内モンゴルではこうしたガチャーの中に含まれる小さな村落を漢語で「自然村」といい、農耕地域のモンゴル人は通常「何々ガチャーの何々ayil」という場合も多い（同上、257 頁を参照）。

³²⁰ 石井弓『記憶としての日中戦争—インタビューによる他者理解の可能性』、70 頁。

たい。次に、「代表的な語り」の他に、語り方の多様性や多声性の問題を見落とさないように、なぜそのような多様な語りがあるのか、その語りの根源がどこにあるのかを検証してみたい。

表 5-1 ガーダー・メイレンについての聞き取りリスト

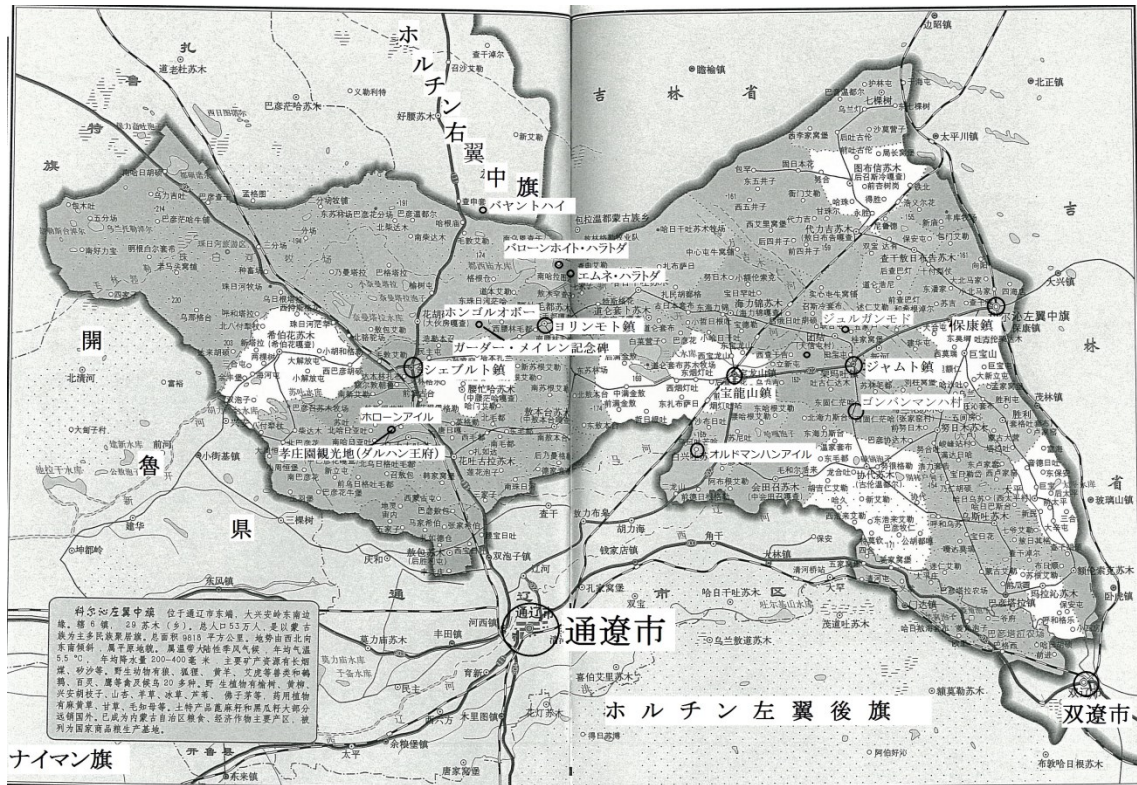
氏名	生年	性別	学歴	居住村	記憶の根源	語りの内容
戴・L	1918	女	文盲	シャンシーンアイ ル（尚辛艾 勒）	出来事目撃者	ガーダー・メイレン蜂起軍 はオールドマンハンマイル （鳥日吐茫哈）に宿営した 際の出来事
朱 （戴） ・L	1923	男	私塾で4 年間勉強	シャンシーンアイ ル（尚辛艾 勒）	出来事を目撃 者、戦友からの 語り	ガーダー・メイレン蜂起軍 のオールドマンハンマイル （鳥日吐茫哈）に宿営した 際の出来事、ガーダー・メ イレンの戦死した際の出来 事
呉・M	1924	女	文盲	バローン ホイト・ハ ラトダ（西 北哈拉吐 達）	ウリゲルト・ド ー	韓色旺についての出来事、 ムーダンの娘殺しなど
孟・O	1927	女	文盲	バローン ホイト・ハ ラトダ（西 北哈拉吐 達）	上の世代の語 りやホーリ ン・ウリゲル、 ウリゲルト・ド ー	村の歴史、ガーダー・メイ レン蜂起の影響とその意 義、満州国時代の話など
芒・M	1927	男	中等専門 学校	フフホト 市	友達の歌った ウリゲルト・ド ー	ウリゲルト・ドー『ガーダ ー・メイレン』の採録・収 集した契機、方法など

包・H	1931	男	文盲	ドシンスム（都西廟）	ウリゲルト・ドー	ガーダー・メイレン蜂起の起きた原因、土地をめぐる漢人とモンゴル人の対立など
白・N	1937	男	小学	ジュルガンモド（珠日干毛都）	上の世代の語りやウリゲルト・ドー	ムーダンの娘殺し、韓色旺についての出来事
白・S	1939	男	文盲	ジュルガンモド（珠日干毛都）	ホーリン・ウリゲルとウリゲルト・ドー、上の世代の語り	ガーダー・メイレン蜂起のゆえに弾圧されるに至った経緯で
呉・D	1939	男	文盲	スーリンノトボ（民主屯/包力召）	自分のお爺さんと村の人々の語り	韓色旺についての出来事
呉・C	1939	男	中学	ホンゴルオボー（洪戈爾敖包）	村の人々の語り、ウリゲルト・ドー	ガーダー・メイレンの戦死する際の出来事や、ガーダー・メイレン記念碑設立について
張・B	1942	男	中学	ヨスト（腰斯吐）	村の人々の語り、ウリゲルト・ドー	蜂起軍の失敗した原因について
・T	1943	男	小学	ホルチン右翼中旗バヤントハイ（巴彦套海）	村の人々の語り、ウリゲルト・ドー	ガーダー・メイレンのホーリン・ウリゲルを語ったホールチなので、蒙地開墾によるモンゴル人の苦難の記憶をホーリン・ウリゲルの形で語った
包・T	1944	男	中学	ホローン	村の人々、新	ホルチン部の歴史、ダルハ

				アイル (浩日彦艾勒)	聞、本、ホーリン・ウリゲルとウリゲルト・ドー	ン王府の出来事から、ガーダー・メイレン蜂起まで、非常に詳しい語った
包・C	1945	女	小学	エムネ・ハラトダ (南哈拉吐達)	叔父のトン・マンサンと村のゴヨウという人 (蜂起軍の生き残り)、ウリゲルト・ドー	老人の語りによれば、ガーダー・メイレン蜂起軍が村に何回も来たという。ウリゲルト・ドーから、ムーダンの娘殺しの話を聞いて、何回も涙を流したという
金・M	1949	男	小学	バローン ホイト・ハラトダ (西北哈拉吐達)	老人の語り、ホーリン・ウリゲルとウリゲルト・ドー	ムーダンの娘殺し、ガーダー・メイレンの脱獄から、蜂起軍が弾圧されるまでの出来事
呉・H	1951	男	小学	スーリン ノトボ (民主屯/包力召)	老人の語り、ホーリン・ウリゲルとウリゲルト・ドー、本など	韓色旺についての語り、ガーダー・メイレンの戦死する際の出来事
孟・B	1952	男	小学	バローン ホイト・ハラトダ (西北哈拉吐達)	ホーリン・ウリゲルとホーリン・ウリゲル	ガーダー・メイレンのウリゲルト・ドーの一部を自分で語る。
張・H	1954	男	小学	バローン ホイト・ハラトダ (西北哈拉吐達)	ウリゲルト・ドー	ガーダー・メイレンのウリゲルト・ドーの一部を自分で語る。

				達)		
金・M	1954	男	小学	エムネ・ハ ラトダ(南 北哈拉吐 達)	ウリゲルト・ド ー	ガーダー・メイレン蜂起の 起きた原因から弾圧される まで出来事、蒙地開墾を巡 るモンゴル人と漢人の対立
包・B	1973	男	文盲	エムネ・ハ ラトダ(南 北哈拉吐 達)	村のセール老 人の語り	ガーダー・メイレンの生涯、 蜂起してから戦死するまで の出来事、ガーダー・メイ レン蜂起軍が村に宿営した こと
包・S	1982	男	中学	エムネ・ハ ラトダ(南 北哈拉吐 達)	ホーリン・ウリ ゲル、ウリゲル ト・ドー、本な ど	ムーダンの娘殺し、ガーダ ー・メイレンが匪賊団と連 合したこと

図 5-1 内モンゴル自治区ホルチン左翼中旗地図（現在）



注：内蒙古自治区地図制印院編制『内蒙古自治区地図冊』北京：中国地図出版社、2004年、21頁を参照して作成（語り手の居住村がカタカナで表示された）。

第2節 民間に共有されるガーダー・メイレンの記憶と語り

1. 地域で共有されるガーダー・メイレンの共通する記憶

調査地域では、ガーダー・メイレンは、共通して共有されている記憶として、「民族的英雄」、または「民族的犠牲者」として認識される場合が圧倒的に多かった。しかも、その記憶の根源がほとんど、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』から由来しており、ガーダー・メイレンについて共通の語りが見られる。例えば、ジュルガンモド（珠日干毛都）に住む白・S（男、1939年生）は次のように語る。

ある日、ダルハン王が張督軍（張作霖：筆者挿入、以下同じ）に誘われて、ムグデン（奉天）に行った。督軍府での宴会の後、ダルハン王は張督軍の仲人で嫁（語り手：つまり、フージン・タイタイ[=朱博儒:]）をもらった。そして、ダルハン王は旗のことを完全に忘れて、戻りたくなかった。〔中略〕その日から、ダルハン王は旗の

政務にまったく従事しなくなり、旗兵隊の諸費用をも支払わなくなってしまった。そのために、ガーダー・メイレンが奉天へ話をつけに行ったんだ、合計で3回も行った。最後にモンゴリン・ジャサク（モンゴルを管理する機関）にも行って直訴したけれども、問題が解決しなかったんで、彼はダルハン王に対して怒ったんだ。これを見たフージン・タイタイ（ダルハン王妃）がカンカンになり、「世の中で、ハラチ・アラド（庶民）が王様に対して怒るというのは、自分の身分をわきまえていない」と言って、彼を逮捕し、奉天の牢屋に入獄させた。のちにガーダー・メイレンの友達のハスオチル（語り手：ダルハン王秘書）とウ・タイタイ（五太太：元ダルハン王妃）のおかげで、ダルハン旗の牢屋に移動することになった。その後、牢屋の人（ガーダー・メイレンの友達）から情報をもらったムーダン（ガーダー・メイレンの妻）は、旗兵隊が匪賊討伐に出発したチャンスに乗じて、ガーダー・メイレンの救出に成功したんだ。脱獄したガーダー・メイレンはトゥシェート（ホルチン右翼中）旗、ジャロート旗などで戦いながら、白龍の指導する匪賊団と合流し、匪首になった。その後、トゥシェート旗の天山一帯に活動するホラガル＝紅順（の匪賊団）と合流し、2000名あまりまで拡大した。ガーダー・メイレンは匪首になった後、ダルハン旗の土地を守るために、ウリジームレン（新開河）の西側に位置するジャムト、ボラギンジョー（宝龍山）付近で、奉天から派遣されてきたデースンチェリグ（degēsün čereg）³²¹を攻撃した。当初は沢山のデースンチェリグの兵士を殺したんだ。デースンチェリグの報告を受け取った張督軍は洮南、魯北などの国軍（東北運）を動員して、蜂起軍を鎮圧した。考えて見るとさあ、匪賊にはね、如何なる援助もないのだよ。彼らは正規な国軍と戦った後、物資や弾薬もなくなってしまったんだ。銃というのはね、弾薬がないと、シレーグル（silegegür/silegebür）³²²のようなものになってしまう。何の役にも立たないからさ。それで、最後にガーダー・メイレンはウリジームレン河のホンゴルオボーで戦死した。ガーダー・メイレンは匪首になったが、彼の本当の目的はモンゴル人の土地と利益を守るためだった。だけど、他の匪賊と違って、人々の財産を略奪したことがない。今日、ガーダー・メイレンが有名になったのは、そのおかげでもある³²³。

³²¹ 「デースンチェリグ」とは土地を測量する作業の実行と保護を行う軍隊（測量軍、護墾軍）を指す。「ホイシャチェリグ」（灰色の軍服を着た軍）とも言う。

³²² 火かき棒のことを指す。内モンゴルでは、炊事の時に、木や草などの燃やすための道具として使われている。

³²³ 2013年9月12日、内モンゴル・ホルチン左翼中旗のジュールガンモド（珠日干毛都）における白・Sへのインタビューによる。

白・Sの語りの前半の内容はテムレー (Temür-e) ホールチの語ったホーリン・ウリゲル『ガーダー・メイレン』の内容と似ているが、後半の内容から見れば、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の影響を受けているのは明らかである。例えば、奉天で逮捕されたガーダー・メイレンはハスオチルとウ・タイタイのおかげで、ダルハン旗の牢屋に移されたことはウリゲルト・ドーの内容であり、ホーリン・ウリゲルには登場しない。

同じ村に住む白・N (男、1937 年生) は次のように述べる。

ダルハン旗はジリム盟 10 旗の中で一番広い旗だったんだ。ダルハン王の下にはね、ガーダー・メイレンと韓色旺という部下がいた。韓の媒介でダルハン王が張督軍の妹と結婚して奉天に住むようになり、旗の政務に従事しなくなった。張の目的はダルハン旗の土地だった。フージン・タイタイも化粧品を買うために、ダルハン旗の土地をたくさん払い下げた。そして、デースンチェリグがやってきて、バヤンラタラ

(Bayantal-a)、ゴルバンマンハ (Gurban mangq-a) 一帯の土地を測量したんだ。貧しい人々が故郷を追われ、大変なことになった。この状況を見たガーダー・メイレンがダルハン王を説得するために奉天に行ったんだけど、結局、免職され、投獄されちゃった。これはすべて韓色旺という奴のやったこと。この情報を聞いたムーダンが仲間を集めながら、家の家畜などを売りさばき、銃と弾薬などを買って、家に戻った。けども、これから 3 歳の娘テン・ジンリャン (天金亮) の運命がどうなるのか。叔父さんに世話をしてくれるように頼んだが拒否されちゃったため、敵に殺されるより、自分で殺しちゃおう、と思ったムーダンが自分の手で娘を殺しちゃったんだ。そして、その日の夜、旗兵隊がホロスタイントン (qulustai-yin tūng) で匪賊討伐に出発したチャンスに乗じて、ムーダンが仲間を連れて、王府の牢屋を破って、ガーダー・メイレンを救出した。脱獄したガーダー・メイレンらは北のほうに向かい、蜂起が始まった。

〔中略〕 彼らは、ジャムト、ゴンルブンマンハ、シェブルト (舍伯吐)、ヨリンモト (腰林毛都)、魯北などで戦闘した³²⁴。

³²⁴ 2013 年 9 月 12 日、内モンゴル・ホルチン左翼中旗のジュルガンモド (珠日干毛都) における白・N へのインタビューによる。彼の元住所はソブラガインアイルという村で、ガーダー・メイレンの住んでいたところ (オロインモド) から近かったので、ムーダンの娘殺しについてより詳しく語った。彼はウリゲルト・ドー以外にも、上の世代の語りを繰り返して聞いたことがあと考えられる。

一方、上記の二人から離れている金・M（男、1949年生）の語りを聞いてみよう。

ダルハン旗において、ベーリン・テレー（通遼荒）などができて、大勢の漢人が入ってきた。ダルハン王はジャシヤンアラバ（年班）³²⁵のために、北京に滞在した時、彼の弟のソリヤト王（＝狂人王）が政務に従事し、贅沢な生活を送りながら、多くの借金をかさねちゃったんだね。ダルハン王もフージン・タイタイを嫁にもらってからね、北京で、莫大な借金をかさね、それらの借金を返済するといって、土地を払い下げたんだ。そして、張督軍とか、呉督軍（呉佩孚）とか、ホイシャチェリグ（測量軍）などね、軍事的な権力を持っている人々がダルハン旗にやってきて、土地を測量した。僕の聞いた限りでは、ベーリン・テレーからシェブルトまでの肥沃な土地が測量され、払い下げられたそう。このような背景で、ガーダー・メイレンが立ち上がった訳だ。モンゴルの土地と利益のためにね³²⁶。

この三人の語りがウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の内容とほぼ一致している。三人とも「ムーダンの娘殺しは真実」であると語っており、「彼女は非凡な女」とであると評価している。また、ガーダー・メイレン蜂起軍がジャムト、ゴルバンマンハ、シェブルト一帯でデースンチェリグと戦ったことが特に記憶されており、三人とも、ガーダー・メイレンのことをモンゴル人の英雄として認め、韓色旺のことをモンゴル人の裏切り者として批判している。白・Sと白・Nの二人が同じ村で住んでいるが、二人とも金・Mと何らかの接触をしたこともない。それにも関わらず、三人の語りの基本的な内容はほぼ同じである。上の表で示した通り、聞き取りの中で、語り手20名の内、16名はウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』からその出来事について知ったと語っている。語りの基本的な内容は、ダルハン王が張作霖と親戚になり、奉天で住むようになってから、ダルハン旗の土地が測量軍によって強制的に測量され、モンゴル人たちが故郷から追われたため、ガーダー・メイレンが蜂起したというストーリーであった。このストーリーは世代を超えて共有されており、しかも、地理的にも広く共有されている。

³²⁵ 清朝時代、旗の王様は、モンゴルの貴族として、数年に一度、首都北京に住み、清朝中央政府や皇室に勤務する「年班」という義務が課せられていた（特古斯巴雅爾「ガダ・メーリン」―モンゴル開墾抵抗運動の英雄―、30頁）。

³²⁶ 2013年9月14日、内モンゴル・ホルチン左翼中旗のパローンホイト・ハラトダ（西北哈拉吐達）における金・Mへのインタビューによる。

一方、「ムーダンの娘殺し」という「ストーリー」も多くの人々に「本当にあった出来事」と信じてられている。この「ストーリー」は確かに、ホールチや民間芸能者によって作られた話であり、史実ではなかったことはムーダン自身の語りによって明らかにされている³²⁷。それにも関わらず、人々はそれを真実であると語っているのは、彼らの記憶形成において、ホールチの歌ったウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』が重要な役割を果たしたと推察できる³²⁸。

2. ウリゲルト・ドー、口承による「ガーダー・メイレン記憶」の形成と伝承

ウリゲルト・ドーは一般的に、聞き終わったら忘れてしまうと思われるが、ガーダー・メイレンのストーリーをウリゲルト・ドーから聞いたと、はっきり語っているのは、その歌に感動し、繰り返して聞いた可能性があると考えられる。ウリゲルト・ドーについて、白・Sは次のように答える（*は筆者の質問した内容、以下同じ）。

*ガーダー・メイレンについてどこから聞いたのですか。

白：ウリゲルト・ドーだ。ドルジ・ホールチの語ったウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』を聞いた、何回も聞いた。ホーリン・ウリゲルも聞いたことがある。

*最近も聞いているのですか。

白：ホーリン・ウリゲルなら、ほとんど毎日ラジオで聞いているが、ガーダー・メイレンについては、何回も聞いたことがあるので、そのストーリーが強く記憶に残っている。ラジオが出てくる前は、村でホールチを招いて、ウリゲルなどを語らせてもらっていた。僕は、それを聞くのは好きだから、いつも料金を払って聞いていた。

*ガーダー・メイレン蜂起軍のメンバーと彼らの戦闘の場所について覚えていますか。

白：蜂起軍のメンバーというのは、俺の記憶では、有名なポーチ（射手）として、ゴンボ・ダ、ジョダバーという二人がいたようだ。彼らは、この辺のウリジムレン河の西側から、トシエト旗、ジャルタ旗、天山、開魯、ボーリンオーラ（玻璃山）一帯で戦った。

*ガーダー・メイレン以外のウリゲルト・ドーも聞いたことがありますか。

³²⁷ 徳吉徳『達爾罕文史』、190 頁。

³²⁸ エムネ・ハマトダ（南哈拉吐達）村に住む包・C（女、1945 年生）はドルジ・ホールチの歌ったウリゲルト・ドーの中で、ムーダンの娘殺し話を聞くたびに、感動し、涙を流してしまうと語る（2013 年 9 月 20 日、同村における包・C へのインタビューによる）。

白：もちろんあるよ。例えば、『トクトホ・タイジ』、『バーリン・テレー』など³²⁹。

呉・H（男、1951年生）もウリゲルト・ドーをよく聞いていたという。

＊ガーダー・メイレンについてのウリゲルト・ドーを聞いたことがありますか。

呉：ある。子供のころから、隣の村のボルジャというホールチの歌ったウリゲルト・ドーを聞いていた。ホイトネレトホショー（qoitu neretü qusiḡu）という村では金アラタンバガナという民間芸能者がいた、彼もよく歌える。

＊最近、誰の歌ったウリゲルト・ドーをよく聞いていますか。

呉：最近テレビでイダンジャブ・ホールチの歌ったウリゲルト・ドーをよく聞いているよ。また、テレビやラジオのモンゴル語チャンネルでは、ガーダー・メイレンの歌が放送されていて、それをよく聞く³³⁰。

呉にとっては、ウリゲルト・ドー以外には、上の世代の語りや老人の語り、ウリゲルト・ドーのテキスト（彼はそのテキストを持っており、自分でも読んだことがあるという）も、ガーダー・メイレンについて知る重要な媒介になっていたと思われる。彼の父の語りによれば、隣の村（qabung-yintobu/団結屯）の白七十三という人の結婚式の際に、ガーダー・メイレン蜂起軍が来てご飯を食べたことがあったが、彼らは民衆の財産を奪うといった迷惑をかけたことがなかったという。

これについては、白・Sも自分の母から、その話を聞いたと語っている。その結婚式では彼の母親も手伝っていたので、その日の蜂起軍の活動の様子を目撃したという。蜂起軍が入ってきた際には、皆はホンホス（匪賊）が来たと恐れていたが、彼らは誰の財産をも奪い取ることもなかったという。白・Sの住んでいる村は、呉・Hの村の隣にあるので、二人の上の世代は確かに接触した可能性もあり、しかも、その結婚式で目撃したことを、後の世代に語った可能性もあると考えられる。

³²⁹ 2013年9月12日、内モンゴル・ホルチン左翼中旗のジュールガンモド（珠日干毛都）における白・Sへのインタビューによる。

³³⁰ 2013年9月12日、内モンゴル・ホルチン左翼中旗のスーリンノトボ（民主屯/包力召）における呉・Hへのインタビューによる。

それでは、ウリゲルト・ドーが人々の記憶形成にどのような影響を与えたのか。この問いを答えるには、ウリゲルト・ドーがどのようにテキスト化され、どのように語られたのかを確認する必要がある³³¹。

調査地域において、人々は、「文化大革命」が始まる前に、ホールチを招いて、ウリゲルト・ドーやホーリン・ウリゲルなどを語らせていたが³³²、「文化大革命」が終結した後、各地の放送局からホールチの口演を聞くようになったと考えられる。特にホールチのドルジ（Dorji）の1982年の口演、チャガンバラス（Čayanbars）の1983年の口演が有名で、この二人のホールチの名前は、聞き取りの中で頻繁に言及されている。1980年代以降、録音テープに吹き入れたウリゲルト・ドーなどが市場に売れるようになり、一部の人々がテープレコーダーを通じて、繰り返して聞いていたと思われる。

ホルチン左翼中旗の人々にとっては、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』が歓迎され、その内容がよく記憶されているのは、ガーダー・メイレンは本旗出身で、有名な人物からである。また、娯楽の少ない当時の人々にとっては、それを聞くことは、彼らの生活の一部になっていたと考えられる。

金・M（男、1949年生）と同じ村で住んでいる孟・O（女、1927年生）は、ガーダー・メイレンのウリゲルト・ドーを聞くのが好きだったため、何回も聞いたことがあると語る。

＊ガーダー・メイレンについて話していただけませんか。

孟：ホワン・ガラガホ（quvang yaryaqu/荒野を開放する）ことで、モンゴル人と漢人が対立するようになってね、メイレン・アープ（abu/お父さん）はモンゴル人の土地を守るために、死んじゃったの。ああ、わがモンゴル人のために、死んじゃったのよ、非常に残念で、窮屈な思いをさせられるわ。モンゴル人の土地のために戦った人だからね、尊敬する人が多いのよ。

＊お婆さんは、はじめてどこからその話を聞いたのですか。

孟：その時代はね、私はまだ物心のつかない子供だったので、よく分からなかったのよ。だけど、上の世代からその話をよく聞いていたわ。私は文盲なので、歴史とか、なにも分からないんだけど、上の世代からの語りを記憶するしかないのよ。

³³¹ ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』のテキスト化については、拙稿「中国・内モンゴルにおけるガーダー・メイレンの記憶とその変遷」、306-312頁に詳しい。

³³² 白・N（男、1937年生）は、1954年、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』をゴーニャン・ホールチから聞いたとはっきり語っている。

＊おばさんにとって上の世代の語りの何が記憶に最も強く残っているのですか。

孟：ガジル・ショロイ（*γajɪ sɪroi*/土地）だよ、ガジル・ショロイ。

＊この辺で、蜂起軍が来て戦ったことがありましたか。

孟：この辺には来てないわ。シェブルト一带には来たそうね。

＊ムーダンの娘殺しは本当にあったことですか。

孟：本当よ。ミーダン（ムーダン）が夫を救出するために、自分の手で娘を殺しちゃったのよ。それ以外の方法がないからね、殺さないと、絶対、敵に殺されるから。

＊ガーダー・メイレンのウリゲルト・ドーやホーリン・ウリゲルなどついて聞いたことがありますか。

孟：ウリゲルト・ドーが好きだからね、集団農業の際、ゴニガというホールチが村に来ていたので、彼の語ったウリゲルを聴いたことがあるわ。ゴニガ・ホールチは2、3回も来たことがあると思う³³³。

孟の語りから見ると、彼女の記憶形成には、ウリゲルト・ドーの影響が強かったが、上の世代の語りも重要な影響を与えたと推察できる。また、「メイレン・アープ（お父さん）はモンゴル人のために死んじゃった」と繰り返し言及し、ガーダー・メイレンのことを自分のアープ（お父さん）のように尊敬している同時に、「非常に残念な気持ち」が伝えられている。彼女の語りの中では、ウリゲルト・ドーで歌われる張督軍（張作霖）や、ダルハン王による蒙地開墾の記憶ではなく、むしろ、モンゴル人の被害の記憶が特に強調されている。その残念さが感じ取らせるのは、上の世代の語りに影響された面が強いのだろう。孟は満州国時代の土地政策と中国共産党の土地改革などを自分で経験しており、モンゴル人にとっては、土地や牧場が如何なる重要なものであるかをよく強調している。そのため、彼女の語りには、満州国時代の日本人についての語りや、共産党による土地改革の話も登場するが、モンゴル人の土地が外敵（漢人による開墾、日本人による蒙地俸上³³⁴）によって奪われた「被害の記憶」が特に言及されている。

³³³ 2013年9月14日、内モンゴル・ホルチン左翼中旗のパローンホイト・ハラトダ（西北哈拉吐達）における孟・0へのインタビューによる。

³³⁴ 1930年代当時、内モンゴル東部地域では、入植者の漢人と現地のモンゴル人の間で、土地をめぐる複雑な権利関係が作り出され、また、1932年の満州国の樹立を契機に、従来モンゴル人が蒙地に対して有してきた諸権利も断ち切られることになり、それは「蒙地俸上」と呼ばれていた（広川佐保「満州国における「蒙地俸上」について―「蒙地整理案」と「開放蒙地調査資料」をもとに―」『アジア経済』43(8)、2頁、2001年を参照）。

一方、前述した白・S と呉・H の記憶形成には、ウリゲルト・ドーからの影響が強かったが、上の世代の語りの影響を受けたことが否定できない。二人とも、「隣の村の白七十三という人の結婚式であった出来事」を記憶しており、その内容はウリゲルト・ドーで歌われていない。

したがって、孟・0 にとっても、白・S と呉・H にとっても、ガーダー・メイレンの記憶はウリゲルト・ドー、あるいは、上の世代の語りだけから獲得されたのではなく、ウリゲルト・ドーのイメージと上の世代の語りが同じところで繰り返して語られて初めて獲得されたと考えられる。もちろん、彼らの上の世代全員が出来事を目撃者や経験者であったわけでもない。しかし、後の世代への語りが大きな役割を果たした。

モーリス・アルヴァックスによれば、「個人的記憶は、完全に孤立した、閉鎖的なものではない。人間は、彼の外部にある社会によって定められた基準点を参照する。その上、個人的記憶の機能は、言葉とか観念などの用具がなければ発揮されないが、それらは個人が発明したものではなく環境から借用したものである」³³⁵。草の根社会の人々にとっては、彼らの外部にある基準点はウリゲルト・ドーやホーリン・ウリゲルの他に、上の世代の語りや老人の語りである。彼らは、口承によって伝えられている経験談や伝聞、ウリゲルト・ドーなどを通じて、ガーダー・メイレンを記憶している。

3. 蒙地開墾によるモンゴル人の「被害の記憶」

1940 年代の中国共産党の文芸政策と 1958 年の民謡運動の影響を受けて作られたウリゲルト・ドーの多くのヴァリエーションには、ガーダー・メイレンがダルハン王や張作霖などの圧迫階級に対抗した「階級闘争の英雄」として描かれるが、草の根社会の人々の中では、むしろ、蒙地開墾によって故郷を追われた被害を受けるモンゴル人の様子が記憶され、ガーダー・メイレン自身も、モンゴル人の土地と利益のために戦って犠牲者になった「被害者」として語られている。

蒙地開墾によるモンゴル人の「被害の記憶」に関しては、上で取り上げた孟・0 の他に、ガーダー・メイレンのホーリン・ウリゲルを語ったテムレー (Temür-e) ホールチはホールを演奏しながら、次のように語る。

³³⁵ モーリス・アルヴァックス『集合的記憶』、46頁。



図 5-2 テムレーホールチはホーリン・ウリゲルを語っている

(歌から始まる)

Uritu жүг-еңе нисүгед yirekü ulayan җалауun-u җулҗау-a
 Uritu yeke mören-degen sayuqul ügei-ber nисүni de
 Urbayad җарууsan Loo Ғadan-u uңir boloyad yabudal-i
 kelebel-e
 Ürgen olan mongylcuud-ıyan җајar siroin-u tusada yüm-e
 Qoitu жүг-еңе нисүгед yirekü qalıуun җалауun-u җулҗаg-a
 Qoitu yeke mören-degen sayukiši ügei-ber nисүni de
 Qobisuyad җарууsan Loo Ғadan-u uңir boloyad yabudal-i

kelebel-e

Qusiуun-u olan ügeičüüd-nü-ıyan җајar boloyad siroin-u tölöge yüm-e

(日本語訳文)

南から飛んでくる雁のひなよ
 南の大河に舞い降りずに飛び立てようか
 反逆したロー・ガードーのことを言えば
 広範なモンゴル民衆の土地のためだったのだ
 北から飛んでくる雁のひなよ
 北の大河に舞い降りずに飛び立てようか
 変革を起こしたロー・ガードーのことを言えば
旗の広範な貧しい人たちの土地のためだったのだ

〔中略〕

Qayaly-a-yin emün-ıyen җойsoyad
 Qaraqı nıdün-ıyen sungyayad
 Dörben жүg-i Ғada üјel-e
 Qoisi-ıyan uryan dörben жүg
 Belčijü yabuју baiу-a kümün-üde
 Kümüsge nitüregend җoburi-tai
 Egüden emün-e җarču yireged
 Üјikü nıdү-i sungyayad
 Eng delekei-i baičayaqu-da

Emün-e qoin-a belčijü yabuγ-a kumus-üde

Ergükü nidün-degen bayar-ügei ki

(日本語訳文)

ガーダーはドア前に立って、周りを見たら、

四方に逃げる人々が眉をしかめ、悲しむ

ドアの前に出てきて、目を上げたら

悲しい目にあった人々はあっちこちに逃げる

(これまでは歌、ここから語りが始まる)

ガーダー・メイレンは、故郷を追われ、北のほうに向かう一人老人（この老人は荷車に荷物を載せ、子供たちを連れていた）から聞く。

ガーダー・メイレン：「なんでこんな有様になってしまったのですか、そしてどこへ行くのですか？」。

老人：「ああ、言うこともないでさあ。デースンチェリグが入ってきて、土地を測量し、俺たちを殴って、故郷を追い出したんじゃ、牧場が奪い取られ、故郷も占領され、生活することができなかったんで、別のところを探して移動しとるんじゃ」。

ガーダー・メイレン（ため息をつぎながら）：「おじさんのところで、皆不幸に見舞われていますか」

老人：「そうじゃよ、ボルハルジン（boro qaljın）からボルチャ（bolčo）までの牧場が全部測量・占領され、皆は牧畜に従事することができなかったんじゃ。昔から住んでいた故郷はすぐ敵の手に入ってしまったもんだから、別のところに移動して生計を維持していく以外の方法がないのじゃ」。

これを聞いたガーダー・メイレンは心中の怒りを抑えることができずに（ここから歌が始まる）：

Ebüged-ün üy-e-eče amiduraǰu sayuγsan nutuγ yüm-e

Üjekü-yin jaγur-a üsiyeten-ü γar-tu oroqu-deger-e tulla-da

Üsbüri nasun-u kümus-un üy-e-eče ejeleǰü baiγsan siroi yüm-e

Odo nigente talaydayad ügei lie bolqu-deger-e tulla-da-ki
Mönö бүкүн-i bodayad masi dotor-a-ban ayurlayad
Man-u yeke wangye mini-e man-ıyan guan-ıyan baisigl-a
Alus Begejing-eče ayalayad Mügden-dü jalaraǵu sayuysan-yüm-e
Odo očıǵu kelelčıǵu baiyad boloy-a-ged ončayai todor-a-ban yayaran-a
Časun čayan külüg-degen emegel qaǵayar ǵasayad
Aqas yagum-a-ıyan tegeged ayta-ban yuyadayad yaruysan-yüm-e
As uryan qanduyad nigen edür yabuyad
Tongliao-du yireged mori-ıyan qayayad
Mügden-i čigleǵu yarču gen-e-ki

(日本語訳文)

昔から暮らしてきた故郷だよ
今すぐ敵の手に入るようになった
祖先の時から支配していた土地だよ
今日すでに失われるようになった
ここまで考えて、怒りを感じるよ
わがダルハン王は我々のことを顧みなくなり
遠い北京から奉天に戻って住むようになった
今すぐ伺いに行って請願しようと
白い駿馬に支度をして、駆って行った
南のほうに向かって、一日走り
通遼に着いて、馬を置き、奉天へ向かったという³³⁶

上の引用は聞き取り調査の中で、現場で語ってくれたホーリン・ウリゲル『ガーダー・メイレン』の一部を書き取って翻訳したもの³³⁷であり、蒙地開墾によって故郷を追われるモンゴル人の惨状を目撃したガーダー・メイレンは奉天へ請願するために出発した内容で

³³⁶ 2013年9月15日、内モンゴル・ホルチン右翼中旗の南バヤントハイ・ガチャにおけるテムレーホールチへのインタビューによる。テムレーホールチへは、元々ホルチン左翼中旗（ダルハン旗）のエレーンアイル（Eriyen ail）出身だが、後に現在の住所に移動してきた。

³³⁷ ここでは、モンゴル語（ホルチン方言）から逐語訳したが、文章化されることによって、ホーリン・ウリゲルとしての効力が失われてしまう可能性がある。例えば、文章化されることによって、ホルチンの演奏した曲や、感情的なものがすべて省略されてしまう。

ある。この場面はテムレーホールチの語ったホーリン・ウリゲル『ガーダー・メイレン』(1980年録音、全30回)でも登場するが、内容が少し異なる³³⁸。ラジオ局で放送するものではなかったので、政治政策や放送局の職人に左右されることなく、比較的自由に語ったと考えられる。

冒頭で歌われる歌はウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の一部であり、しかも、今日の内モンゴルにおいて、もっとも広範な範囲で歌われている。しかし、歌の第2段で歌われる「革命を起こしたガーダー・メイレンのことを言えば、広範なモンゴル民衆のためだったのだ」という内容はテムレーホールチによって「旗の広範な貧しい人たちの土地のためだったのだ」と歌われている。また、故郷を追われる一人の老人の語りによって、旗の貧しい人たちの受けている被害が特に強調されている。テムレーホールチは子供の頃から貧しい家庭で育てられ、ホールチの家で農耕をしながらホーリン・ウリゲルを勉強したという。したがって、彼の語りにおいて、モンゴル人の受けた被害の記憶が強調され、貧しい人たちのために立ち上がった「ガーダー・メイレン像」が浮かび上がったのである

このようなウリゲルト・ドーやホーリン・ウリゲルなどに描かれるモンゴル人の苦難の記憶は、聞き取り調査の中で、他の語り手によっても頻繁に言及されている。こうした集合的記憶は、共産党の宣伝政策の一環として作られた漢語版のウリゲルト・ドーや他の諸芸術作品で描かれるイメージ(つまり、軍閥とダルハン王に対抗した「ガーダー・メイレン像」と異なり、人々の記憶に残っているモンゴル人の「苦難の記憶」である。

4. 語りと場所(空間)の関わり

調査地域の人々の記憶形成において、ウリゲルト・ドーや上の世代の語りが重要な影響を与え、語りの主な内容が一致しているが、彼らの住んでいる村(場所)によって、語りの内容が少し異なる場合もあった。例えば、呉・D(男、1939年生)は、ガーダー・メイレンのモンゴル人の土地のための戦ったことを認める一方、「モンゴル人の裏切り者」とされる韓色旺のことを頻繁に口にした。彼によれば、「韓はボルジャ(包力召)の人、満州国

³³⁸ 1980年に録音されたホーリン・ウリゲル『ガーダー・メイレン』の内容は1960年に出版されたエドヘシングによる『嘎達梅林的事迹』などの伝記の影響を受け、地元の人々の対立が描かれるが、「階級闘争」の枠組みで描かれる「ガーダー・メイレン像」である。しかし、蒙地開墾によるモンゴル人の苦難の記憶もある程度、伝えられている。

から逃げようと思ったが、日本人に逮捕され、薬を飲まさせ、精神病になり、亡くなってしまった。実は彼もモンゴルのために考えた人だった」³³⁹という。

呉・Dの祖父は韓色旺の仆人であって、スリンノトボ（民主屯/包力召）³⁴⁰を守って、韓の耕作をやっていた。そのため、彼は祖父から韓色旺や、ガーダー・メイレンについてよく聞いたという。彼の語りの中では、ガーダー・メイレンの部下である小ラマというポーチ（射手）の話や、「ベーレン・テレー」などの話も登場するが、彼は必ずしも提出した質問を答えるのではなく、韓色旺のことを繰り返し話した。したがって、彼の記憶形成に影響を与えたのはウリゲルト・ドーよりは、上の世代の語りや、彼の住んでいた場所であると考えられる。なぜなら、「実は韓もモンゴルのために考えた人だよ」と語るのはウリゲルト・ドーで登場する「モンゴル人の裏切り者」としての韓色旺のイメージと対照的だからである。同じ村に住む呉・H（男、1951年生）も、韓色旺と彼の女婿のイエーシダンバについて言及していた。

また、ガーダー・メイレンの戦死した村（ホンゴルオボー/洪戈爾敖包）に住む呉・C（男、1939年生）は次のように語る。

村の人の話によれば、ガーダー・メイレンは扎魯特旗のガハイト、ナイマラジー帯での戦闘で敗北した後、自分の故郷に戻り、10名の腹心、8名の兵士を率いてウリジムレン河のハリヤチャイン・エリ（Qariyačai-yin erki）³⁴¹を渡る時に、ちょうど、川の氷が解けはじめた春の時期であったので、溺れで戦死した。 فقط、敵の銃弾で戦死したという説もある。どちらの説が正しいのかはわからない。とにかく、現在の記念碑が建てられたところで死んだわけだ。〔中略〕俺の父はホールチであったので、ウリゲルや歌をよく歌ったり、語ったりしていた。また、有名なホールチの中で、ドルジ・ホールチの歌をよく聞いていたよ³⁴²。

³³⁹ 2013年9月12日、内モンゴル・ホルチン左翼中旗のスーリンノトボ（民主屯/包力召）における呉・Dへのインタビューによる。

³⁴⁰ スリンノトボ（民主屯//包力召）は韓色旺の女婿であるイエーシダンバの住んでいた村である。ここでは、「スリン」というのは漢語の「司令」から借用した言葉であり、「トボ（tobu）」は通常、具体的な住居一建物を指す意味で使われていると同時に、農耕地域ではさらに村落名の一部として使われているのがよく見られる（ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、259頁）。満州事変後、韓色旺はモンゴル自治軍の第2司令官に就任したことがあり、おそらく、この村の名前がその時からこのように名づけられるようになったと考えられる。

³⁴¹ 呉・Cによれば、ハリヤチャイン・エリへ（Qariyačai-yin erki）のエリへ（erki）は河の一番深いところで、その傍にハリヤチャイ（ツバメ）が巣を建てたので、そのように名づけたという。

³⁴² 2013年9月15日、内モンゴル・ホルチン左翼中旗のホンゴルオボー（洪戈爾敖包）における呉・Cへのインタビューによる。

呉・Cは2004年からガーダー・メイレン記念碑の守り人（守陵人）として、現在まで働いている。記念碑の隣に小さい部屋も建てられ、彼はそこにも住む場合もある。彼はガーダー・メイレンのウリゲルト・ドーについてよく聞いていたが、語りの中では、主にガーダー・メイレンの戦死した時の様子が登場する。このような語りも彼の住んでいる場所、つまり記念碑が建てられた場所と無関係ではない。したかつて、彼は、記念碑の建てられた経歴についても詳しく語っており、「モンゴル人のために戦った英雄」のガーダー・メイレンの業績を高く評価している。また、「ガーダー・メイレンはモンゴル人の利益のために戦ったとされているが、この辺の地域ではモンゴル人だけではなく、漢人も暮らしていたので、漢人も彼の業績を肯定しており、土地を巡っての漢人とモンゴル人の対立はなかった」と語る。

一方、ダルハン王府が建てられた村（ホローンアイル/浩日彦艾勒）の包・T（男、1944年生）はホローンアイル³⁴³（村）の名前の来歴、ホルチンの歴史、満蒙連合からガーダー・メイレン蜂起まで、非常に詳しく語る事ができた。彼は歴史に関する本を読むのは好きなので、ガーダー・メイレンについて、本やウリゲルト・ドーだけではなく、隣の村の張大叔³⁴⁴という老人からその話をよく聞いていたという。

ガーダー・メイレンはオロインモドに住んでいた。〔中略〕張督軍（張学良）がモンゴルの土地を開墾してから、ベーリン・テレーからシェブルトまでの土地が測量された。今の通遼や、開魯などの県が設立されたのは、漢人の入植の結果だ。〔中略〕それで、モンゴル人たちが砂漠などの不毛の地に追いやられちゃった。デースンチェリグはやってきて、人々を殴ったり、土地を奪い取っていったりしたことをガーダー・メイレンが見て、耐えられなかったため、立ち上がったわけだ。ガーダー・メイレンは貧しい人々のためであり、彼の思想や対抗運動は、実はトローヤ（陶老爷/トクトホ・タイジ）の影響を受けていた。だが、貧しい人々だけが彼を想起し、忘れない。〔中略〕蜂起を起こしたガーダー・メイレンが人々を集めて戦ったのだ。もちろん、その

³⁴³ 包・Tによれば、ホローンアイルというのは、「王のホロー（quriy-a）」（＝王府）が建てられたアイル（＝村）という意味を持っている。

³⁴⁴ 包・Tによれば、張大叔はハラチン出身で、ジャムインホトグル（jam-yin qutuyor）というところで住んでいた。彼はダルハン王府ピチゲンゲルの料理人であって、ガーダー・メイレンによって、命が助けられたことがあり、投獄中のガーダー・メイレンも彼の助けを受けたことがある。また、彼の送った情報を受け取ったムーダンが牢屋を潰して、ガーダー・メイレン救出に成功したという。

中で、匪賊も加えていて、ガーダー・メイレンの命令に違反し、豊かな人々の財産を奪ったことがある。これは史実だ。蜂起の失敗した原因もこれに関わっている。匪賊たちのリーダーするのは大変なことなんだ。ガーダー・メイレンの立ち上がった目的は本当に貧しい人々のためだった。当時のモンゴル地域では、援助がほとんどなかったんで、匪賊たちに頼るしかなかっただ³⁴⁵。

包・Tの住んでいる村は、元々、ダルハン王府が建てられたところで、しかも、ガーダー・メイレンの住所と勤務していたところからも近かったので、彼の語りには、ビチゲルゲルの料理人であった張大叔について言及する同時に、ダルハン王府のことや、ムーダンのガーダー・メイレン救出の話が出てくる。一方、ガーダー・メイレン蜂起軍の中には「匪賊も加わっており、ガーダー・メイレンの命令に違反し、豊かな人々の財産を奪い取ったことがある」と語るのは、民国側の新聞記事で報道される内容と一致している。この話は、後の節で取り上げる包・B（男、1973年生）と包・S（男、1982年生）の語りの中でも登場する。しかし、このような語りは、ウリゲルト・ドーなどではほとんど歌われない内容であり、草の根社会における記憶と語りの複雑さを表していると思われる。

包・Tによれば、蒙地開墾によってモンゴル人たちは不毛なところに追われたので、土地を巡って、モンゴル人と漢人の対立があったという。また一方、モンゴル人の遊牧できる草原が狭くなり、ガーダー・メイレンが遊牧民の牧場のために立ち上がったので、その出来事の背景として、遊牧文明と農耕文明の対立と矛盾もあったという。聞き取り調査の中で、語り手20名の内、7名は土地を巡って、モンゴル人と漢人の対立があったと答えている。

ガーダー・メイレン蜂起に関して、上の3人はそれぞれ、自分の住んでいる場所にあった出来事を主に記憶しており、それ以外の出来事にはほとんど言及してない。彼らは、その場所で何十年以上住んでいるので、そこにあった出来事や、村において共有される記憶を老人の語りや、上の世代の語りから継承した可能性があると思われる。このことから、集合的記憶の形成において、場所、あるいは空間的イメージは重要な役割を果たしていると考えられる。モーリス・アルヴァックスによれば、個人の記憶は周りの人々の相互関係や個人の所属する集団の枠組みで過去を記憶し、想起するのである。また、彼は、集団の

³⁴⁵ 2013年9月16日、内モンゴル・ホルチン左翼中旗のホリヤンアイル（浩日彦艾勒）における包・Tへのインタビューによる。

思い出は安定した空間（＝場所）と結び付けられることによって維持されると指摘する。

「集団は場所と結びついている。なぜなら、空間の上で接近しているという事実が、それらの成員間に社会的諸関係を作り出しているからである。〔中略〕同じ地区の住民が一つの小社会を形成するのは、彼らが空間の同じ地域に集合しているからである」³⁴⁶。呉・Cの所属する集団はホンゴルオボーという村であって、この村に纏わる記憶は主にガーダー・メイレンの戦死や記念碑に関する思い出である。これに対して、包・Tの所属村はダルハン王府があったところなので、彼の語りは、王府の印務処の料理人やガーダー・メイレンの軍務メイレンとして働いていた場所に関するものであった。

5. ウリゲルト・ドー、ホーリン・ウリゲルと老人の語りの内容がなぜ異なるのか

ここまで見てきたように、人々はウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』や、老人の語りの影響を受け、ガーダー・メイレンのことを「モンゴルの土地と利益のために立ち上がった英雄、犠牲者」と評価している。しかし、その一方で、「ガーダー・メイレンのホンホス（匪賊）」(Gada Meiren-u hongyusa) は、豊かな人の財産を奪い取ったことがある」と語る人もいた。例えば、自分の居住村に宿営したガーダー・メイレン蜂起軍を目撃した戴・L（女、1918 生）の語り中では「匪賊としてのガーダー・メイレン」の話が登場する。

＊おばさんがガーダー・メイレン蜂起軍を目撃した時の様子を教えてくださいませんか。

戴・L：7 月（旧暦）ごろと思うんだけど、突然、窓の傍に立っていたお兄ちゃんが「灰色の服を着たラマ（僧侶）たちが白興吐で読経した後、こっちへ向かっているんだ」って言ったけど、近づいて見たら、ラマじゃなくて、肩に銃をかける匪賊団とわかったのよ。ガーダー・メイレンの匪賊団だったの。彼らは村に入ってから、人々をあまり怖がらせることはなかったが、それぞれ皆の家に入った。その時、私は初めて匪賊を見たの。

＊彼らは村に入ってからどのぐらいの時間留まったのですか。

戴：1 泊泊まって、次の日の朝、夜明け前に出発したわ。私の大兄を連れて行っちゃったの。匪賊たちは4、5頭の馬を大兄に引くように要求し、後からを追いかける部隊（黒馬隊）と激戦になったの。大兄が（そのチャンスに乗じて）家に戻ったが、あまりにも怖い

³⁴⁶ モーリス・アルヴァックス『集合的記憶』、175 頁。

経験で、ショックを受けてしまった。お母さんはラマなどを招いて、「スンス・ドーダホ」³⁴⁷ とか、いろいろやってもらって、1 か月以上経てやっと精神状態がよくなった。

〔中略〕

＊彼らは村に来てから、何をやりましたか。

戴：ボイントクトホ³⁴⁸というバヤン（お金持ち）の羊や牛などを殺して食べて出発したわ。その後、追いかける部隊も入ってきたの。

＊彼らはその人の羊などを奪い取って食べたんですか、それとも、ボイントクトホ自身が自発的に彼らをご馳走したのですか。

戴：もちろん、奪い取って食べたのよ。ホンホスをご馳走したわけじゃない。彼らは自分で奪い取って、それぞれ皆の家（家ごと）に持ってきて食べたの。

＊私の聞いた限りでは、ガーダー・メイレン蜂起軍が皆の財産を奪い取ったことがあまりなかったと聞いたのですが、（そのお金持ちの）羊などを奪い取ったのは確かなことですね。

戴：そう。確かに、皆にはあまり迷惑をかけなかったけど。私たちも、そのホンホスより、後から追いかけて入ってきた部隊を見てすごく怖がったの。追いかける部隊が「黒馬隊」と言われていたけど、彼らは入ってから、我々の服などを見て、「これは全部ホンホスの残したものだ」と言って、奪い取っていったの。

〔中略〕

＊ボイントクトホの羊などを奪い取ったのはガーダー・メイレン自身の命令によるものなのですか、それとも、その部下たちによる勝手な行為なのですか。

戴：それについては、はっきりわからないわ。私は、妻のムーダンが馬に乗っていたのを見たことがあるのだけれども、メイレン自身を目撃したことはなかった。私もその時、13 歳ぐらいの子供だったので、そんなに気にしていなかったのよ。その後、「ガーダー・メイレンのホンホス」だったとわかったの。

³⁴⁷ モンゴルでは伝統的に、人間の「スンス(sūnesü)＝魂」の存在を信じ、これを行動性があり、何らかの原因で肉体を離れ、浮遊するものであると考えられてきた。そしてたとえば、外部から何か強いショックを受けるなどして、正気を失ったり、普段のような元気がなくなったりした場合、また、精神的なダメージから立ち直れなくなった場合などに、その原因を、肉体からの魂の離脱によると判断し、魂をもとの肉体に呼び戻す、いわゆる「招魂」の儀礼を行う。「招魂」の儀礼＝スンス・ドーダホ儀礼は、生きた人間の魂を肉体に呼び戻す儀礼を指す（チョク「内モンゴル東部ホルチン地域におけるスンス・ドーダホ儀礼について―フレイ・ホショーの事例を手掛かりにして、東京外国語大学修士論文、2013 年、1 頁」）。

³⁴⁸ 当時、ボイントクトホというお金持ちは、その村の一番豊かな人で、羊だけで 500 頭以上持っていたという。

＊彼らは村に入ってから、ほかにも何かやったことがあります。

戴：馬などを運動させるとかね。家に入ってから「馬を運動させて！」、鶏や羊、牛などを持ってきて、「食事をやってくれ！」とかね、そんなことを村人たちにやらしていたわ。

＊その後、ガーダー・メイレンについて聞いたこともありますか、例えば、ウリゲルト・ドーなど。

戴：あまり聞いたことがない。ウリゲルなどについてあまり興味がないので³⁴⁹。

戴・L 老人の語りの内容はウリゲルト・ドーの内容と異なっており、彼女の記憶ではガーダー・メイレンは「民族の英雄」とよりは「ホンホス（匪賊）」のイメージが強かった。彼女はガーダー・メイレン本人を目撃したことがなかったが、13歳時、村に宿営した蜂起軍について、はっきり覚えている。自分の大兄も蜂起軍（ホンホス）に強制的に連れて行かれ、馬を運動させ、両側の戦いに挟まれたことにより、トラウマになったことは、彼女の家族にとっては大きな影響を受けたと言える。ポイントクトホの羊などが奪い取られたと語っているが、弟の戴（朱）・L（男、1923年生）は否定している。約15分のインタビューでは「ガーダー・メイレンのホンホス」という言葉が頻繁に言及されており、「モンゴル民族の英雄」などの言葉が全く登場しない。彼女はウリゲルト・ドーなどについてもあまり聞いたこともなかったもので、その影響をほとんど受けてないと言える。彼女は文盲であって、その出来事について「他の人々からもほとんど聞いてない」と答えているので、自分の経験したことしか語っていない。

彼女の語りは息子のゲゲルト（Gegereltü）によって整理され、『ガーダー・メイレンの想起（*Tada meyiren-u durasumji*）』³⁵⁰という本の中で収録されているが、「ガーダー・メイレンのホンホス」という言葉は「ガーダー・メイレンの蜂起軍」と書き換えられている。確かに、「モンゴル民族の英雄」と位置付けられている現在、「ガーダー・メイレンのホンホス」と言われるのは、英雄の名誉を傷つけてしまうので、そのように書き換えられたのだろう。しかし、1930年代においては「ガーダー・メイレンのホンホス」という表現はよく用いられ、民国時代の新聞記事でも報道されていた。

³⁴⁹ 2013年9月23日、内モンゴル・ホルチン左翼中旗の宝龍山鎮における戴・Lへのインタビューによる。彼女はインタビュー当時、宝龍山鎮の息子の家に泊まっていたが、元々の居住村は白興吐ソムのオルドマンハンアイル（*Uritu Mangqan ayil*）に住んでいた。現在、花胡碩ソムのシャンシーンアイル（*Šangsi-yin ail*/尚辛艾勒）に住んでいる。

³⁵⁰ Gegereltü, “Tada meyiren urtu mangqan ail-du bayudallaysan-i”, P.Oči nar jökiyaba, *Tada meyiren-u durasumji*, Öbör mongyol-un baγačuud keked-ün keblel-ün qoriy-a, 2005 on, pp.192-199.

一方、彼女の弟の戴（朱）・L（男、1923 年生）もその出来事（蜂起軍が村に宿営したこと）について経験したが、蜂起軍はポイントクトホの羊などを奪い取ったわけではないと語る。彼は蜂起軍の生き残りであったジュリンガーという人からガーダー・メイレンについてよく聞いていたという。戴（朱）老人は満州国時代、私塾で4年間勉強した後、同級生の3人と共に軍隊に入隊させられ、1945年のソ連軍侵攻後、家に戻った。その後、アスガン司令の内モンゴル軍隊に参加し、「シェブルトの解放戦」にも参加し、1950年ごろ退役した。



図 5-3 出来事の日撃者である戴（朱）・L(左)と戴・L(右)老人

＊おじさんの聞いたことを教えていただけませんか。

戴（朱）：お姉ちゃんの言った通り、その時、「ガーダー・メイレンのホンホス」と言われていたが、現在は、我々の土地のために立ち上がったと言われている。本当はホンホスと言えない。ベーリン・テレー、シェブルト一帯の土地

が測量され、払い下げられたので、それに反対して逮捕され、脱獄して蜂起したわけだ。

＊誰からこの話を聞いたんですか。

戴（朱）：俺はジュリンガーという人からその話を聞いた。彼はポイントクトホの三男であって、ガーダー・メイレン蜂起軍に参加し、海山という漢語名を取ったんだ。ガーダー・メイレンが戦死する時、彼もその傍にいたそうだ。〔中略〕彼によれば、蜂起軍が（東北軍に）追いかけられ、河を渡る時、20、30人しかいなかった。ガーダー・メイレンは河に溺れて死んだそうだ。〔中略〕実は、ガーダー・メイレンらは北のほうに向かってハルハモンゴル（モンゴル人民共和国）に行こうとしたが、結局失敗しちゃった。ずっと（東北軍）に追いかけていたんで、故郷に戻り、河で戦死した。

＊軍隊にいた時は、ガーダー・メイレンについて聞いたことがありますか。

戴（朱）：その時、ほとんど聞いたことはなかった。退役した後、村で人からその話をよく聞いていたんだ。実際にジュリンガーという人はね、現在の言葉で言えば、革命をやっている人と言えるんだ。彼は、土地改革の時、また解放後もずっと、村の人々に「海山ホンホス」と呼ばれていた。ガーダー・メイレンにしたがっていたので、「ホンホス」と言われるのは当たり前でしょう。現在、ガーダー・メイレンの業績が高く評価されているが、

彼に従った人も高く評価されるべきじゃないかな。ガーダー・メイレンの蜂起軍が村に宿営した際に、ポイントクトホの三男のジュリンガーをガーダー・メイレンの養子として蜂起軍に参加させた。当時は16歳でね。その時、ガーダー・メイレンが彼の家に泊まったので、連れていったんだ。

＊ガーダー・メイレンが強制的につれて行ったのですか、それとも、ジュリンガー本人の希望で蜂起軍に参加させたのですか。

戴（朱）：いや、ガーダー・メイレンは彼を見て気に入ったので、ポイントクトホと相談した後、自分の養子として受け入れたそう。その後、ポイントクトホもそのことについて言っていたそうだよ。

＊そしたら、先ほどの戴・L（女、1918生）の話ですが、ポイントクトホの羊などを奪い取ったわけではないのですか。

戴（朱）：実際にガーダー・メイレン本人が村の人々の財産を奪い取ったわけじゃない。後ろから追いにきた黒馬隊は村の財産を奪ったことがあるよ。しかし、ガーダー・メイレンは「ホンホス」と言われていた。現在はそうではないけど、確かに、彼は蜂起しなかったら、ダルハン旗もなくなってしまったかもしれない。昔のダルハン旗はノーン10旗の第1の広い旗であったが、どんどん払い下げられ、今はこれだけの面積が残っているんだ。

＊ガーダー・メイレンについて他にも聞いたことがありますか

戴（朱）：ウリゲルト・ドーの一部だけを聞いたことがある。

＊ムーダンの娘殺しが本当にあったことですか。

戴（朱）：そう。夫を救出するために、娘を殺した。

＊ガーダー・メイレン蜂起を巡って、漢人とモンゴル人の対立があったんですか。

戴（朱）：漢人とモンゴル人の対立の問題ではない。ガーダー・メイレン蜂起の起こった原因は、ダルハン王は漢人の娘と結婚後、奉天に住んで、いいなりになっちゃって、ダルハン旗の土地が払い下げられた結果だよ³⁵¹。

戴（朱）の語っているように、彼は、蜂起軍の生き残りであったジュリンガーの影響を受けた。しかし、後半の語りの内容から見ると、ウリゲルト・ドーの影響も受けている。

³⁵¹ 2013年9月23日、内モンゴル・ホルチン左翼中旗の宝龍山鎮における戴（朱）・Lへのインタビューによる。

特に、蜂起の勃発した原因やムーダンの娘殺しの話をそのままウリゲルト・ドーで歌われている内容である。

一方、村に宿営した蜂起軍がポイントクトホの財産を奪い取ったことについて、戴・Lの語りと異なっている。また、インタビューの中では、ジュリンガーが村の人々に「海山ホンホス」と言われていたが、現在の視点から見れば、彼もガーダー・メイレンと同じように高く評価されるべきではないかと頻繁に繰り返している。確かに、ジュリンガーのような蜂起軍の生き残りについてはガーダー・メイレンの伝記資料でも言及されておらず、ウリゲルト・ドーのなかでも歌われていないまま忘却されている。

それでは、戴・Lと戴（朱）・Lの語りの内容がなぜ異なっているのか。また、戴・Lの語りはウリゲルト・ドーやホーリン・ウリゲルの内容となぜ異なるのか。戴（朱）・Lの記憶は、蜂起軍の生き残りや村の人々、ウリゲルト・ドーなどの多様な語りによって成り立っている。これに対して、戴・Lの記憶の根源が非常に単純で、しかも大兄の受けた精神的なショックが彼女にとって大きなインパクトを与え、匪賊に対して恐怖感を抱いていただろう。

「匪賊としてのガーダー・メイレン」の話は他の人の語りの中でも言及される。例えば、エムネ・ハラトダ（南北哈拉吐達）村に住む包・B（男、1973年生）は村のセーヘルという老人から聞いた話を次のように述べる。

〔前略〕ガーダー・メイレンが逮捕され後、妻のムーダンが人々を集めて、4歳の娘を殺し、ガーダー・メイレンを救出した。脱獄したガーダー・メイレンは、人々を集めて、ヨリンモド（腰林毛都）一帯で測量隊を殺し、ハラ・ボタイントン(qar-a buta-yin tūng)³⁵²を経て、トゥシェート旗の匪賊たちと合流した。その後、何回もダルハン旗に戻って、デースンチェリグを殺した。実際に彼らはデースンチェリグを殺した後、トロージャのように直接ハルハ・モンゴルに行ったらよかったね。だけど、ガーダー・メイレンはそうしなかった。彼が立ち上がったのは、ダルハン旗の土地のためだったので、何回もダルハン旗に戻って戦った。最後にガーダー・メイレンはダルハン王の部下（蒙奸、ガーダー・メイレンの親戚だったかもしれない）に騙され、偽弾薬をもらって、結局戦死したという。

³⁵² トン(tūng)は「漆黒の密林」という意味を持っている。「ハラ・ボタインドン」は現在のホルチン左翼中旗のヨリンモド（腰林毛都）鎮エムネ・ハラトダ（南北哈拉吐達）村の東北にあった密林のことをさしている。昔は「匪賊のトン」と言われたという。

ガーダー・メイレンは、モンゴル人の土地のために立ち上がったが、匪賊と連合し、匪賊になったのは本当のことだよ。彼らは人々の財産や食べ物を奪ったことがある。匪賊というのはね、農耕もやってないし、馬背で暮らしていた人々だからさあ、人々の食べ物を奪い取るしかないよ。しかも、正式な軍隊でもなく、1000 ぐらいの匪賊団の食べ物がどこからもらえるのか？援助がないので、奪い取って食べるしかないよね。

老人の話によると、〔中略〕ガーダー・メイレンの命令が厳しくて、人々に迷惑をかけなかったという。だけど、食べ物があれば、絶対出してあげなければならなかったそうだ。村のセーヘル老人の父は蜂起軍をよく招待したので、ガーダー・メイレンがセーヘル（当時子供であった）に自分の部下の着ていた服を挙げたことがあるそうだ。そのあと、部下が自分の服を暴力で戻したが、ガーダー・メイレンがその部下を殺したという³⁵³。

このように、「匪賊としてのガーダー・メイレン」のイメージはその出来事を目撃者である戴・Lの世代だけでなく、今日の一部のモンゴル人の間でも共有されている。包・Bが語るように、ガーダー・メイレンが蜂起したのはモンゴル人の土地のためだったが、匪賊と合流し、人々の財産を奪い取った可能性は否定できない。しかし、他の匪賊団と違って、モンゴル人の土地のために戦ったことは、モンゴル人の中で尊敬を集め、世代を超えて記憶され、共有されている。包・Bは文盲なので、過去の出来事について本や教科書を読んで知ったわけでもなく、村の老人の語りからその出来事の記憶を継承していると考えられる。彼にとっては、「ホンホス」としてのガーダー・メイレンのイメージが強く記憶されており、それはウリゲルト・ドーで歌われる「ガーダー・メイレン像」とやや異なる。

一方、ガーダー・メイレンの蜂起軍がエムネ・ハラトダ（南北哈拉吐達）村の東北にあるハラ・ボタインドンによく来ていたことは同村に住む包・C（女、1945年生）と包・S（男、1982年生）の語りでも登場するだけでなく、後の節で取り上げるウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』（1990年）にも描かれる。ダルハン旗（ホルチン左翼中旗）は山と森林が少ない平原であったため、ガーダー・メイレンは旗の密林などの陰しいところを利用してデースンチェリグとゲリラ戦を展開していた³⁵⁴。したがって、ハラ・ボタインドンとう

³⁵³ 2013年9月21日、内モンゴル・ホルチン左翼中旗のエムネ・ハラトダ（南北哈拉吐達）村における包・Bへのインタビューによる。

³⁵⁴ P.Oči, *Gada meyiren-u durasumji*, pp.201-202.

場所に結びついたガーダー・メイレンの記憶は、この地域の人々の間で共有されており、現在も語り継がれている。

第3節 ガーダー・メイレンの記憶と語りの根源ーウリゲルト・ドーの内容

以上のように、草の根社会に共有されるガーダー・メイレンの記憶と語りの分析を通じて、彼らの記憶形成において老人の語りが重要な影響を与えており、ウリゲルト・ドーの影響も受けていることが分かった。そのため、本節でウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の内容とテキスト分析を通じて、歌による人々の記憶のありようを描き出してみたい。

今日の内モンゴルにおいて、初等学校や中学校のモンゴル版と漢語版の音楽教科書にもウリゲルト・ドー冒頭の2段の歌詞が収録されている。おそらく、内モンゴルで普通教育を受けた人であれば、誰でもガーダー・メイレンの話を知っているだろう。

ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の各ヴァリエーションの中で、マン・ムレン (Mang Mören/芒・牧林) によって1990年に出版されたウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』³⁵⁵の内容や構成が一番完璧であると言えるだろう。なぜなら、このヴァリエーションでは長い間で語り継がれる各ヴァリエーションの内容が包摂されたからである。ここからは、1990の民謡ガーダー・メイレンの内容を少し紹介したい。歌詞は異なるが、内容を繰り返している部分を省略した。

1. ウリゲルト・ドーの歌詞

(1) 序歌

南から飛んでくる雁のひなよ
南のシラムレン河に舞い降りずに飛び立てようか
造反したガーダー・メイレンのことを言えば
あまねくモンゴル民衆の土地のためだったのだ

北から飛んでくる雁のひなよ
北のハラムレン河に舞い降りずに飛び立てようか
匪賊になったガーダー・メイレンのことを言えば

³⁵⁵ Mang Mören, “Arad-un dayuu Gada Meyiren”, *Gada meyiren*, ündüsüten-ü kebelei-ün qoriy-a, 1990 on.

旗のモンゴル民衆の土地のためだったのだ

生まれたところの状況を言えば

ドシーンソムの南部にあるオロインモトの村だよ

勤務していたところを言えば

ダルハン王府の印務処の営舎だよ

飲んだ水の源泉を言えば

南に流れているウリジムレン河だよ

戦闘をした場所を言えば

罹災する故郷のダルハン旗だよ

〔中略〕

父祖時代から生計をしてきた揺籃の地だよ

没落したダルハン王は故郷を払い下げたよ

仇敵の国民党は来て 10 県の地³⁵⁶を開墾した後

我々モンゴル人たちは生活できなくなったよ

〔中略〕

役所の印務処でメイレン職に就いていたロー・ガーダーは

広範なモンゴル民衆の苦難の様子を見て耐えられるのか

父祖の故郷を守り、モンゴル民衆を助けようとして

遠く離れたソロン山で命を落としたよ

〔中略〕

王府のダルハン王は七称号者³⁵⁷のリーダーだよ

悪巧みの張作霖と手を結んで祖先の故郷を破壊した

祖先の故郷を守るために対抗したガーダーを殺したよ

天地に背いたダルハン王の極悪非道を訴えよう³⁵⁸

³⁵⁶ ここでいう「10 県の地」は、1870～1928 年までの約 60 年間で蒙地開墾によってダルハン旗に設置された「法庫」、「康平」、「懷徳」、「梨樹」、「遼原」、「双山」、「通遼」などの県を指す（同上、p. 53）。

³⁵⁷ 「七称号者（doloyan čolaten）」は清朝の皇帝によってダルハン旗の王公に与えた称号（爵名）のことを指している。つまり、ダルハン親王、ジョリクト親王、郡王、貝勒、貝子、左輔国公、右輔国公などの「七称号者」を指しており、彼らはそれぞれの権力と領地を持っていた。

³⁵⁸ Mang Mören, “Arad-un dayuu Ğada Meyiren”, pp.45-51.

こうして、蜂起を起こして、匪賊となったガーダー・メイレンの目的はあまねくモンゴル民衆の土地のためであったことが歌われ、彼の生れ育てられたダルハン旗の美しい草原の風景が描かれる。しかし、このようなモンゴル人たちが昔から生活していた揺籃の地であったダルハン旗は、ダルハン王によって東北軍閥の張作霖に払い下げられ、モンゴル人の土地と牧場が奪われたことや、罹災されるモンゴル人たちの様子が歌われる。

(2) ウリゲルト・ドーの本文

①蒙地開墾とモンゴル人の苦難の記憶

歌の本文の内容は 21 章から構成され、最初に、ガーダー・メイレンの生れたところと家族について紹介され、彼の蜂起した原因が歌われる。

青や黒と言えば色の違いだよ

残虐や狡猾と言えば性格の違いだよ

日本は愛すべき美しい中国を占領しよう

王公の権力を頼って漢奸の張作霖と手を結んだ³⁵⁹

このように、背後にある日本の侵略意図や東北軍閥の張作霖のモンゴル地域への勢力拡大の意図が紹介された後、張作霖は日本人顧問と腹心の王祥林などに相談して、モンゴル地域を支配するために、婚姻などの懐柔政策を用いて、南京の売春婦 (egüden ger-ün ekener) のヤン・シューイン³⁶⁰を自分の妹として改名して、ダルハン王に嫁がせた。その時から、ヤン・シューインが王に土地を払い下げ、漢人農民を移民させるようにそそのかし、王が言いなりになってしまい、旗の政務を韓色旺に頼んだ。ダルハン王は旗の土地を次々と払い下げたため、モンゴル草原が漢人によって占領され、開墾されてしまう。

役所の印務処の政務が韓色旺に主管されてから

売春婦のヤン・シューインと気が合うようになった

移民局が設置され、短い服を着た漢人が流れ込んできた

³⁵⁹ 同上、pp.54-55。

³⁶⁰ 楊淑英 (Yang Shuying) という漢人女のことを指しているがウリゲルト・ドーの多くのヴァリエーションでは張作霖の妹として登場する。史実では、ダルハン王は張作霖の媒介で満州人のジュボル (朱博儒) と結婚するが、ウリゲルト・ドーでは楊淑英のような「売春婦」や、人を惑わす「妖婦」として描かれる。

広大なダルハン旗は占領されるようになった³⁶¹

ある日、ガーダー・メイレンは故郷を追われる民衆の惨状を目撃しながら、民衆の嘆きも聴く。

天然の草原では山東からの漢人が溢れている

肥沃な牧場が焼かされて荒地になってしまった

墾田を置いてあげたら、田畑の畔まで残してくれなかった

故郷を追われた我々があっちこちに流浪している³⁶²

ガーダー・メイレンはダルハン王に民衆の惨状を直訴したが、「王様に対抗した罪」で免職されてしまう。やがて、免職されたガーダー・メイレンは妻のムーダンの助言を聞いて、仲間たちと協議した後、「60 人の老人で構成される開墾反対嘆願団」³⁶³を組織し、「嘆願団」の代表たち（ハン・センゲガルブ、ジャオ・セワン、ジャン・スレンニマ）と共にドゴイラン（円形署名）を持って、民衆の惨状を役所に訴えるために奉天へ向かった。

②「開墾反対嘆願団」とガーダー・メイレンの投獄

彼らは、最初に嘆願書を持って、奉天にあるダルハン王府（当時、張作霖は奉天市で小和園という華麗な別荘を建てて、ダルハン王とヤン・シューインを住わせていたという）に向かい、嘆願書を出した。

僕自身が民衆と共に王様をまみえたのは

王様は恩を施し、開墾作業を止めさせ

わがモンゴル人たちに生計の土地を残してくれるように

嘆願書を呈上し、大胆にお願いしている³⁶⁴

³⁶¹ Mang Mören, “Arad-un dayuu Ġada Meyiren”, p.70.

³⁶² 同上、pp.89-90.

³⁶³ モンゴル人の習慣では、地元の老人 3 人が合同で意見を出したら、役人も聞くべきであった。この伝統に従って、ガーダー・メイレンらはダルハン旗の範囲で徳望が高い 60 人の老人を選んで、ダルハン王と奉天側へ嘆願書を出した（同上、p.146）。

³⁶⁴ 同上、pp. 170-178.

ところが、ガーダー・メイレンはダルハン王を説得できずに、王府から追い出されてしまった。彼はやむを得ず、奉天の蒙蔵院（蒙一処）³⁶⁵へ向かい、張作霖に直訴し、一生懸命に懇願したのだが、交渉が失敗し、「民衆を扇動し、王様に対抗しようとした罪」で遼寧省警察署に逮捕されてしまう。その後、ダルハン王府のウルジバト（Ülĵeyibatu）書記、元ダルハン王妃のウ・タイタイ³⁶⁶と王子などの要望でガーダー・メイレンらダルハン旗印務処の牢屋に移動させた。投獄中のガーダー・メイレンはウルジバトの助けを受けて、妻のムーダンに手紙を書いた。手紙を受け取ったムーダンは民衆を集め、牢屋を潰して、夫を救出する方法を検討した。

③ムーダンの娘殺し

民衆の協力を受けたムーダンは家の牧畜などの財産を販売し銃と弾薬を買ったが、娘の天吉良（3歳）を誰に頼んで世話をすればいいのかという問題に直面した。取りあえず、ガーダー・メイレンの兄のジョルラマなどの親戚を家に招いて、ガーダー・メイレン救出の話を持ち出し、娘の世話をやってもらうように頼んだが、拒否されてしまう。牢屋から脱獄し、反逆した人の娘をもらって育てる人が誰もいない。しかも、娘が生きていても、この後、敵の手に入ったら、殺されるので、自分の手で殺してから行くしかない。ムーダンは3歳の天吉良を見て歌う。

玉とパールのように愛していたよ、貴女を
海棠と蓮華のように咲くように、と望んでいたよ
幼い天吉良と共に幸せに生活しようと思ったが
投獄中の父が殺されたら、母が寡婦になり、貴女も孤児になるよ

両目に見える飾り物として、
綺麗な蓮華をドアの前に栽培したよ
死刑に処された父を救出するために

³⁶⁵ ここでは、蒙蔵院（蒙一処）で張作霖に直訴したと歌われるが、実際に代表団に会見したのは、遼寧省民事長の庁長の潘文雪であった。張作霖もこの時点で日本人によって殺された。

³⁶⁶ ウリゲルト・ドーの一部のヴァリエーションでは、元ダルハン王妃のウータイタイ（五太太）という人物が登場するが、史実と異なる。これについては Darqud Kingyan *Fada meyiren-ü dayuu-yin sudulul* に詳しい。

幼い天吉良を自分で殺して行くぞ、私は

十連発銃を持ち上げたよ、ムーダンは

幼い子天吉良の胸のほうに向けたよ

殺そうとしている母の思いを幼い子はわかるのか

銃口を触りながら、口を開けて笑っているよ³⁶⁷

これを見たムーダンは耐えられずに涙を流しながら、目を閉じて、銃の引き金を引いた。

銃を発砲した瞬間、雷鳴のような大きな音が立てたよ

幼い天吉良は倒れて動かなくなったよ

目を覚めて見ると、鮮血が敷布団に流れたよ

初乳で育てた母は娘の血を見て昏倒してしまったよ³⁶⁸

ムーダンは娘を殺した後、民衆を集め、旗兵隊が匪賊討伐に出発したチャンスに乗じて、牢屋を潰し、ガーダー・メイレンを救出した。

④武装蜂起

脱獄したガーダー・メイレンらは北のトシェド旗（ホルチン右翼中旗）へ向かい、北山地域で紅順、白來、九斤紅、天岡などの各匪賊団と合流し、蜂起軍は1000人まで拡大した。彼らは、ホンホブインオオラ（qungqub-yin ayula）というところで集会を行い、荒務局とダルハン王に対抗し、払い下げられた民衆の土地と牧場を取り戻すなどの蜂起の目的を宣言した。そして、ガーダー・メイレンをリーダーとする武装蜂起を展開した。ガーダー・メイレンとムーダンはそれぞれ「托天保民」と「双雁公主」というあだ名が付けられ³⁶⁹、蜂起運を連れて、ダルハン旗に戻り、デースンチェリグと戦った。

³⁶⁷ Mang Mören, “Arad-un dayuu Γada Meyiren”, pp.294-297.

³⁶⁸ 同上, pp.308-309.

³⁶⁹ ここでいう「托天保民」は「天の加護で、民衆を守る」という意味を持っており、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の他のヴァリエーションでは「護国托天」とも登場する。「ガーダー・メイレン蜂起」に参加した匪賊団の匪首たちはそれぞれあだ名を持っていた。

「匪賊」という名声がとどろいた、ロー・ガーダー

測量軍たちが四方から戦いに來た

広大な故郷を守り、生計を回復するために

命をかけて戦っているよ、ロー・ガーダー

〔中略〕

ドシンスムの横で騒いでいるよ、ロー・ガーダー

測量軍と戦っているよ、ロー・ガーダー

タンリギンスムの近くに疾駆しているよ、ロー・ガーダー

測量軍を殺しているよ、ロー・ガーダー

〔中略〕

旗兵隊に遭遇したら、上のほうに発砲している

黒馬隊に遭遇したら、命中するように撃っている

ハラトダ村へ向かって、攻撃した

残虐な測量軍を包囲して殺している³⁷⁰

蜂起軍は至るところで民衆の援助を受け、測量軍と戦って、勝利を収めたが、韓色旺の離間策にはまり、分裂されてしまう。一方、蜂起軍の弾薬も少なくなり、張督軍の派遣されてきた東北軍に包囲され、敗色が濃くなった。窮地に陥った蜂起軍はアル・ホルチンを通じて、ハルハ・モンゴル（モンゴル人民共和国）へ向かった。しかし、アル・ホルチンでタルワ・トイン（*taru-a tuyin*）の軍隊に進路を阻止されたので、やむを得ず包囲を突破し、故郷のダルハン旗へ向かった。

弾薬がほとんどなくなった蜂起軍は洮南の王団長から弾薬などの援助を求め、扎魯徳旗のジュルヘンアイル（*jirūke-yin ayil*）という村に宿営した。この情報を得た韓色旺はガーダー・メイレンの昔なじみを派遣し、偽弾薬（哑弾）を蜂起軍に送った。このように、再び敵のわなにはまった蜂起軍は敗北し、ガーダー・メイレンはホンゴルオボー付近の新開河で戦死する。

(3) ウリゲルト・ドーの結末

³⁷⁰ Mang Mören, “Arad-un dayuu Γada Meyiren”, pp.416-419.

勇猛な英雄ガーダー・メイレンは造反した戦友と共に、あまねくモンゴル人の故郷を守るために、逆賊のダルハン王と仇敵の張作霖たちと命をかけて戦って戦死した。彼の正義な戦いと英雄的な物語は後人に懐かしく思われ、歌い継がれている。

南から飛んでくる雁のひなよ
南のシラムレン河に舞い降りずに飛び立てようか
造反したガーダー・メイレンのことを言えば
あまねくモンゴル民衆の土地のためだったのだ

北から飛んでくる雁のひなよ
北のハラムレン河に舞い降りずに飛び立てようか
匪賊になったガーダー・メイレンのことを言えば
旗のモンゴル民衆の土地のためだったのだ

〔中略〕

厳冬は寒いが、春の到来を食い止めることができるのか
残虐者たちはガーダーを殺したが、庶民たちの恨みを解消できるのか
暗黒が過ぎ去り、黎明が訪れる時はあるよ
英雄のガーダー・メイレンは庶民の心に永遠に刻まるよ³⁷¹

2. ウリゲルト・ドーのテキスト分析

ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』では、モンゴルの故郷を守るために戦ったガーダー・メイレンが英雄化され、ダルハン王と日本人によって殺された軍閥の張作霖が悪役として登場するが、蒙地開墾によるモンゴル人の苦難の記憶も伝えられている。この点は中国国内で作られた漢語の歌劇、映画などの諸芸術作品と対照的である。一方、このヴァリエーションで歌われる蜂起の目的は奪い取られたモンゴルの故郷を戻すことであって、漢語版のウリゲルト・ドーや他の諸芸術作品で描かれる「反日的」、「反軍閥的な「ガーダー・メイレン像」とやや異なる。

前述したように、草の根社会に歌われているウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』は1930年代に作られ、当初はモンゴル人コミュニティ内部で口承によって伝えられていた

³⁷¹ 同上、p.513-515.

ので、政治的政策や圧力に制約されることがなく、比較的に自由に歌われていた。しかし、1950年代から採録されたウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の各ヴァリエーションは、中国共産党に文芸政策と1958年の「民謡運動」の影響を受けつつ、ガーダー・メイレンの記憶を継承した。後世代の人々はこのような歌からガーダー・メイレンを知り、記憶していたと考えられる。モンゴル人の故郷を守り、漢人の入植に対抗し、立ち上がったガーダー・メイレンの戦いを歌い称えたこの歌は草の根社会の人々の利益を代表しており、彼らの対抗力も表していた。内モンゴル東部地域の特有の口承文芸の一ジャンルとして、ホールチによってホルチン方言で歌われ、コミュニティ内部において、聞き手の共鳴や感銘を呼び起こす効果を持っていた。したがって、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』はガーダー・メイレンの記憶を伝える媒介として、草の根社会の人々の集合的記憶の形成と構築の契機ともなっている。それは「歴史史実」としてのガーダー・メイレンというよりは、「集合的記憶」としてのガーダー・メイレンであり、しかも上から構築される「公式的な記憶」と異なる集合的記憶でもある。

序歌で歌われる部分はウリゲルト・ドー全体の内容をまとめたものであり、特に、冒頭の2段の歌はその精髓になる部分である。序歌では国民党やダルハン王と軍閥の張作霖がモンゴル人の仇敵として登場する。しかし、続く本文の冒頭では日本人も登場するのは、歌のテキスト化される過程において、党の文芸政策の影響を受けているために「反日的な特徴」が強調され、後に挿入された可能性が高い³⁷²。また、序歌で登場する「シラムレン河（黄色の河）」はガーダー・メイレンの戦死した河を指しており、「ハラムレン河（黒い河）」は「シラムレン河（黄色の河）」と音韻や意味を対比させ対句表現として整った美しさを演出するために歌われたものである³⁷³。このような表現はモンゴル文学作品の一つの特徴である。

ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』で描かれる物語は架空のそれであるが、基本的な内容が「史実としてのガーダー・メイレン」と一致している。特に、作品の中で登場する「ドシンスム」、「ハラトダ」、「ハラ・ボタイントン」などの地名はダルハン旗に実在する地名であり、「張作霖」、「韓色旺」、「王祥林」などの人物も実在の人物である。

ウリゲルト・ドーのプロットをまとめると、故郷のダルハン旗はダルハン王によって東北軍閥の張作霖に払い下げられ、モンゴル人の土地と牧場が奪われたので、ガーダー・メ

³⁷² これについては、石原邦子「内モンゴル民歌「ガダ・メーリン」についての一考察—モンゴル英雄はなぜ中国で歌われたか」、27頁でも指摘されている。

³⁷³ 同上、26頁。

イレンが奉天に行って請願したが、逮捕されてしまう。そして、ガーダー・メイレンがダルハン旗印務処の牢屋に移動された時、妻のムーダンによって救出され、武装蜂起を起こしたというストーリーである。その中では「ムーダンの娘殺し」という場面はウリゲルト・ドーの中で、一番典型的な部分であるが、このエピソードは民間芸能者によって作られた部分である。主人公の一人であるムーダンの「平凡な母としての深い愛」だけでなく、「英雄的な女性としてのムーダンのイメージ」を描くためであろう。しかし、この場面はウリゲルト・ドーの一番感動的な部分であり、口承文芸としてのもっとも魅力的な部分でもある。この場面は一部のヴァリエーション³⁷⁴を除いて、多くのヴァリエーションで登場する。したがって、この場面は人々の印象にもっとも強く残っている典型的な記憶になっている。

このヴァリエーションでは「匪賊になったガーダー・メイレンのことを言えば／旗のモンゴル民衆の土地のためだったのだ」と歌われるが、彼は人々の財産を奪い取った「匪賊」ではなく、至る所で民衆の援助をもらい、人々の心に永遠に刻まれて「英雄」として描かれる。ウリゲルト・ドーの中では「ホンホス」という言葉が頻繁に登場されることは、草の根社会における人々の記憶形成にも影響を与え、そのイメージが定着している。しかし、人々はウリゲルト・ドーで歌われるイメージをそのまま受け止めているのではなく、それぞれの理解や解釈に基づいて、再構築、再記憶している。例えば、上の節で取り上げた包・Tと包Bの語りからみれば、蜂起軍が人々の財産を奪い取ったことは否定できない。

小結

以上、草の根社会における人々の記憶と語りをウリゲルト・ドーの内容と関連させながら分析してきた。分析を通じて、人々の記憶形成にはウリゲルト・ドーと上の世代や老人の語りの影響を大きく受けていることが確認できた。

まず、多くの人々の意識に残っている共通の語りとして、「ムーダンの娘殺し」の話や、モンゴル人の故郷を守るために蜂起した「英雄の語り」が挙げられる。「ガーダー・メイレン」という人物について、語り手の中では、一番、最初に思い出されたのは「モンゴル人の故郷、土地のために造反した英雄だ」という語りであった。つまり、彼らにとっては、

³⁷⁴ 例えば、包玉林採録（雑誌『内蒙古文芸』1978年3号掲載）と、道尼日布扎木蘇等採録（吉林人民出版社、1979年出版）の中で、鎖柱ホールチの語ったヴァリエーションでは、一人の老人が娘の天金良を連れいくが、民間芸能者のマンドラ（Mndul-a）の歌ったヴァリエーションでは、天金良が病死するように歌われる。また、ドーライ採録（「ガーダー・メイレンの歌」1947-1948年）では天金良の運命については取り上げられてないが、これ以外のすべてのヴァリエーションでは、天金良が母のムーダンによって殺されるように歌われる（Mang Mören, “Arad-un dayuu Ğada Meyiren”, p.537を参照）。

「モンゴルの故郷」と「ガーダー・メイレン」という人物はほぼ同じ意味で思い出され、記憶されている。ウリゲルト・ドーの冒頭で歌われているように、「造反したガーダー・メイレンのことを言えば／あまねくモンゴル民衆の土地のためだったのだ」という歌詞は人々の心の奥まで浸透し、もっとも馴染みのある「文化的な記号」として受け入れられている。このことから、歌は人々の記憶形成に如何なる影響を与えたかを推察できる。

次に、ウリゲルト・ドーで歌われるイメージと対照的に、草の根社会の人々の語りが非常に複雑で、多様な語りによって成り立っている。その語り方の多様性や多声性には、蒙地開墾によるモンゴル人の苦難の記憶や、モンゴル人と漢人の対立の語り、「ダルハン王と張督軍に対抗した英雄」、「遊牧文明と農耕文明の対立と矛盾による出来事」、「モンゴル人と漢人の共同の利益のために戦った英雄」などの複数の語り方が含まれている。この中では、モンゴル人と漢人の対立の語りは国民国家と地域に構成される「公式的な記憶」と異なる「対抗的記憶」、「マイナーな記憶」でもある。このような記憶の語り方は今でも「忘却の穴」に投げ込まれているが、それは完全に抹殺され、消されてしまったわけではない。聞き取り調査の中では数少ない人々が「ガーダー・メイレン蜂起」を巡って、漢人とモンゴル人の対立があったと語っている。一方、語り手の個人的な経験や住んでいる場所によって、語りの内容が少し異なっており、彼らの記憶形成において、ウリゲルト・ドーだけではなく、語り手を取り巻く環境や空間的イメージも重要な影響を与えていると考えられる。つまり、人々は、個人の経験と集団の思い出を特定の場所、あるいは空間的イメージで結びつけることによって、自分の経験を秩序づけ、解釈しているのである。

第4章で述べたように、ウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』は、1940年代の中国共産党の文芸政策と「1958年の民謡運動」の影響を受け、漢語に訳され、全国に普及し、同主題を用いて諸芸術作品も沢山作られた。特に、文化大革命が終了した1980年代以降、文学作品や、映画、テレビ・ドラマなどの映像作品も作られている。しかし、草の根社会に人々の語りはそれと関係なく、むしろ、ホールチによる口演（モンゴル語版のウリゲルト・ドー）の影響を強く受けており、特に特にホールチのドルジとチャガンバラの歌ったウリゲルト・ドーの影響を受けている。このことから、草の根社会の人々（記憶する主体）は必ずしも、「公式的な記憶」としての「ガーダー・メイレン像」をそのまま受け止めているわけではなく、語り手の個人的経験や、自分を取り巻く環境によって記憶が成り立って

いると言える。例えば、「ムーダンの娘殺し」の話は、彼らにとっては、「否定できない史実」として受け止められており、「テレビで演じられているのは嘘だよ」と語る方もいる³⁷⁵。

さらに、出来事を目撃者である戴・Lの語るように、「蜂起軍は豊かな人々の財産を奪い取った」という特別な語り方もあり、それも、草の根社会の人々の語り方の複雑さを表していると考えられる。

³⁷⁵ 聞き取り調査の中では、呉・Cと白・Nはテレビ・ドラマ『ガーダー・メイレン』を見たことがあると答えているが、「ムーダンの娘殺し」について、「テレビで演じられているのは嘘だよ」と語る。

結論

本論文では、「モンゴル民族の英雄」とされるガーダー・メイレンを事例として中国内モンゴルにおける集合的記憶の形成と変容のメカニズムに対する検討を行った。歴史的人物としてのガーダー・メイレンの「実像」や歴史事実としての「ガーダー・メイレン蜂起」を再評価した上で、「集合的記憶」としての「ガーダー・メイレン像」の在り方を中心に分析したのである。検討の際には、記憶論の研究方法を用いて、ガーダー・メイレンに関するウリゲルト・ドー、小説、映画などの過去の表象を表す文化的存在を視野に入れつつ、記憶が社会的に構成されるというモーリス・アルヴァックスの議論に即して、国民国家と地域に共有され、生成される、変容される「記憶の場」としての「ガーダー・メイレン像」のあり方を明らかにした。一方、内モンゴルの人びと（記憶する主体）の記憶と語りの分析を通じて、彼らが国民国家と地域の範囲で共有されるガーダー・メイレンのイメージと表象をいかに受け止めているのかを、フィールドワークで得た情報を基づいて、分析を行った。本論文の考察を通して明らかにしたことは次の通りである。

第一に、中国において、集合的記憶研究の対象として、主に、「文化大革命」、「南京虐殺」などの重大な歴史的イベントが挙げられているが、草の根社会の記憶やマイナーな記憶に関する研究、文学作品、映像作品、記念物、顕彰記念行為について考察した研究の蓄積が少ない。一方、内モンゴル地域のモンゴル研究においても、集合的記憶論は導入されているが、集合的記憶と伝説の関わりや、記憶と現代内モンゴル人の民族アイデンティティの構築などの問題が若干論じられている程度である。集合的記憶の事例分析として、姜迎春の研究を挙げることはできるものの、イデオロギー的圧力により、ガーダー・メイレンの「公式的な記憶」があまりに強調され過ぎており、それに対抗するような形で存在する周辺的な「マイナーな記憶」は軽視されている。一方、彼女の研究では草の根社会における「ガーダー・メイレン記憶」の形成と変容のメカニズムが詳しく論じられていない。これらの問題について検討を行ったのは、おそらく本研究がはじめてであろう。

第二に、今日の内モンゴルの公式的な歴史叙述の中では、「ガーダー・メイレン蜂起」が「階級闘争」の枠組みで位置づけられ、「封建的蒙古王公」と「反動的な軍閥」に対抗した運動と評価され、漢人農民と匪賊団も蜂起軍のパートナーとして記述されているが、『盛京時報』の報道によれば、蜂起軍の攻撃の対象も地元の漢人であったことが確認できる。また、蜂起軍の活動には陳剛、洪順（紅順）、天紅などの地元の匪賊団が加わったことは事実

であると考えられる。それどころか、一部の人々が蜂起軍の名義で地元の漢人とモンゴル人地主に対して、略奪行為を行ったことは否定できない。

第三に、ガーダー・メイレンは内モンゴルの異なる時代において異なる形で記憶され、語られていた。1930年代において、ガーダー・メイレンは国の政策に対抗した「モンゴルの馬賊」として批判され、弾圧された。ところが、彼は中華人民共和国が建国されるとともに、反動的軍閥及び封建的王公と対抗した「モンゴル民族の英雄」として評価され、尊敬されたが、文化大革命時代において、祖国の裏切り者（民族分裂主義者）として再び批判され、突然忘却されてしまう。1978年の改革開放政策によって、再び民族の英雄としての「名誉回復」が行われるが、論者によって、「環境保護のパイオニア」や「草原を開墾から守るために戦った英雄」などの議論も出回っている。ノラの「記憶の場」論に即していえば、彼は内モンゴルにおいて、一つの「記憶の場」となっていると考えられる。この「記憶の場」の複数性には、蒙地開墾による漢人とモンゴル人の民族的関係や、「階級闘争のモデル」としての英雄像、文化大革命による「敵の表象」、農耕経済と遊牧経済の対立の問題などの複数の要素が絡み合っ、多様な「ガーダー・メイレン像」が浮かび上がっている。

第四に、内モンゴルにおいて、政治運動によって編纂された『ガーダー・メイレンの事跡』などの資料や、中国共産党の文芸政策と「1958年の民謡運動」の影響を受けて採録されたウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』の内容が民間芸能者のホールチによって、ウリゲルト・ドーとして歌われ、「ホーリン・ウリゲル」として語り直されることによって、再記憶化され、より広い地域で共有されるようになった。この時代に作られたウリゲルト・ドーや文芸におけるガーダー・メイレンの表象が、後の時代の記憶の原型となっている。しかし、それは内モンゴルにおけるガーダー・メイレン記憶の根源ではない。というのも、彼をモンゴル民族の英雄として讃える民謡はすでに1930年代には作られていただけでなく、元々のモンゴル語の歌詞はのちに漢語で訳されたウリゲルト・ドーの歌詞と異なるからである。

したがって、内モンゴルにおけるガーダー・メイレン記憶の形成は1930年代から始まり、1950年代から普及され、広い範囲の人々に共有されるようになったのである。しかし、1950年代から採録されたウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』で伝わるガーダー・メイレンは「階級闘争の英雄」になってしまうのである。つまり、中華人民共和国初期におい

て、ガーダー・メイレンは基本的には社会主義イデオロギーの手法に基づいて、反敵国主義的、反封建的、反軍閥的な英雄として表象されてきた。

このような状況は、とくに 1970 年代以後の改革開放によって、変化していくのである。例えば、2011 年に出版された『青旗・嘎達梅林』で描き出されているのは、「公式的記憶」とはいささか異なり、長年に渡って忘却され、周縁化されてきた蜂起軍の生き残りの記憶や「草原を開墾から守るために戦った英雄」としての「ガーダー・メイレン像」である。ところで、小説のタイトルが示唆しているように、「青旗」はモンゴル人の「民族的精神」と「感情」を動員させ、人々を鼓舞する効果を持っており、モンゴル人の基本的な表象となっている。

第五に、内モンゴルの草の根社会における人々の記憶形成にはウリゲルト・ドー『ガーダー・メイレン』と上の世代や老人の語りの影響を大きく受けていることが確認できた。彼らの意識に残っている共通的な語りとして、「民族的英雄」、または「民族的犠牲者」としての「ガーダー・メイレン」が挙げられるが、人々の語りが非常に複雑で、多様な語りによって成り立っている。その中には、国民国家と地域に構成される「公式的な記憶」と異なる「マイナーな記憶」としての蒙地開墾によるモンゴル人の苦難の記憶や、モンゴル人と漢人の対立の語りなどがある一方で、「モンゴル人と漢人の共同の利益のために戦った英雄」、「匪賊としてのガーダー・メイレン」などの複数の語り方が含まれている。一方、草の根社会に人々は「公式的な記憶」をそのまま受け止めているのではなく、彼らは、モンゴル語のウリゲルト・ドーのイメージや、自分を取り巻く環境や空間的イメージの影響を受けていることが確認できた。

以上、内モンゴルにおけるガーダー・メイレンの表象とその変遷を分析の視野へ置き、集合的記憶としての動態と変容を検証した。ここでは、マクロレベルでの社会的、文化的側面から構築・変容する「ガーダー・メイレン像」と、ミクロレベルでの「記憶する主体（モンゴル人）」から語り出される「ガーダー・メイレンの語り」という二つの軸で議論を展開した。ガーダー・メイレンは実在の人物であるが、彼を纏わる記憶のポリティックスは非常に複雑で、彼の生涯をめぐる批評も、時間的にも空間的にも断絶している。モーリス・アルヴァックスによれば、記憶は可變的であり、動態的で、再現的である。「社会的フレームワーク」によって集団の集合的記憶は再構成されており、その変化によって、記憶も変容するのである。ガーダー・メイレンをめぐる評価や記憶は時代によって変容して

いるのは、彼を取り巻く政治的、社会的文脈、つまり、「社会的フレームワーク」が変わっているからであろう。

しかし、漢人人口が圧倒的に多数を占める今日の内モンゴルにおいて、記憶する主題はモンゴル人だけではなく、漢人と他の少数民族の人々も含めていることはいうまでもない。彼らはガーダー・メイレンのことをどのように記憶し、どのように語っているのか。また、同じモンゴル人コミュニティや漢人コミュニティの中でも、対立する集団が存在しており、一人の人物について、異なる「集合的記憶」が構築されているだろう。これらの異なる集団によって構築されるガーダー・メイレンの記憶とはいったいどのようなものだろうか。本論文では、これらのいくつかの問題について詳細に検討することができなかった。

第二章では、内モンゴルの時間的枠組みの変容によって構築する「記憶の場」としての「ガーダー・メイレン像」を検討したが、空間的変容による「ガーダー・メイレンの記憶」を論じることができなかった。一方、本論文では、ウリゲルト・ドー、映画、小説など過去の表象をあらわす「一体化の歴史」を描く文化的存在に焦点を当てたが、記憶の媒体＝形ともなる記念物についての分析が不十分である。第三章で述べたように、1990年8月、ガーダー・メイレンが戦死したホルチン左翼中旗でホンゴルオボー付近では、「ガーダー・メイレン記念碑」が建てられ、2003年、ホルチン左翼中旗の保康鎮では「ガーダー・メイレン広場」が建てられた。また、ホルチン左翼中旗のホリヤンアイル（浩日彦艾勒）において、孝庄園観光地（孝庄园旅游区）としてダルハン王府が建てられ、その中では「ガーダー・メイレン記念館」も建てられた。

第1章で紹介したヤン・アスマンの議論によると、「コミュニケーション的記憶」が日常生活の中で循環しているのに対して、「文化的記憶」は、遠い過去と関わっており、文化的意味の循環空間である祝日、祝典、儀式などの行為や、シンボリックな記念物、顕彰記念行為などの形式によって、展示され、具体化されるのである。内モンゴルにおいては、「ガーダー・メイレン蜂起」の当事者はどんどん亡くなっていることによって、この出来事の記憶が媒介を通じて「文化的記憶」に移し替えられていると言えるだろう。この媒介には、記憶の社会的実践としての記念物も含まれている。記念物は、新聞、歴史教科書、文献資料、文学作品などの他のメディアと並んで、記憶の媒介、あるいは記憶の装置として、その果たしている役割は小さくない。したがって、内モンゴルに造られた「ガーダー・メイレン蜂起」をめぐる記念物について考察し、これらは、現在にいたるまで、どのように語られ、人々の記憶を規定してきたか。このように、記念物をめぐる記憶のポリティックス

や「文化的記憶としてのガーダー・メイレン」の在り方を考察することが不可欠である。引き続き、資料の発掘と調査の努力を重ね、さらに研究を深めていくために、これらの問題を含めて体系的な研究を行うことを今後の課題にしていきたい。

最後に、付記しておきたいのは、本論本で一貫して応用しながら展開してきた記憶や集合的記憶をめぐる議論である。第一章では、中国における集合的記憶論の研究動向をある程度整理したが、理論的に深く掘り下げることができなかった。1980年代半ばから、注目され始めた記憶や想起をめぐる議論が「記憶のブーム」とも呼ばれるほど研究者の関心を引いているが、これらは、理論的にも、体系的にも、一定の方向性を持たず、複数の学問分野を乗り越えて展開してきている。この中では、「記憶」という表象や想起に関わる営みが深刻な対立や矛盾がはらみながら、歴史学などの学問分野だけではなく、メディア言説なかでも、頻繁に取り上げられ、議論されている。岩崎稔の指摘するように、「記憶」という主題そのものが、分析と総合の緊密な体系的提示を拒否し、扱いにくい「迷宮」のようのものである。本論文では、取り上げられた「ガーダー・メイレン」をめぐる表象や想起のアプローチも、そのような側面を持っており、集合的記憶としての「ガーダー・メイレン」の氷山の一角に過ぎない。

参考文献

日本語文献（五十音順）

<著作、雑誌論文>

- アライダ・アスマン著、安川晴基訳『想起の空間：文化的記憶の形態と変遷』水声社、2007年
- 阿部安成『記憶のかたち：コメモレーションの文化史』柏書房、1999年
- 今井昭夫・岩崎稔編『記憶の地層を掘る—アジアの植民地支配と戦争の語り方』御茶の水書房、2010年
- 岩崎稔「記念碑と対抗的記念碑」『クヴァドランテ』第10号、2008年
- 岩崎稔「モーリス・アルヴァックスの『集合的記憶』1-2」『未来』第377-388号、1998年
- 岩崎稔「ピエール・ノラの《記憶の場所》1-2」『未来』第380-381号、1998年
- 岩崎稔「ヤン・アスマンの《文化的記憶》1-2」『未来』第382-383号、1998年
- 石原邦子「内モンゴル民歌「ガダ・メーリン」に関する一考察—モンゴルの英雄はなぜ中国で歌われたか」『モンゴル研究』第20号、2002年
- 石井弓『記憶としての日中戦争—インタビューによる他者理解の可能性』研文出版、2013年
- 板垣竜太・鄭智泳・岩崎稔『東アジアの記憶の場』河出書房新社、2011年
- 小野道邦『可能性としての文化社会学：カルチュラル・ターンとディシプリン』世界思想社、2011年
- マリタ・スターケン著、岩崎稔・杉山茂・千田有紀・高橋明史・平山揚洋訳『アメリカという記憶—ベトナム戦争、エイズ、記念碑的表象』未来社、2004年
- モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989
- 森村敏己「記憶とコメモレイション：その表象機能をめぐって」『歴史学研究』第742号、2000年
- 森村敏己『視覚表象と集合的記憶：歴史・現在・戦争』旬報社、2006年
- 斉藤公輔「集团的記憶研究の素地」関西大学『独逸文学』第51号、2007年
- 斉藤公輔「集合的記憶概念の批判的考察と今後の展望」『ドイツ文学論考』第49号、2007年
- 関沢まゆみ『戦争記憶論—忘却、変容そして継承』昭和堂、2010年

- 関嘉寛「博物館という空間—記憶の伝承に関する一考察—」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第30巻、2004年
- 工藤光一「『記憶の場』と現代フランスの歴史叙述」『クアドランテ』第6号、2004年
- チョク「内モンゴル東部ホルチン地域におけるスンス・ドーダホ儀礼について—フレイ・ホショーの事例を手掛かりにして、東京外国語大学修士論文、2013年
- テッサ・モーリス＝スズキ著、田代泰子訳『過去は死なない：メディア・記憶・歴史』岩波書店、2004年
- 谷川稔「『記憶の場』の彼方に—日本語版をどう読むか—」『クアドランテ』第5号、2003年
- 谷川稔「社会史の万華鏡—『記憶の場』の読み方・読まれ方—」『思想』第911号、2000年
- 富山一郎『記憶が語りはじめる』東京大学出版会、2006年
- 成田龍一「『記憶の場』の歴史学と政治学」『クアドランテ』第6号、2004年
- 二宮宏之「思想の言葉—歴史と記憶」『思想』911号、2000年
- 広川佐保「満州国における「蒙地俸上」について—「蒙地整理案」と「開放蒙地調査資料」をもとに—」『アジア経済』43(8)、2001年
- 二木博史「ボヤンマダフと内モンゴル自治運動」『東京外国語大学論集』第64号、2002年
- 特古斯巴雅爾「ガダ・メーリン—モンゴル開墾抵抗運動の英雄—」『日本とモンゴル』第88号、1994年
- 五孫子徹男「内モンゴル三題」『日本とモンゴル』第91号、1995年
- 包金剛「内モンゴル東部地区特有の口承文芸の研究：ホールチとホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドー」、東京外国語大学博士論文、2003年
- 包宝海「集合的記憶としての「ノモンハン事件」/「ハルハ河戦争」」『言語・地域文化』第20号、2014年
- 包宝海「中国における集合的記憶論の議論状況—『文化的記憶論読本』などを手がかりに—」『クアドランテ』第16号、2014年
- 包宝海「中国・内モンゴルにおけるガーダー・メイレンの記憶とその変遷」『クアドランテ』第17号、2015年
- ポール・トンプソン著、酒井順子訳『記憶から歴史へ：オーラル・ヒストリーの世界』青木書店、2002年
- ピエール・ノラ「基礎報告」『クアドランテ』第6号、2004年

ピエール・ノラ『『記憶の場』から『記憶の領域』へ』ピエール・ノラ編、谷川稔訳『記憶の場：フランス国民意識の文化＝社会史』（対立）岩波書店、2002-2003 年

ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』風間書房、2003 年

オウエン・ラティモア (Owen Lattimore) 著、後藤富男譯『満州に於ける蒙古民族』善隣協會、1934 年

吉田正広「『記憶の場』の歴史家を目指して」『愛知大学法文学部論集、人文学科編』第 30 号、2014 年

<日本語資料>

南滿洲鐵道株式會社哈爾濱事務所編「内蒙哲里木盟殖民の沿革」南滿洲鐵道株式會社哈爾濱事務所庶務課、1929 年 3 月

漢語文献（ピンイン・ローマ字順）

<著作、雑誌論文>

阿斯特莉特・埃爾、馮亜琳『文化的記憶論読本』北京大学出版社、2012 年

艾娟「知青集体記憶研究」、南開大学博士論文、2010 年

博和、薩音『博彥滿都生平事略』呼和浩特、1999 年

白拉都格其、金海、賽航『蒙古民族通史』第五卷(上)、内蒙古大学出版社、2002 年

巴音図、張成業『蒙古族近代戦争史』遼寧民族出版社、2005 年

波・特古斯、王坤「嘎達梅林起義軼事」『内蒙古文史史料』第十輯、内蒙古人民出版社、1983 年

蔡偉傑「從蒙匪、英雄到環保先鋒：嘎達梅林在現代中國的表述與政治」『蒙藏季刊』第 22 卷、第 3 号、2013 年

曹永年『内蒙古通史』内蒙古大学出版社、2007 年

程铂舜「集体記憶的规训：南京大屠殺的記憶如何被建构」、南京大学修士論文、2012 年

程振翼「文化遺產与記憶理論：对文化遺產研究的方法論思考」『广西社会科学』2014 年第 2 期

陳旭清「心灵的記憶：苦难与抗争—山西抗戰口述史」浙江大学博士論文、2005 年

朝克図、趙玉華「探析蒙古族曲芸藝術胡仁・烏力格日面臨的危機」『内蒙古民族大学学报』（社会科学版）第 34 卷、第 6 期、2008 年

秦志希、曹茸「電視歷史劇：对集体記憶的建構与消解」『現代伝播』2004 年、第 1 期

德吉德『達爾罕文史』政協科爾沁左翼中旗文史委員会、2008 年

- 馮小寧「嘎達梅林：拍出一部東方的斯巴達克思」『民族團結』1998年、第3期
- 馮小寧「電影的意識形態和藝術家的社會責任」『綠葉』2005年、第5期
- 高萍「社會記憶理論研究綜述」『西北民族大學學報』2011年、第3期
- 郭雪波「尋找嘎達梅林紀念碑」『文藝報』2011年9月9日
- 郭于華「心靈的集體化：陝北驢村農業合作化的女性記憶」『中國社會科學』2003年、第4期
- 郝維民『內蒙古革命史』人民出版社、2009年
- 侯微、趙文梁「戰爭電影中的英雄主義、集體記憶與國家認同」『成都師範學院報』第29卷第7期、2013年
- 義都合西格、額爾德木圖、吳津「嘎達梅林的事跡」內蒙古人民出版社、1960年
- 景軍「社會記憶理論與中國問題研究」『中國社會科學季刊』（香港）1995年、第12期
- 姜迎春「長編敘事民歌〈嘎達梅林〉文本和歷史記憶研究」、中央民族大學博士論文、2010年
- 姜迎春「長編敘事民歌〈嘎達梅林〉歷史記憶研究」『民族文學研究』2010年、第2期
- 李瑞文「歷史・藝術・意識形態—嘎達梅林形像流變分析」、暨南大學碩士論文、2008年
- 李守信「我是怎樣鎮壓嘎達梅林起義部隊的」『內蒙古文史史料』第十輯、內蒙古人民出版社、1983年
- 利揚「歌謠傳統下的記憶表述」『民間文化論壇』2013年、第6期
- 李紅武、胡鴻保「國外社會記憶研究概述」『學習月刊』2011年、第12期
- 李莉「文學與記憶的關係探析」『社會科學家』2009年、第12期
- 李興軍「集體記憶研究文獻綜述」『上海教科研』2009年、第4期
- 劉忱『嘎達梅林』遠方出版社、2004年
- 劉國強「當代傳媒形塑集體記憶的方式探析」『社會科學輯刊』2009年、第2期
- 劉大先「敘事作為行動：少數民族文學的文化記憶問題」『南方文壇』2013年、第1期
- 羅彩娟「社會記憶散論」『廣西民族師範學院學報』2011年、第6期
- 納日碧力戈「各煙屯藍靛瑤的信仰儀式、社會記憶和學者反思」『思想戰線』2000年、第2期
- 孫峰「從集體記憶到社會記憶—哈布瓦赫與康納頓社會記憶理論的比較研究」華東師範大學碩士論文、2008年
- 舒開智「傳統節日、集體記憶與文化認同」『天府新論』、2008年、第2期
- 天鷹『一九五八年中國民歌運動』上海文藝出版社、1978年

- 王漢生、劉重秋「社会記憶及其建构一項關於知青集体記憶的研究」『社会』2006年、第3期
- 王霄冰「文化記憶与文化傳承」『勵耘學刊』（文學卷）2008年、第1期
- 王伟平「電視紀錄片的文化記憶功能」『新聞戰線』2010年、第6期
- 王明珂「歷史事实、历史記憶与歷史心性」『歷史研究』2001年、第5期
- 王炎、黃曉晨「歷史与文化記憶」『外国文学』2007年、第4期
- 王灿、李技文「近十年我国群族認同与歷史記憶研究總述」『內蒙古民族大学學報』（社会科学版）、第38卷、第3期、2012年
- 相如「“歷史事件与集体記憶”国际學術研讨会總述」『史林』2011年、第1期
- 楊楊「空間、儀式与社会記憶—以侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館為中心的考察」南京師範大學、修士論文、2007年
- 燕海鳴「集体記憶与文化記憶」『中国圖書評論』2009年、第3期
- 葉子「社会学視野下的記憶研究」『前沿』、2014年、第6期
- 余霞「歷史記憶的伝媒表達及其社会框架」『武漢大學學報』（人文科学版）2007年、第2期
- 張榮明「歷史真实与歷史記憶」『學術研究』2010年、第10期
- 張宇婷「淺談文化記憶」『文芸評論』2011年、第4期
- 趙海山主編『科爾沁左翼中旗志』內蒙古文化出版社、2003年
- 钟年「社会記憶与族群認同—从《评皇券牒》看瑶族的族群意識」『广西民族学院學報』2000年、第4期
- 朱沛昇「“文革”—沉重的集体記憶」、福建師範大學修士論文、2010年
- 『中国蒙古史学会大会紀念集刊』呼和浩特：中国蒙古史学会編印、1979年
- 中国戏剧家协会主編、內蒙古自治区文化局編輯『中国地方戲曲集成』（內蒙古自治区卷）中国戲劇出版社、1959年

＜漢語資料＞

① 【科爾沁左翼中旗档案館藏】

「通遼縣縣長王激波呈文」民國19年5月21日：

科爾沁左翼中旗档案館「史志辦档案史料」－「沿革地理類」類号80

「遼北荒務局總辦戰滌塵呈文」民國19年12月16日：

科爾沁左翼中旗档案館「史志辦档案史料」－「沿革地理類」類号127

「遼源縣縣長金玉聲密稟呈文」民國19年5月16日：

科爾沁左翼中旗档案館「史志辦档案史料」－「沿革地理類」類号120

「丈放東西夾荒事務局総辦劉効琨呈文」民国 19 年 8 月：

科爾沁左翼中旗档案館「史志辦档案史料」-「沿革地理類」類号 138

「遼寧省遼北荒務局総辦張成箕呈文」民国 19 年 7 月 14 日：

科爾沁左翼中旗档案館「史志辦档案史料」-「沿革地理類」類号 130

「民族英雄嘎達梅林的歷史材料汇编」科爾沁左翼中旗档案館、1960 年 7 月 7 日

② 【日本・東洋文庫蔵】

『Mongyol/蒙古』北平：蒙古留学生会、第 6-7 号、1930 年

③ 【東京外国語大学図書館蔵】

「魯北縣境匪患已平」『蒙藏旬刊』（創刊號）：『中國少數民族舊期刊集成、第 1 版』、南京
卷、第 28 冊

「嘎達梅林問題調查報告」『文芸戰鼓』、嘎查達梅林批判專号：内モンゴル大学の井岡山
『文藝戰鼓』編集部

④ 【東京大学東洋文化研究所蔵】

「調隊勦匪」『盛京時報』民国 18（1929）年 10 月 25 日、（第 7135 号）、第 74 冊

「傳団長勦匪凱旋」『盛京時報』民国 19（1930）年 1 月 10 日、（第 7204 号）、第 75 冊

「防軍勦匪凱旋」『盛京時報』民国 19（1930）年 4 月 3 日、（第 7281 号）、第 75 冊

「劉団長剿匪獲勝」『盛京時報』民国 19（1930）年 8 月 12 日、（第 7408 号）、第 76 冊

「劉団長率隊剿匪」『盛京時報』民国 19（1930）年 9 月 27 日、（第 7450 号）、第 77 冊

「發現大股蒙匪」『盛京時報』民国 19（1930）年 9 月 30 日、（第 7457 号）、第 77 冊

「匪勢披猖」『盛京時報』民国 19（1930）年 10 月 23 日、（第 7478 号）、第 77 冊

「鵬団長出殯剿匪」『盛京時報』民国 19（1930）年 11 月 8 日、（第？号）、第 77 冊

「大隊長剿匪凱旋」『盛京時報』民国 19（1930）年 11 月 8 日、（第？号）、第 77 冊

「蒙匪機關尚存」『盛京時報』民国 19（1930）年 11 月 16 日、（第 7501 号）、第 77 冊

「大隊長剿匪凱旋」『盛京時報』民国 20（1931）年 1 月 17 日、（第 7556 号）、第 78 冊

「聯合勦匪」『盛京時報』民国 20（1931）年 2 月 10 日、（第 7580 号）、第 78 冊

「張鎮帥出發」『盛京時報』民国 20（1931）年 2 月 14 日、（第 7584 号）、第 78 冊

「軍警雲集搜勦胡匪」『盛京時報』民国 20（1931）年 2 月 21 日、（第 7588 号）、第 78
冊

「西夾荒蒙匪猖獗」『盛京時報』民国 20（1931）年 2 月 22 日、（第 7589 号）、第 78 冊

「達爾罕王府電請張鎮帥會同勦匪」『盛京時報』民国 20 (1931) 年 2 月 26 日、(第 7593 号)、第 78 冊

「張鎮帥勦匪捷音」『盛京時報』民国 20 (1931) 年 3 月 5 日、第 7600 号、第 78 冊

「团长凱旋」『盛京時報』民国 20 (1931) 年 3 月 15 日 (第 7608 号)、第 78 冊

「騎四团勦匪」『盛京時報』民国 20 (1931) 年 3 月 15 日 (第 7608 号)、第 78 冊

「張鎮帥調隊勦匪」『盛京時報』民国 20 (1931) 年 3 月 17 日 (第 7610 号)、第 78 冊

「胡匪蜂起」『盛京時報』民国 20 (1931) 年 3 月 19 日、(第 7612 号)、第 78 冊

「洮南方面匪氛漸形緊急」『盛京時報』民国 20 (1931) 年 3 月 27 日、(第 7620 号)、第 78 冊

「勦討蒙匪軍凱旋 擊斃百名活獲五十」『盛京時報』民国 20 (1931) 年 4 月 5 日、(第 7628 号)、第 78 冊

「崔司令又出剿匪」『盛京時報』民国 20 (1931) 年 4 月 9 日、(第 7631 号)、第 78 冊

⑤ 【国際日本文化センター所蔵】

「通遼股匪 已聯合五六百人 軍隊正謀會勦」『東三省民報』民国 20 (1931) 年 2 月 13 日、(第 2858 号)

「匪患肅靖 擊斃三十餘名 活捉二十餘名」『東三省民報』民国 20 (1931) 年 2 月 23 日 (第 2867 号)

<ウリゲルト・ドーのテキスト>

安波、許直『東蒙民歌選』新文藝出版社、1952 年

陳清漳、鵬飛、孟和巴特、達木林、軍力、美麗其格、松来扎木蘇、賽西雅拉図合訳「嘎達梅林」『人民文学』1950 年、第 1 卷、第 3 期

陳清漳、賽西、芒・牧林『嘎達梅林：蒙古族民間叙事詩』上海文芸出版社、1979 年

<他の芸術作品>

郭雪波『青旗・嘎達梅林』（長編小説）新星出版社、2011 年

李賜『嘎達梅林』（晋劇）中国戏剧出版社、1959 年

李悦之『嘎達梅林』（歌劇）中国戏剧出版社、1957 年

孟和博彦『嘎達梅林』（映画脚本）内蒙古人民出版社、1959 年

朱蘇進『嘎達梅林』（長編小説）人民文学出版社、2011 年

扎拉嘎胡『嘎達梅林伝奇』（長編小説）人民文学出版社、1986年

<映像資料>

『嘎達梅林』（漢語、馮小寧監督、2002年）

『嘎達梅林』（漢語、20回テレビ・ドラマ、陳家林監督、2010年）

モンゴル語文献（ČaGan toloGai 順）

<著作、雑誌論文>

AltanbulaG,Qüü Güi ying, “Teüken ruman “Midan qatun” bol teüke-yin ünen-ü batu

gereči---Č.Bükedelger-ün “Midan qatun” gekü ruman-i ongsiGad” *Öbör mongyol-un*

ündüsüten-ü yeke surγayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül(gün uqayan neigem-ün sinjilekü

uqayan-u mongyol keblel),2008 on-u3duyar quyučay-a.

Edükesig“Tada meyiren-ü bosulγ-a-yin tuqai ügüel” *Mongyol kele udy-a jokiya teüke*

sedgül ,1960on-u 7duyar quyučay-a.

Ü.Suyar-a “Durasγa-un kösiy-e---Γada meyiren-u dayuu nurud-i tanilčayulqu-ni” *Ör-yin*

čolmun,1981 on-u 3duyar quyučay-a.

Namiy-a, “Qamtuliy-un čegejilel,tayamaylal boyu teüken kömil---sin-e eren-ü mongyol teüken tuyūjis-un

tuqai ajıylalta”*Dumdadu ulus-un mongyol sudulul*,40düger bodi,2012on-u 6duyar quyučay-a.

Nasunbayar“Teüken durasumji kiged odo üy-e-yin Öbör mongyolcud-un ündüsüten-ü adalisil-un

čoyčalalta”: *Öbör mongyol-un yeke surγayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül* ,2006 on-u 4duyar

quyučay-a

Bai.Tuyay-a, “Arad-un dayuu“Tada meyiren”-u aradči činar-un tuqai” *Öbör mongyol-un ündüsüten-*

ü baysi-yin degedü surγayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül(gün uqayan neigem-ün sinjilekü

uqayan-u mongyol keblel),1991 on-u jun-u quyučay-a.

Boyantoytaqu, “Tada meyiren-u namdar teüken-deki jarim madaγ-tai asaγudal-un tuqai ” *Öbör*

mongyol-un ündüsüten- ü baysi-yin degedü surγayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül(gün uqayan

neigem-ün sinjilekü uqayan-u mongyol keblel),1998 on-u namur-un quyučay-a.

Kingyan, “Üligertü dayuu “Tada meyiren”-u doturaqi jüriyen-tai kedün kereg učir-un toqai” *Öbör*

mongyol-un ündüsüten-ü yeke surγayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül(gün uqayan neigem-ün

sinjilekü uqayan-u mongyol keblel),2008 on-u 3duyar quyučay-a.

- KürelSa, Sergüleng, *Qorčin arad-un dayuu-yin bayatur-un domoγ namdar*, Öbör mongyol-un soyol-un keblel-ün qoriy-a, 1999 on.
- Ma Guolin, “Üligertü dayuu “Tada meyiren”-u sungudayjıdayısan uçıır” öbör mongyol-un ündüsüten-ü yeke surıayuli-yin mastwr čula qamayalaqu ügülel, 2008 on.
- Mei Hua “Durasumji jıči durasumji-yin toγorin-du ügülekü-ni ” *Öbör mongyol-un neigem-ün sinjilekü uqayan* , 2007 on-u 6duyar quyučay-a
- S.Urusyal, “Tada meyiren-u amidaral üile-dü qolboydaqu kedün adsayudal”, *öbör mongyol-un yeke surıayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül(gün uqayan neigem-ün sinjilekü uqayan-u mongyol keblel)* ,2009 on-u 2duyar quyučay-a.
- Sečinyuu-a,Örgön, Üljeisang,*Qorčin arad-un dayuu* (nige)Öbör mongyol-un soyol-un keblel-ün qoriy-a ,1987on.
- Tegüsbayar “Domoγ durasumji-yin Ligden Qayan---durasqu-ba martaqu-yin solbičel jürilčel Öbör mongyolcud-un ündüsüten-ü adalisil-un čoyčalalta ”: *Öbör mongyol-un yeke surıayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül* ,2006 on-u 5duyar quyučay-a.
- T.ErdenibaGan-a, “Tuulis dayuu“Tada meyiren”-deki Müdan-dü qolboydaqu qoyar asayudal” *öbör mongyol-un ündüsüten- ü baysi-yin degedü surıayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül(gün uqayan neigem-ün sinjilekü uqayan-u mongyol keblel)*,1994 onn-u ebül-ün quyučay-a.
- T.Erdenibayan-a, “Tada meyiren-u busuly-a-yin egüsügsen siltayan-u tuqai tobči ügülekü-ni” *öbör mongyol-un ündüsüten-ü yeke surıayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgül(gün uqayan neigem-ün sinjilekü uqayan-u mongyol keblel)*,2006 on-u1duyar quyučay-a.
- Toytaqu, “Qorčin arad-un dayuu-yin ulamjılan tarqaqui-yin neigem-ün baičayalta-yin jadalulta” *öbör mongyol-un neigem-ün sinjilekü uqayan*,2009 on-u 1duyar quyučay-a.
- Toytaqu, *Qorčin arad-un dayuu-yin ulamjılan tarqaqui-yin sudulul*, Öbör mongyol-un soyol-un keblel-ün qoriy-a, 2009on.
- Toytaqu, “Mongyol arad-un dayuu“Tada meyiren”-u ulamjılan tarqaqui-yin olan kelberi” *öbör mongyol-un neigem-ün sinjilekü uqayan*,2008 on-u 3duyar quyučay-a.
- Darqud Kingyan, *Tada meyiren-ü dayuu-yin sudulul*, Öbör mongyol-un soyol-un keblel-ün qoriy-a, 2009on.
- Dumdadu ulu-un mongyol udy-a jokiyaal-un sinjilegen-ü neigemlig, *Öbör mongyol-un udy-a jokiyaal-un tabin jıl*(degedü,dooradu), Öbör mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy-a ,1997 on.

jang li jen, “Üligertü arad-un dayuu “Гada meiren”-u ulamjilaydal-un tuqai baičayalta-yin medegülülte” *öbör mongyol-un ündüsüten-ü yeke surγayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedgöl(gün uqayan neigem-ün sinjilekü uqayan-u mongyol keblel)*, 2011 on-u 2duyar quyučay-a.

Čoytu, Erkimbayar *Quγurčid-un aman teüke*, Öbör mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy-a, 2012 on

Rinčindorji, nim-a “julγarasi ügei urliy-un čečeg---arad-un dayuu ‘Гada Meiren’-u tuqai sigümji” *jirim-un uran jokiyal*, 1978 on-u 4duyar quyučay-a

P.Oči, *Гada meiren-u durasumji*, Öbör mongyol-un bayačuud keuked-ün keblel-ün qoriy-a, 2005 on

<ウリゲルト・ドーのテキスト>

Mang Mören, *Гada meiren*, ündüsüten-ü keblel-ün qoriy-a, 1990 on.

Mang Mören, Saisiyaltü *Гada meiren*, Öbör mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy-a, 1979 on.

Dungrubjamsü, *Гada meiren*, girin-u arad-un keblel-ün qoriy-a, 1979 on.

<他の芸術作品>

Dungrubjamsü, *Гada meiren* (quγur-un üliger), degedü debter, Öbör mongyol-un soyol-un keblel-ün qoriy-a, 1990 on

jalγaqü, *Гada meiren-u tuuli*, Öbör mongyol-un surγan kümüji-ün keblel-ün qoriy-a, 1994 on.

英語文献

Anne Henochoicz, “For the Land of All Mongols”: Gada Meiren the Bandit, Hero, and Proto-Revolutionary, ”*The postcolonialist*, November 2013, Vol.1, Number1.

Astrid Erll, Ansgar Nünning *Cultural Memory Studies: An Interdisciplinary Handbook*, Walter de Gruyter • Berlin • New York, 2008.

Ann Rigney, “Plenitude, scarcity and the circulation of cultural memory” *Journal of European Studies*.35(1)

Jaqchid sechin, “An Interpretation of ‘Mongol bandits(Meng-fei).” *Altaica: Proceedings of the 19th Annual Meeting of the Permanent International Altaistic Conference*, edited by Juha Janhunen, Helsinki : Suomalais-Ugrilainen Seura, 1977.

Wulf Kansteiner, “Finding meaning in memory: a methodological critique of collective memory studies” *History and theory* 41(May 2002).

跋

2009年、来日して恩師の岩崎稔教授に出会ったこの数年間に、私は「内モンゴルにおける集合的記憶」という刺激的なテーマに取り込み、文献資料に基づく「過去」の「実像」ではなく、「記憶」や「表象」といった側面から構築し、変容する「記憶」の「動態」に取り込み、内モンゴルにあった事件や出来事の「集合的記憶」を考えてきた。修士論文では、1939年、満州国とモンゴル人民共和国の国境で起こった日本・満州国軍とモンゴル・ソ連軍の大規模な軍事衝突事件として知られている「ノモンハン事件」を事例として、内モンゴルとモンゴル国における集合的記憶の動態を考察した。博士論文では、1930年代の内モンゴル東部地域にあった「ガーダー・メイレン蜂起」という出来事に焦点を当てて検討を行った。ガーダー・メイレンはホルチン左翼中旗から出た英雄であり、同旗出身の筆者にとっては、もっとも馴染み深い人物である。今日、彼に纏わる記憶は、もやはホルチン左翼中旗の枠組みを超えて伝わっている。しかし、集合的記憶としての「ガーダー・メイレン像」は多様な「語り」や「表象」によって成り立っているのは本論文で考察した通りである。

本論文の執筆にあたっては、多くの先生方からのご指導、ご助言をいただいた。指導教官の岩崎稔先生から、来日以来、研究者として、学術論文の執筆の方法や理論的ものについて熱心かつ丁寧なご指導をいただいた。特に、欧米における集合的記憶論に関する最新のアプローチ(J. アスマンおよびA. アスマンの文化的記憶論)や資料を提供していただき、テーマの設定、問題点についてご指導いただいただけではなく、日本語の表現についてもご推敲いただいた。副指導教官の二木博史先生と米谷匡史先生からは、モンゴル研究、内モンゴル近現代史、思想文化史の視点から、懇切なご指導、アドバイスをいただいた。ここに改めて感謝を申し上げたい。

また、ご助言やコメントをいただいた岩崎ゼミと二木ゼミの学生の皆さんにも感謝を申し上げたい。特に、論文全体の日本語の添削作業を引受けていただいた同大学院の博士前期課程千葉雄氏、第1章と第4章の日本語を詳細に直していただいた同時に、原稿を読んで、多くのコメントや意見をくれた渡辺隆宏氏に心より、感謝を申し上げたい。そして、日本での留学、研究生生活を強く支え、励まし続けてくれた妻の高小芳にも感謝したい。

そのほか、現地調査中にご協力をいただいた内モンゴルのホルチン左翼中旗ヨリンモド鎮エムネ・タリンアイル（南塔林艾力）ガチャー（村）の元書記長のトン・シレム（佟西

日莫) 氏、エムネ・ハラトダ (南哈拉吐達)、バローンホイト・ハラトダ (西北哈拉吐達)、ドシンスム (都西廟)、ジュールガンモド (珠日干毛都)、スーリンノトボ (民主屯/包力召)、ホンゴルオボー (洪戈爾敖包)、ホローンアイル (浩日彦艾勒) の各インフォマントの皆さん、特に、出来事を目撃者として自分の目撃したことを詳しく語ってくださったシャンシーンアイル (尚辛艾勒) の戴・L さんに感謝の意を表したい。また、資料調査中、内モンゴル師範大学図書館の王曉霞先生、ホルチン左翼中旗文書館、ホルチン左翼中旗の文化局の関係者、ホルチン右翼中旗のテムレーホールチ、内モンゴル師範大学のマン・ムレン教授、ホルチン左翼中旗放送局の職員団花さん、内モンゴル大学博士のテムレバガナ先生、中国民族言語と文字翻訳局職員・中央民族大学博士の姜迎春氏からの協力を受けた。特に、「ガーダー・メイレン蜂起」に詳しいテムレバガナ先生と姜迎春氏からは、調査の方法や、語り方の分析などについての貴重な意見をいただいた。彼らの協力によって、本論文を完成することができたと言えよう。

なお、本論文の執筆は、以下の研究助成金、奨学金を得て行われた。特に現地調査や資料収集の時、これらの助成金や奨学金がなければ、実施することが大変困難であった。諸関係機関に心より、深謝申し上げる。

- (1) 辻アジア国際奨学財団 (2013 年)
- (2) 東京外国語大学卓越した大学院拠点形成支援補助金 (2013 年)
- (3) 平和中島奨学財団 (2015 年)

最後に、本論文では、内モンゴルのホルチン左翼中旗の文書館、内モンゴル図書館、中国国家図書館、日本の東洋文庫、東京大学東洋文化研究所、国際日本文化センターなどの諸機関に所蔵されている文書資料、内部発行資料と聞き取り調査で得た情報（特に出来事を目撃者などに対するインタビュー）を参照にしながら総合的に分析を行った。なお、本論文は、2013 年 1 月東京外国語大学大学院総合国際研究科に提出した修士論文（「中国内モンゴルにおける集合的記憶のある動態－「ハルハ河戦争/ノモンハン事件」を事例として」）の他に、以下の数本の学術論文を基礎とし、されに加筆、改稿したものである。

- (1) 包宝海「集合的記憶としてのノモンハン事件／ハルハ河戦争」東京外国語大学大学院『言語・地域文化研究』第 20 号、2014 年 3 月、331-355 頁（序論、第 1 章の一部）。

- (2) 包宝海「中国における集合的記憶論の議論状況—『文化的記憶論読本』などを手がかりに」東京外国語大学海外事情研究所『クアドランテ』第 16 号、2014 年 3 月、295-303 頁（第 1 章の大部分）。
- (3) 包宝海「中国・内モンゴルにおけるガーダー・メイレンの記憶とその変遷」東京外国語大学海外事情研究所『クアドランテ』第 17 号、2015 年 3 月、109-128 頁（第 4 章）。
- (4) 包宝海「記憶の場としてのガーダー・メイレン」東京外国語大学海外事情研究所『クアドランテ』第 18 号、2016 年 3 月（掲載予定）（第 3 章）。
- (5) 包宝海「草の根社会におけるガーダー・メイレンの記憶と語り」東京外国語大学大学院『言語・地域文化研究』第 22 号、2016 年 3 月（掲載予定）（第 5 章）。
- (6) 包宝海「ガーダー・メイレン蜂起に関する一考察」『日本モンゴル学会紀要』第 46 号、2016 年、5 月（掲載予定）（第 2 章の大部分）。